

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第26冊

鹿田遺跡 6

—第13・15次調査—

〔総合教育研究棟新営工事に伴う発掘調査〕

2010年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第26冊

鹿田遺跡 6

—第13・15次調査—

〔総合教育研究棟新営工事に伴う発掘調査〕

2010年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

鹿田遺跡が形成された岡山大学の鹿田キャンパスは今日では平野のやや内陸部に位置していますが、かつては海に近い低地で、ようやく弥生時代中ごろになって人々が生活できる条件が整いました。しかし、ひとたび生活の拠点ができあがると、その後はかなり活発な活動が展開されたようで、これまでの発掘調査で出土した豊富な遺構や遺物がそれを物語っています。

今回報告させていただく資料は、2002（平成14）年および2003（平成15）年に実施した、医歯学系の総合教育研究棟新館に伴う発掘調査によって出土・確認されたもので、とくに古墳時代初頭の土器が合計1000点近く集中して出土した3か所の「土器溜まり」が目をひきます。

「土器溜まり」は、明瞭な遺構が確認できない状態で、土器などがまとめて出土するものです。形成の理由がはっきりしないために十分な研究が行われてきたとはいえませんが、今回の資料は質・量ともに優れたものであり、今後の研究の重要な手掛かりとなるものと思われます。また、良好な一括資料であることから、今後の土器研究にも貴重なデータとなるはずです。

発掘によってふたたび姿を現した土器などの大量の資料は、その後、記録、洗浄、分類、接合、実測などの長いプロセスを経て、このような報告書に結実し、多くのみなさま方に活用していただける形に姿を変えていきますが、報告書の行間やひとつ一つの図の背後には多くの関係者の莫大な作業が隠されています。8年間にわたって発掘調査から洗浄や接合の作業に従事していただいた多くの作業員・補助員をはじめとする多くのみなさま方に感謝するとともに、調査からやや時間が経過したとはいえ無事報告書が刊行できたことをひとまず喜びたいと思います。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

北尾善信

副センター長（大学院社会文化科学研究科 教授） 新納

泉

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	-----	(山口 雄治)	1
第1節 遺跡の位置と周辺環境	-----		1
第2節 鹿田遺跡	-----		3
1. 構内座標の設定	-----		3
2. 遺跡の概要	-----		5
第2章 調査・整理の経過と概要	-----	(光本 順)	9
第1節 第13次・15次調査の経緯と調査体制	-----		9
1. 調査に至る経緯	-----		9
2. 調査体制	-----		9
第2節 第13次・15次調査の経過	-----		10
第3節 調査の概要	-----		12
第4節 整理・研究および報告書作成にあたって	-----		16
1. 整理・研究および報告書作成にあたっての方針	-----		16
2. 古式土師器の分類	-----		16
第3章 調査の記録	-----		20
第1節 調査地点の位置	-----		20
第2節 層序と地形	-----		21
1. 層序	-----		21
2. 地形の推移	-----		28
第3節 弥生時代の遺構・遺物	-----	(野崎貴博)	29
1. 弥生時代中期	-----		33
a. 溝	-----		33
2. 弥生時代後期	-----		34
a. 溝	-----		34
第4節 古墳時代の遺構・遺物	-----		37
1. 古墳時代初頭	-----		37
a. 井戸	-----		39
b. 土坑	-----		43
c. 溝	-----		44
d. 土器溜まり	-----	(光本 順)	46
2. 古墳時代後期	-----	(野崎貴博)	122
a. 溝	-----		122
第5節 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物	-----		123
a. 掘立柱建物・ビット	-----	(光本 順)	126
b. 井戸	-----	(光本 順・野崎貴博)	132
c. 炉	-----	(光本 順)	151
d. 土坑	-----	(光本 順・野崎貴博)	152
e. 溝	-----	(光本 順)	156

第6節 近世・近代の遺構・遺物	172
1. 近世	172
a. 土坑	173
b. 溝	181
2. 近代	184
a. 畦畔	184
第4章 自然科学的分析	186
1. 鹿田遺跡第13・15次調査出土木材の樹種	(能城修一) 186
2. 曲物の樹種同定	(株式会社 吉田生物研究所) 191
3. 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体の分析	(宮岡直人・畠山智史) 193
4. 鹿田遺跡第13次調査における自然科学的分析	194
a. 植物珪酸体分析	(株式会社 古環境研究所) 194
b. 花粉分析	(株式会社 古環境研究所) 198
第5章 考察	203
1. 土器窓まり考	(光本順) 203
2. 曲物製作における技術的特徴	(山本悦世) 216
第6章 結語	(光本順) 227
写真図版	229

挿図目次

(第1章)	
図1 周辺遺跡分布図	2
図2 構内座標と発掘調査地点の位置	4
(第2章)	
図3 調査風景	11
図4 弥生時代～古墳時代遺構全体図	13
図5 平安時代～鎌倉時代遺構全体図	13
図6 近世・近代遺構全体図	13
図7 上師器分類図(1)	18
図8 上師器分類図(2)	19
(第3章)	
第1節	
図9 調査地点遺景	20
図10 調査地点位置図	20
第2節	
図11 土層断面位置図	21
図12 調査区土層断面(1)～第13次調査南壁	23
図13 調査区土層断面(2)～第13次調査西壁	24
図14 調査区土層断面(3)～第13次調査北壁ほか	25
図15 調査区土層断面(4)	26
第3節	
図16 弥生時代遺構全体図	29
図17 弥生時代遺構全貌	30
図18 弥生時代中期以前の河道出土遺物～木製品	30
図19 包含層出土遺物	32
図20 溝1・出土遺物	33
図21 溝2	34
図22 溝3	34
図23 溝4・5	35
図24 溝6・出土遺物	36

第4節	
図25 古墳時代遺構全体図	37
図26 古墳時代遺構全景	38
図27 井戸1	39
図28 井戸1出土遺物	40
図29 井戸2	42
図30 井戸2出土遺物	43
図31 土坑1	44
図32 溝7	44
図33 溝8	45
図34 溝9	45
図35 溝10	45
図36 溝11~13	46
図37 土器満まり1遺物出土状況	48
図38 土器満まり1	49~50
図39 土器満まり1土層断面図	53
図40 土器満まり1取り上げ単位	57
図41 土器満まり1器種別分布(1)全器種	58
図42 土器満まり1器種別分布(2)壺	59
図43 土器満まり1器種別分布(3)甕	60
図44 土器満まり1器種別分布(4)鉢	61
図45 土器満まり1器種別分布(5)高杯	62
図46 土器満まり1器種別分布(6)その他の器種	63
図47 土器満まり1器種別分布(7) 一製塗土器・土製品・石器	64
図48 土器満まり1出土遺物(1)	65
図49 土器満まり1出土遺物(2)	66
図50 土器満まり1出土遺物(3)	67
図51 土器満まり1出土遺物(4)	68
図52 土器満まり1出土遺物(5)	69
図53 土器満まり1出土遺物(6)	70
図54 土器満まり1出土遺物(7)	71
図55 土器満まり1出土遺物(8)	72
図56 土器満まり1出土遺物(9)	73
図57 土器満まり1出土遺物00	74
図58 土器満まり1出土遺物01	75
図59 土器満まり1出土遺物02	76
図60 土器満まり1出土遺物03	77
図61 土器満まり1出土遺物04	78
図62 土器満まり1出土遺物05	79
図63 土器満まり1出土遺物06	81
図64 土器満まり1出土遺物07	82
図65 土器満まり1出土遺物08	83
図66 土器満まり1出土遺物09・土鍊	85
図67 土器満まり1出土遺物10・石器	86
図68 土器満まり2	90
図69 土器満まり2遺物出土状況	91
図70 土器満まり2土層断面	92
図71 土器満まり2器種別分布(1)	97
図72 土器満まり2器種別分布(2)	98
図73 土器満まり2出土遺物(1)	99
図74 土器満まり2出土遺物(2)	100
図75 土器満まり2出土遺物(3)	102
図76 土器満まり2出土遺物(4)	103
図77 土器満まり2出土遺物(5)	104
図78 土器満まり2出土遺物(6)	105
図79 土器満まり2出土遺物(7)	107
図80 土器満まり2出土遺物(8)	108
図81 土器満まり2出土遺物(9)	109
図82 土器満まり2出土遺物00・石器	110
図83 土器満まり3	111
図84 土器満まり3遺物出土状況	112
図85 土器満まり3器種別分布(1)	116
図86 土器満まり3器種別分布(2)	117
図87 土器満まり3器種別分布(3)	118
図88 土器満まり3出土遺物(1)	119
図89 土器満まり3出土遺物(2)	120
図90 土器満まり3出土遺物(3)	121
図91 土器満まり3出土遺物(4)・土鍊・石器	122
図92 溝14	122
図93 溝15	122
第5節	
図94 平安時代~鎌倉時代遺構全体図	123
図95 平安時代~鎌倉時代遺構全景	124
図96 段	125
図97 A層出土遺物	125
図98 建物1・2	127
図99 建物3	128
図100 建物4・5	129
図101 ピット1・出土遺物	130
図102 ピット2・出土遺物	131
図103 ピット出土遺物	132
図104 井戸3	133
図105 井戸3出土遺物(1)・木製品	134
図106 井戸3出土遺物(2)	135
図107 井戸4・出土遺物(1)・木製品	136
図108 井戸4出土遺物(2)	137
図109 井戸5	139
図110 井戸5出土遺物(1)	140
図111 井戸5出土遺物(2)・木製品	141

図112 井戸5出土遺物(3)―木製品―	142
図113 井戸6・出土遺物	143
図114 井戸7出土遺物(1)	144
図115 井戸7出土遺物(2)―木製品―	145
図116 井戸8・出土遺物(1)	146
図117 井戸8出土遺物(2)―木製品―	147
図118 井戸9	148
図119 井戸10	149
図120 井戸10出土遺物	150
図121 井戸11	151
図122 炉1・出土遺物	152
図123 土坑2・出土遺物	153
図124 土坑3	154
図125 土坑4	155
図126 土坑5	155
図127 土坑6	156
図128 調査区北辺の溝群とその他の遺構	156
図129 溝16・17	157
図130 溝18~20・出土遺物	158
図131 溝21	160
図132 溝22~24・出土遺物	161
図133 溝25	162
図134 溝26・27	162
図135 溝28	163
図136 溝28出土遺物	164
図137 溝29出土遺物	165
図138 溝30A・B	166
図139 溝30(1)	167
図140 溝30(2)	168
図141 溝30B出土遺物	169
図142 溝31	170
図143 溝32・33	171
図144 溝32・33出土遺物	172
第6節	
図145 近世遺構全景	172
図146 近世遺構全体図	173
図147 近世土坑(1)―土坑7~11―	174
図148 近世土坑(2)―土坑12~20―	175
図149 近世土坑(3)―土坑21~27―	176
図150 近世土坑(4)―土坑28~34―	177
図151 近世土坑(5)	178
図152 近世土坑出土遺物(1)	179
図153 近世土坑出土遺物(2)	180
図154 溝30C・溝30D・出土遺物(1)	182
図155 溝30D出土遺物(2)―石製品―	183
図156 近代遺構全体図	184
図157 咲峰	185
〈第4章〉	
図158 鹿田遺跡第13・15次調査出土 木材の顕微鏡写真(1)	189
図159 鹿田遺跡第13・15次調査出土 木材の顕微鏡写真(2)	190
図160 出土木製品の顕微鏡写真	192
図161 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体	193
図162 試料採取地点	194
図163 鹿田遺跡第13次調査における 植物珪酸体分析結果	196
図164 植物珪酸体(プラント・オバール)の 顕微鏡写真	197
図165 鹿田遺跡第13次調査における 花粉ダイアグラム	201
図166 花粉・孢子の顕微鏡写真	202
〈第5章〉	
図167 土器溜まりの位置	204
図168 土器溜まり出土土器の器種別最大個体数	204
図169 土器溜まり出土搬入土器とその分布	205
図170 土器溜まり1の群別器種比率(1)	207
図171 土器溜まり1の群別器種比率(2)	208
図172 土器溜まり1~1群の器種別分布	210
図173 土器溜まり1~1群の器種・類型分布概念図	211
図174 土器溜まり2~3の全器種分布	212
図175 古墳時代初頭の鹿田集落	213
図176 曲物W5組合せ詳細	226
図177 曲物W5・10・11内面加工と木釘の状況	226
図178 鹿田遺跡第7次調査井戸3出土曲物	226

表 目 次

（第2章）

表1 検出遺構一覧 14

（第3章）

表2 土器満まり1土器個体数 51

表3 土器満まり1土製品・石器個体数 52

表4 土器満まり1遺物一覧 54

表5 土器満まり2土器個体数 93

表6 土器満まり2土製品・石器個体数 94

表7 土器満まり2遺物一覧 95

表8 土器満まり3土器個体数 113

表9 土器満まり3上製品・石器個体数 114

表10 土器満まり3遺物一覧 115

表11 近世土坑の分類 174

（第4章）

表12 鹿田遺跡第13・15次調査出土木材の集計表 188

表13 鹿田遺跡第13・15次調査で出土した木材の樹種 188

表14 出土木製品一覧 191

表15 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体一覧 193

表16 鹿田遺跡第13次調査における

植物珪酸体分析結果 196

表17 鹿田遺跡第13次調査における花粉分析結果 200

（第5章）

表18 土器満まりの基本データ 204

表19 土器満まり出土搬入土器一覧 204

表20 土器満まり1各群の遺物組成 206

表21 鹿田遺跡の成長と土器満まり形成 213

表22 曲物の概要 223

表23 曲物W5箇材マチ部の特徴 224

表24 曲物W5縫じ孔間隔と縫じ皮の残存位置 224

表25 曲物W5箇材と下段箇の縫じ孔の位置関係 224

表26 曲物W10・11の側板マチ部の縫じ孔位置 224

表27 曲物W10・11の側板マチ部における縫じ孔間隔 225

表28 曲物W10・11箇材マチ部の縫じ孔位置 225

表29 箇材の縫じ孔位置に関する列比較 225

表30 曲物W10・11箇材マチ部における

縫じ孔間隔（外側） 225

写 真 図 版

図版1 弥生時代後期～古墳時代初期の土器（満・井戸）

図版2 土器満まりの土器（壺）1

図版3 土器満まりの土器（壺）2

図版4 土器満まりの土器（壺）3

図版5 土器満まりの土器（壺）1

図版6 土器満まりの土器（壺）2

図版7 土器満まりの土器（壺）3

図版8 土器満まりの土器（高杯）1

図版9 土器満まりの土器（高杯）2

図版10 土器満まりの土器（高杯）3

図版11 土器満まりの土器（鉢）1

図版12 土器満まりの土器（鉢）2

図版13 土器満まりの土器（鉢）3

図版14 土器満まりの土器（蓋形土器・

手培形土器・器台・ミニチュア土器・製塙土器）

図版15 平安時代の土器

図版16 鎌倉時代の土器

図版17 中世陶磁器他

図版18 近世陶磁器（土坑）

図版19 近世陶磁器・石製品他（満）

図版20 木製品1（各種製品）

図版21 木製品2（曲物）

図版22 土製品

図版23 石器

例 言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、総合教育研究拠点室に併せて実施した鹿田遺跡第13次調査、および総合教育研究拠点室・水槽・地下水槽設備に併せて実施した鹿田遺跡第15次調査の発掘調査報告書である。
調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。
鹿田遺跡第13次調査地点は鹿田地区構内座標BL~BN45区・BL~BR46~52区に位置し、発掘調査期間は2002(平成14)年4月18日~10月25日、調査面積は934m²を対象とした。
鹿田遺跡第15次調査地点は鹿田地区構内座標BQ~BS45~46区に位置し、発掘調査期間は2003(平成15)年10月14~29日、調査面積は304m²を対象とした。
2. 発掘調査は岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3. 本書作成にあたっては、木材の樹種同定を能城修一氏(独立行政法人森林総合研究所)に、動物遺存体の鑑定を富岡寅人氏・横山智史氏(岡山理科大学)に依頼し玉稿を頂いた。石器の同定は鈴木茂之氏(岡山大学理学部)によるものである。また、古式土器に關しては、大久保徹也氏(徳島文理大学)、中川東氏(鳥取県埋蔵文化財調査センター)、近世陶磁器に關しては桑原寛氏(岡山市教育委員会)に御教示頂いた。記して感謝申し上げる。株式会社古環境研究所に依頼した植物珪藻体分析および花粉分析は、科学研究費補助金(基盤研究C)「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」(研究代表者:山本悦世)に基づく。
4. 調査時の造構火災・写真撮影は、岩崎志保・忽那駿三・高川治司・野崎貴博・光木順・山本悦世・横田美香、本堂春生が行った。
5. 報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
<遺物>土器・土製品の整理・実測・浄粧・観察表:山本・光木・野崎・中村大介・岩崎・池田青・山口達治・西本尚美
石器・木器の整理・実測・浄粧・観察表:野崎・山本・光木・山口・遺物写真:野崎・池田・山口
<造構>下図:光木・野崎・山本・浄粧:西本・井上佐智 デジタルデータ図版:野崎・山口
6. 本書の執筆分担は次のように本文中に示した。
7. 編集は、植田孝司(前研センター長)・新納泉(前研センター長)・山本悦世(調査研究室長)の指導のもとに、光木が担当した。
8. 調査の概要は、第13次調査を「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002」に、第15次調査を「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003」に一部報告しているが、本書を持って正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した調査の記録・出土遺物はすべて当センターで保管している。

凡 例

1. 本書で用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土標準第V準標系(世界測地系)の座標化である。
方位に關しては、本書では調査時に使用した座標を用いる。
2. 遺物番号は、遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはS、木製品にはW、金属器にはMをつけて通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめ、実面図と組み合わせて掲載している。
拓本は内外面を掲載する場合は、左側に外面、右側に内面を記す。片面の場合は外面の拓本を基本とした。
観察表の表記基準は以下の通りである。
①内外面の色調を併記する場合は、「内面/外面」の順序で表示する。
②粘土は、微砂:砂粒径0.5mm未満、細砂:0.5~1mm未満、粗砂:1~2mm未満、砾:2mm以上を基準とする。
③沈量の単位は「cm」である。軸元値には*付の数字で表し、残存値には()で表す。
4. 遺構は、探査などで以下のように記号で種類を表記する場合がある。
獨立柱建物:SB、ピットP、井戸:SE、上坑:SK、溝:SD、炉:LT、土器埋まり:SX
5. 十墨注記では鉄分をFe、マンガンをMnで表記した。
6. 卷末図版の遺物番号は本文中の遺物番号に一致する。

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の位置と周辺環境

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号所在の岡山大学鹿田地区にほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。半田山、龍ノ口山、操山などの山塊に囲まれた狭義の岡山平野の南端部に位置し、岡山県中部を南流する旭川が形成した沖積地の中でも、河口近くの三角州帯上に立地している。本遺跡の東方約1kmには旭川が南流し、岡山市江波で見島湾に流入しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられ、岡山平野の各所で旭川の旧河道やそれに伴う自然堤防などの微高地が確認されている。本遺跡の主要部分も、標高1～2m前後の微高地上に立地するものとみられる。現在、本遺跡は海岸線から北に遠く隔たっているが、中世以前には、遺跡のすぐ南まで瀬戸内海（見島湾）が入り込んでいた。

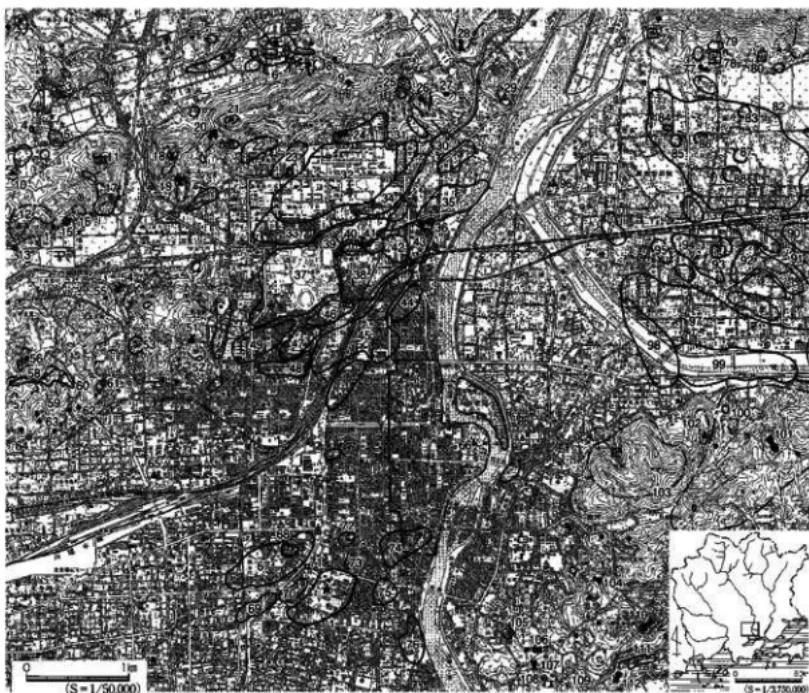
遺跡周辺における人類の活動痕跡は旧石器時代までさかのほる。旭川を挟んだ対岸の操山では、ナイフ形石器や網石器が採集されている¹⁾。縄文時代前期、海進がピークを迎える頃には、半田山丘陵南端部に朝寝鼻貝塚²⁾が形成される。その後、海岸線が次第に後退し始めるものの、平野部における活動痕跡が明確に確認されるのは縄文時代後期以降のことである。津島岡大遺跡³⁾、百間川沢田遺跡⁴⁾などで住居址や貯蔵穴が検出されている。晩期では、居住域は確認されていないが、津島岡大遺跡や百間川遺跡群などを挙げることができる。本遺跡でもわずかであるが、縄文時代中期前半～晩期の土器が検出されている。

縄文時代の終わり頃、北部九州で稻作農耕が受容されて各地へと波及していく中で、瀬戸内地域ではかなり早い段階にそれらの情報がもたらされていたようである。弥生時代早期とされる津島江遺跡⁵⁾や前期の百間川遺跡群などでは水田遺構が確認されている。前期前半の津島遺跡⁶⁾では微高地上に豊穴住居・掘立柱建物が、その周辺に位置する北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡⁷⁾では水田遺構が確認されている。この時期にはすでに、集落の縁辺部で一定の広がりをもつ水田経営が行われていた状況が見て取れよう。また、前期末葉には百間川沢田遺跡で墓と環濠もみられる。弥生時代中期以降には、平野部各地の微高地上に新たな集落が出現・展開していく。津島遺跡や津島岡大遺跡はもとより、それ以降に遺跡が分布する傾向にあり、前期後半からの南方遺跡⁸⁾や天瀬遺跡⁹⁾、中期以降の絵図遺跡¹⁰⁾・上伊福遺跡¹¹⁾などがあげられ、南に後退した平野部に集落が展開していく。

鹿田遺跡でも、これまでの調査で弥生時代中期末～古墳時代前期にかけての豊穴住居や井戸、土坑、土器窯まりなどの遺構が濃密に検出され、安定した生活拠点が形成されていたことが明らかとなっている。ここでも、集落に付随して水田が南側に展開しており、鹿田遺跡も他と同様の集落景観を呈していたことがわかる。さらに、土鍤、石鍤、製塙土器なども出土しており、海岸に近い立地を生かした生産活動を行っていたことが推定される。

一方で、弥生時代末から古墳時代前期には、岡山平野やその周辺の山塊に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長系列を読み取ることができる。北方の半田山山塊にある都月坂2号墓¹²⁾・都月坂1号墳¹³⁾・七つ塹1号墳¹⁴⁾などは、おそらく津島遺跡を拠点とする集団に対応する首長墓系列に当てることができ、旭川河口付近の操山山塊に位置する操山109号墳¹⁵⁾、網浜茶臼山古墳¹⁶⁾などは、鹿田遺跡周辺の集団に対応すると考えられている¹⁷⁾。これらの首長墓系譜は古墳時代前期後半～中期前半に、それぞれ神宮寺山¹⁸⁾、金蔵山¹⁹⁾、海茶臼山²⁰⁾という大型前方後円墳が築造されて最盛期を迎えるが、その後急速に衰退し、古墳時代後期になると、一部に唐人塚古墳²¹⁾のような、いわゆる巨石墳が築造されるものの、全体として、周囲の山塊に中小の横穴式石室が群集してつくられるようになる。

古墳時代の集落遺跡は、広範囲に展開することが旭川東岸の百間川遺跡群²²⁾や、西岸の津島遺跡から南方遺跡



1. 唐田遺跡（弥生～近世）
2. 芳原山遺跡奥山遺跡（不明）
3. 光神寺寺（飛鳥～平安）
4. 上の船遺跡（山古）
5. 矢奈多遺跡（古墳）
6. 魚崎遺跡（古墳後期）
7. 沼田上墳群（古墳後期）
8. 高原上墳群（古墳後期）
9. ダイノイ上墳群（古墳中期？）
10. 鮎矢塚（古墳）
11. 手主山遺跡（古墳～奈良町）
12. 中村吉清春（古墳後期）
13. 貝塚（小明）
14. 万古山遺跡古墳（古墳）
15. 東加賀郡厚原（小明）
16. 東施留1号・2号墳（古墳後期）
17. 首都（白山神社）古墳
（高倉～奈良町？）
18. 烏山城（佐々又泊城）藤（室町）
19. 七つ子墳群（古墳～小坂）
20. 那珂川遺跡・古墳群（弥生～古墳）
21. 下田山城（織田）
22. 津島神社遺跡（古墳～奈良町）
23. お冢（藤）古墳（古墳中期）
24. 津島鬼頭跡（飛文～奈良町）
25. 津丸山1号・2号墳（弥生・古墳）
26. 一本松古墳（古墳中期）
27. 不動山古墳
28. 信合古墳（古墳前期・後期）
29. 紗見古墳跡（飛文）
30. 叶出遺跡（弟・能）
32. 津島鬼頭跡（飛文～近世）
33. 津島鬼頭野遺跡（弥生）
34. 津島鬼頭遺跡（飛文～近世）
35. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
36. 鬼頭遺跡（古墳後期）
37. 宇治山遺跡（弥生～古墳）
38. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
39. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
40. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
41. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
42. 北方鬼頭遺跡（弥生～古墳）
43. 北方鬼頭内遺跡（弥生～近世）
44. 庄屋遺跡（弥生）
45. 南方鬼頭（弥生～近世）
46. 鬼頭遺跡（弥生～古墳）
47. 上伊祖遺跡（弥生・古墳）
48. 上伊祖（立佐）遺跡（弥生～奈良町）
49. 上伊祖遺跡・伊祖定岡前遺跡
（弥生～近世）
50. 上伊祖西遺跡・尾針神社遺跡
（弥生～平安）
51. 津古古墳（古墳前期）
52. 神妙寺遺跡（弥生）
53. 石舟寺（奈良～一室町）
54. 青陵大塚（古墳後期）
55. 十二木本理古墳
56. 富山城跡（平成～江戸）
57. 天狗山古墳群（古墳後期）
58. 天狗山古墳群（弥生）
59. 大坂山東古墳群（古墳後期）
60. 正野田古墳群（古墳後期）
61. 岡内向山古墳群（弥生）
62. 看音古墳（古墳後期）
63. 乞食古墳（古墳後期）
64. 鬼頭遺跡（弥生）
65. 鬼頭遺跡（弥生）
66. 鬼頭遺跡（弥生～云母）
67. 山形古墳（弥生～云母）
68. 大井鬼頭遺跡（古代～近世）
69. 大久保鬼頭遺跡（弥生～室町町）
70. 斎田本町古墳群（弥生）
71. 故衣坂（村名・大伴置跡）（弥生）
72. 人代古墳遺跡（弥生～奈良町）
73. 故衣坂（弥生）
74. 天魔遺跡（弥生～近世）
75. 斋田遺跡（奈良～近世）
76. 二日市遺跡（弥生～近世）
77. 唐人鬼頭（古墳後期）
78. 貢出古墳（弥生～室町）
79. 貢出古墳（奈良）
80. 静土寺（奈良～室町）
82. 湯古古墳群（古墳前期）
83. 北口山遺跡（奈良～室町）
84. 横前町古墳（奈良～平安）
85. 倭南町古墳群（弥生～奈良町）
86. 南吉市場遺跡（奈良～平安）
87. 八ヶ（高島小）遺跡（奈良～室町）
88. 中井・南一反田遺跡・古墳群
89. 雄町古墳跡（弥生～吉墳）
90. 乙多鬼頭遺跡（弥生）
91. 間谷寺（佐生）
92. 雷門山遺跡・高麗跡（弥生～奈良町）
93. 雷門山遺跡（弥生～平安）
94. 由田山遺跡（弥生～室町）
95. 五足山遺跡（弥生～室町）
96. 中条寺（室町）
97. 百夷川遺跡群（飛文～近世）
98. 百夷川阪尾古墳群
99. 白岡川の田畠跡（飛文～中斯一五世）
100. 雄川21号古墳（江戸石器）
101. 金藏山八幡（古墳中期）
102. 神移寺鬼頭（岐國）
103. 鶴山古墳群（古墳後期）
104. 鶴山103号墳（古墳前期）
105. 鶴浜寺廢寺（飛鳥～平安）
106. 鶴浜茶臼山古墳（古墳前期）
107. 雄川109号墳（古墳後期）
108. 鶴山202号古墳（平安～奈良）
109. 月冢（建佐～室町町）
110. 後赤山白山城（古墳前期）
111. 麻葉神社跡（奈良～室町）
112. 大椎山軒跡（雄略～室町）

図1 周辺遺跡分布図

一帯でそれぞれ確認されている。鹿田遺跡では、これまでの調査によって、弥生時代末～古墳時代にかけて井戸の管理形態や遺物の様相に変化が生じることや、古墳時代中期以降、集落規模の縮小化が顕著になることが明らかにされている³⁰。こうした状況は、古墳にみられる首長系列の消長と同調しているとみてよい。

古代においては、岡山平野でも条里制が施行されるが、津島岡大遺跡・中瀬遺跡³¹・南方釜田遺跡³²で条里間連造構が一部確認される程度で、実際に発掘された例は少ない。津島遺跡では、条里制の施行に関連する可能性の高い整地土層や畦・溝などが検出されている。

また、古代国家完成期の政治状況を物語る寺院や国府については、近年、旭川東岸において調査が進展している。主な遺跡として、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡³³・創建期がさかのほり平城宮式瓦も出土した賀田庵寺³⁴などがある。また、楓柱建物や「市」が墨書きされた土器が出土した百間川米田遺跡³⁵などは、備前国府の国府津と推定されている³⁶。旭川河口付近においても、平城宮式瓦が確認されている網浜庵寺³⁷が知られている。一方、旭川西岸では寺院は認められない。旭川の東西におけるこのような不均衡は、前代の巨石墳の分布からもうかがうことができるよう、古墳時代後期から認められるものである³⁸。また、8世紀頃と考えられる火葬造構やピットが鹿田遺跡周辺の新道遺跡³⁹で確認されている。平城宮式瓦や導入初期の火葬造構などの存在から、旭川河口を介した人々の交流がうかがえ、後に平安時代における鹿田庄の成立の重要な要因になったと想定できる。

古代から中世にかけて、岡山平野南北においていくつかの莊園が成立したが、具体的な位置を考古学的に比定することは未だ難しい。その中で、鹿田遺跡の位置する旭川河口付近の西岸は、建物群・井戸等の遺構の検出から、藤原摂関家殿下波領であった鹿田庄に比定されている⁴⁰。近瀬の新道遺跡では、12世紀後半頃の大型井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土しており、鹿田庄の莊園域であったと考えられている⁴¹。二日市遺跡⁴²でも古代末～中世の井戸や柱穴が確認され、旭川東岸の百間川遺跡群⁴³においても該期の集落が知られている。

室町時代以降、鹿田遺跡一帯では集落の分布や立地状況に大きな変動が生じたらしく、以後江戸時代にいたるまで集落その他の具体的な様相ははっきりしない。しかし、鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査成果から、14世紀初頭頃に広範囲の火災にあったらしいことがわかり、集落の再編が行われた可能性が指摘されている⁴⁴。江戸時代以降、岡山平野南部は大規模な干拓が進められ、海岸線は南へと後退する。そして、岡山城や城下町の建設による開発も急激に進められていった。鹿田遺跡周辺は岡山城下町の南辺に当たり、江戸時代以後は耕地の広がる農村地帯になっていたらしく、畦畔や野塗などの遺構がしばしば検出される。一方で、近瀬の新道遺跡では、絵図などによって城下町の南辺に位置していたことがわかっている。

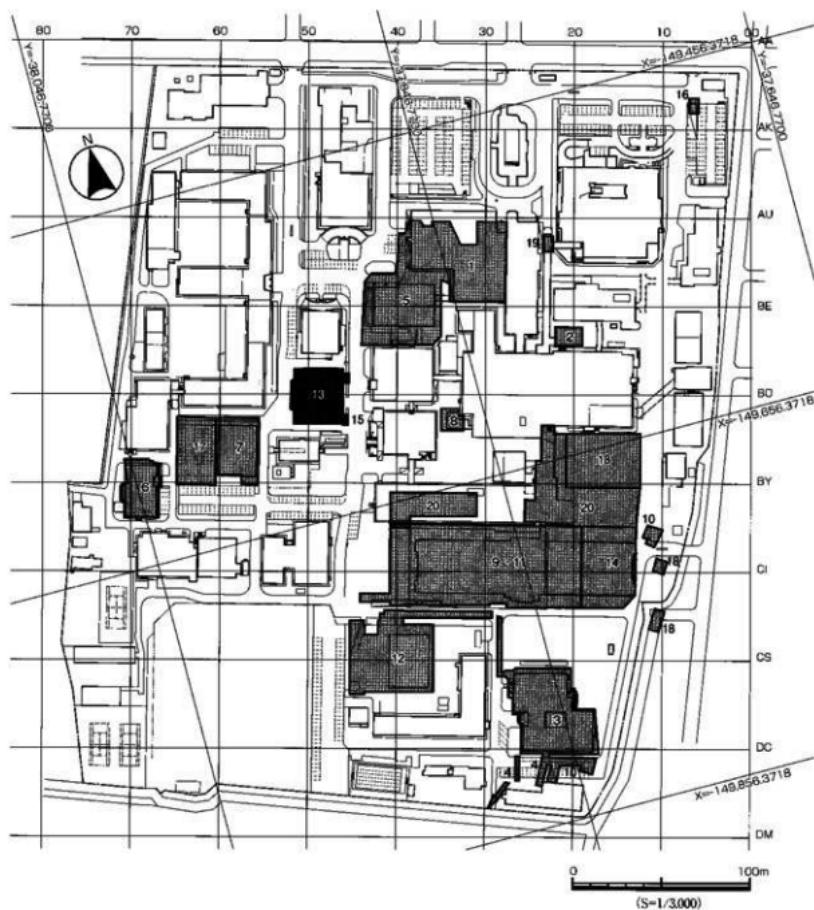
その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および、同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡地は厚さ0.6～1m内外の造成土に覆われた。近瀬も、しだいに都市開発が進行し、現在、遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

鹿田遺跡が広がる岡山大学鹿田地区構内において、本センターでは、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設定している⁴⁵（図2）。この構内座標は、2002年度までは、日本測地系による国土座標第V座標系に基づいたものであり、発掘調査時点においては、南北・東西座標値（X=-149,800m, Y=-37,400m）を原点とし、同座標軸から南北軸をN-15°-Eに振ったものを使用していた。その後、2004年4月1日に改正さ

地理的・歴史的環境



* AA00は、日本測地系によるX=-149,800,000m、Y=-37,400,000mの交点を原点として設定したものである。

2003年から世界測地系による座標に移行したため、現在の表記となっている。

図2 構内座標と発掘調査地点の位置

れた測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとした。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718m$ 、 $Y = -37,646.7700m$ の数値にあたることとなった。

構内には、この座標軸を基準に、一辺5mの正方形の区割りがあり、これまでの鹿田遺跡の調査は、すべてこの区割りに基づいた位置関係の上に記録されている。

この区割りの呼称については、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC……AZ、BA、BB……、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03……、と付番していく。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせてA00区、AB01区、AC02区……、というように呼称する。

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2009年度までに、20回にわたる発掘調査が行われている。遺跡の範囲は、岡山大学鹿田地区のほぼ全域にわたると推定されている。遺跡南には瀬戸内海が迫り、旭川も幾筋かの河道となって岡山市街地の北東から南西にかけて網流していたと考えられている。遺跡は、旭川によって形成された沖積平野の南辺部、河口近くの三角州带上に立地しており、いわゆる自然堤防帯に立地する津島遺跡や百間川遺跡などのやや内陸の遺跡とは異なり、臨海性の高い集落遺跡とみることができる。

鹿田遺跡において最も古い遺物は、第1次調査で確認された縄文時代前期の土器片である¹⁰。ただ、その時期に対応する遺構は確認されておらず、該期の人間活動の痕跡は希薄であったようである。

遺跡の中心に当たるとみられる微高地は、岡山大学鹿田地区の中央や北よりの、付属病院外来診療棟付近と考えられる。この地点において、第1次発掘調査が行われ、弥生時代中期末・後期前半～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代末～平安時代前半、平安時代後半～鎌倉時代の各時期を主とする遺構・遺物が濃密に確認された¹¹。弥生時代以降、長期にわたって、居住域の中核になっていたことが判明している。他の調査地点の状況も、この第1次発掘調査地点の時期とおおよそ対応しているため、ここでは、この時期設定に従って遺跡の概要を述べてみたい。

弥生時代中期末・後期前半～古墳時代初頭には、外来診療棟地点（第1次発掘調査）の微高地が居住域の中核となっていたと考えられる。同時併存住居址は3棟と考えられているものの¹²、計9棟の堅穴住居址、複数の井戸、土器溜まりなどが検出されている。その南西に隣接する付属病院管理棟地点（第5次発掘調査）では、調査区の北側に溝と井戸が、南側には堅穴住居址1棟が検出されているものの、遺物の出土量も含め、その密度は外来診療棟地点よりも相対的に低く、集落の南西端付近と考えられる¹³。また、この微高地の東南側にあたる中央診療棟北側と南側で行われた第2・18次発掘調査¹⁴でも、遺構の密度が低く、同一微高地にのる居住域の縁辺に近い状況が明らかとなっている。一方で、外来診療棟・管理棟の北～北東側についてみると、構内の北東隅付近を発掘調査した第16次調査地点をはじめとして、低地で河道が走っていた状況が明らかとなっている¹⁵。よって、該期の遺構が一面に広がっている可能性は高くない。

しかしながら、外米診療棟・管理棟地点を中心とする微高地上にのみ当時の居住域が限定されていた、というわけではない。古墳時代初頭においては、外米診療棟から南西に位置する基礎研究棟地点（第7次調査）¹⁶で微高地が確認されており、堅穴住居址4棟、掘立柱建物3棟、井戸、土器溜まりなどが検出されている。本報告の総合教育研究棟地点（第13・15次発掘調査）¹⁷は、この基礎研究棟の居住域と外米診療棟地点の居住域の間に位置し、溝や窪地、土器溜まりが確認され、「居住域の中間地帯ないし縁辺部に相当する」と判断されてきた¹⁸。また、エネルギーセンター地点（第12次発掘調査）¹⁹や構内南辺の保健学科棟地点（第3次発掘調査）²⁰でも、該期の遺物や遺構が確認されている。すなわち、該期における鹿田遺跡の集落景観は複数の安定した微高地上に数件程度の

堅穴住居、掘立柱建物が点在し、こうした居住域の間には溝や窪地が配されていた、と考えることができる。こうした現象は、おそらく、当時の人々が新たな居住域を広げ活用していたことを示すものと評価できよう。

生活の基盤となった水田の様相については、遺跡の南半部にあたる病棟地点（第9・11・14次発掘調査）³³やエネルギーセンター地点（第12次発掘調査）などで畦畔や溝が確認され、その状況が次第に明らかになりつつある。特に、病棟地点では、北西から南東方向を主軸とする大畦畔と共に直交する小畦畔と小溝、そして畦畔の交差地点に土器を集中廃棄した遺構が確認されている。

古墳時代後期になると、居住域は縮小するようである。これまで住居址が確認されたのは、外米診療棟地点（第1次発掘調査）のみであり、エネルギーセンター地点（第12次発掘調査）では、用水路の機能が考えられる構群が確認されてはいるものの、遺構の密度はそれほど高くない。集落規模の縮小あるいは移動が予想され、その具体的な状況の解明が今後の課題といえよう。

次に奈良時代末～平安時代前半の様相についてみてみたい。この時期においても、居住域の中核は外米診療棟・管理棟地点（第1・2・5次発掘調査）と考えられ、掘立柱建物群や井戸、土坑、溝などが確認されている。特に、大型井戸を中心とした大小の掘立柱建物群が立ち並ぶ状況が推定されており、遺物についても磨き土器、転用硯、木簡などが出土している。こうした状況から、古くから比定されている藤原摂関家の殿下渡領たる鹿田庄との関連が注目される。

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、「興福寺縁起」によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」で當てたとされている。少なくとも平安時代初期には莊園として機能していたのであろう。外米診療棟地点（第1次発掘調査）で確認された、上述の建物群と大型井戸は、およそ8世紀後半から9世紀代と考えられ、鹿田庄成立期の遺構と判断できそうである。庄家の可能性もあるう。

また、外米診療棟地点（第1次発掘調査）から250m程南に位置する、保健学科棟の南辺（第3・4・10次発掘調査地点、2000年度立会調査47地点）³⁴では東西方向に流路を取る河道やそれにかかる橋脚、杭による護岸が確認されている。径約30cmという橋脚の太さや造替の状況から、堅固な基礎構造をもつ橋が、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断でき、鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示している³⁵。しかし、他の発掘調査地点においては該期の遺構は確認されておらず、当時の生活域の広がりについては、資料の増加を待って今後具体的に検討していく必要がある。少なくとも、後の平安時代後半～鎌倉時代と比べれば、居住域は限定されているようである。

その後、鹿田庄は糸余曲折を経つつも、室町時代まで殿下渡領として機能したようであり、鹿田遺跡で確認される平安時代末～鎌倉時代の遺構は、当時の状況を反映しているといえる。該期には、外米診療棟・管理棟地点（第1・5次発掘調査）、保健学科棟地点（第3次発掘調査）、病棟地点（第9・11・14次発掘調査）、エネルギーセンター地点（第12次発掘調査）、アイソトープ総合センター地点（第6次発掘調査）³⁶、基礎研究棟地点（第7次発掘調査）³⁷、そして今回報告する総合教育研究棟地点（第13次発掘調査）と、遺跡の中央～南半部にかけて集落が展開するようになる。

該期の集落構成は、数棟の建物群と井戸、そして区画溝が一つのパターンとして一般的に存在しており³⁸、今回報告する総合教育研究棟地点（第13・15次発掘調査）でも、そうした状況が確認されている。また、遺跡の西辺部に位置するアイソトープ総合センター地点（第6次発掘調査）の西側では、13～14世紀代に大溝が数度にわたりて北北東～南南西方向に掘られた状況が、また医学部附属病院RI治療室地点（第8次発掘調査）³⁹においても、数度にわたりて東南東～西北西方向に掘られた状況が明らかとなっている。このような溝は、数度にわたる掘削、鹿田地区周辺の地割とも一致する方向などを考え合わせると、鹿田集落の空間構造を規定するような性格のものであった可能性が考えられる。そして、基礎研究棟地点（第7次発掘調査）でも、L字形に走る大溝が確認されている。一方で、遺跡北側の様相については、未だ本格的な発掘調査が行われておらず、未解明の部分が

多い。遺跡北東部の立体駐車場付近における小規模な発掘調査（第16次発掘調査地点）では、建物や井戸は確認されておらず、耕作地が広がっていた状況を想定できるものの、具体的な様相に関しては今後の課題とせざるを得ない。

以上のように、平安時代末～鎌倉時代には広い範囲にわたって居住城が拡大していた状況を推測でき、遺跡北側には耕作地が広がっていた景観も想定される。まさに、集落の盛行期を迎えていたことがうかがえる。そして、その背景に殿下渡領たる鹿田庄の展開を関連付けることは許されよう。

室町時代以降の状況については不明な部分が多い。ただ、各地点において近世の畔界や野臺などが認められており、江戸時代から大正年間にかけて遺跡の耕地化が進む一方で、近年新たに中央診療棟地点（第18次調査）において近世後半の居住域の様相が明らかとなった。今後の調査研究の進展が期待されるところである。

今回報告を行う総合教育研究棟地点（第13・15次発掘調査）は、弥生時代終末～古墳時代初頭における居住城跡が濃密に確認される外来診療棟地点（第1次発掘調査）と基礎研究棟地点（第7次発掘調査）の中間地帯に位置している。該期の土器溝まり、井戸、溝などが確認されており、居住城縁辺部の活動を示すものとして注目される。平安時代～鎌倉時代においては、建物群や井戸、溝などが確認され、長期間にわたる居住城として考えることができる。該期の集落のひろがりをさぐる資料として重要だろう。また、中世末には土坑や条里に関わる大型の溝が、近世・近代では畔界が確認されている。以上のように、本調査地点の成果は鹿田遺跡の集落構造とその変遷についての詳細なデータを提供したといえるだろう。

（山口雄治）

付記 本章第1・2節については、下記報告の文書に一部加筆修正したものである。

高田賀太2007「第Ⅰ章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23号

註

- (1) 鎌木昌凸1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』岡山市役所
- (2) 宮岡直人1995「利根鼻貝塚発掘調査報告」加計学園蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦也（編）1992「津島兩大遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5号
b 阿部芳郎（編）1994「津島兩大遺跡4」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6号
c 石崎信保（編）2005「津島兩大遺跡5」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21号 ほか
- (4) a 「宮治夫1983「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 静（編）1993「百間川沢田遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) a 高畠知弘1988「津島江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』18
b 草原孝典1999「津島江遺跡（岡北町）遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査の概要』1997（平成9）年度
- (6) a 津島遺跡調査委員会1969「昭和44年岡山県津島遺跡調査概要」
b 萩原義典2007「岡山県津島遺跡調査金報」
c 鳥崎 実（ほか）1999「津島遺跡1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 啓2000「津島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 鳥崎 実（ほか）2003「津島遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 本多泰典2003「津島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
g 山本悦也（編）2004「津島兩大遺跡1」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19号
- (7) 関田 治1998「北方下沼遺跡・北方被田遺跡・北方中沼遺跡・北方地蔵遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- (8) a 岡山市道跡調査会1971「南方（立國南院）遺跡発掘調査概要」
b 岡山市道跡調査会1981「南方（立國南院）遺跡発掘調査概要」
c 岡山市教育委員会1981「南方遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 日本考古学会静岡大会実行委員会1983「南方被田遺跡」「日本における稻作農耕の起源と展開－資料集－」
e 内藤哲史1996「駿河遺跡・南方遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (9) 山宮健尚1986「天照遺跡」『岡山県史』考古資料編
註 8c 文獻
- (10) 中野雅美1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
- (11) 近藤義郎1996「都月坂二号孙生墳丘墓」『岡山県史』考古資料編
- (12) 近藤義郎1996「都月坂一号古墳」『岡山県史』考古資料編
- (13) 七つ塚古墳群発掘調査会1987「七つ塚古墳群」
- (14) 宇垣匡泰1990「網浜茶臼山古墳・孫山109号墳の測量調査－古墳の前期古墳III－」『古代吉備』第12集
註 15文献

地理的・歴史的環境

- 07 松本武彦1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団－鹿田集落の地域史的位置づけ－」[『鹿田遺跡3』]岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 08 a 離木義昌1986「神宮寺山古墳」[『岡山県史』]考古資料編
b 神谷正義・安川満2008「神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳」岡山市教育委員会
- 09 西谷真治・離木義昌1959「金藏山古墳」[『吉備考古学』]考古資料編
- 10 近藤義郎1986「淡系白山古墳」[『吉備県史』]考古資料編
- 11 村上幸雄1987「古墳時代後期」[近藤義郎(編)『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 12 註4文献
a 正岡鷲夫ほか1984「百間川原尾島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
b 高畠知恵ほか1982「百間川今谷遺跡1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
- 13 山本悦世1988「鹿田遺跡における先秦構造とその変遷」古留秀敏・山本悦世(編)『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 14 日本考古学会静岡大会実行委員会1988「中備遺跡」「日本における稻作農耕の起源と展開－資料集－」
- 15 註8文献
- 16 草原孝典2004「ハガ遺跡」岡山市教育委員会
- 17 高橋仁二ほか2005「史跡賞田庭跡」岡山市教育委員会
- 18 a 岡山県教育委員会1981「百間川長谷遺跡 当麻寺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
b 井手弘ほか1982「百間川麻庭跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
c 同本覚入1989「百間川米田遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
d 物部茂樹ほか2002「百間川米田遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164
- 19 註28d文献
a 中野亮美1977「吉備における平城宮式瓦について」[『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』]16
b 卓原季彦2002「鹿田庄の定位と意義」[『新道跡』]岡山市教育委員会
- 20 出宮徳尚・葛原克人・西本清1987「古代」[近藤義郎(編)『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 21 草原孝典2002「新道跡」岡山市教育委員会
a 斎井駿1973「戦下渡築の前国鹿田庄」[『吉備地方史の研究』]法藏官
b 中野栄夫1990「第六章第三節 備前国鹿田庄事件」[『岡山県史』]古代 II ほか
- 22 註32文献
23 山宮惣兵衛1985「岡山県「日市遺跡」」[『日本考古学年報』]35
- 24 註22a文献
25 勝利昭1996「百間川原尾島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105
- 26 神谷正義・堀田英樹2007「鹿田遺跡」岡山市教育委員会
- 27 先木類2004「日本列地系から世界列地系への移行に伴う構内座標の変更について」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 28 吉留秀敏・山本悦世(編)1988「鹿田遺跡1」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 29 註39文献
- 30 註23文献
31 松本武彦(編)1993「鹿田遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 32 山本悦世ほか2008「鹿田遺跡第13次調査」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 33 高田貢2006「鹿田遺跡第16次調査」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 34 山本悦世(編)2007「鹿田遺跡2」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 35 a 先木類2004「鹿田遺跡第13次調査」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
b 菊崎貴博2004「鹿田遺跡第13次調査」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 36 先木類2004「鹿田遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の集落について」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 37 山本悦世2001「鹿田遺跡第12次調査」[『岡山大学構内遺跡調査研究年報』]18 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 38 山本悦世(編)1990「鹿田遺跡2」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 39 a 小林哲平2000「鹿田遺跡第9次調査」[『岡山大学構内遺跡調査研究年報』]16 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
b 岩田敏・岩崎忠保2000「鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査」[『岡山大学構内遺跡調査研究年報』]17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
c 岩崎忠保2004「鹿田遺跡第14次調査」[『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』]岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 40 註40文献
a 長島吉博2000「鹿田遺跡第10次調査」岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
b 桃田光秀2001「第4第1立会調査 鹿田地区」[『岡山大学構内遺跡調査研究年報』]18 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 41 藤原千鶴1990「古代の横塚遺構について」[『山本悦世(編)1990「鹿田遺跡2」』]岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 42 松木武彦・山本悦世(編)1997「鹿田遺跡4」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第11番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 43 註45文献
44 山本悦世1990「鹿田遺跡における古代末～中世集落について」[『山本悦世(編)1990「鹿田遺跡2」』]岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4番 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 45 桃田光秀2000「鹿田遺跡第9次調査」[『岡山大学構内遺跡調査研究年報』]16 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
46 註43文献

第2章 調査・整理の経過と概要

第1節 第13次・15次調査の経緯と調査体制

1. 調査に至る経緯

第13次調査 鹿田キャンパスのはば中央部、駐車場として使用されていた敷地に、総合教育研究棟を2002年度に建設する計画が立った。この建設計画では、一定面積の地下掘削が予定された。本地点は、既往の調査である管理棟地点（第5次調査）、基礎研究棟地点（第7次調査）の中間の位置にあたる。これらの調査データからみると、本地点には中世や古墳時代の集落がひろがることが予想されたため、全面的に発掘調査を実施することとなった。調査面積は、934m²となり、調査員2名が調査を担当することとなった。調査期間は約6ヶ月を予定し、表上掘削を2002年4月18日から開始した。

第15次調査 鹿田遺跡第13次調査が終了して以降の2003年度、新設の総合教育研究棟周辺においてポンプ槽・検水槽の設置が計画された。これは、小規模ながら、一定面積の地下の掘削が必要とされる工事であった。設置地点は、第13次調査地点の南東隅に隣接する。この第13次調査地点南東部には、古墳時代初頭の土器溜まりが検出されており、本地点においてその広がりの有無を確認する必要性からも、発掘調査を実施することとなった。調査面積は30.4m²で、調査員1名が調査を担当することとなった。調査期間は約半月間を予定し、2003年10月14・15日に造成土・支障管の除去を実施した。

2. 調査体制

【発掘調査：第13次調査】(発掘調査年度：2002年度)

調査主体	岡山大学	学長	河野伊一郎
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員：調査主任	タ	助手	光本 順
調査研究員	タ	助教授	山本 悅世
	タ	助手	横田 美香
	タ	助手	野崎 貴博
	タ	助手	岩崎 志保
	タ	助手	高田 浩司
	タ	助手	忽那 敬三

運営委員会

センター長（文学部教授）	稲田 孝司	大学院自然科学研究科教授	千葉 留三
文学部教授	新納 泉		(調査研究専門員)
文学部教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター助教授	山本 悅世
大学院医歯学総合研究科教授	村上 宅郎		(調査研究室長)
環境理工学部教授	名合 宏之	事務局施設企画部長	森内 寿一
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫		

調査・整理の経過と概要

【発掘調査：第15次調査】（発掘調査年度：2003年度）

調査主体	岡山大学	学長	河野伊一郎
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	福田 孝司
調査研究員：調査主任	タ	助手	野崎 貴博
運営委員会			
センター長（文学部教授）	福田 孝司	大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫
文学部教授	新納 泉	大学院医薬学総合研究科教授	村上 宅郎
文学部教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター助教授	山本 悅世
環境理工学部教授	名合 宏之		（調査研究室長）
環境理工学部教授	沖 陽子	事務局施設企画部長	齊藤 健次
（調査研究専門員）			

【報告書刊行】（報告書刊行年度：2010年度）

運営委員会			
センター長（理事・事務局長）	北尾 善信	大学院環境学研究科教授	沖 陽子
副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）	新納 泉		（調査研究専門委員）
人学院社会文化科学研究科教授	久野 修義	埋蔵文化財調査研究センター教授	山本 悅世
大学院医薬学総合研究科教授	大塚 愛二		（調査研究室長）
大学院自然科学研究科教授	柴田 次夫	事務局施設企画部長	山下 隆幸

第2節 第13次・15次調査の経過

第13次調査 2002年4月18日～4月26日までの期間、発掘調査に先立つ表土掘削を行った。表土掘削時に重機で掘削した土層は、大正期以降の岡山医科大学建設時における造成土（厚さ0.8～1.1m）と、その直下の近代耕作土（2層）（厚さ0.2m）である。表土掘削時には、（2層）より下位の包含層にまで達する建物基礎が多くみつかった。とくに、南北に1条、東西に3条にのびる、煉瓦を伴った梁状の基礎が深くまで達していた。他にも、梁状基礎ほど深くないものの、平面方形のコンクリート基礎が、調査区北辺と南半を中心に多数みつかった。これら基礎については、いずれも表土掘削時に重機で破砕して除去した。ただし、基礎下の松杭については、包含層を壊さずに撤去することが困難なため残すこととした。表土掘削期間中の人力作業は、主に基礎に伴う埋土や石を除去する清掃作業に費やされることとなった。

発掘調査は、2002年4月31日～10月25日まで実施した。調査開始に当たって、まず2名の調査員が現地を担当した。最初の作業として、基礎撤去後の清掃、および基礎で生じた壁面の精査による遺跡の全体像の把握、調査区内の側溝の整備、そして近代層（3層）を中心とする調査開始面の精査を実施した。調査区中央部を東西に走る、梁状基礎部分の壁面清掃の際、（6層）中において、古式土師器が広範囲に連なる状況を確認した。さらに、調査区北半の西壁側溝掘削時や、調査区南東部の擾乱清掃中にも古式土師器が出土したことから、今後の掘り下げによって広範囲に古式土師器が出土する可能性が高くなった。したがって、この古墳時代に関する調査に多くの時間が必要とされることが予想された。

調査開始面の精査は、近代層である（3層）上面を対象とした。結果、東西・南北方向の畦畔を検出した。この畦畔には2段階あり、（3層）と（4層）をそれぞれ畦畔として割り出して加工がなされていることが判明し

た。(3層)の畦畔に伴う耕作土である(2層)については、東西・南北畦畔の一部において土層状況と平面形を確認した。(4層)を加工した畦畔については、耕作土となる(3層)上面の検出時において調査区全面で検出を行った。

5月下旬より、(3層)の掘り下げを行い、中世層である(4層)上面の調査に移った。(4層)で検出した遺構は、近世と中世に属する。近世遺構としては、本層を加工した東西・南北畦畔と近世土坑群、大型溝、中世遺構としては井戸、溝、ピット群を発見した。まず調査を進めたのが、近世の東西・南北畦畔である。その際、南北畦畔を軸とするラインに、近世土坑が多数存在することが判明した。最終的な土坑の数は計28基となったが、これらの調査に予定外に時間を費やすこととなった。近世土坑の調査が進行するうちに、調査区北東隅に大型の溝の西端が存在することが判明した(溝30)。これは当初、大型の近世土坑と捉えていたが、平面形と土層の堆積状況から溝と認識するに至った。なお本溝については、四段階からなり、発掘調査時は近世を中心とするものと認識していたが、整理研究の結果、中世末～近世に属することが判明している。近世遺構の全体写真は、6月26日に撮影した。

近世遺構の調査と並行するかたちで、(4層)の中世遺構の検出作業を行った。(4層)はおもに上下二層に分かれたが、それぞれの面の調査を実施した。本層の土質は、中世遺構の埋土上層とかなり類似していたため、本層で中世遺構を検出することは全般的に難しかった。そうした中、調査区東半を中心に、井戸や南北溝等の中世遺構を見いだした。それは、調査区東半において多数の近世土坑を掘りあげたことで生じた、多くの土層断面を検討したこともによる。一方、調査区北西部の精査時にも、14世紀段階の土師質土器碗が多く出土したため、溝等の存在が想定された。しかし、その平面形を明瞭に認識することが困難であったため、遺物の取り上げに注意しつつ、次の(5層)で再度精査することとした。中世遺構の検出を目的に、(4層)の掘り下げを行い、7月より(5層)の調査に移った。中世および後の古墳時代遺構の調査に対応するため、ここで調査員をひとり増員し、常時3名体制でのぞむこととした。(5層)の調査では、7基の井戸のほか、調査区北半の東西溝とピット群、



1. 造成土除去・
建物基礎撤去
作業
2. 井戸 5曲物
取り上げ
3. 土器溜まり
2の調査
4. 現地説明会



図3 調査風景

調査・整理の経過と概要

南半の東西溝等を検出するに至った。上述した、調査区北西部において中世土器が出土した箇所も、東西溝であることが判明した。〈4層〉・〈5層〉で検出した中世遺構の全体写真は8月13日に撮影した。

8月後半から、古墳時代層である〈6層〉の調査に進んだ。古式土器の出土状況と、その他の遺構の把握を目的とした。調査区北半と南東部では、〈5層〉を取り除いた段階ですべて一部、面的に土器がすがたを表しつつあった。これら土器の検出作業および地形の検討を重ねた結果、調査区北半で長さ約14m、南東部で約8mにわたる土器溜まりを検出した。さらに、調査区南辺でも長さ約5mの土器溜まりの存在が判明した。これら土器については、多くは完形のものが集め置かれた状況を呈していた。後の整理段階において遺物の出土傾向を分析するために、遺物出土状況図を全面的に作成しながら、遺物の取り上げを実施することとした。そのため、土器溜まりの調査を迅速に行うべく、調査員6人という、ほぼ純手の体制でのぞんだ。土器を検出し終えた状態で、調査区東半において検出した南北方向の溝群とともに、9月24日に古墳時代遺構の全体写真を撮影した。その後、土器溜まりの実測と並行して遺物の取り上げ作業を実施し、10月8日にすべての土器溜まりの調査が完了した。なお、〈6層〉においては、上層において検出しえていなかった中世の建物およびピット群も確認した。

調査終了予定日が迫る中、〈8層〉の調査に移った。本層では、弥生時代後期の溝や、高まりを確認した。10月11日に〈8層〉上面検出遺構に関する全体写真を撮影した後、高まりについては、3段階の土層堆積が認められたため、それぞれに調査を実施した。最後の面である〈9層〉では、北半において弥生時代中期段階の微高地と、その縁辺付近をめぐる溝を検出した。〈9層〉の調査終了後、最後に、旧地形復元のための深掘りを、調査区南壁・西壁・東辺において実施した。結果、弥生時代中期以前の河道（板材1点が出土）の存在を確認した。調査は、10月25日に終了した。

なお、土器溜まりおよび中世集落の調査成果をひろく公開すべく、9月15日(日)に現地説明会を開催し、学内外からの72名の見学者を得た。また、9月26日付けの山陽新聞朝刊1面に本調査に関する記事が掲載され、それ以降に23名の専門家や一般の方々からの見学があった。

第15次調査 発掘調査に先立つ表土掘削を2003年10月14・15日に実施した後、10月16日～10月29日までの期間、発掘調査を行った。調査の過程で、近世土坑1基や中世の土坑1基、古墳時代初頭の井戸1基・溝1条が確認された。特に古墳時代の井戸からは、土器や木製品が豊富に出土した。当初、第13次調査において検出の古墳時代初頭の土器溜まりの続ぎが、本地点においてもみつかる可能性も考えていたが、実際にはそれは本地点までのびないことが判明した。

第3節 調査の概要

第13次調査においては、弥生時代、古墳時代、平安時代～鎌倉時代、近世・近代の遺構を確認した。また、第15次調査では、古墳時代、中世、近世の遺構がみつかった。以下では、両者をあわせた上で、時代ごとに調査成果の概要を示す。

① 弥生時代（図4）

弥生時代中期以前には、河道が調査区南西部に広がっていた。また、調査区北東部は、中期以前から低位部を形成していた。弥生時代の遺構としては溝5条があり、中期と後期に分かれ。中期には、調査区北側～南東にかけて弧状にのびる微高地に活動痕跡がのこる。この微高地の南縁辺に、東西方向の溝がつくられた。また微高地上から当該期の土器片が出土している。

後期には、上記微高地と周辺の低位部を継続する南北溝と、南西部の微高地に沿う溝がつくられた。その後、弥生時代末頃の洪水砂が調査区を覆った。

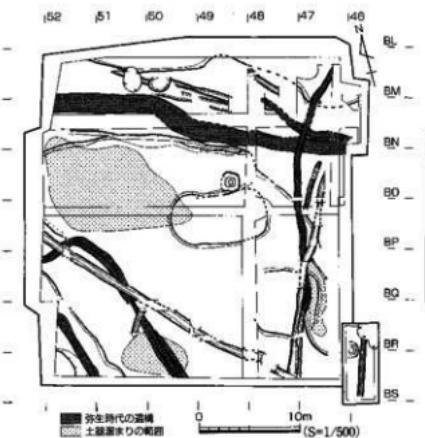


図4 弥生時代～古墳時代遺構全体図



図5 平安時代～鎌倉時代遺構全体図

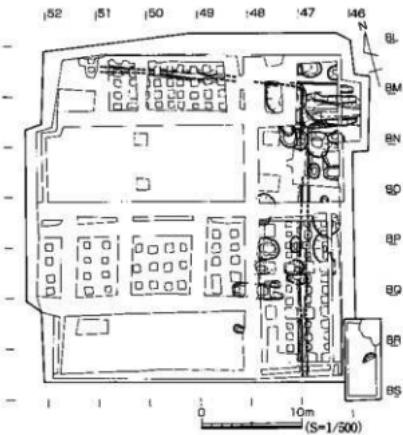


図6 近世・近代遺構全体図

② 古墳時代（図4）

古墳時代の遺構は、古墳時代初頭と後期に分かれる。古墳時代初頭の遺構としては、井戸2基、溝9条があり、その他に土器満まり3箇所を検出した。調査区東側の南北溝は当該期に再整備された。また、弥生時代以来の地形を利用して、土器満まりが3箇所形成された。2箇所の井戸は、土器満まり1・2が位置する低位部の範囲に構築された。一方、古墳時代後期の遺構は溝2条である。調査区南半において、北西～南東方向の溝、およびそれに取り付く小溝がつくられた。

③ 平安時代～鎌倉時代（図5）

地形の平壠化が図られ、調査区全体に遺構が広がる段階である。掘立柱建物5棟、井戸9基、塼1基、土坑5基、溝19、ピット群、段を検出した。これらは、10世紀末～11世紀初頭、11世紀後半～12世紀前半、14世紀前半にわかれれる。

10世紀末～11世紀初頭の遺構については、井戸1基のみを認識している。当該期の遺構については施田キャンバス内で発見されていないが、集落の中心域から離れて標示されたものと推定される。11世紀後半～12世紀前半は、調査区北辺と南辺に位置する東西溝群による区画と、周辺の井戸・土坑からなる。14世紀前半になると、前代よりも遺構密度が高まる傾向にある。溝による土地区分は調査区東辺と中央部に変化した。特に調査区東部で検出した大型溝の西端部は、その規模と構造から、厘敷地の大きな区画をなすものと考えられる。こうした区内において、井戸・掘立柱建物・ピット群が形成された。

④ 近世・近代(図6)

近世の遺構は土坑28基、溝3条、近代の遺構は畦畔からなる。近世には、調査区北東部の大型溝が規模・構造を縮小しつつも機能した。この大型溝周辺から調査区南半にかけて土坑群がつくられた。これら土坑群は南北へ帯状に展開しており、その分布は当該期の土地区分面と関連する可能性が強い。近代になると、土坑群の上面を削平する形で南北と東西に畦畔がつくられた。また、この段階で大型溝は機能を失い、当該箇所が東西方向の大畦畔として整備された。

表1 検出遺構一覧

a. 堀立柱建物

番号	時期	間×間	桁(m) [復元値]	梁(m) [復元値]	柱間(m) [復元値]
1	平安～鎌倉時代	2×1	北側:[4.12]、南側:[4.60]	西側:[3.44]、東側:[3.45]	北面:[1.95]・[2.67]、南面:[2.10]・[2.56]
2	平安～鎌倉時代	2×1	西側:[3.18]、東側:3.12	北側:[2.97]、南側:2.98	北面:[1.17]・1.80、南面:1.49・1.49
3	平安～鎌倉時代	2×1	北側:3.65、南側:4.08	西側:3.51、東側:3.44	北面:1.59・2.09、南面:2.02・2.05
4-1	平安～鎌倉時代	2×1	北側:[4.40]、南側:4.15	西側:3.90、東側:[3.90]	西面:2.10・1.80、東面:[2.28]・1.62
4-2	平安～鎌倉時代	2×1	北側:[4.40]、南側:3.96	西側:3.69、東側:[3.80]	西面:2.10・1.59、東面:[2.02]・1.77
5	平安～鎌倉時代	2×1	西側:[4.57]、東側:[4.52]	北側:[3.25]、南側:3.13	西面:[2.16]・2.42、東面:[2.25]・2.99

b. 井戸

番号	時期	上面形	長辺／短辺(m) [復元値]	底面高(標高m)	深さ(m)	断面形
1	古墳時代初期	隅丸方形	1.92/1.74	-0.61	1.70	逆凸形
2	古墳時代中期	椿円形	2.21/1.73	-0.54	1.49	Y字形
3	平安時代中期	円形	1.89/1.42	-0.65	1.50	逆台形
4	平安時代後半	隅丸方形・円形	2.26 [2.34]/1.78	-0.43	1.76	逆凸形
5	平安時代後半	椿円形	2.13/1.79	-0.42	1.72	逆凸形
6	平安時代後半	椿円形	2.16/1.88	-0.53	1.78	Y字形
7	平安時代後半	円形	0.62/0.52	-0.27	1.64	箱形
8	平安時代後半	円形	2.28/2.19	-0.35	1.72	逆凸形
9	平安時代後半～鎌倉時代	方形	1.70 [2.12]/1.22	-0.43	1.70	逆台形
10	鎌倉時代	円形?	2.30 [4.36]/2.00	-0.41	1.87	逆台形?
11	鎌倉時代	円形	0.93/0.86	-0.37	1.37	U字形

c. 炉

番号	時期	上面形	長辺／短辺(m)	底面高(標高m)	深さ(m)	断面形
1	平安時代末～鎌倉時代	長楕円形	1.66/1.02	1.30	0.09	瓶形

d. 土坑

番号	時期	上面形	長辺／短辺(m)	底面高(標高m)	深さ(m)	断面形
1	古墳時代初期	隅丸方形	1.89/1.27	1.03	0.16	直形
2	平安時代後半	椿円形	1.44/1.18	1.00	0.40	レンズ形
3	平安～鎌倉時代	円形	1.48/1.45	0.35	0.99	逆台形
4	平安～鎌倉時代	椿円形	0.60/0.58	0.51	0.65	箱形
5	平安～鎌倉時代	椿円形	0.90/0.73	0.94	0.16	レンズ形
6	平安～鎌倉時代	椿円形	1.15/0.65	0.81	0.19	直形
7	近世	不規則丸長方形	3.96/3.00	0.71	0.79	ボウル形
8	近世	隅丸長方形	1.57/1.00	0.65	0.71	ボウル形
9	近世	隅丸長方形	1.80/1.34	0.71	0.65	箱形
10	近世	円形	1.40/0.92	0.81	0.55	鐘鉢形
11	近世	隅丸長方形	0.91/0.40	1.42	0.22	鐘鉢形
12	近世	木の盤形	1.60/1.30	1.01	0.40	ボウル形
13	近世	木の盤形	1.90/1.50	1.10	0.30	箱形
14	近世	椿円形	1.30/1.82	1.13	0.21	箱形
15	近世	椿円形	2.50/2.10	1.12	0.48	ボウル形
16	近世	隅丸長方形	1.22/0.68	1.35	0.28	箱形
17	近世	円形	1.99/1.13	1.00	0.40	ボウル形

番号	時期	上面形	長辺／短辺 (m)	底面高 (標高m)	深さ (m)	断面形
18	近世	楕円形	2.10/1.70	0.91	0.88	ボウル形
19	近世	円形	1.15/1.20	0.95	0.50	ボウル形
20	近世	円形	1.34/1.49	0.98	0.39	ボウル形
21	近世	円形	0.67/0.69	0.71	0.38	箱形
22	近世	円形	2.08/2.00	0.51	0.99	箱形
23	近世	楕円形	2.60/2.26	0.88	0.79	箱形
24	近世	円形？	1.42/0.40	1.01	0.40	ボウル形
25	近世	隅丸長方形	1.55/1.08	0.52	0.84	ボウル形
26	近世	木の葉形	2.15/1.05	0.89	0.55	擂鉢形
27	近世	木の葉形	1.40/1.90	0.80	0.52	擂鉢形
28	近世	隅丸長方形	3.10/1.81	0.88	0.61	箱形
29	近世	楕円形	2.15/2.13	0.55	0.66	ボウル形
30	近世	楕円形	1.70/1.35	0.56	0.79	ボウル形
31	近世	隅丸長方形	1.20/0.65	0.85	0.52	ボウル形
32	近世	隅丸長方形	1.40/0.67	1.09	0.37	箱形
33	近世	隅丸長方形	3.79/1.50	0.86	0.54	箱形
34	近世	円形	0.80/0.32	0.09	0.15	ボウル形

e. 溝

番号	時期	長さ (m)	幅 (m)	底面高 (標高m)	深さ (m)	断面形	方向
1	弥生時代中期	29.2	W 1.96/E 1.50	W 0.83/E 0.75	W 0.30/E 0.20	直形	E→W
2	弥生時代中期	12.5	0.55	W 0.96/E 0.78	W 0.07/S 0.18	ボウル状	W→E
3	弥生時代中期	6.3	0.92	NW 0.24/SE 0.35	NW 0.38/SR 0.27	ボウル状	SE→NW
4	弥生時代後期	20.9	W 0.50/S 0.48	W 0.61/S 0.77	W 0.37/S 0.21	逆台形	S→W
5	弥生時代後期	20.9	N 0.49/S 0.53	W 0.58/0.46	W 0.42/S 0.52	ボウル状	W→S
6	弥生時代後期	30.7	N 0.45/S 0.89	N 0.55/S 0.67	N 0.27/S 0.18	逆台形	S→N
7	古墳時代初期	6.58	N 0.76/S 1.03	N 0.9/S 0.86	N 0.18/S 0.21	直形	N→S
8	古墳時代初期	20.0	N 0.58/S 1.25	S 0.97/N 1.05	N 0.02/S 0.41	直形	N→S
9	古墳時代初期	5.58	N 0.38/S 0.42	N 0.85/S 0.83	N 0.11/S 0.14	ボウル状	S→N
10	古墳時代初期	3.67	NW 0.38/SE 0.47	NW 1.07/SE 1.07	W 0.07/E 0.18	直形	NW→SE?
11	古墳時代初期	8.42	0.50	W 1.05/E 0.98	W/E 0.13	ボウル状	W→E
12	古墳時代初期	11.92	0.73	W 1.06/E 0.99	W/E 0.12	直形	W→E
13	古墳時代初期	7.33	0.34	W 1.08/E 1.01	W/E 0.10	直形	W→E
14	古墳時代後期	27.67	NW 1.00/SE 1.50	NW 0.86/SE 0.80	NW 0.29/SE 0.45	直形	NW→SE
15	古墳時代後期	2.17	0.56	NQ.77	0.28	逆台形	N→S?
16	平安時代後半	13.8	W 0.44/E 0.20	W 1.19/E 1.07	W 0.14/E 0.23	逆台形	W→E
17	平安時代後半	13.8	W 0.50/E 0.68	W 1.22/E 1.06	W 0.13/E 0.25	逆台形	W→E
18	平安時代後半	18.6	W 0.44/E 0.68	W 1.21/E 0.93	W 0.15/E 0.24	ボウル状～逆台形	W→E
19	平安時代後半	24.8	W 0.29/E 0.30	W 1.11/E 0.88	W 0.24/E 0.24	ボウル状	W→E
20	平安時代後半	24.8	W 0.55/E 0.70	W 1.20/E 1.03	W 0.14/E 0.20	ボウル状～逆台形	W→E
21	平安時代後半～鎌倉時代	5.6	N 0.54/M 0.34	N 1.27/S 1.21	N 0.22/S 0.11	逆台形	N→S
22	平安時代後半	9.5	W 0.45/E 0.39	W 0.73/E 0.73	W 0.25/E 0.34	直形	W→E?
23	平安時代後半	6.0	W 0.28/E 0.28	W 1.03/E 0.95	W 0.18/E 0.24	逆台形	W→E
24	平安時代後半	21.8	W 0.73/T 0.46	W 0.96/E 0.96	W 0.32/E 0.18	逆台形	W→E
25	平安時代後半	5.5	0.41～0.65	W 1.13/E 1.01	W 0.04/E 0.15	ボウル状	W→E
26	鎌倉時代	5.4	W 0.83/E 0.50	W 0.97/E 0.94	W 0.19/E 0.15	ボウル状	W→E
27	鎌倉時代	9.6	W 0.52/E 0.74	W 0.97/E 0.88	W 0.17/E 0.23	ボウル状	W→E
28	鎌倉時代	7.7	W 0.81/E 0.79	W 1.16/E 1.14	W 0.29/E 0.19	ボウル状	W→E
29	鎌倉時代	4.5	N 0.38/S 0.68	N 1.06/S 0.94	N 0.07/S 0.19	ボウル状	N→S
30A	鎌倉時代	5.6	W 2.03/楕円3.40/E 0.95	W 0.77/中央4.35/E 0.39	中央0.53/E 0.62	ボウル状	W→E
30B	鎌倉時代～近世	5.3	W 0.07/楕円5.13/E 2.66	W 0.47/中央4.62/E 0.52	中央1.14/E 0.98	逆台形	W→E
30C	近世	6.0	W 3.45/E 2.70	W 1.19/E 1.10	W 0.54/E 0.50	逆台形	W→E
30D	近世	5.5	W 1.86/E 1.66	W 0.90/E 1.10	W 0.49/E 0.56	逆台形	W→E?
31	鎌倉時代～近世	2.08	1.20	W 1.13/E 1.08	W 0.22/E 0.32	ボウル状	W→E
32	鎌倉時代	24.8	0.36～0.67	N 1.03/S 0.86	N 0.35/S 0.72	ボウル状	N→S
33	鎌倉時代	24.8	0.80～1.10	N 0.58/S 0.50	N 0.70/S 0.87	すり鉢状	N→S
34	近世	1.25	0.68	1.46	0.20	ボウル状	W→S

第4節 整理・研究および報告書作成にあたって

1. 整理・研究および報告書作成にあたっての方針

第13次・第15次調査では、弥生時代・古墳時代・中世・近世・近代にわたる各時代の生活面を検出した。なかでも、発掘後の整理・研究にあたってもっとも留意したのは、第13次調査で検出された土器溜まりにどのように取り組み、その成果をどのような形で報告書に反映させるかという点である。土器溜まり出土遺物には、土器の他、土錐、石錐、礫があるが、特に主体をなす土器群に関する整理・研究方法が課題となった。

今回実施した整理・研究では、土器溜まりの全体像の把握を目的とすることとした。当該期の上器編年研究については、従来の調査・研究によって精力的に進められてきた一方、土器溜まりの歴史的意義についてはいまだ十分な議論がなされていないからである。それは、土器溜まりの実態に関する基礎的データが不足しているためと考えられる。今回の整理・研究にあたっては、現象としての土器溜まりの実態を可能な限り明らかにし、その上で歴史的評価にのぞむことを目指した。

こうした目的の達成に近づくためには、①土器溜まり出土遺物の総数を明らかにすること、②調査時に記録した遺物出土状況と実際の出土遺物を照合しながら遺物の出土傾向を探すこと、という少なくとも二つの作業が必要となった。①については、接合・復元作業の段階から調査員が器種分類を進め、分類ごとに個体認識を行うこととした。個体数の算出に関しては、土器の特徴や、破片形態に関する一定の基準の元に、口縁や底部等の数量をカウントすることで、分類ごとに最小個体数および最大個体数を求めた。なお、古式土器の分類については次項、遺物の個体数カウント結果については、第3章第4節の各土器溜まりの項に掲載している。

②については、上記の作業により認識した個体単位で、出土記録との照合を行った。発掘調査時には、各土器溜まりにおいて、遺物検出の後に50cm程度の任意の取り上げ範囲に取り上げ番号を付与しながら、出土状況図の作成を行った。そうした出土記録をもとに、遺物分布図を作成することとした。

報告書作成にあたっては、土器溜まりの全体像を示しうる基礎的データの提示を目指す一方で、実測・掲載遺物については一定の統一を行った。それは、作業効率を勘案しつつ、把握した全体の中で図化の必要な個体を掲載しようとしたためである。あわせて、個体数算出の根拠となる個体データ一覧と、個体数算出結果を提示することとした。

2. 古式土器の分類

古墳時代初頭の3箇所の土器溜まりからは、合わせてコンテナ148箱（1箱28ℓ）の古式土器を主体とする遺物が出土した。古式土器の器種構成は、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器、器台形土器、手焙形土器、ミニチュア土器、蓋形土器、製塩土器となる（図7・8）。これらの土器の個体数を算出し、かつ土器溜まりの全体像を考察するにあたって、いくつかの器種において整理段階で基本的な分類を行った。小形式に区分した上で個体数算出を行ったのは、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、鉢形土器、蓋形土器である。ミニチュア土器や手焙形土器、製塩土器については、個体数算出時においては細分していない。

壺形土器（図7） 最もバリエーションの多い器種である。全体的形状と頸部の有無、口縁部形態、調整によって分類した。分類にあたっては、大型のものと小型・精製のものに二大別される。ここでは、前者をI系、後者をII系とする。それらの中でも、頸部の有無によって二大別し、さらに口縁部形態（複合口縁/單口縁）や口縁部の立ち上がりの様相で細分を行った。壺I A類については口縁部の形態によって細分し、その細分単位を個体数計

測に用いた。一方、壺 I D類については、D 1～D 3類に細分しうるが、その形態差が漸移的であることと、個体数を測る過程では小片を扱う場合も生じたため、まとめて一類型として認識している。

〈I系〉

壺A類：頸部を有し、口縁部が複合口縁となるもの。複合口縁形態によって、以下に三分類した。

A 1類：口縁の立ち上がりが短い複合口縁となるもの（1）。

A 2類：口縁の立ち上がりが長く直立するもの。山陰系を含む（2）。

A 3類：口縁の立ち上がりが長く内傾するもの。西部瀬戸内系を含む（3）。

壺B類：頸部を有し、口縁部が單口縁となるもの。頸部や口縁部の形態で細分も可能である（4・5）。

壺C類：頸部が無く、口縁部が複合口縁となるもの（6）。

壺D類：頸部が無く、口縁部が外反するものをまとめてD類とする。D類は、口縁部形態によって以下に細分しうる。D 1類：口縁部がラッパ状に大きく外反するもの（7）。D 2類：口縁部が「く」字形を呈するもの（8）。D 3類：口縁部が直立ぎみに短く立ち上がるもの（9）。

壺E類：頸部が無く、口縁部が短く直立するもの（10）。

〈II系〉

壺A類：頸部を有し、口縁部が複合口縁のもの（11）。

壺B類：頸部を有し、口縁部が單口縁のもの（12）。

壺C類：頸部が無く、口縁部が直口縁のもの（13）。

壺D類：頸部が無く、口縁部が鉢形を呈するもの（14）。

變形土器（図7） 口縁部形態により以下の類型に大別する。

壺A類：口縁部が複合口縁のもので、立ち上がり幅や器形によって以下の二類型に分ける。

A 1類：口縁の立ち上がりが短い複合口縁となるもの。いわゆる古備型壺（15）。

A 2類：口縁の立ち上がりが長く直立するもの。山陰系の壺を含む（16）。

壺B類：口縁部が「く」字形を呈するもの（17）。タタキ成形のもの等、バリエーションがある。

鉢形土器（図7・8） 鉢形土器については、大型と中～小型の二つの大別形式に区分する。大型鉢については、口縁形態によって二分する。中・小型鉢については、口縁形態によって4つに細分する。

〈大型鉢〉

A類：「く」字口縁となるもの（18）。

B類：複合口縁となるもの（19）。

〈中・小型鉢〉

中・小型鉢A類：口縁に段を有するもの。いずれも小型となる（20・21）。

中・小型鉢B類：口縁に段がなく、逆ハの字形に聞くものの（22・23）。台付きのものを含む。いずれも小型となる。

中・小型鉢C類：「く」字口縁となるもの。中型（24）と小型（25）がある。

中・小型鉢D類：複合口縁となるもの。中型（26）と小型（27）がある。

高杯形土器（図8） 杯部と脚部の形態により、以下の四類型に大別する。

高杯A類 杯部に段が無く、脚部にも段が無いもの（28）。

高杯B類 杯部が二段となり、脚部に段が無いもの（29）。

高杯C類 杯部が鉢形となり、脚部に段が無いもの（30）。

高杯D類 杯部に段が無く、脚部が二段となるもの（31）。小型のものには、器台としての機能を想起させる形態（杯部が浅く、杯部が脚より小型）がみられる。

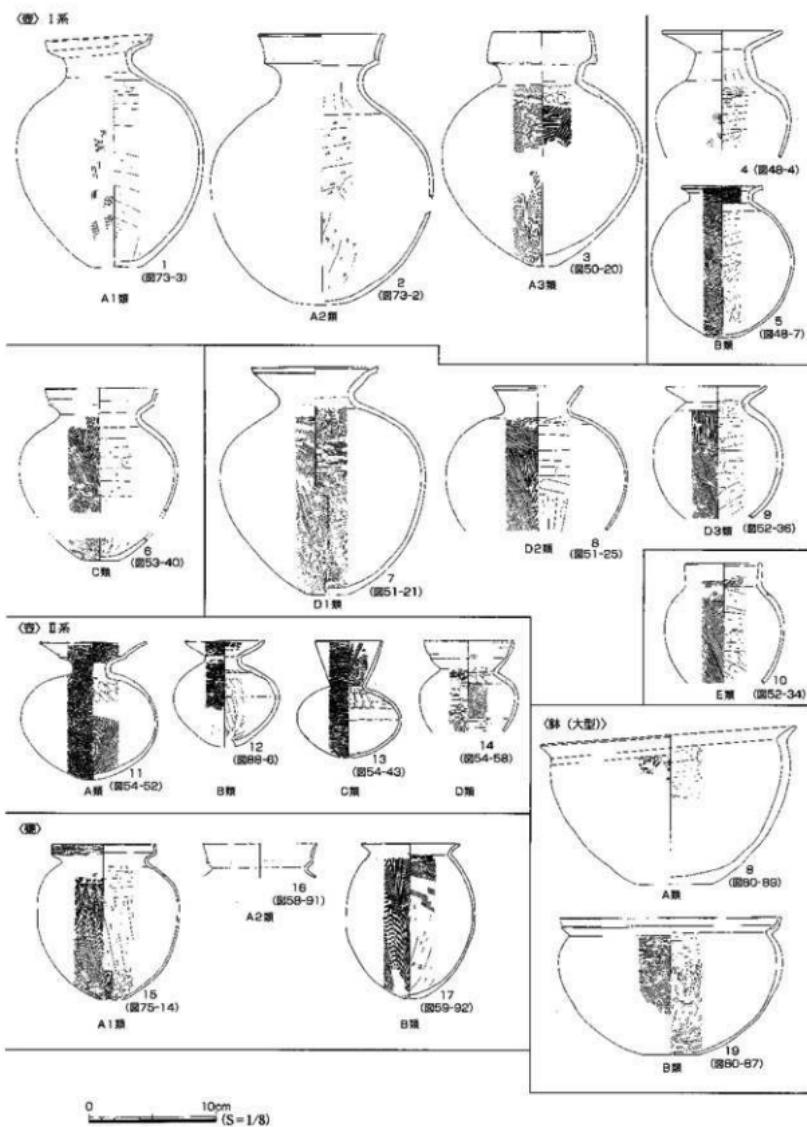


図7 土師器分類図(1)

器台形土器（図8） 大きさ・形態によって二類型に大別した。

器台A類：小型で口徑に類する形態をなすもの（32）。小型高杯の形態で杯部に穿孔を有するものも本類型に含める。

器台B類：中型で口径が大きいもの（33）を本類型とする。

蓋形土器（図8） 造りと形態によって二類型に分類した。

蓋A類：円錐形で頂部につまみを有するもの（34）。本類型は中・小型鉢B類と造りの点で共通するが、径に対する器高が低く、外側に大きく開くことを特徴とする。いわゆる「低脚杯」も本類型に含める。

蓋B類：高杯の素材を利用したものをまとめて蓋C類とする（35）。本類型には、杯部転用のものや、裾広がありの帽子形を呈するもの、脚部単体で焼成され、かつ脚頂部に突起を有するものがある。

手捨形土器（図8） 「く」字口縁の鉢（中・小型鉢C類）に覆い部を付加した形態を呈する（36）。覆い部の端部が上下に拡張するものと、拡張をみせず平坦な端面をなすものがある。

ミニチュア土器（図8） 径・高さが5cm以内、あるいは手づくねによって成形されているものを総称してミニチュア土器とする（37～40）。形態については、中・小型鉢A～D類に類するものを基本とする。

製塙土器（図8） 脚台（41）や脚部細片として出土した。脚台の大きさで二区分しうる可能性がある。

（吉本 順）

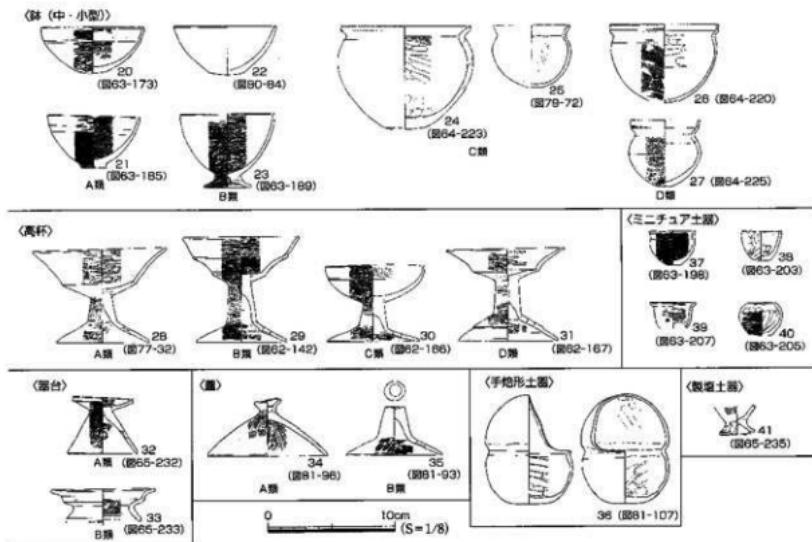


図8 土器分類図(2)

第3章 調査の記録

第1節 調査地点の位置

本書で報告する鹿田遺跡第13次・第15次調査地点（総合教育研究棟新館）は、岡山大学鹿田キャンパスの中央からやや東寄りに位置する。既往の施設との位置関係でみると、本調査地点は記念会館、臨床研究棟・講義棟、RI研究センター、基礎研究棟、基礎医学棟に囲まれた地点となる。構内座標では、BK～BS45～52区に位置する。

既往の調査地点との関係では、本調査地点は第5次調査地点（管理棟新館、1987・88年発掘調査）の南西、第7次調査地点（基礎研究棟新館、1998年発掘調査）の北東にあたる。第5次調査地点は、鹿田遺跡の中心部である第1次調査地点（外来診療棟新館、1983・84年発掘調査）の南西に隣接することから、弥生時代・古墳時代・古代・中世にわたる考古資料が濃密に分布する地点であった。一方、第7次調査地点は、弥生時代と古代の遺構は認められなかったものの、古墳時代初頭の集落や、中世集落および猿形木製品の出土が注目された。こうした位置環境から、本調査地点においても、鹿田キャンパス構内で広く認められる中世集落や、古墳時代集落の広がりが予想された。

発掘調査前の第13次調査地点は、駐車場として利用されていた。しかしその地下には昭和に建てられた建物の基礎部分が残存していることが、調査前から判明していた。そのため、調査前から遺跡が一定程度破壊されていることが危惧された。（光本）



図9 調査地点遠景



図10 調査地点位置図

第2節 層序と地形

1. 層序

第13次・第15次調査をあわせて層序を検討した結果、以下の基本土層を認識した。ただし、第13次調査地点は、東西南北にのびる建物の梁状基礎の搅乱により、調査区周囲の壁面はところどころに分断が生じ、全体的な基本土層の把握において困難な面もあった。なお、本報告書内における基本土層の表記は〈 〉書きとする。また、東西南北の調査区壁面の土層断面について言及する場合には、断りがない限り第13次調査のものを指すこととする。第15次調査の土層断面に関する記述の際にはその旨を記す。

〈1層〉(大正期以降の造成土) 上面は現地表面にあたる。上面標高は約2.30~2.50mである。厚さは0.8~1.1mを測る。本層の多くは、1922(大正11)年の岡山医科大学建設時における造成土である。

〈2層〉(近代) 本層については、〈1層〉とともに表土掘削段階で掘り下げを行ったため、断面の調査によつて全体像の概略をつかんだものである。本層は淡灰褐色粘質土で、しまりが非常に強い一方でブロックと砂粒を多く含む。こうしたことから、本層の形成は、近代の洪水砂に起因するものと考えられる。本層は〈1層〉による削平が認められたものの、本来は調査区の全面にわたって堆積していたものと推定される。上面標高1.56~1.84m、厚さは15~24cmを測る。調査区北壁でみると北壁より20cm前後高くなる。こうした比高は、直接的には〈3層〉段階の地形によるが、遙れば弥生時代以来の北側に広がる微高地の影響もあるものと考えられる。本層の上面～土層中からは、近代の陶磁器片が出土した。

〈3層〉(近代) 本層は〈4層〉削り出しによる畦畔に伴う土層であり、性格としては耕作土と考えられる。本層上面より発掘調査を開始した。上面標高1.45~1.68m、厚さ5~26cmとなる。BNライン以北において上面標高が高くなり、1.60mを超える。ただし北壁でみると、調査区北東部である47ライン以東については上面標高を低くする。こうした上面標高の様相は、弥生時代以来の旧地形の影響の名残と考えられる。

本層は〈3a層〉・〈3b層〉の上下二層に細分される。〈3a層〉は淡緑灰褐色粘質土～淡灰褐色粘質土、〈3b層〉は灰褐色粘質土～灰茶褐色粘質土となる。〈3層〉からは、陶磁器の他、中世の土器細片も出土した。

〈4層〉(平安時代末～近世) 淡黄褐色～緑褐色を呈する粘質土である。上面標高1.31~1.49m、厚さ6~20cmを測る。上面標高は、旧地形の影響により調査区北東部が低くなるものの、全体としては一定の水平面を形成する。

本層については、北壁で一層として認識したもの、基本的には〈4a層〉・〈4b層〉という上下二枚の層に大別される。本層は、中世～近世にわたる段状の堆積を特徴とすることが調査区壁面の調査および調査後の整理過程で判明した。段の様相(段1・2)については、本章第5節で後述したい。

〈4a層〉では、近世土坑群や大型溝を検出した。〈4a層〉は堆積順序と遺構との関係から、近世段階の〈4a-1層〉と、13~14世紀段階の〈4a-2層〉に時期的に区分される。〈4a-1層〉は淡灰褐色粘質土で、南壁47~50ライン西25mまでにみられる。〈4a-1層〉に切られる〈4a-2層〉は淡黄灰色粘質土で、南壁および西壁において確認された。

一方、〈4b層〉では、13世紀末～14世紀の井戸・溝・ピット

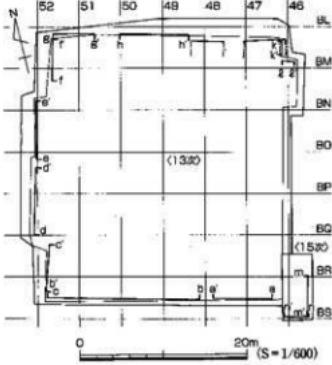


図11 土層断面位置図

を検出した。本層については、南壁における堆積順序から〈4 b-1層〉と〈4 b-2層〉に細分を行った。〈4 b-1層〉は緑褐色～淡黄灰色砂質土で、南壁の47～49ライン西1.9mの範囲に堆積する。本層は、〈4 b-2層〉および火災等の後の整地土と考えられる西側の「炭層」(12世紀初頭)を切る形となる。〈4 b-2層〉は淡緑灰褐色粘質土で、「炭層」と同様に12世紀頃のものと推定する。なお他の四隅の壁面では、南壁における〈4 b層〉の細分単位との直接の関係が把握できなかったため、〈4層〉を二分した場合の下層については〈4 b層〉という枠内で認識している。

〈5層〉(平安時代) 鉄分を多く含む暗緑褐色粘質土を基本とする。上面標高1.15～1.37m、厚さ6～20cmを測る。北壁においては遺構埋土のため、47ラインより西の上面標高については押さえられなかったが、46ライン以東については標高が低くなる傾向がみられた。旧地形からの影響がのこるものと考えられるが、それを除けば標高1.30m前後で平坦な面を形成している。本層の上面では11世紀後半～12世紀前半の井戸・溝などを検出した。また13世紀末～14世紀のピット群も検出されたが、これは検出面を下げて調査を行った結果であり、本来は〈4層〉から掘り込まれたものと考えられる。

本層についても、〈4層〉と同じく段状のカット面等がみられた。堆積順序から〈5 a層〉～〈5 d層〉に四区分する。〈5 a層〉は南壁・西壁・北壁、および第15次調査区において確認した。〈5 a層〉は、〈5層〉段階の段1・2の周囲に堆積した層と認識される。南壁の〈5 a層〉は灰緑褐色粘質土で、段1の東西、および段2の西側に堆積する。北壁では暗黄褐色粘質土となり、47ラインの段1をカットした後の堆積である。〈5 b層〉は灰茶褐色砂質土～明緑黄色土で、南壁と北壁、第15次調査区で確認した。調査区南半では、〈5 b層〉は段1・2を構成する。〈5 c層〉は明緑黃褐色～淡灰褐色砂質土で、調査区南壁と西壁で確認した。これは、平面調査時には確認しえなかつたが、その後の断面精査で調査区南西に広がることが推定された。〈5 d層〉は淡灰褐色砂質土で、〈5 c層〉同様に調査区南壁と西壁で確認した。本層もまた、調査区南西の段2を構成するものである。なお、〈5 b層〉・〈5 c層〉の東西端部は傾斜面をなすが、これらは傾斜が緩やかなことから段状のカット面というよりも、自然の落ち地形を示すものと考えられる。

〈5層〉全体からは、コンテナ4箱(1箱28ℓ)の遺物が出土した。多くは、下層に埋没する古墳時代の土器溜まりの土器碎片であるが、150片程の中世土器片と黒色上器5片が出土した。出土遺物および遺構の切り合い関係から、〈5層〉の堆積時期は11世紀～12世紀初頭頃の範疇と考える。

〈6層〉(古墳時代初頭) 淡褐色系の土質でマンガンを多く含むことを基本とする。上面標高は0.95～1.26m、厚さは6～26cmを測る。47ライン以東の北東部が低くなる。また、南壁51ラインや西壁BQラインでも、窪みに堆積するパターンがみられる。上面標高が高くなる南壁50ライン付近には本層が認められず、〈5 c層〉と〈7 b層〉による堆積となる。このことから、本層は〈5層〉形成において上面を削平された可能性が高い。

本層は自然の落ちへ堆積するとともに、土器溜まりを包含する層も形成する。古墳時代初頭の井戸1・2も、本層上面で検出した。

本層は六層に細分できる。〈6 a層〉・〈6 b層〉は鉄分・マンガンの多い淡灰褐色砂質土で、南壁に認められた。上部が〈5層〉によって削平される一方、50ライン西2m以西の〈6 b層〉は〈7層〉が形成する緩やかな傾斜面に堆積する。こうした傾斜面内の〈6 b層〉には、上器溜まり3が包含されていた。〈6 c層〉は南壁・西壁に認められる淡黄～淡茶褐色砂質土である。後者はさらに二層に細分した。本層は北西～南東方向にのびる弥生時代後期の窪地に堆積したものである。〈6 d層〉は西壁にみられる土層である。東西方向の窪地内に堆積したもので、土器溜まり1を覆う土層である。二層に細分され、上層が灰緑茶褐色土、下層が灰黄褐色土となる。本層はd-d'断面の東端にわずかにのこる〈6 e層〉上面から落ち込む。したがって、本層を土器溜まり包含層として個別に扱う可能性も排除はされないものの、土質としては本層は〈6層〉の範疇にある。また、〈6 d層〉堆積箇所が旧地形の落ちにあたることから、〈6 e層〉堆積時からさほど期間を置かない時期に、旧地形を反

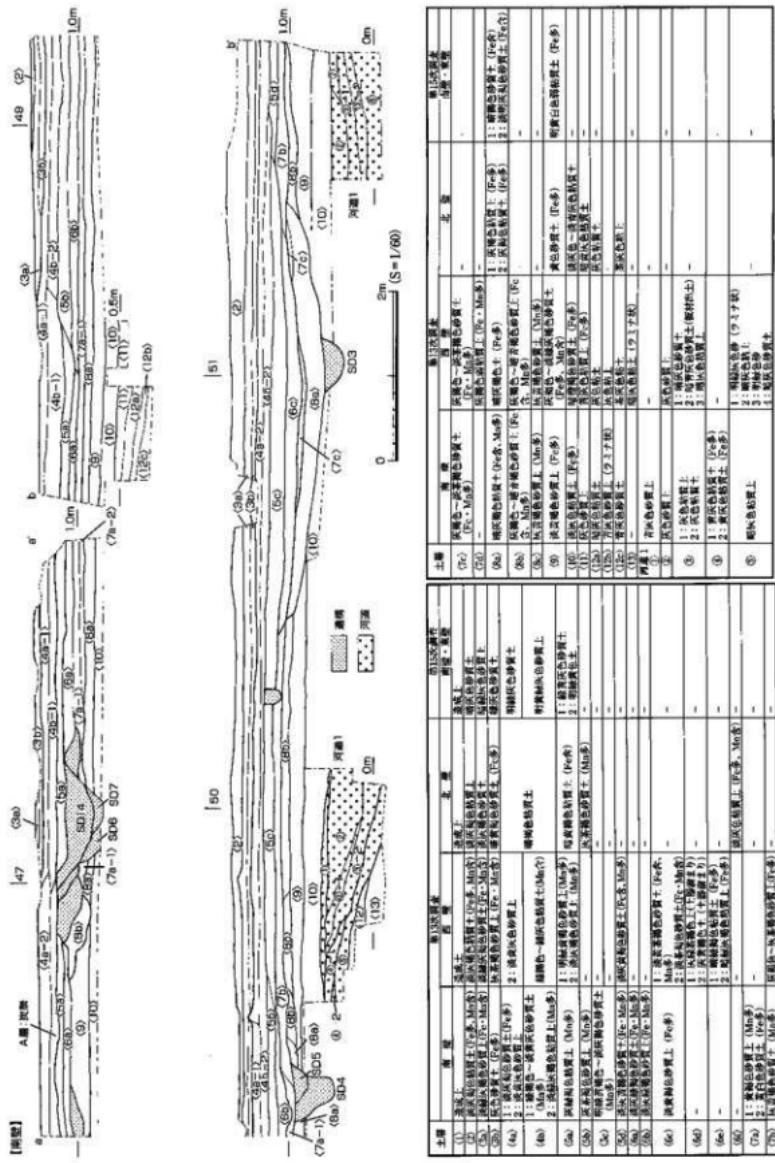


図12 調査区土層断面(1)—第132次調査測量—

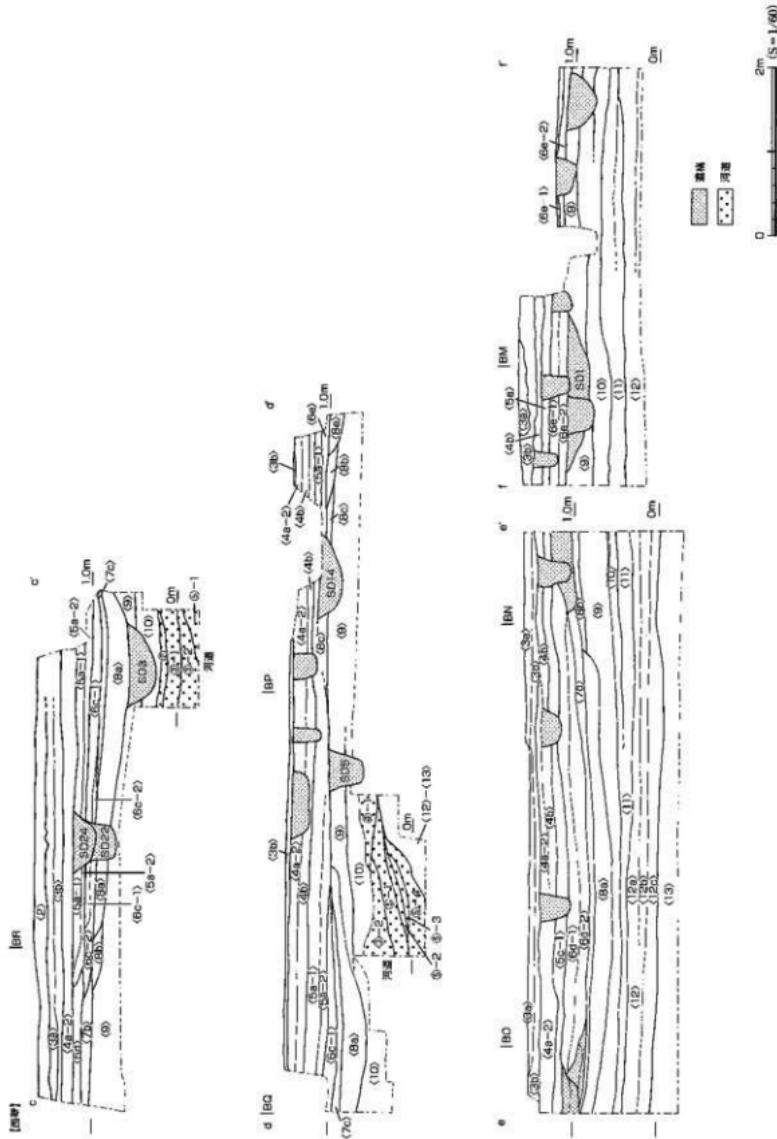
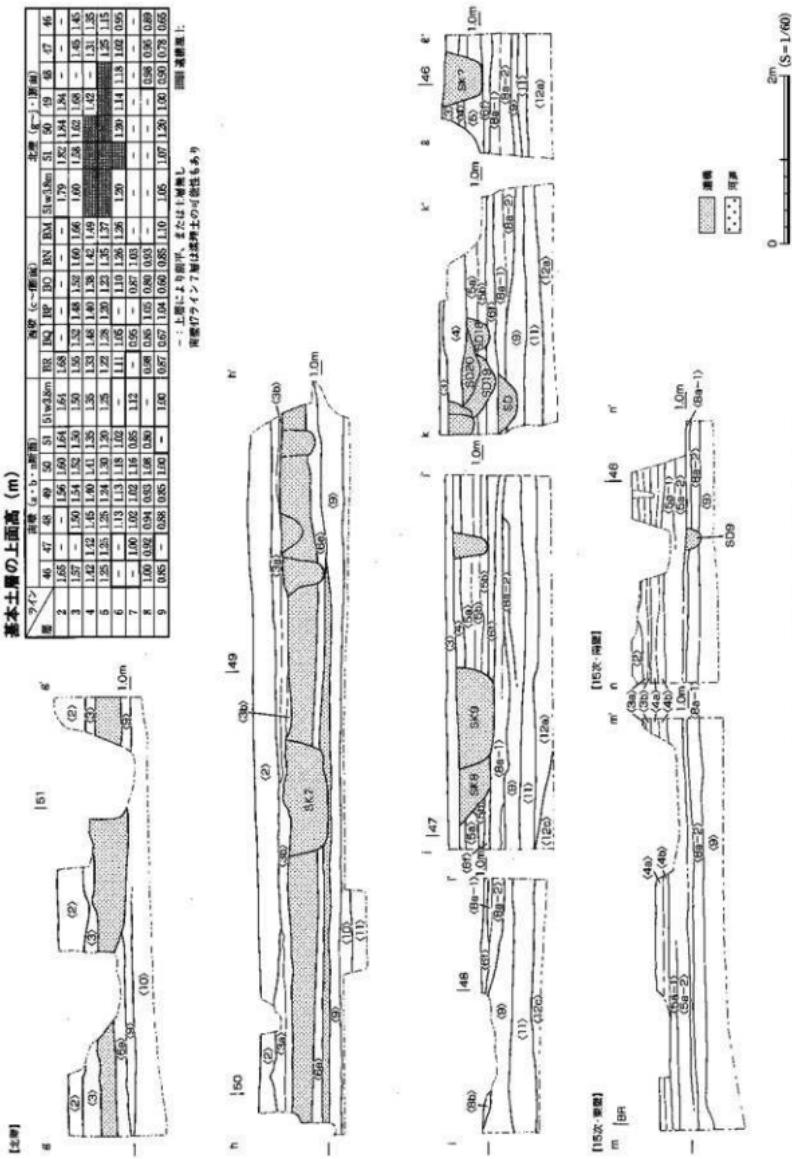


図13 調査区土層断面(2)—第13次調査面—



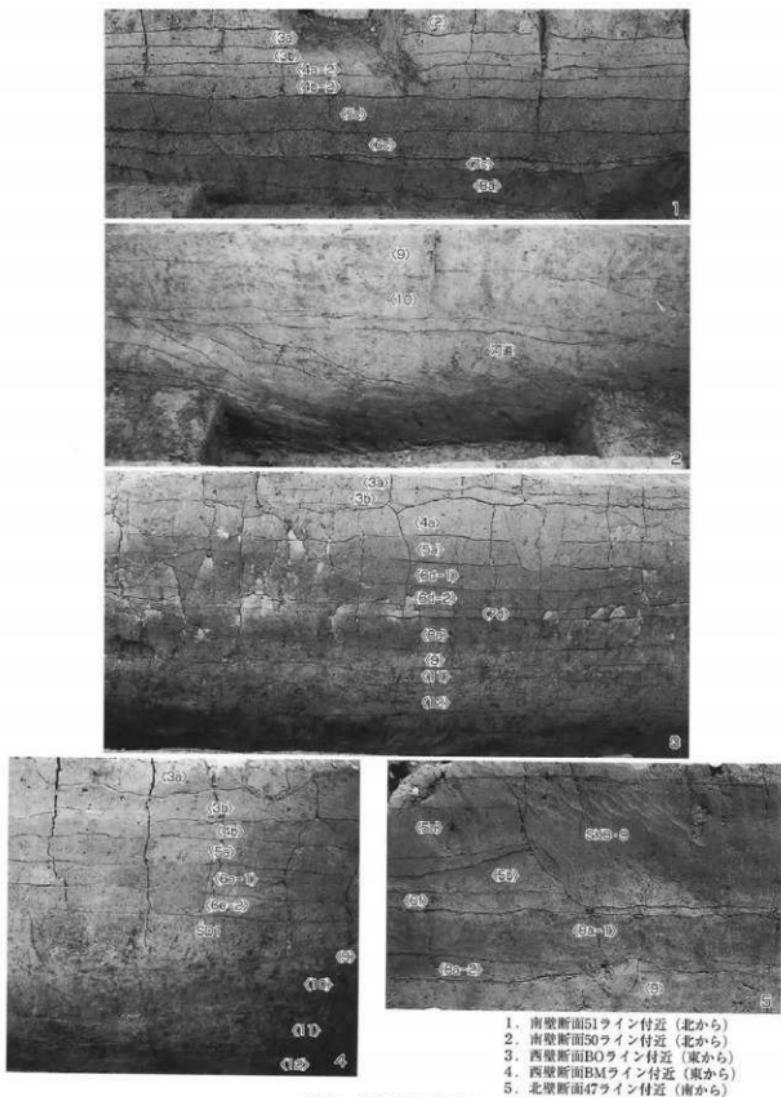


図15 調査区土層断面(4)

映した落ちが形成されやすい環境が生じたものと推定する。こうしたことから、本層を〈6層〉のひとつとして捉えるものである。〈6e層〉は、西壁から北壁にかけて、〈6d層〉の南側・北側に堆積する。本層は西壁では水平堆積をなすようにみえるが、北壁の49~50ラインにかけて、本層下面、緩やかに下方に傾斜をみせるため、本層もまた傾斜面への堆積を示す。西壁では上下二層に区分でき、上層が暗緑褐色粘質土、下層が暗緑灰褐色粘質土となる。〈6f層〉は、48ライン以東に分布する。本層も下層の傾斜面が形成する落ち内に堆積したものである。なお、土器溜まり2についても、同1・3同様に〈6層〉相当の土層で覆われていた。

〈6層〉は、土器溜まりを包含することから古墳時代初頭に位置付けられる。

〈7層〉(弥生時代後期) 灰黃褐色砂質土を基本とする。調査区南半の低位部を中心に残存した土層であり、調査区北半の微高地部分には確認されない。基本土層の中では砂質が強く、鉄分・マンガンを多く含むこと、また遺物の立った出土がみられなかったことから、洪水砂と考えられる。上面標高0.87~1.16m、厚さ5~10cmを測る。本層は堆積順序によって三層に区分した。〈7a層〉は黄褐色砂質土で、南壁西半で確認した。緩やかな落ちの斜面に堆積した状況を示す。〈7b層〉は南壁東半~西壁南端にかけて広がる灰黃褐色砂質土他の土層である。本層は比較的平坦な部分に堆積したものであり、南壁50ライン付近で本層の上面標高が最も高くなる。この南壁50ライン付近では本層上部が〈5層〉の影響で削平されていた。〈7c層〉は調査区南西部に位置する落ちの中に堆積したもので、灰褐色~淡茶褐色砂質土である。〈7d層〉は灰褐色弱粘質土となる。上層が土器溜まり1を包含する〈6d層〉で、土器溜まり形成以前に東西方向の落ちの内部に堆積した状況を示す。

本層の時期は、〈8層〉検出遺構の下限が弥生時代後期後葉であることから考えると弥生時代後期と考えられる。

〈8層〉(弥生時代後期) 暗灰褐色~灰褐色粘質土を基本とする。湿地を想起させる粘質土である。上面標高は0.80~1.05m、厚さは7~25cmを測る。落ちを含む低位部に残る土層である。本層上面では、弥生時代後期の溝を検出した。

本層については三層に区分した。〈8a層〉は暗灰褐色粘質土が主体で、色調が他の〈8層〉よりも濃く、鉄分が多い。本層は、調査区南半の低位部と北東部の落ちに厚く堆積する。〈8b層〉は灰褐色~暗青褐色砂質土で、〈8a層〉の脇に堆積する。調査区南半の低位部において認められた。〈8c層〉は灰黃褐色砂質土で、〈8b層〉の脇に形成された。本層も調査区南半の低位部に分布した。

〈8層〉からは、コンテナ2箱分の土器が出土した。土器は弥生時代後期前半~後葉に位置づけられ、他に中期後半のものが数片含まれる。したがって〈8層〉の形成時期は弥生時代後期と捉えることができる。

〈9層〉(弥生時代中期前半) 鉄分の多い淡黄褐色砂質土を基本とする。上面標高0.78~1.20m、厚さ12~24cmを測る。調査区全体に堆積が認められる。調査区北半が南半よりも高くなる一方、北東部は低くなる。本層上面では、弥生時代中期の溝を検出した。

調査区北半の微高地では、コンテナ1/2箱の土器が出土した。出土遺物および遺構との切り合い関係から、本層は弥生時代中期前半に形成されたものと考えられる。

基本土層〈10層〉~〈13層〉については、調査区西壁e-e'断面、および南壁・西壁において調査終了段階に設定したトレンチ調査で部分的に確認したものである。それらの形成年代は、遺物が出土しなかったため不明であるが、弥生時代中期以前のものである。またトレンチ調査の過程で、弥生時代中期以前の河道がみつかった。

〈10層〉 淡灰色粘質土を基本とする。上面標高0.67~0.80m、厚さ10~25cmを測る。調査区北側の微高地部分で標高が高くなるが、i-i'断面以東では本層は確認されない。

〈11層〉 黄灰色粘質土を基本とする。上面標高0.52~0.75m、厚さ10~32cmとなる。調査区北側の標高が高くなり、微高地の基盤層のひとつとなる。査区南西部でみつかった旧河道上面は本層相当面にあたる。

〈12層〉 灰色粘土を基本する。上面標高0.32~0.48m、厚さ36cmを測る。本層は部分的に三層に細分された。

〈13層〉 暗灰色粘土を基本とする。上面標高-0.05~0.06m、厚さは不明である。

〈河道〉 河道は調査区南西部および北東部に位置し、いずれも北西~南東方向にのびる。南西部の河道については、〈11層〉に相当する面から落ち込むラインを調査区南壁と西壁のトレンチ部分で確認した。上面標高0.65m、深さは現状で0.65mとなる。底面は確認していない。南壁でみると、南壁50ライン西2.5m付近が東肩となり、調査区南西隅まで河道埋土が広がる。調査区南西隅のトレンチ部分では西へ向けて上がる堆積を示すため、当該箇所は西肩に近いものと考えられる。調査区西壁のトレンチでは、河道埋土3~②層において板材1点が出土した。他に遺物は出土していない。

北東部についてはBM46から南2.5m付近の深掘りトレンチにおいて、河道埋土と考えられる互層状堆積を確認した。北東部が弥生時代中期以降も低位となることから当該箇所に河道の存在を推定するものである。

2. 地形の推移

弥生時代中期以前 〈10層〉~〈13層〉

北西から南東方向にのびる河道が、調査区南西部および北東部に位置する。また、調査区北東部には落ちが形成された。これら河道と落ちに挟まれた範囲の中に、微高地が形成された。

弥生時代中期~後期 〈7層〉~〈9層〉

前代までの旧地形を踏襲しながら、〈9層〉において微高地と低位部が形成される。比較的大きな微高地は、調査区北側と南西部にのびる。北側微高地は西から南東に湾曲するように島状にのびる。南西部の微高地は、北西~南東方向にのびる。これは、微高地西側において、河道埋土の上面がたわみを形成することで生じた微高地である。溝はこれらの微高地の縁辺につくられる。2つの微高地の間には、隅丸長方形と隅丸方形の島状の高まりが形成される。こうした高まりは現状では自然地形によるものと考えられるが、何らかの人为的な土地の加工がなされた可能性も完全に排除されるものではない。

弥生時代後期前半の〈8層〉は、低位部と窪地に堆積した。〈8層〉は土質と堆積箇所から、湿地状の環境をなしたものと推定される。〈8層〉段階において、微高地縁辺部、および調査区東側に溝がつくられた。その後、洪水分砂〈7層〉が本調査区全体に堆積した。

古墳時代 〈6層〉

洪水分砂の堆積によっても、古墳時代初頭段階には、弥生時代の地形の影響がなお色濃く残存した。弥生時代以来の微高地・高まりと、低位部による地形構成は継続した。また、この段階で南東部にも窪地が形成された。こうした調査区南東部と中央部、南部に生じた窪地や傾斜面は、土器満まりの形成箇所として利用されることとなった。

平安時代~鎌倉時代 〈4層〉・〈5層〉

旧地形の影響は、調査区北東の低位部に認められるが、この段階で地形は平坦化を遂げた。そうした中で、集落が調査区全体に広がることになった。その一方で、旧地形の影響を受けたわずかな傾斜面に段を構築する状況は、調査区内が一律な環境ではなかったことも示唆する。

近世・近代 〈1層〉~〈4層〉

〈3層〉段階に至っても調査区北東部の標高の低さが目立つ一方で、他の箇所はほぼ平坦な地形を呈する。ただし、〈4層〉を削り出して築かれた近代の駐畔や、近世の土坑群の分布は、旧地形における北側~南東へ湾曲する微高地に重なるものである。弥生時代以来の地質的影響が、近世・近代においてもなお残存していたものと推定される。〈1層〉による造成は、こうした過去の残滓を払拭し、均質な空間形成への意思の現れともいえるのである。

(光本)

第3節 弥生時代の遺構・遺物

概要（図16～19、図版20） 弥生時代の遺構は、弥生時代中期の包含層である〈9層〉上面と、後期の包含層である〈8層〉で検出した。〈9層〉上面で検出した遺構は溝2条、〈8層〉で検出した遺構は溝4条である。これらの遺構が構築された弥生時代中期から後期にかけての時期、本調査区内では狭い高まりが点在し、その

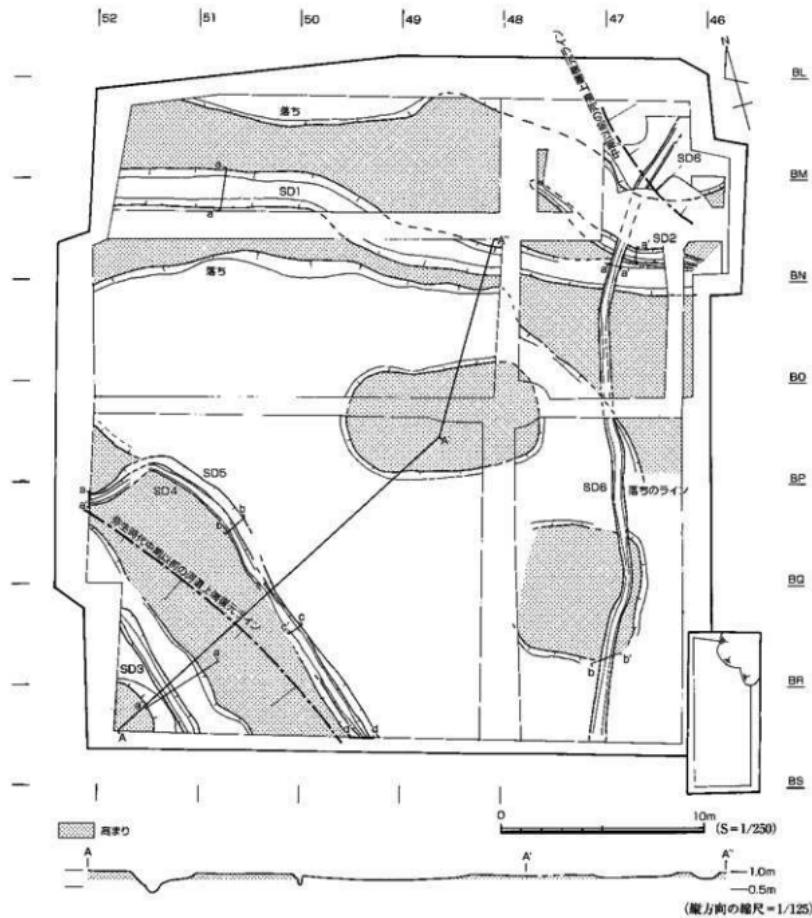


図16 弥生時代遺構全体図



図17 弥生時代遺構全景

間に低位部が広がる景観となっていたことが明らかとなった。ここでは地形の推移を概観し、検出した遺構との関係についてもふれておきたい。

弥生時代中期以前 弥生時代中期およびそれ以前と推測される時期の地形として確認できたもののうち、最も下層のものは、調査区南西部および北東部でのトレンチ調査によってデータを得ることができた河道である。調査区南西部・北東部ともに〈10層〉下面から北西-南東方向の河道が確認された。限られたトレンチ調査の範囲内では十分なデータを得られなかったが、南西部の河道は幅約10m以上、深さ約0.75m以上というおおよその規模を推測できた。このトレンチ調査の過程で南西部の河道内から板材が出土した(図18)。この板材以外の遺物は出土していないため、河道の時期は後述する〈9層〉の時期(弥生時代中期前業)を下限とする。調査区北東部の河道については、調査区内で確認できた範囲が狭く、調査区外に大きく延びているものとみられる。調査区内で確認できた規模は、幅約4m、深さ0.4mである。

この河道が埋没した後、〈10層〉、〈9層〉が形成される。〈9層〉は中期前業の土器を包含するが(図19-1~6)、中期後半や後期の土器は含まないので、中期前業段階までに形成された土層と考えられる。

〈9層〉段階の地形をみてみると、調査区の北側・南西には帯状にのびる高まり、調査区

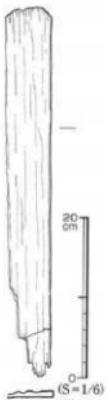


図18 弥生時代中期以前の河道出土遺物—木製品—

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	周縁	特徴
W1	板材	(45.0)	(5.7)	0.8	ヒノキ	粗目取り、側縁面取り加工

中央・南東・南西に隅丸長方形や隅丸方形の形状をとる高まりが確認される。それぞれの高まりの規模と形状を以下に記す。弧状に緩く湾曲しながら東西方向にのびる北側の高まりは、南北幅約7~8m、東西長約30.8m、高さ約0.2~0.3mである。南西部の北西-南東方向にのびる高まりは幅約6m、長さ約20m、高さ約0.15~0.3mである。調査区中央の高まりは東西に長い隅丸長方形を呈し、東西約8m、南北約3.5m、高さ約0.2mの規模を有する。南東の高まりは隅丸方形を呈し、東西約4m、南北約4m、高さ約0.2mの規模を有する。

本調査区の弥生時代中期前葉頃には上記のような高まりとその間に低位部が広がる起伏のある地形が展開していたことがうかがわれる。このような環境下で構築された遺構は3条の溝のみである。いずれも高まりの形状に沿って掘削されており、地形の影響をうけていることが看取されるものである。なお、この高まりの成因については人為的なもの、あるいは自然の営みによるもの、という二つの可能性が考えられるが、確定的な判断を下す材料は得られなかった。

弥生時代後期 〈8層〉出土土器（図19-7~15）は弥生時代中期後半から後期にかけてのものを含み、土器を含まないので、〈8層〉は後期に形成された土層と考えられる。また、〈9層〉の高まりは、この段階にも引き続き認められ、高まりと低位部が展開する起伏のある地形がのこっている。この段階の高まりは、〈9層〉段階の高まりを核とし、外縁部に〈8b層〉・〈8c層〉が堆積することで規模を拡大していく様子がうかがわれた。それぞれの高まりの規模と形状を以下に記しておく。

東西方向にのびる北側の高まりは〈9層〉段階からの形状をとどめ、弧状に緩く湾曲する。規模は南北幅約8~9m、東西長約30.8m、高さ約0.2~0.3mである。南西部の北西-南東方向にのびる高まりは幅約6m、長さ約20m、高さ約0.2~0.3mである。調査区中央の高まりは東西に長い隅丸長方形を呈し、東西約10m、南北約5.5m、高さ約0.2mの規模を有する。南東の高まりは隅丸方形を呈し、東西約7m、南北約7m、高さ約0.2mの規模を有する。〈9層〉段階の高まりに比して拡大した規模は、北側の高まりで幅約1m、中央の高まりで南北約2m、東西約2m、南東の高まりで南北約3m、東西約3mである。

〈8層〉で検出した遺構は調査区南西部に北西-南東方向にのびる高まりの縁辺部に掘削された2条の溝および、この高まりの南に位置する高まりとの間の窪みの最深部に掘削された溝、調査区東半部で南北方向に掘削された溝であり、散漫な遺構の分布状況を示している。北側高まり上に東西方向に掘削された〈9層〉段階の溝はこの時期には引き継がれない。調査区南西部の溝は地形の方向に沿ったかたちで構築されているが、調査区東半の溝は地形の高まりや窪みを横断して構築されている。これはこの溝の時期が調査区南東の溝群よりもやや遅れた後期に属しているため、この段階にはさらに堆積がすみ、調査区東半ではすでに地形の起伏がわざかなものとなっていたとも考えられるからである。また、この段階の溝は、弥生時代後期の溝4・5がほぼ同じ位置に並行して掘削されていることや弥生時代後期末の溝6の流路が古墳時代初頭にも引き続き踏襲されており、この段階以降、溝の位置が一定期間にわたり固定化されるようになる。

なお、この〈8層〉で確認された高まりについては、人為的なものか、自然地形かという問題がある。〈9層〉の高まりの周囲の〈8b層〉・〈8c層〉が高まりの整形を目的とした盛土、溝4・5が耕地への給水を目的とした溝であり、高まり間の低位部に堆積した〈8a層〉に耕作土としての性格を仮定した場合、高まりを人為的なものとしてとらえることとなる。しかし、〈8層〉の各細分層が高まりの周囲から低位部を順に埋めていった土層と考えれば、〈8層〉細分層の堆積順序は、堆積作用によって起伏のある自然地形が埋没していく過程を示すものとなる。〈8層〉の性格については、複数の可能性が考えられるものの、盛土や耕作土とする決め手を欠くため、現時点ではこの高まりは自然地形の可能性が高いと考えておきたい。

〈7層〉に属する遺構は検出されなかった。〈6・7層〉から出土した弥生後期土器（図19）については、〈8層〉検出遺構出土遺物よりも古い特徴をそなえており、混入品と判断される。

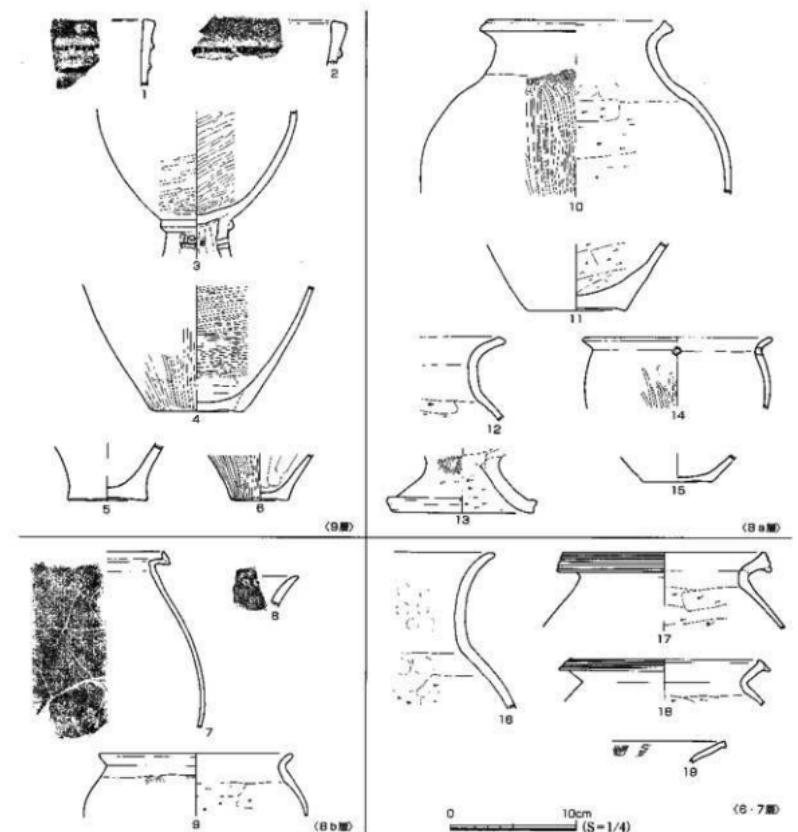


図19 包含層出土遺物

番号	種類・器種	底量 (cm)	形態・手法の特徴は	胎土	色調
1	漆器土器・漆	-	(内)漆瓶(外)漆底。貼り付け部と底刷み	粗砂、粗砂△	黄褐色
2	漆器土器・漆	-	(内)漆瓶(外)漆底。口部部、貼り付け部と底刷み	粗砂	乳白色、淡褐色
3	漆器土器・高杯	-	(内)漆底: ヨカ、器底: ナグ(外)漆底: 油毛漆底、1.5cm、円孔5孔、方孔通かし、1.5cm△	粗砂	淡灰色(白)
4	漆器土器・漆?	7.3	(内)刷毛下手: ミガキ、底端: ナグ(外)ミガキ、底面ナデ、底接	粗砂、粗砂△	淡灰灰褐色
5	漆器土器・漆?	6.2	(内)ナグ(外)被油漆路、不明點、底部穴空	粗砂、粗砂△	淡灰灰褐色、無灰褐色~淡灰褐色
6	漆器土器・漆	4.4	(内)ナグ(外)ミガキ、底面ナデ、2/3残存	粗砂	暗褐色~暗灰褐色
7	漆器土器・漆	-	口縁: 司馬3条、(内)漆底(外)漆底: ハケ、漆付筋: 1/10残存	粗砂	淡灰褐色~淡褐色
8	漆器土器・漆	-	(内)竹質、漆底(外)漆底	粗砂	淡黃褐色
9	漆器土器・漆	15.2	(内)口付一部部: ナグ、底刷: ケズリ(外)口縁一部部: ナグ、刷部: ハケ、1/5残存	粗砂	淡黃褐色
10	漆器土器・漆	13.8	口縁: 強いヨコナギ(内)漆底: 油毛+ナグ、刷部: ナグ(外)刷部: ハケ底: ミガキ△	粗砂、乳酸(白)△	暗灰色、乳酸(白)△
11	漆器土器・漆	8	(内)ケズリ(外)テグリ底: ミガキ、底面、底漆薄存	粗砂	暗灰色~淡黃褐色
12	漆器土器・漆	-	(内)口縁: ヨカ、刷部: ナグ(外)口縁: ヨカ△、底~刷部: ハケ△、1/6残存	粗砂、粗砂△	淡黃褐色
13	漆器土器・漆台	11.2	(内)ケズリ、底漆薄存: ナグ、底漆、刷部	粗砂	淡褐色~白色
14	漆器土器・漆	14.6	(内)漆底(外)口縁一部部: ヨコナギ、刷部: ミガキ、底部穿孔△	粗砂	淡褐色~淡灰褐色
15	漆器土器・漆	5.5×5.5	-	粗砂	明褐色
16	漆器土器・漆	-	(内)漆底、脚柱2ナデ、刷部: ケズリ(外)口縁: ヨカナギ、底~刷部: ハケ△	粗砂、粗砂△	暗褐色~暗褐色
17	漆器土器・漆	16	口縁: 油毛(外)口縁一部部: ヨカナギ、刷部: ケズリ(外)口縁一部部: ヨカナギ、1/3残存	粗砂、粗砂△	淡灰褐色
18	漆器土器・漆	15	口縁: 油毛(外)口縁一部部: ヨカナギ、刷部: ケズリ(外)不明點、1/5残存	粗砂	淡乳灰褐色
19	漆器土器・漆	-	口縁: 油毛(内)ヨコハゲ底ナデ?	粗砂、角凹△	灰暗褐色~深灰褐色

1. 弥生時代中期

a. 溝

溝 1 (図20)

調査区の北部、BL~BN46~52区に位置する。検出面の標高は西側約1.1m、東側約1mで、(9層)で検出した。調査区北側において東西方向にのびる高まり上に掘削されている。

平面形は東西方向に伸び、49~50ライン付近で緩く蛇行している。確認できた溝の長さは東西29.2mである。溝の幅は西側で1.88m、東側で1.36mをはかる。断面形は浅い皿形で、底面は平らな形状をとる。検出面からの深さは西側で約0.3m、東側で約0.2mである。底面の標高は西側で0.83m、東側で0.75mであり、西から東に向かってわずかに下がっている。確認できた溝の長さは約30mに及ぶが、地形は調査地区北東に向かって下がっており、この溝も西から東に向かって流れていた可能性が高いと考えられる。

埋土は3層に分層した。灰褐色砂質土を主体とする埋土であり、(9層)との土質の差は小さい。溝の南半において溝の埋土を切り込むかたちの土層(1層)が堆積しており、いったん埋没した後に再掘削を行ったものとみられる。再掘削された部分の幅は0.83mとなり、溝幅は縮小している。埋土はいずれも砂質土である。1層の下位には灰色粘土、灰白色砂がラミナ状に含まれ、2・3層は灰色粘土ブロックを含んでおり、遺構として認識したが包含層の土質の差が小さいことから、溝として疑問を残す。

遺物は弥生時代中期前半の甕の口縁部1点・底部1点が出土している。これらは(9層)の時代と大きな矛盾はない。遺構の時期については、検出面、出土遺物から弥生時代中期前半と考える。

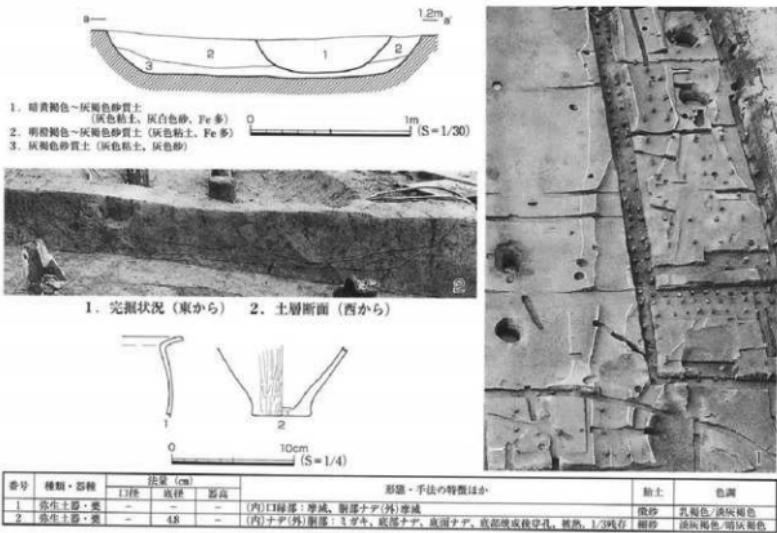


図20 溝 1・出土遺物

調査の記録

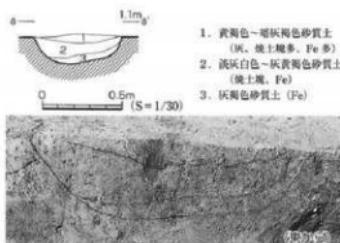


図21 溝2

り、西から東に向かって流れているものと考えられる。

埋土は3層に分層した。1・2層には炭や焼土塊を含んでいる。南に隣接する溝1の埋土内には顕著な炭や焼土は含まれないため、溝2の埋没段階に周辺で火を用いたことも考えられる。遺物は出土していない。造構の時期については、検出面から弥生時代中期に属すると考える。

溝3 (図22)

調査区の南西部、BQ・BR51区に位置する。検出面の標高は西側で0.65m、南側で約0.6m、8層下面で検出している。調査区南西に位置する高まりの間の深い落ち込みの底面に掘削されており、溝の方向は地形の方向に合致している。平面形は南東から北西方向にはほぼ直線的なかたちであり、確認できた溝の長さは約63mである。溝の幅は0.85mをはかる。断面形は〈8a層〉が堆積する浅く幅広い皿状の落ち込みの最深部に、ボウル状の掘り形を有するものである。底面の標高は北西側で0.24m、南東側で0.35mである。掘り形上端からの深さは北西で0.38m、南東で0.27mとなる。底面の標高は南東から北西に向かって下がっている。検出された溝の長さが短いため、不確実な部分のみのこすが、この溝は南東から北西方向に向かって流れているものと推測される。

埋土は4層に分層した。土層の堆積状況をみると、1～3層が4層を切り込むかたちで堆積しており、いったん埋没した後、再掘削されたものとみられる。2・3層は炭・焼土・ブロック等の包含物を含んでいる。遺物は出土していない。造構の時期は、検出面から弥生時代中期の造構と位置づけられる。



図22 溝3

2. 弥生時代後期

a. 溝

溝4 (図23)

調査区の南西部、BO～BR49～52区に位置する。検出面は〈8層〉で、標高は西側で約1m、南側で約0.9mと

なる。調査区南西の高まりに並行し、縁辺部に掘削される。溝5と並行し、切り合いからは溝5に先行する。

南東から北西方向に延び、51ラインの西約2mで大きく屈曲して北東から南西方向に掘削される。幅は西側で0.5m、南側で0.48mとなる。底面の標高は西側で0.72m、南側で0.77mである。横出面からの深さは、西側で0.28m、南側で0.13mである。底面の標高の高低差は0.05mとわずかであるが、並行する溝5が西から南に下がっており、溝4についても西から南に向かって流れていたと推測される。

断面形は逆台形状を呈する。a、c断面は溝4・5が上下に重なった部分である。埋土は溝4の最下層に灰色の粘質土や粘土ブロックを含む土層がみられるものの、そのほかは特に顕著な包含物は認められない。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面から弥生時代後期に属すると考えられる。

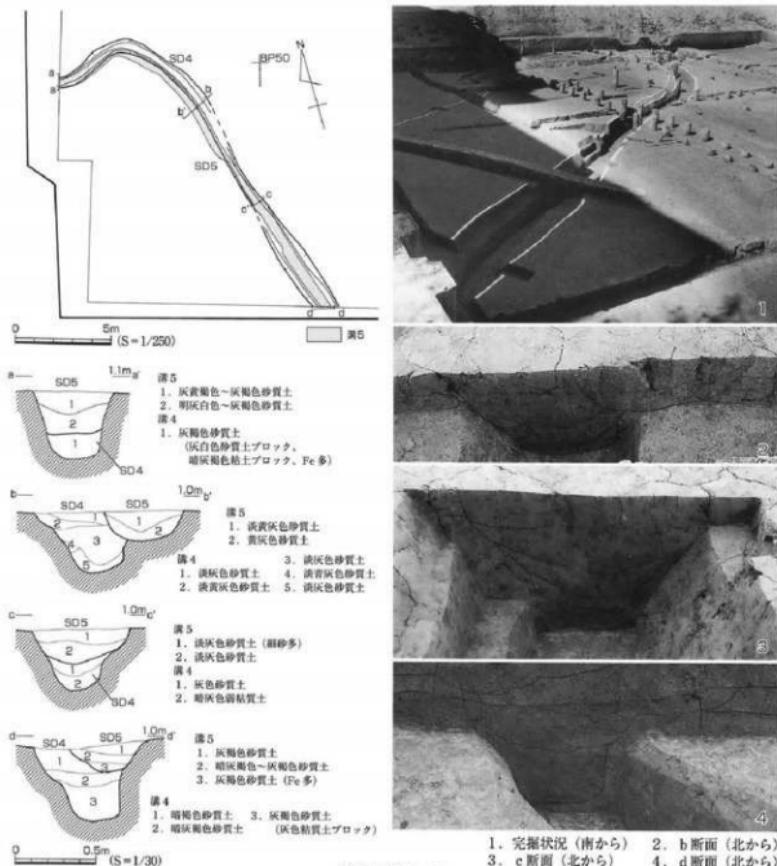


図23 溝4・5

調査の記録

溝5（図23）

調査区の南西部、BO～BR49～52区に位置する。検出面は〈8層〉にあたり、標高は西側で約1m、南側で約0.9mとなる。溝4に並行し、調査区南西の高まり縁辺部に掘削されている。切り合い関係から溝4に後続する。

溝の平面的位置と形状は溝4と大過なく、南東から北西方向に延び、51ラインの西約2mで大きく屈曲して北東から南西方向に掘削される。幅は西側で0.49m、南側での残存値0.55mとなる。底面の標高は西側で0.58m、南側で0.46mである。検出面からの深さは西側で0.42m、南側0.44mである。底面標高の高低差から、西から南に流れていたと推測される。断面形はボウル状を呈する。埋土には顯著な包含物は認められない。

溝4の埋没後もほぼ同じ流路を踏襲して再掘削されており、この段階の基幹的な水路であった可能性がある。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面から弥生時代後期に属すると考えられる。

溝6（図24、図版1）

調査区の東半部、BL～BR46・47区に位置する。〈8層〉上面で検出した。南側では古墳時代初頭に掘削された溝7・8が重複して掘削されており、溝の上半部が失われている。検出面の標高は北側では標高0.82m、南側では標高0.75mである。

ほぼ南北方向に掘削された溝の平面形態は、緩やかに湾曲しながら蛇行している。長さは南北約30.7m、幅は北側で0.45m、南側で0.89mである。断面形は逆台形を呈するが、北側のa断面では急峻に立ち上がるるに対し、南側のb断面では立ち上がりの角度が緩くなり、溝幅が広がっている。底面の標高は北側で0.69m、南側で0.81mである。したがって溝6は南から北に向かって流れていると考えられる。なお、検出面からの深さは北側で0.27m、南側で0.08mであるが、南側は古墳時代初頭の溝が重複して掘削されたため、検出面からの深さは小さくなっている。埋土はa断面で4層、b断面で2層に分層した。いずれも砂質土が主体をなす。

遺物は弥生時代中期の高杯脚部片1点、後期後葉の甕1点が出土した。甕は溝の底面に倒れこんだ状態で出土している。遺構の時期は、検出面、出土遺物から判断すると弥生時代後期後葉の遺構と判断される。なお、調査区東半部では、溝6の掘削以降古墳時代初頭まで、ほぼ同じ場所において方向を同じくした溝7・8が掘削されている。弥生時代後期後葉以降、この流路が基幹的な水路として利用されたものであり、この段階から古墳時代初頭まで引き継がれる土地利用の変化があったものと評価される。

（野崎貴博）

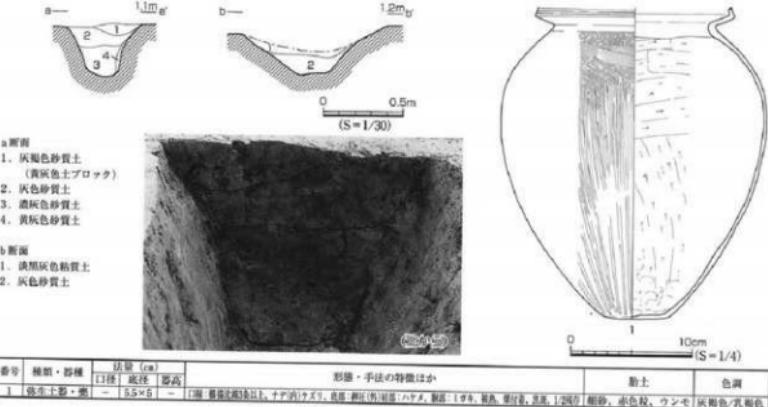


図24 溝6・出土遺物

第4節 古墳時代の遺構・遺物

1. 古墳時代初頭

概要（図25・26） 古墳時代初頭の遺構は〈6層〉で検出した。〈6層〉段階においても弥生時代以来の地形の影響は引き続き認められており、BNライン以北の調査区北側、BP～BQライン以南の調査区南側、46～47ライン間の調査区東側の地形が高く、調査区中央部や南東の一部は窪地状の地形となっている。特に調査区中央部の窪地は東西約22m、南北約6～7m、深さ約0.2mの規模をもつ。

〈6層〉で検出した遺構には、井戸2基、土坑1基、溝7条、上器溝まり3箇所があり、上記のような地形環境のなかで形成された遺構である。これらの遺構のうち、溝は調査区北半のBMライン以北・調査区東半の47ラ

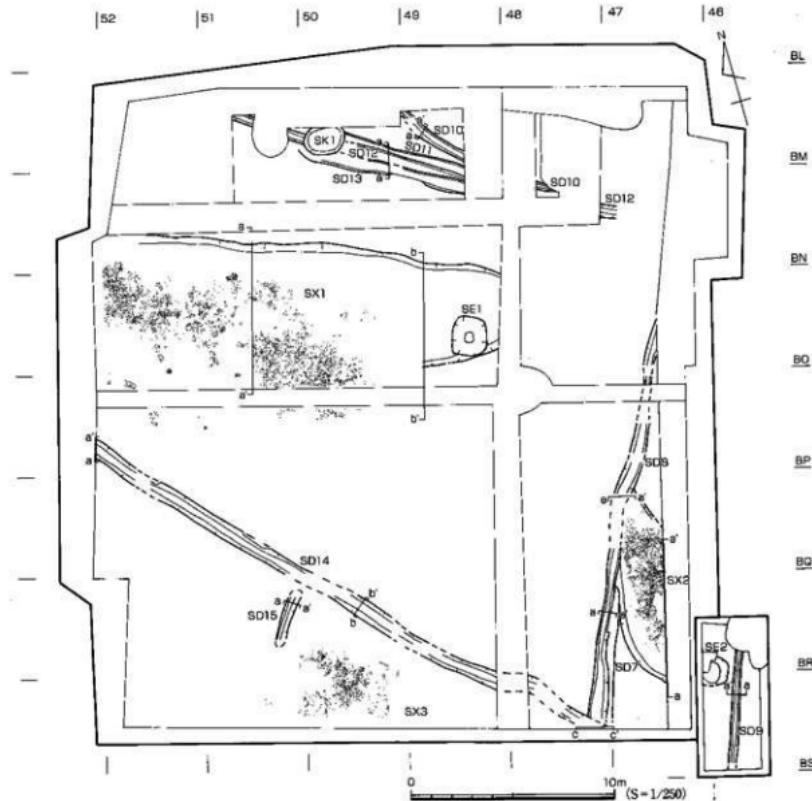


図25 古墳時代遺構全体図



図26 古墳時代遺構全景

イン以東に掘削されており、比較的地形の高い位置に構築が集中する傾向にある。特に東半の南北溝は弥生時代後期後葉からの水路の位置をほぼ踏襲して掘削されており、基幹水路としての役割を有していた可能性を考えられる。また、調査区北半の溝群は〈9層〉段階に掘削された溝群の方向にはほぼ合致している。弥生時代後期にはいったん断絶したものの、古墳時代初頭には再び水路として整備されている。その一方で、弥生時代後期に調査区南西部で認められた溝群はこの段階には引き継がれない。なお、〈6層〉で検出した溝群は、東西方向の溝では西から東へ、南北方向の溝では南から北へ流れている。

調査区中央西半・南東・南側で検出した3箇所の土器溜まりは崖地状に落ち込む低位部を中心に形成されていた。特に調査区中央の土器溜まり1は大規模なもので、多量の土器が集積しており、土鍤や石鍤などの漁撈具や製塗土器といった海浜部で使用される道具も含まれている。また、一定量の被熟繭が採取されている。

2基の井戸はいずれも土器溜まりに近接した位置につくられているが、井戸の検出面が土器溜まりの土器群を包含するものであるため、土器溜まり形成後、一定の堆積が進行する期間を経た後に構築された遺構と考えられる。したがって、両者に直接的な相関関係は求めることはできない。また、本調査区内では当該期の堅穴住居や掘立柱建物などの居住にかかる遺構は確認されておらず、居住域からは離れた位置に掘削された井戸であるという立地上の特徴を有する。なお、2基の井戸の下位や中位には完形の土器がおさめられたり、炭化物を多く含む層がみられたりしており、廃棄時には複数回にわたる祭祀的行為を伴っていたことが想定される。

このように本調査区をみると、2基の井戸や3箇所の土器溜まりを除けば、土坑1基・溝7条が検出されたのみであり、これは集落外縁の一般的な土地利用のあり方を示しているといえよう。本調査区は当該期の集落が展開する第1次調査地点から南西に約100m、第7次調査地点から北東に約50m離れた位置にあたる。そのような中で、低位部に形成される大規模な土器溜まりや、祭祀的行為の痕跡をのこす井戸の構築は、居住域以外での多様な人間活動を示すものといえる。

a. 井戸

井戸1 (図27・28、図版1)

調査区中央、BN48区で検出した。(6層) 上面で検出しており、検出面の標高は1.1mである。

上面の平面形は、隅丸方形を呈し、南北1.92m、東西1.74mの規模を有する。底面の形状は方形を呈する。底面の規模は南北0.48m、東西0.42mである。二段掘り状の掘り形を有し、断面形は逆凸字形を呈している。底面の標高は-0.61mで、検出面からの深さは1.7mである。

埋土は22層に分層しているが、その特徴から井戸廃絶時以後の埋土(I群)と使用段階の堆積土(II群)に大別する。I群はさらに6単位に細分できる。I-1群(1~3層)は淡灰褐色砂質土を主体とする。レンズ状に堆積し、黄色ブロックや炭などの包含物を含む。井戸埋没後の詰みへの流入土と考えられる。I-2群(4~10層)は淡灰褐色~灰色砂質土を主体とする一群である。掘り形肩部にブロック状の土層が形成された後、中心部を埋める土層が形成される。I-3群(11~14層)は、淡灰色粘質土を主体とする土層であり、これ以下に粘質土が堆積する点でI-1・2群とは様相を大きく異なる。そのうち11層には炭が多量に含まれており、この段階で火を用いた何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。I-4群(14~16層)は灰色粘質土を主体とする層で、

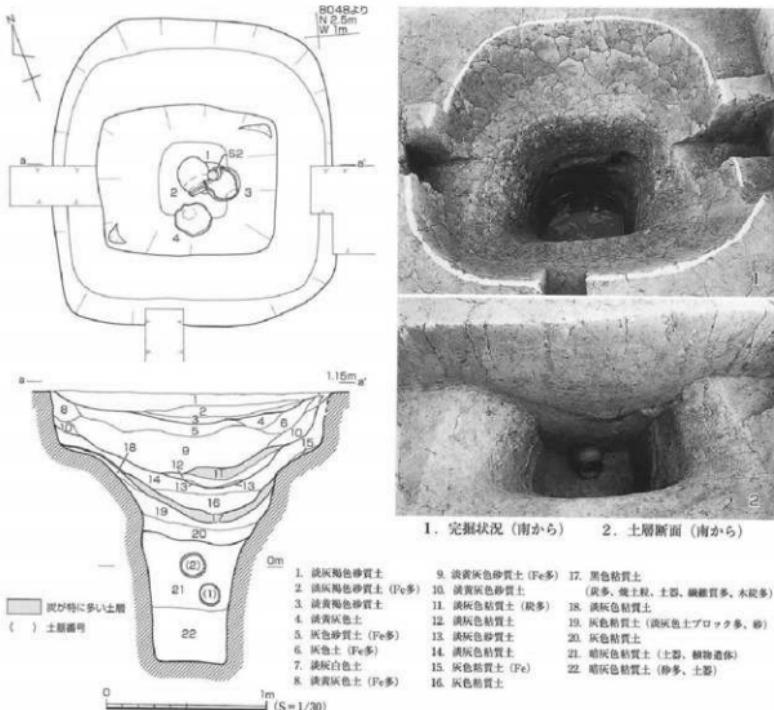
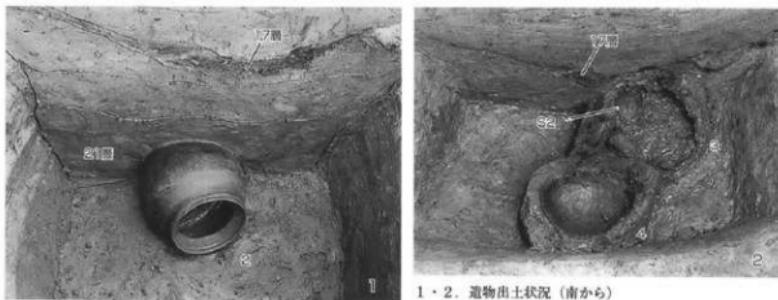
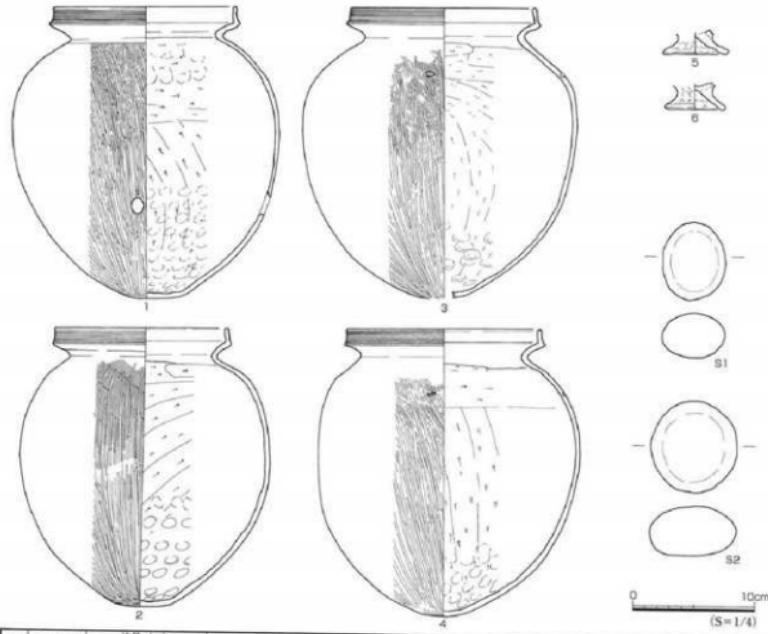


図27 井戸1

調査の記録



1・2. 遺物出土状況（南から）



番号	種類・器種	法面 (cm)			形状・手法の特徴ほか	胎土	色調
		口径	底径	高さ			
1	上部壺・瓶	15	4.2×4.4	24	口縁：梯形口幅7mm、ヨコナデ(内)斜E、ケヌリ(外)ハケ残さざり、底○	粗鈍、粗鈍△	淡灰褐色
2	上部壺・瓶	14.2	4.7	22.8-23	口縁：梯形口幅6mm、ヨコナデ(内)ケヌリ、脚柱(外)ハケ残さざり、底○	粗鈍、均四石	淡灰褐色
3	上部壺・瓶	-	-	-	口縁：梯形口幅6mm、ヨコナデ(内)ケヌリ、脚柱(外)ハケ残さざり、底○、斜丸e形、3.5cm在	粗鈍、ウンキ	淡灰褐色
4	上部壺・瓶	16	3.7	23.5	口縁：梯形口幅6mm、ヨコナデ(内)ケヌリ、脚柱(外)ハケ残さざり、底○、斜丸e形1/2在	粗鈍、ウンキ	淡灰褐色/淡灰系褐色
5	瓶底・壺	-	-	-	粗鈍、褐色(内)斜尾：ナデ、脚柱(外)齊多、脚柱	粗鈍	灰褐色/灰乳白色
6	瓶底・壺	-	5	-	一端残缺、褐色(内)斜尾：ナデ、脚柱(外)齊多、脚柱	粗鈍	黑褐色/淡白色~灰白色
番号	器種	最大径 (cm)	最小径 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	
S1	円錐	6.80	5.20	3.70	190.0	角四苦	
S2	円錐	7.50	7.10	4.10	306.6	粗粒花崗岩	

図28 井戸1出土遺物

二段掘りの掘り形上段部分を埋める土層である。I-5群（18層）は黒色粘質土の炭化物層である。井戸の中心部から掘り形東法面まで炭化物層が6~7cmの厚さで堆積している。この層では、井戸の中心部の位置で、土師器壺2個体（図28-3・4）と円錐2個体（図28-S1・S2）が検出された。I-6群（18~21層）は灰色粘質土を主体とする一群で、20層には淡灰色ブロックが多く含み、砂も混在していることが観察された。21層ではほぼ完形の土師器壺2個体が井戸の中心部で検出された。わずかな隙間をもって上下に置かれており、上位の壺（図28-1）は横位に、下位の壺（図28-2）は斜位に置かれた状況であった。井戸使用段階の堆積土と考えられるII群に該当するのは、最下層の22層である。均質な暗灰色粘質土が厚く堆積している。

遺物はコンテナ（28ℓ）で3箱分が出土し、出土状況を記した壺4個体・円錐2個体のほか、器種の判定が可能なものには鉢1片、高杯2片、手焙形土器1片、製塙土器2個体、土鍤1片がある。鉢・高杯・手焙形土器・土鍤は小片であり、西に近接する土器窓より1からの流入の可能性も考慮する必要がある。

出土遺物から、本遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

井戸2（図29-30、図版1・20）

第15次調査区、BQ・BR45・46区で検出した。第13次調査区の基本土層の（6層）に対応する土層で検出しており、検出面の標高は0.95mである。

掘り形の西半部は南北方向に深くまで及んだ擾乱によって失われていたものの、残存していた東半部の掘り形の形状から、上面の平面形は、南北にやや長い楕円形に復元される。復元できた規模は長径2.21m、短径1.73mである。底面の平面形は南北の残存値0.45m、東西0.4mで、上面の形状と同様、南北にやや長い楕円形を呈するものと復元することが可能であろう。断面形は、標高0.5m以下の下半部ではほぼ直立した筒状の掘り形となっている。上半部は上方に向かって緩い角度で大きく広がり、全体としてはY字状の断面形を呈している。底面の標高は-0.54mで、検出面からの深さは約1.49mである。

埋土は21層に分層しており、その特徴から井戸廃棄時の埋土と井戸使用時の堆積土を含む可能性がある2群に大別することが可能である。また、この大別した土層については、それぞれの土層の特徴からさらに堆積の単位を細分できる。まず、井戸廃棄時の埋土であるI群は、5単位に細分できる。I-1群（1~3層）は灰褐色砂質土を主体とする層で、各層は明暗によって分層される。炭・焼土・土器小片を少量含む砂質土層で、井戸の最終段階の埋め土であると考えられる。I-2群（4~7層）はいずれも炭を多く含む灰色~灰褐色の粘質土を主体とする土層である。I-2群の下面ラインは、下位の埋土を切り込み、V字状に窪んだ形状を呈している。この窪み部分を埋める4・5層は多量の炭によって形成された炭層であり、その中から甕口縁部片（図30-3）および胴部片が出土した。胴部片は土層の層理面に接して検出している。このような炭層の形成や壺の出土状況は、この上層群の形成された段階に火を用いた祭祀行為が行われた可能性を強く示すものとえられよう。I-3群（8~11層）はすり鉢状に開く井戸上部を埋める土層群である。ブロック状の単位の土層により、井戸掘り形肩部から中心部に向かって順に埋め戻されていったことがうかがわれる。I-4群（12・13層）は井筒の最上部を埋める土層である。13層は無遺物層である。I-5群（14層）は植物遺体を多く含んだ暗灰色粘土層である。完形の直口壺1個体、複合口縁壺1個体、板材1枚、杭2本と礫が出土した。これらの遺物群のうち、板材がもっとも上位に位置している。板材は土器群の上位に覆い被さるようには水平な状態で出土した。板材の下位に位置する複合口縁壺、直口壺は横位に倒れた状態である。複合口縁壺の口縁部は南西向き、直口壺の口縁部は北向きとなっており、口縁部の向きは揃っていない。2本の杭はともに先端部を南に向け、横位に倒れた状態で出土した。杭の出土状態や土層の観察からは、本来横位に置かれたものか、立てられていたものが倒れたのかを判別することは困難であった。

井戸使用段階の堆積土を含む可能性があるII群（15~21層）は2単位に細分される。均一で汚れの少ない土層で、上半部の暗灰色粘土層であるII-1群（15~17層）と、砂層と粘土層が交互に堆積する下半部II-2群（17

調査の記録

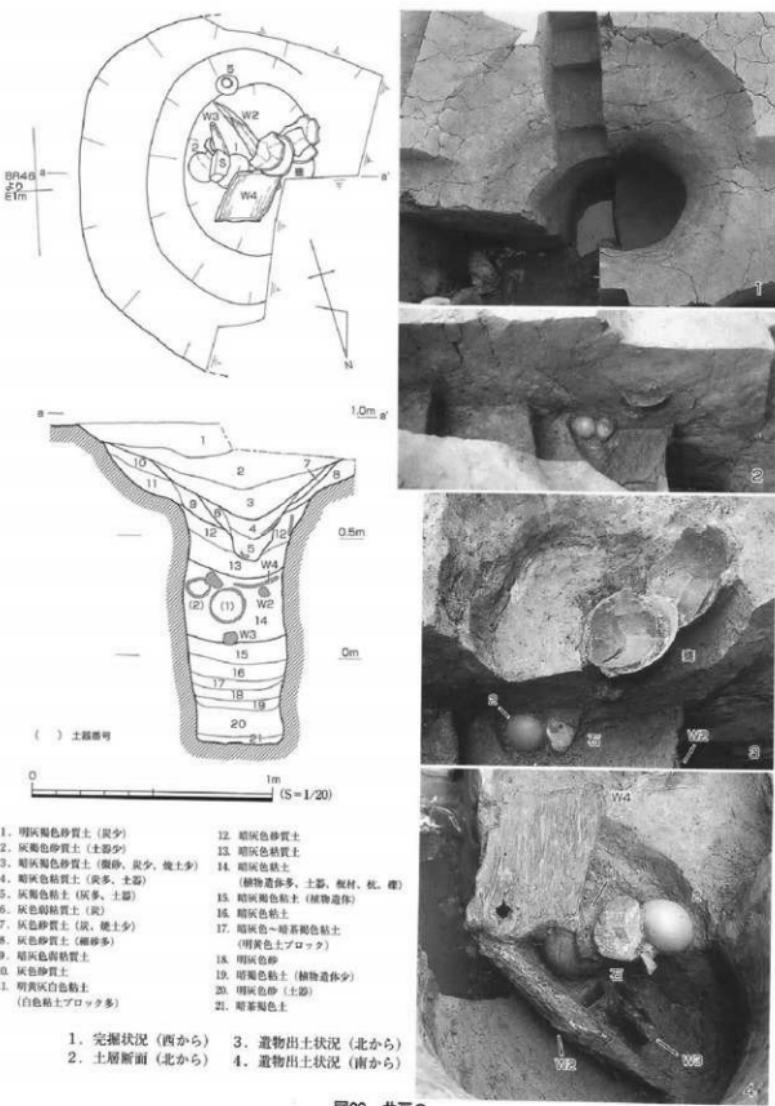
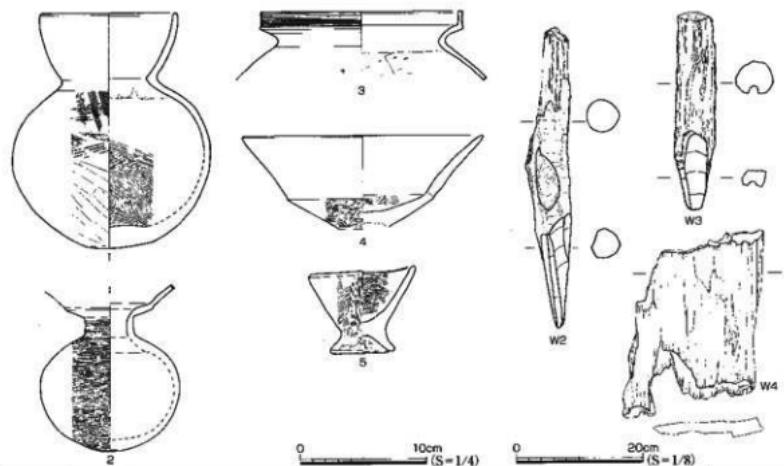


図29 井戸2



番号	種類・器種	法寸 (cm)			形状・手法の特徴は?	出土	色調
		11層	底径	鉢高			
1	土師器・壺	108×11	53.5×57	18.6	(外)面名: リコナガ、腹斜・斜、ハナガ・圓・豊・ヨコナガ、蓋名: フラガタ(オナガ)、底面: フラガタ(オナガ)、高さ: 17.5mm 縦縫、粗筋ム、角凹凸口	黒灰褐色	
2	土師器・壺	—	13.5×12	—	(内)底底(外)外縫縫、底減口、第一肩部: ミガナガ、穿孔: 1ヶ所	粗筋、半凹筋	淡褐色
3	土師器・壺	16	—	—	口縫型: 橋底(横縫)、ナゲ(内)ケツリ(外)堆付筋、1/4残存	粗筋、角凹凸	黒灰褐色
4	土師器・壺	19	—	—	(内)底底(外)内底底ハケ(外)ミガナガ、底面	面~縫、赤灰色	明褐色
5	土師器・鉢	8.6×8.6	4.9×5	6.3~6.9	口再延、ナゲ(内)ハケ(外)ガリ(外)カチハケ無ナゲ、廻刃、底底	縫	明褐色/淡褐色
骨質							
W2	骨質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	高さ (cm)	縫隙	骨質	
W2	骨質	(47.9)	(6.7)	5.2	コナラ風クヌギ等	芯神ちえ木取り、先端部は一回の加工で一箇所を削取り、主軸	
W3	骨質	(31.3)	(5.85)	5.1	コナラ風クヌギ等	芯神ちえ木取り、先端加工: 表裏の加工は長く側縫の加工は短い、6箇所	
W4	骨質	(29.7)	(22.4)	23	ミクニ	施目取り	

図30 井戸2出土遺物

~21層)に分けることができる。なお、最下層である21層では小形鉢が逆位に伏せた状態で出土している。これが人為的に配されたものであるとするならば、井戸の使用段階に何らかの祭祀行為が行われた痕跡である可能性もある。

遺物はコンテナ(28ℓ)で2箱分が出土し、土師器壺2点、壺1点、高杯1点、小形鉢1点のはか、木製品としては杭2点、板材1点を同化した。出土遺物から、本遺構は古墳時代初頭に属すると考えられる。

b. 土坑

土坑1 (図31)

調査区北側中央、BL49区に位置する。調査区北側で東西方向に3条が並行して掘削された溝11~13を切り込むかたちで検出した。検出面は(6層)上面で、標高は1.15mである。

北側は中世の東西溝により失われているが、平面形は東西方向に長軸を有する隅九長方形に復元できる。長さは東西189m、南北の残存値は127mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。底面は広く平らな面を形成しており、北側では二段掘り状となっている。底面の標高は1.03m、検出面からの深さは0.16mである。

埋土は4層に分層した。いずれも灰色~灰褐色砂質土を主体とし、2・3層には黄白色ブロックが多く含んでいる。これらの埋土は溝11~13の埋土の主体をなす淡灰白色砂質土との差が小さい。

遺物は出土していない。検出面や埋土の質が近似した溝11~13との切り合い関係から、溝11~13に近い、古墳時代初頭に属すると考えられる。ただし本土坑は溝11~13の埋土との差が小さいことや底面の標高が近似すること

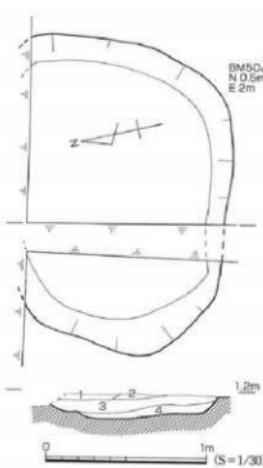


図31 土坑1

は黄褐色・灰色砂質ブロックを含む。最下層の3層は黄色砂質土・灰白色砂の堆積が認められ、流水による堆積と考えられる。溝7は水利にかかる機能を有していたと想定される。

遺物は古墳時代初頭頃の甕口縁部破片が出土しており、遺構の時期は、検出面、出土遺物から判断すると古墳時代初頭に属すると判断される。

溝8 (図33)

調査区の東半部、BN・BR46・47区に位置する。(6層)上面で検出した。検出面の標高は北側では標高1.12m、南側では標高1.2mである。北北東～南南西方向に掘削されており、長さは約20mをはかる。幅は北側で約0.58m、南側で約1.25mである。断面形は直状を呈し、底面は平らで幅広い。底面の標高は北側で約0.97m、南側で約1.05mであり、南から北に向かって流れているものと推測される。検出面からの深さは北側で約0.15m、南側で約0.15mをはかる。

埋土は淡灰色砂質土の单一土層で鉄分を含んでいた。遺物は下位にある溝6からの巻上げとみられる弥生後期末の土器小片10片が出土したが、固化可能なものはない。



と、本調査区では当該期の土坑がほかにみられないことなどから、溝11～13の一部を土坑と認識した可能性も残されている。

c. 溝

溝7 (図32)

調査区の東半部南側、BQ・BR46・47区に位置する。(6層)上面で検出し、検出面の標高は北側では標高1.03m、南側では標高1.22mである。ほぼ南北方向に掘削されており、長さは南北約6.6m、幅は北側で0.76m、南側で1.03mである。底面の標高は北側では0.9m、南側では0.86mで、ほぼ等しく、確認した溝の長さも短いことから、水流の方向はいずれとも決しがたい。本溝の流路を踏襲する溝8では南から北に流れているため、本溝も南から北に向かって流れているものと推測される。検出面からの深さは北側で約0.13m、南側で約0.36mである。

埋土は3層に分層した。いずれも砂質土を主体とする。1・2層

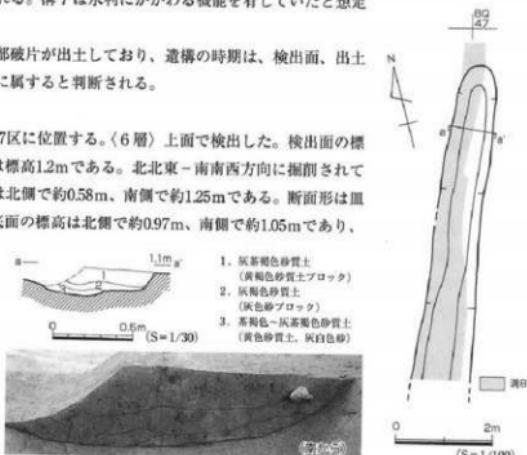


図32 溝7

遺構の時期は、検出面から古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝9(図34)

第15次調査地点の中央、BQ・BR45区に位置する。第13次調査区(6層)対応層上面で検出した。検出面の標高は北側では標高0.96m、南側では標高0.98mである。ほぼ南北方向に掘削されており、検出できた長さは南北5.58m、幅は北側で約0.38m、南側で約0.42mである。底面の標高は北側で約0.85m、南側で約0.83mとほぼ等しく、水流の方向は決しがたいが、本溝の西に並行して掘削される溝8では南から北に向かって流れているため、本溝も南から北に向かって流れていたものと推測される。断面形はボウル状を呈している。検出面からの深さは北側で0.11m、南側で0.15mである。

埋土は4層に分層した。2~4層は灰色~褐色土ブロックを含む砂質土~粘質土である。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面などから、古墳時代初頭の遺構と判断される。

溝10(図35)

調査区の東半部北側、BL48区に位置する。(6層)上面で検出した。検出面の標高は北側では標高1.19m、南側では標高1.16mである。北西~南東方向に掘削されており、長さは南北約3.7m、幅は北側で0.38m、南側で0.47mである。断面形は浅い皿状で、底面は平らである。底面の標高は北側で1.07m、南側で1.07mと等しく、水流の方向は決しがたいが、後述する溝11~13では西から東に向かって下がっているため、本溝も西から南に流れていたものと推測される。検出面からの深さは北側で0.12m、南側で0.09mである。埋土は淡灰色砂質土の單一土層で黄白色ブロックを含み、鉄分を多く含む。

遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面から判断すると古墳時代初頭以前の遺構と考えられる。

溝11(図36)

調査区の東半部、BL・BM47~50区に位置する。(6層)上面で検出した。南に並行する溝12に切られており、並行する3条の溝では最も古く位置づけられる。西北西~東南東方向に掘削されている。長さは8.4m、幅は0.5mである。底面の標高は、西側で1.05m、東側で0.98mとなり、西から東に流れていたと推測される。検出面の標高は西側では標高1.16m、東側では標高1.19mをはかる。断面形は丸底の皿状を呈している。検出面からの深さは、西側で0.11m、東側で0.21mである。

埋土は淡灰色砂質土が主体である。断面観察の結果、溝11・12・13の順に北から南に切り合ひ関係を有しながら掘削されている状況が確認されたが、それぞれの土層の差は大きくない。

遺物は古墳時代初頭の高杯部片が出土したが、小片のため國化にはいたらなかった。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代初頭に属するものと考えられる。

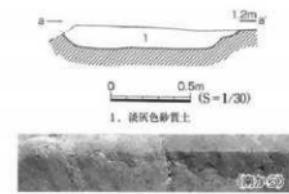


図33 溝8

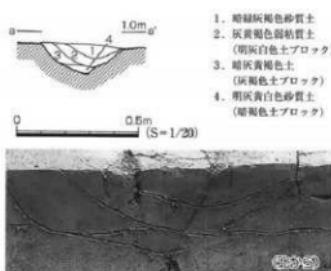


図34 溝9

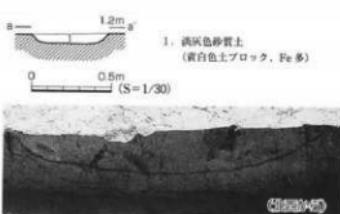


図35 溝10

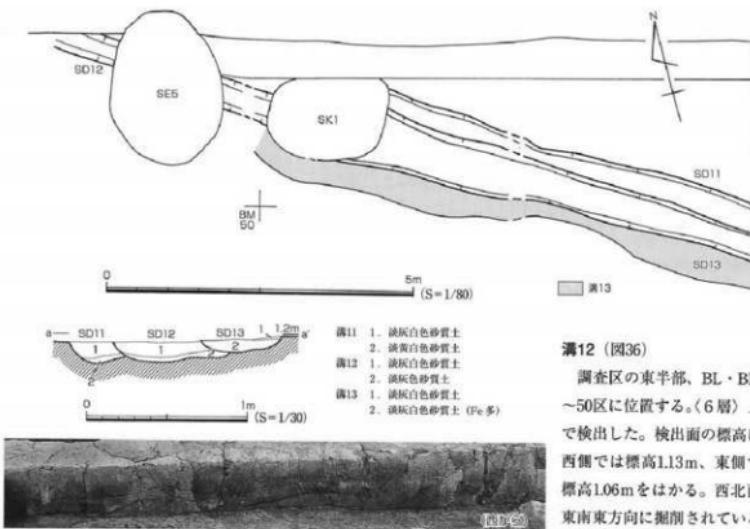


図36 溝11~13

m、東側で0.99mとなり、西から東に流れていると推測される。断面形は丸底の皿状を呈している。検出面からの深さは、西側で0.07m、東側で0.07mである。埋土は淡灰白色砂質土が主体である。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、北に並行する溝11が古墳時代初頭に属すると考えられるため、検出面や切り合ひ関係から判断すると溝12も古墳時代初頭頃の遺構と考えられる。

溝13 (図36)

調査区の東半部、BL・BM47~50区に位置する。(6層) 上面で検出した。断面観察では、並行する溝11~13のうち、本溝が最も新しく掘削される。検出面の標高は、西側では標高1.2m、東側では標高1.18mをはかる。西北西~東南東方向に掘削されている。長さは7.3m、幅は0.34mである。底面の標高は、西側で1.08m、東側で1.01mとなり、西から東に流れていたと推測される。断面形は丸底の皿状を呈している。検出面からの深さは、西側で0.12m、東側で0.17mである。埋土は淡灰白色砂質土が主体である。

遺物は出土していない。遺構の時期は、北に並行する溝11が古墳時代初頭に属すると考えられるため、検出面や切り合ひ関係から判断すると、本溝も古墳時代初頭頃の遺構と考えられる。

(野崎)

d. 土器溜まり (図版2~14・22・23)

土器溜まり1

1) 検出状況 (図37~40)

土器溜まり1はBN49~52区、BM51・52区に位置する。検出面は(6層)である。本土器溜まりからは90箱(1箱28L)の遺物・礫が出土した。本調査区で検出した3箇所の土器溜まりの中でも、土器溜まり1は最大規模となる。調査区西壁内にも土器溜まり1が続いている状況を確認したため、今回の調査で本土器溜まりの全体が判明

したものではない。土器溜まりの南部は、近代の東西にのびる建物基礎によって失われていた。現状の規模は、調査区西壁～土器溜まり東端までの長さで13.7m、幅は南北8.6mを測る。

土器溜まり1の形成箇所は窪地内である。窪地は、西～南東へと字状に湾曲する。窪地の北側肩については、平面的に認識したが、南肩については部分的に認識した以外は、明瞭な落ちのラインを検出することはできなかった。これは、後述のように窪地内の土層と周辺の〈6c層〉との差異がさほど大きくなかったことと、もともとの落ちの傾斜が緩やかであったことによる。窪地の幅は3.6～6.0m、窪地の肩の標高は1.10m、底面標高は0.92m、〈6層〉上面からの深さは0.18mとなる。〈6層〉上面が、中世段階の土層である上層の〈5層〉によって削平を受けたものであるため、本来の窪地の規模は、検出時よりもいくぶん大きくなるものと考えられる。直上の〈5層〉中からは、本土器溜まりに属する土器器片がコンテナ25箱分出土した。

この窪地は、下層にひろがる〈8層〉段階(弥生時代後期)の窪地の影響下に形成されたものである。土器溜まり1を包含していたのは、窪地内には堆積する〈6d層〉である。〈6d層〉は、南側では〈6c層〉上面、北側では〈6e層〉上面から落ちる窪地に堆積した土層である。〈6d層〉は基本土層(6層)の範疇で捉えることができ、特別に炭粒や焼土、ブロック等を多く含む層ではない。したがって、〈6d層〉は窪地内に自然堆積した土層と判断される。〈6d層〉は上層の〈6d-1層〉(淡黄褐色砂質土)、下層の〈6d-2層〉(黄褐色砂質土)に細分される。土器溜まりが形成されたのは、遺物の標高から考えると、〈6d-2層〉堆積以前の段階であり、〈6層〉段階の窪地の直上にあたる。土器溜まり内には間層は認められなかった。

窪地が東西にひろがりつつ、南へと湾曲する地点において、その地形に沿うように土器溜まり1は帶状に形成されていた。遺物の取り上げに際しては、出土状況に応じて30～60cm程度の任意の取り上げ範囲を設定し、それらに番号を付与した。こうして設定した出土位置は、225箇所となる。このように取り上げを行ったのは、基本的に遺物がもともと破片の形態ではなく、個体単位で置かれていたものと、検出状況から判断したためである。

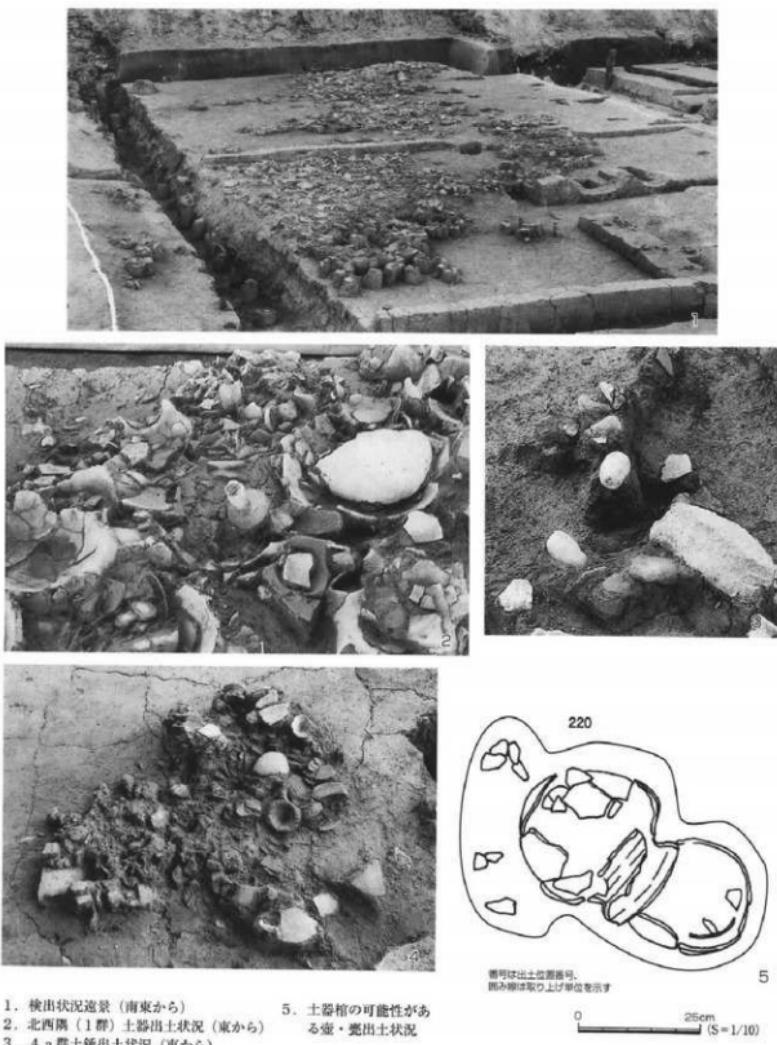
土器溜まり1の検出当初は、それが1つの土器溜まりであるのか、複数の単位によって構成されるものなのかが判然としなかった。土器溜まりの全体を検出する過程において、遺物取り上げの便宜上、本土器溜まりをa～dの区域に分けた。しかし調査が進展するにつれ、それらの境は必ずしも明確でないという認識に至った。ただし、西端のa区、および東端のd区に、特に土器が密集する傾向は認められた。a～d区として取り上げを行った区域は、遺物が濃密であり、帶状の分布を呈する。位置番号224・225は帶状分布の延長にあり、土器溜まり1の南東端にあたる。一方、南方には、遺物が散漫に分布する周縁域(位置番号219～223)を形成している。

遺物の上面標高は、個体の大きさや遺存状況にも左右されるが、0.93～1.16mを測る。もっとも標高が高くなるのは、北西隅の位置番号4の範囲にあり、1～5、7～10において遺物の上面標高が1.15m前後となる。北西隅の上面標高が高いのは、壺が多く分布すること、窪地の肩に近い斜面にそれらの遺物が置かれたことが要因として考えられる。この北西隅の南方および東方は、上面標高が0.93～1.10mの範疇を主体とし、北西隅よりも標高が低くなる。それは一定の傾斜を形成するものではなく、ほぼ一定の上面標高を保つ。東端の215では1.06～1.10m、南東端の225では上面標高0.98～1.08mを測る。なお、「下位」として取り上げた遺物は、遺物の重なりの関係で取り上げ範囲を別途設定したものである。

土器溜まり内に間層が認められることと、遺物の標高が地形の起伏に沿って一定することから、土器溜まり1は短期間のうちに形成されたものと評価しうる。

土器には表面が風化によって荒れているものが見受けられた。このことは、土器溜まりが形成された後に、自然堆積によって埋没するまでの一定期間、土器が露出していたことを示すものと考えられる。また土器には二次的な被熱によって器壁が破碎していたりするものがあり、破碎片と土器本体とが接合する状況も確認された。土器溜まりに含まれる砾(562点)についても、被熱と判断される赤色化したものが点確認された。被熱に関しては、意図的に火が焚かれたような痕跡は土中にはみつかっていない。被熱の要因については特定が難しいが、土器溜まりが埋没する以前に偶発的に火を受けたか、あるいは別地点で被熱した資料が混ざっていた可能性が考え

調査の記録



1. 掘出状況遠景（南東から）
 2. 北西隅（1群）土器出土状況（東から）
 3. 4 a 群土器出土状況（東から）
 4. 4 a 群製塙土器出土状況（南から）
 5. 土器棺の可能性があ
 る壺・甕出土状況

図37 土器窯より1遺物出土状況

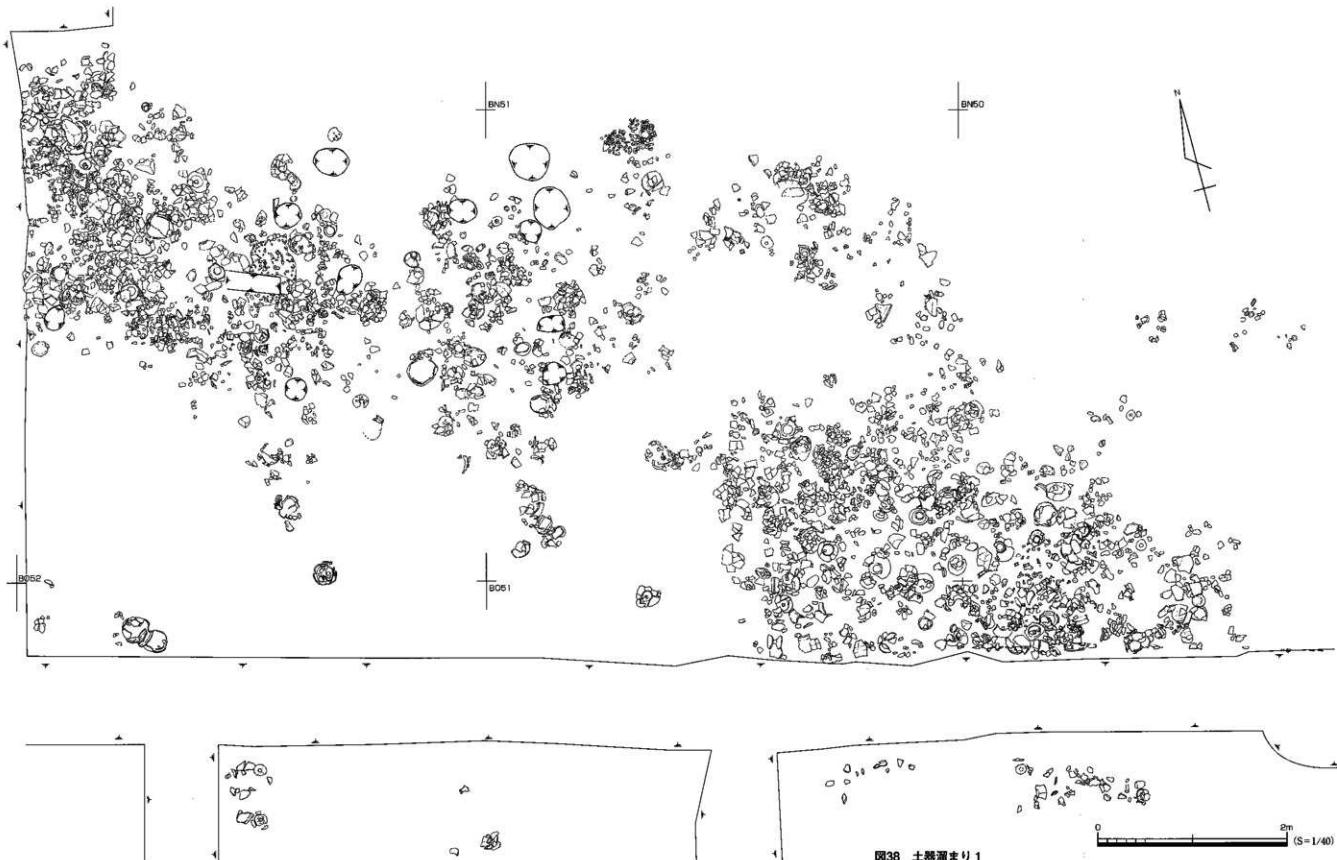


図38 土器湖まり1

表2 土器類より1土器個体数

(総個体数)

	縦割分類	壺	甌	釜	大型	中・小	鉢	高杯	器台	ミニチュア	手納形土器	蓋	蓋底土器	脚台
最小個体数	505個体	70	72	12	81	196	5	12	3	2	2	49	3	
最大個体数	609個体	104	82	12	85	249	3	15	3	2	2	49	3	

個体数カウントについて、いずれの器種においても破片資料については部位ごとに径1/3以上残存するものを個体数として認識した。ただし、1/3未満の破片でも特徴的で個体認識可能なものについては一個体としてカウントした(表4参照)。

(壺)

	合計	I系								II系			
		A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類	E類	面割不明	A類	B類	C類	D類
①定形に準じるor口縁と底部の対応判明	16個体	2個体	0	1個体	0	2個体	1個体	0	0	4個体	0	6個体	0
②口縁部(個体数のカウント可能なもの)	43個体	6個体	2個体	0	10個体	0	16個体	1個体	5個体	2個体	0	0	1個体
③脚部(個体数としてカウント可能なもの)	6個体				6個体								0
④底部(口縁部との対応不明)	39個体				24個体								15個体
⑤底部	39個体	5個体	2個体	1個体	10個体	2個体	17個体	1個体	5個体	6個体	0	6個体	1個体
最小個体数(縦割別) * 1	59個体												
最小個体数(全体) * 2	70個体												
最大個体数 * 3	101個体												

* 1 : I系・II系とともに①+②。

* 2 : II系は①+④。

* 3 : ①+②+③+④。

(甌)

	合計	A1類	A2類	B類						合計	A類	B類
①定形に準じるor口縁と底部の対応判明	8個体	6個体	1個体	1個体								
②口縁部(～断部) : 1/3以上割合が判明するもの * 1	64個体	30個体	1個体	13個体								
③脚部	4個体	3個体	0	1個体								
④底部	6個体	5個体	0	1個体								
最小個体数 * 2	72個体	56個体	2個体	14個体								
最大個体数 * 3	82個体	65個体	2個体	16個体								

* 1 数量の多いA1類については口縁1/3以上をカウントし、数量が少なく個体識別しやすいA2・B類については口縁1/4以上を個体数認定の原則とした(土器頭より2・3も同様)。

* 2 最小個体数: ①+②。

* 3 最大個体数: ①+②+③+④。

(鉢(中・小型))

	合計	A類	B類	C類	D類	面割不明				合計	A類	B類
①定形に準じるor口縁と底部の対応判明	30個体	12個体	7個体	7個体	4個体	0						
②L縁部(～断部)	51個体	11個体	8個体	24個体	5個体	1個体						
③底部	4個体	0	0	1個体	0	0						
最小個体数 * 1	80個体	23個体	15個体	31個体	10個体	1個体						
最大個体数 * 2	81個体	24個体	16個体	42個体	12個体	2個体						

* 1 最小個体数: ①+②。

* 2 最大個体数: ①+②+③。

(高杯)

	合計	A類	B類	C類	D類					合計	A類	B類
①定形に準じるor杯と脚の対応判明	49個体	39個体	3個体	7個体	7個体	1個体						
②杯部(杯底部含)	42個体	27個体	6個体	7個体	2個体	2個体						
a : 杯底部～脚部	5個体	5個体	5個体	0	0	0						
b : 杯底部～盤	5個体	5個体	5個体	(A・B・D類)	11個体	(A・B・D類)						
c : 杯底部のみ	11個体	11個体	11個体	11個体	11個体	11個体						
③脚部	47個体	45個体	45個体	2個体	2個体	2個体						
④軸のみ	99個体	90個体	90個体									
最小個体数(類型) * 1	91個体	65個体	9個体	14個体	3個体							
最小個体数(全体) * 2	196個体			196個体								
最大個体数	249個体			249個体								

* 1 最小個体数(類型): ①+②。

* 2 最小個体数(全体): ①+③ a +③ b +④+⑤。

調査の記録

〈器台〉

	合計	A類	B類
穴形に準じる	1個体	1個体	0
杯部	2個体	0	2個体
脚部	1個体	1個体	0
最小・最大個体数	4個体	2個体	2個体

〈手焙形土器〉

	合計
穴形に準じる	1個体
蓋部	2個体
最小・最大個体数	3個体

〈ミニチュア土器〉

	合計
①穴形or準定形	6個体
②I形（～脚部）	6個体
③脚部	3個体
最小個体数	12個体
最大個体数	15個体

〈蓋〉

	合計	A類	B類
穴形に準じる	2個体	2個体	0
最小・最大個体数	2個体	2個体	0

〈製塙土器〉

	合計
カウント可能個体数	49個体
最小・最大個体数	49個体

〈脚台〉

	合計
カウント可能個体数	1個体
最小・最大個体数	1個体

表3 土器溜まり1土製品・石器個体数

種類	土器	石器	円錐	塊石	敲石
計	31	7	4	4 *1	2 *2

*1 塵石の可能性のある個体1点含む

*2 敲石の可能性のある個体2点含む

られる。

2) 遺物の個体数と組成（表2・3、付表1）

土器溜まり1からは、土器、石器、土製品、蝶が出土した。ここでは、土器溜まり1における遺物組成の概要を示すこととし、3箇所の土器溜まり間比較の詳細については、第5章考察において述べたい。

まず、土器溜まり1出土の土器個体数は、最小で505個体、最大で609個体となる。この数量は、土器溜まり2の約2倍、土器溜まり3の約6倍に相当する。土器の組成は、壺、甕、高杯、鉢（大型）、鉢（中・小型）、ミニチュア土器、手焙形土器、器台、蓋、製塙土器となる。なお脚台は、器種としては壺または大型鉢に属するものである。基本的器種である壺、甕、高杯、鉢（大型）、鉢（中・小型）について最小個体数で割合をみると、①高杯（45%）、②鉢（中・小型）（19%）、③甕（17%）、④壺（16%）、⑤鉢（大型）（3%）となる。土器溜まり2・3よりも高杯と壺の割合が高く、甕と鉢（中・小型）の割合が低くなる。また器種組成として土器溜まり1に特徴的なのは、製塙土器が他の土器溜まりに比べて数量が突出し、49個体出土したことである。これは、後述のように製塙土器が分布においてもまとまって出土したことによる。ミニチュア土器・手焙形土器・器台・蓋は、希少な器種といえる。ミニチュア土器（12個体）の割合については、製塙土器と脚台を除いた最小個体数（453個体）をもとに算出すると0.03%となる。この数値は、土器溜まり2・3とはほぼ同じである。

器種の細別類型単位でみると、壺についてはⅡ系B類を除けばすべての類型を備える。Ⅰ系（最小45個体）とⅡ系（25個体）の比率は、Ⅰ系が64%、Ⅱ系が36%となる。Ⅱ系の割合が、土器溜まり2（7%）、土器溜まり3（21%）よりも高くなる。甕は、A 2類を有することが特徴といえる。高杯は、各類型が揃う土器溜まり2の比率と同様である。中・小型鉢の類型比率も土器溜まり2・3と相違ない。大型鉢については土器溜まり2ではA類主体となるが、土器溜まり1ではB類の数量が多い。土鍾が一定量（31個体）出土したのは土器溜まり1のみであるが、石鍾や、加工痕はないものの石材・全体形が石鍾に類似する「円錐」は規模に比して少ない。

上記の他に、蝶が562点が出土した。この数量は、土器溜まり2・3と比べれば最も多いものであるが、土器溜まりの規模からみれば、蝶の含有率は本土器溜まりが最も小さい。

3) 遺物分布（図41～47）

各遺物は、多くはひとつのおさまる。一方で、整理作業の結果、複数の地点にまたがる個体も認められた。近隣の出土位置どうしで接合する場合が多いが、5m以上の距離のものが接合する場合も少数な

ら認められた。こうした遠距離で接合する個体については、もともと破片の状態で場所を異にして廃棄されたか、一個体として廃棄後に何らかの要因で破片が移動したかという二つの可能性が考えられる。破片の移動の要因を確定することは困難であるが、こうした状況は、土器溜まり形成後に、一定程度の期間、土器が露出した状況で放置されていたことを示すものと考えられる。なお、一個体を構成する破片が複数地点におよぶ場合には、一個体において主体をなす出土地点を破片の大きさ等から推定した。器種別分布図においては、その接合関係を示すこととした。

全体としてみると、遺物分布はいくつかの群をなすものと理解することができる。壺・甕・高杯・鉢（中・小型）のような、70点以上ある器種については、一定のまとまりを示しながら、そのまとまりが分散している。一方、鉢（大型）・ミニチュア土器・手焙形土器・器台・壺のような、10個体前後あるいはそれ未満の希少遺物については、個別的な分散化傾向を示す。また、製塙土器・土鍤については、局所的まとまりを形成している。

ここでは説明の便宜上、遺物のまとまりを1～6群に区分した（図41）。各群は、分布状況と遺物組成に基づくゆるやかな区分である。したがって、特に群の境界部分については、漸移的な性格がある。北西隅に位置する1群は、壺・甕を分布の中心軸とし、その周辺に高杯と中・小型鉢という中・小型器種や、大型鉢がみられるグループである。それに追加して、蓋や手焙形土器・器台・ミニチュア土器・土鍤が伴う。1群の東に隣接する2群は、高杯と中・小型鉢を主体とする。ここには、石鍤2個体を伴うことも特徴的である。2群は、器種組成と分布から、1群あるいは3群の中間領域とみることも可能である。3群は、壺・甕を中心とし、高杯および中・小型鉢・ミニチュア土器を伴う。また、大型鉢もそれに加わる。4群は、5群の北側に広がるもので、西半（101～117）と東半（216～218）に区分することも可能である。ここでは西半を4a群、東半を4b群とする。4群は高杯と中・小型鉢を主体とすることと、製塙土器集中や土鍤の分布が4a・4bそれぞれに認められることを特徴とする。5群とした範囲は、最も面積が広い。5群は遺物が密集して面的に分布する一方で、器種組成と分布が

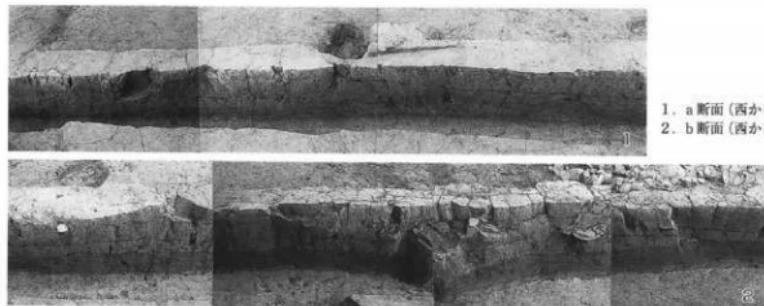
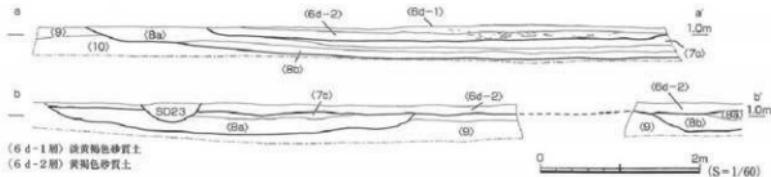
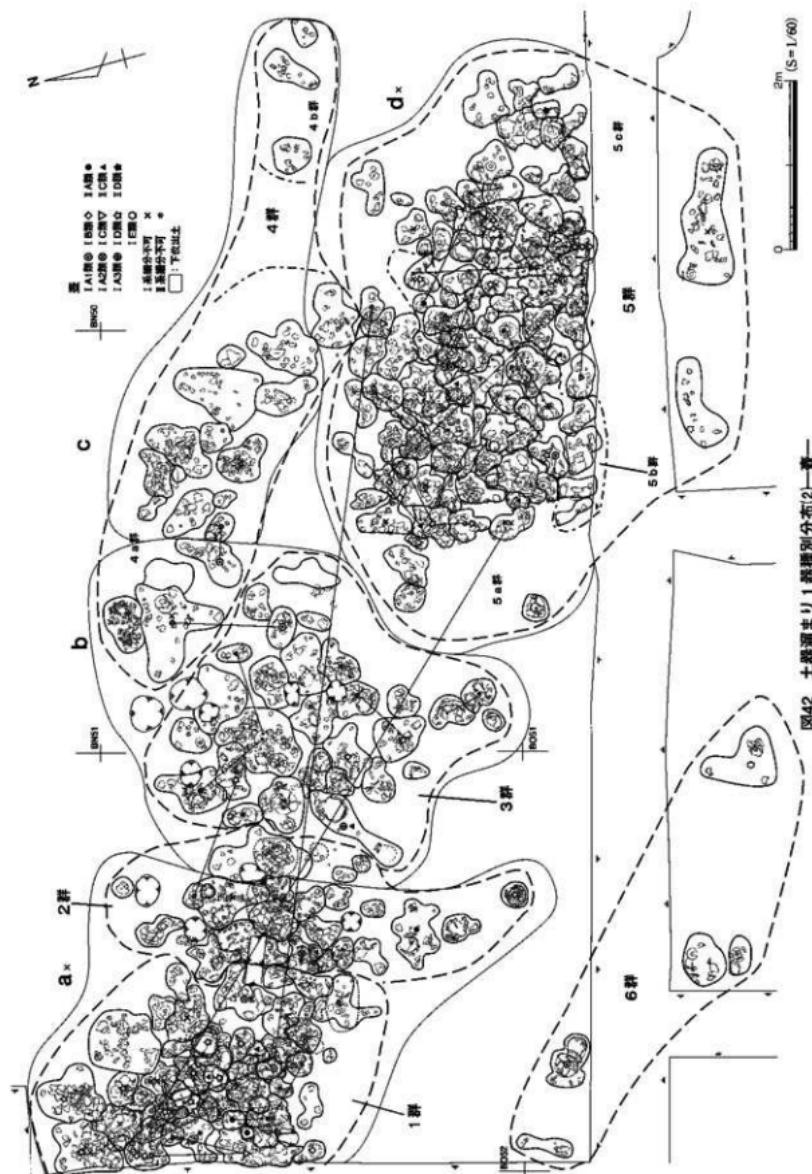
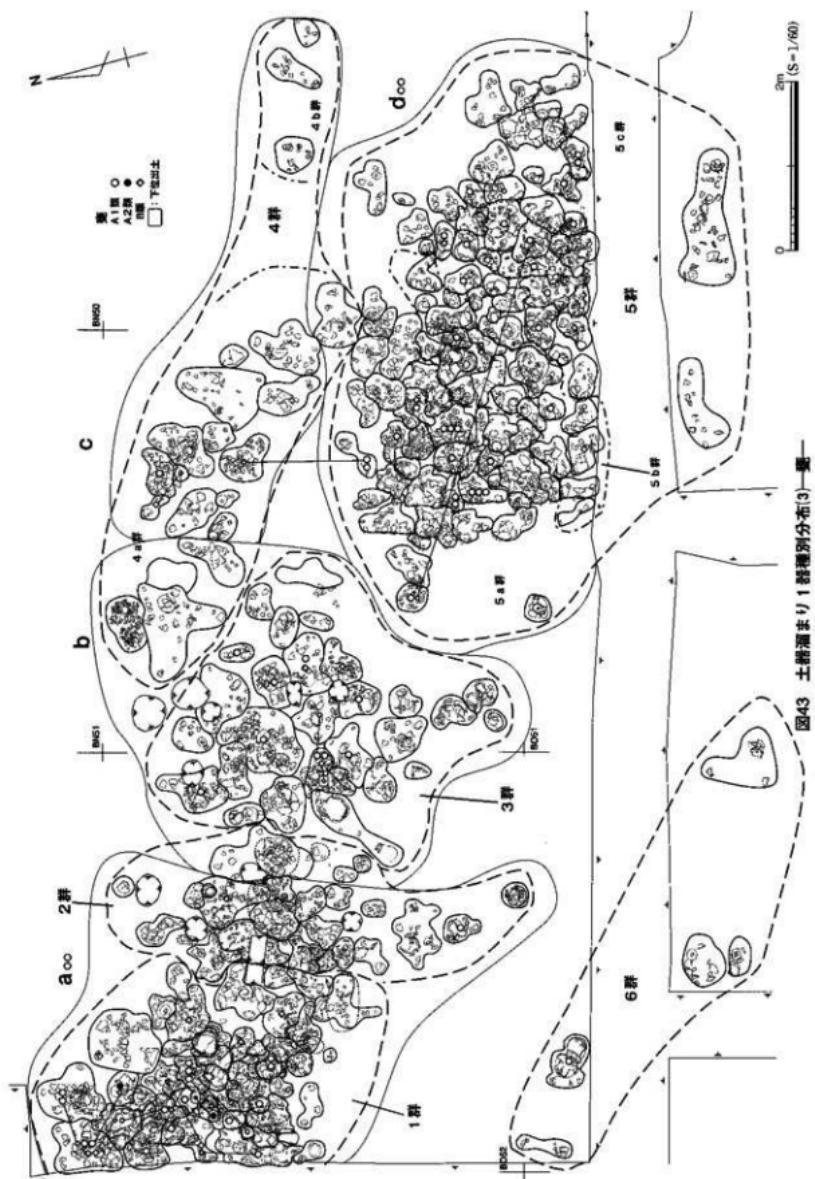


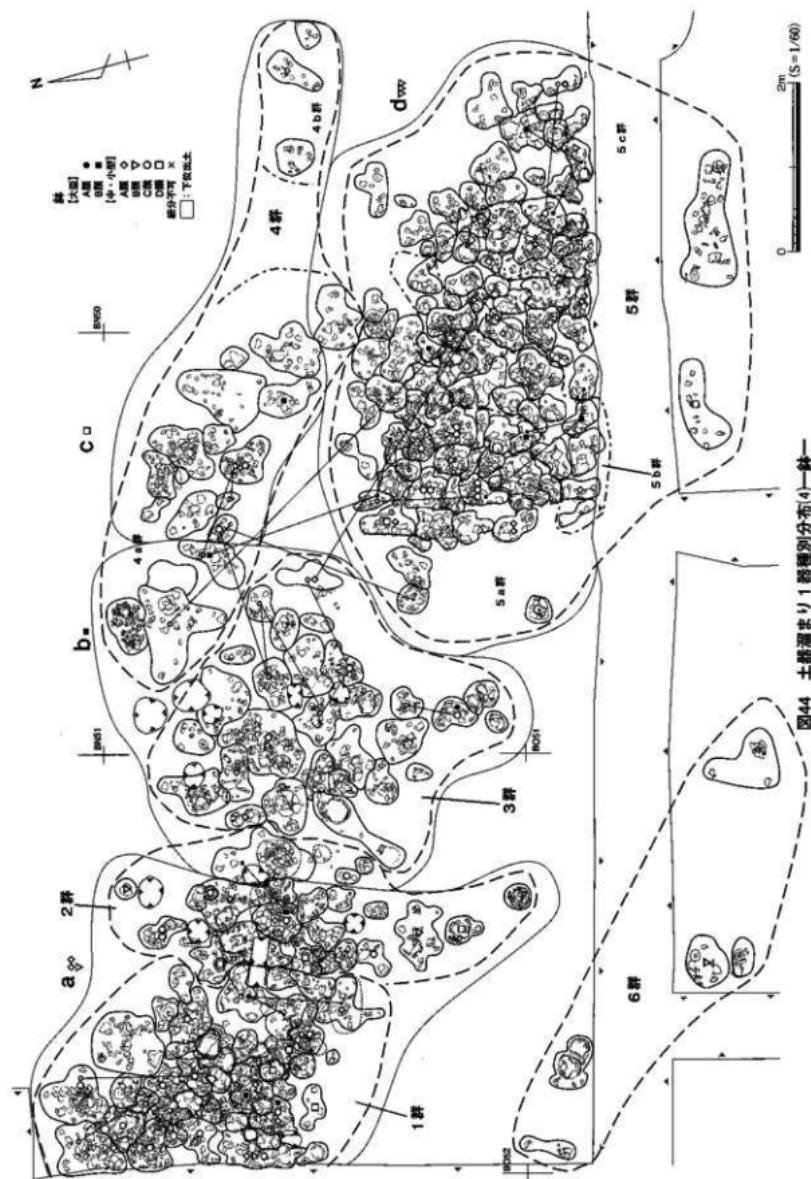
図39 土器溜まり1土層断面図

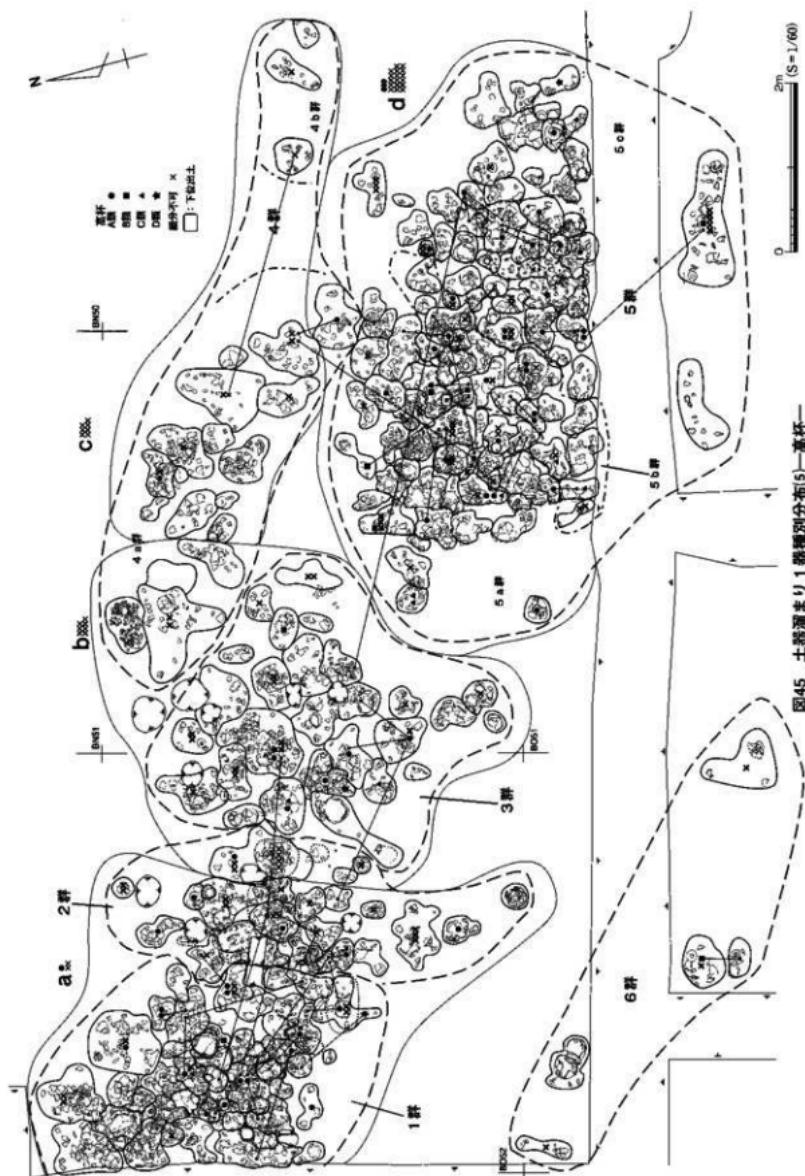


図40 土被覆より1段り上位













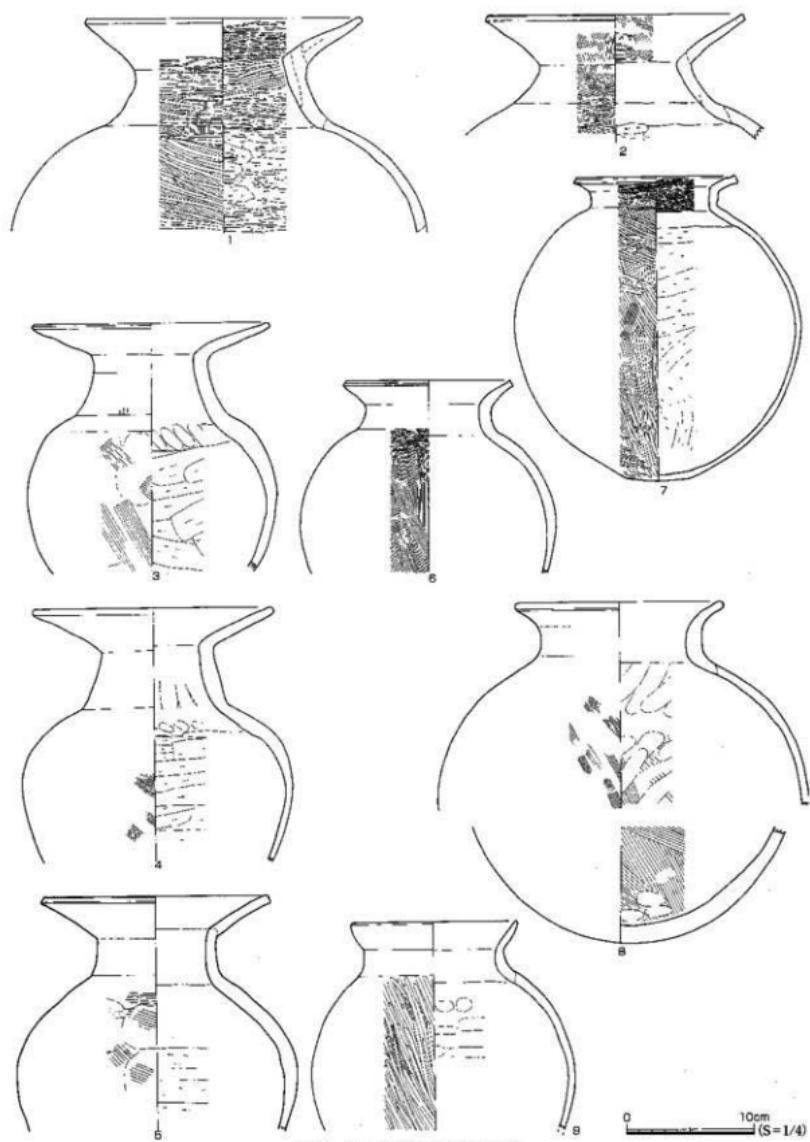


図48 土器満まり 1 出土遺物(1)

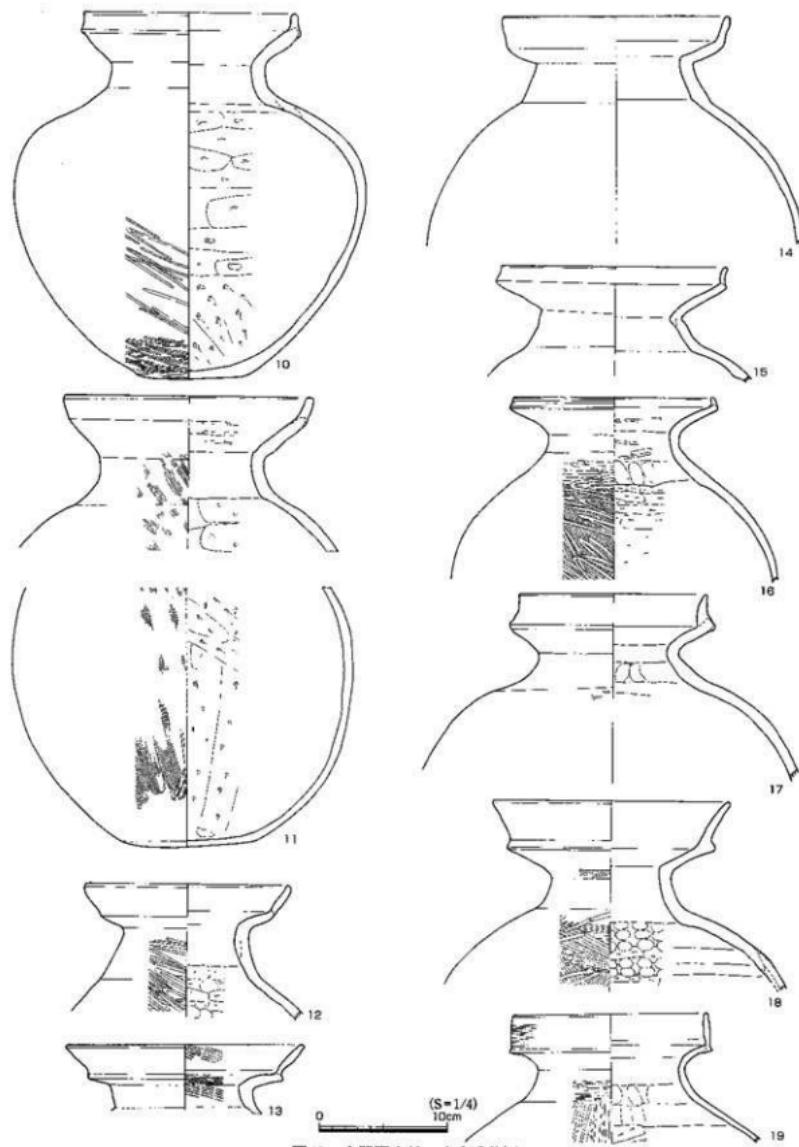


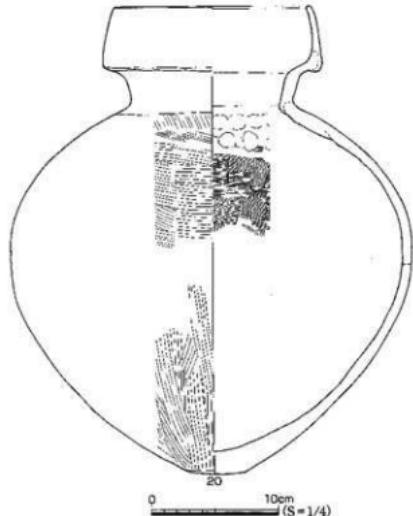
図49 土器満まり1出土遺物(2)

らみると、内部においてさらに3つのまとまり（5a～5c群）に細分しうる可能性が高い。ただし、細分単位の範囲は漸移的である。いずれの群も、壺・甕が核となり、それに高杯や中・小型鉢、および大型鉢が伴う組成となる。5a群では、それらに土錐が加わる。5b群は、位置としては5a・5cの中間地帯ともみなせるが、甕が帶状に分布することから、ひとつの細別群として認識したものであるが、本来的には5aまたは5cに付随するまとまりである可能性も排除されない。

6群としては、1～3群の南方にあたり、周辺域をなすものを一括した。6群中央部に東西基礎の擾乱が存在するため、その全体を把握することは難しい。6群では、位置220において横位の甕と甕各1個体が合わせ口となつて出土した点は注意を要する。位置220では、特別な振り形は認められなかったが、これらの土器は甕口としての機能を果たしていた可能性がある。

次に、器種ごとに分布を概観する。

甕（図42） 甕は各群内で帶状に分布することを基本とする。まず1群の甕の構成は、I系30個体（分類不明15個体含む）、II系8個体（分類不明4個体含む）となる（個体数は最大個体数、以下同様）。I系甕では、D類が最も多く、9個体を数える。D類は、北から南へ帶状分布をなす（位置1・4・10・7・18・20・21・35・34）。このD類分布域に隣接する位置2では、單口縁のI系B類が2個体みられる。これらD・B類の周辺に、複合口縁をもつI系A1類2個体（位置30・45）とI系C類1個体（位置11）が分布する。一方、II系甕については、直口甕であるC類が、單口縁のI系D類の分布と重なるのに対し、複合口縁甕であるA類は、複合口縁のI系A・C類と同様に周辺部に位置する。I・II系ともに、類型不明の底部片等が一定量存在するが、現状で認識しうる傾向としては、非複合口縁甕（I系D・B



甕）とI系A・C類と同様に周辺部に位置する。I・II系ともに、類型不明の底部片等が一定量存在するが、現状で認識しうる傾向としては、非複合口縁甕（I系D・B

番号	器種	法量 (cm)		形態・手法の特徴ほか	胎土	色調
		口径	底径			
1	甕	21.8	-	(内)U縁一部鋸歯：タギ、体幅：ケズリ、一部にヒガ底(外)口縁：低い横ナギ	微細、角閃石△	淡黄褐色
2	甕	*20.0	-	(内)頭部：押捺・ナギ、口縁：ハケナギ(外)ハケ後3段タギ、1.5残存	微~細、角閃石△	淡青褐色
3	甕	*18.7	-	(内)ケズリ、前縁(外)ハケナギ、腹部：強(内)ナギ、3/4残存、底面	微細	淡灰褐色
4	甕	19.0	-	(内)U縁：強タギ(外)直底、ナギ、体幅：ケズリ(外)口縁一部鋸歯：側面ハマメ、3/4残存	微~細	淡灰褐色
5	甕	18.0	-	(内)U縁：強タギ、ナギ、腹部：直底、ナギ、1/3残存、1/3残存	微細、角閃石△	黑色△、灰褐色
6	甕	13.1・13.6	-	(内)底破損、U縁：横ナギ(外)口縁一部鋸歬、腹部：赤色顔料？	微細均質	黃褐色△、赤褐色
7	甕	12.4	-	U縁：横ナギ(外)ハケミガ底(外)鋸歯	粗粒均質	灰褐色△、赤褐色
8	甕	16.4	5.0	24.9 (内)頭部：強タギ(外)直底、ナギ、頭部：ハケ後押捺(外)直底、旁底：強タギ、3/4残存	粗粒、角閃石△	淡灰色△、明系褐色
9	甕	13.1	-	(内)U縁、頭部：強タギ(外)直底、腹部：ハケ後3段タギ、1/2残存	微~細	淡灰褐色△、深褐色
10	甕	16.8	8.3×8	26.9 (内)頭部：ケズリ、気泡(外)側面：タギ、直底：内・外曲輪底、底面：1/3残存、底跡	粗粒△	灰黑色△、赤褐色△
11	甕	*19.7	-	(内)ナギ、頭部：ナギ後ミガタ(外)直底、ナギ、ハケス、1/4残存、全胎化	粗粒、赤色粒△	乳白色△、口縫付泥化色
	甕	-	10.4	(内)ケズリ、底部：内凹(外)ハケメ、直底、底跡：強タギ、ナギ、1/5残存	微細	赤褐色△
12	甕	*16.2	-	(内)口縁：ナギ、腹部：ナギ、所生：ナギ(外)口縁：強タギ、急屈：ナギ後ミカキ、1/4残存、底迹	微細、角閃石△	淡黄褐色
13	甕	18.7	-	(内)ハケス、頭部：ハケ後ミカキ、一部強熱(外)摩滅△、不明瞭、1/3残存	微細均質	空褐色△、孔裂褐色
14	甕	*18.0	-	全体に滑落口、不明瞭、1/4残存	微~細、赤色粒△	明褐色△
15	甕	17.8	-	(内)全体に剥離、不明瞭、強熱被熱(外)摩滅△、強烈：高い横ナギ、頭部：ハケ後ナギ	微細	小褐色△
16	甕	17.8	-	(内)：ナギ、内面一部光沢あり(内)頭部：滑落ナギ、ケズリ(外)ハマメ後3段タギ、3/4残存	微細	乳白色△、明褐色△
17	甕	*14.8	-	口縁一部強熱、強ナギ、内面強熱、滑落(内)頭部：ケズリ(外)強熱熟色、消褪△、1/2残存(外)底迹△、底面：強(外)底面△	粗粒、赤色粒△	本褐色△
18	甕	18.8	-	口縁一部強熱、所生：ナギ、頭部：上部ナギ(外)ハケメ、ミカキ、被熱強熱、不明瞭、1/3残存	微細	深青灰白色
19	甕	15.4	-	(内)強ナギ、所生：ナギ、頭部：上部ナギ(外)ハケメ、1/2残存(外)底面△、1/2残存	微細、角閃石△	淡褐色△(明褐色△)
20	甕	15.5	4.5	37.0 U縁一部強熱：滑落(内)頭部△+ナギ、ハケス(外)ハケメ、1/2残存	微細	明褐色△

図50 土器溜まり1出土遺物(3)

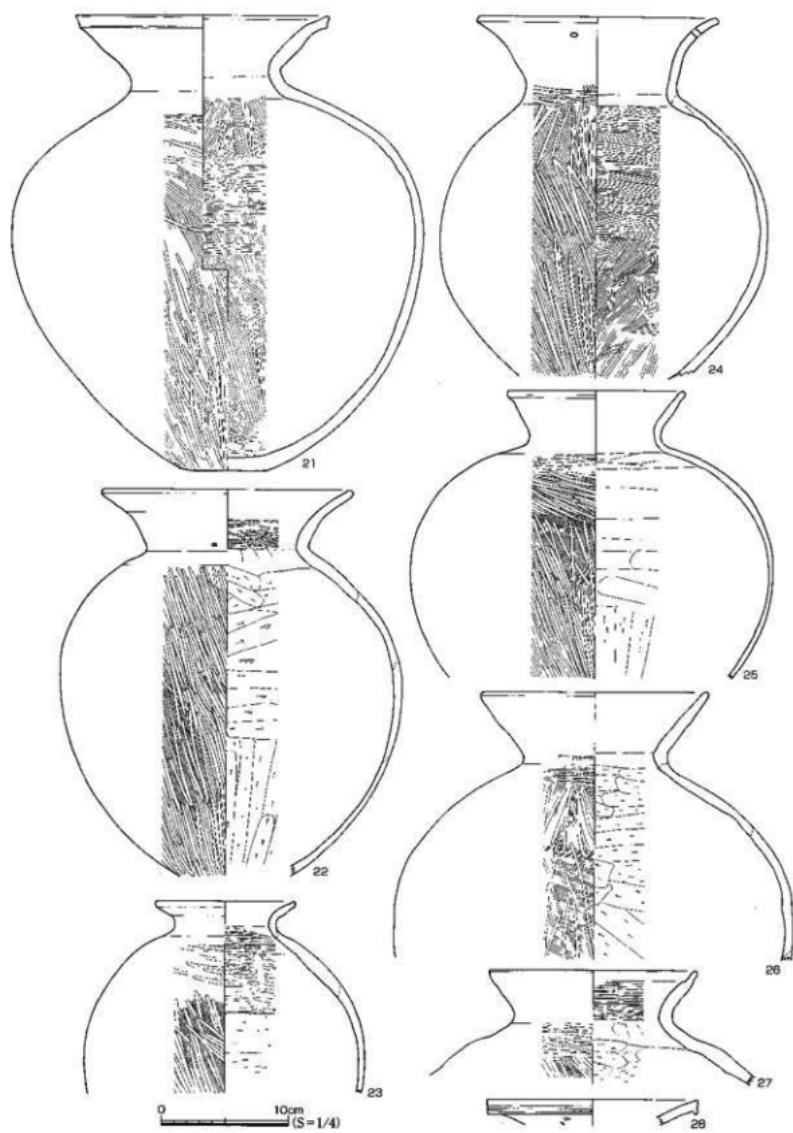
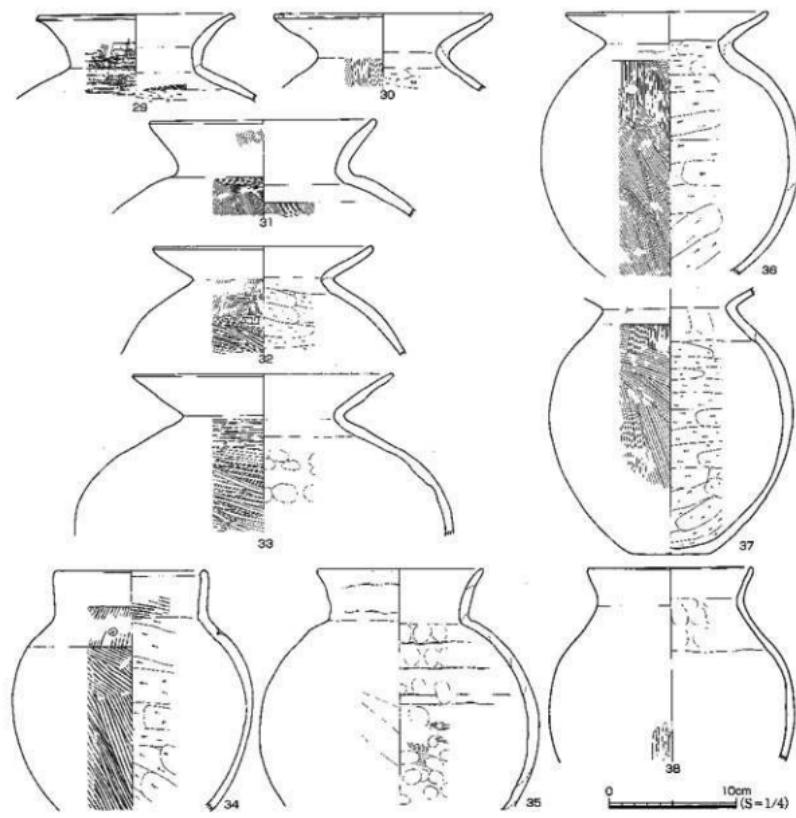
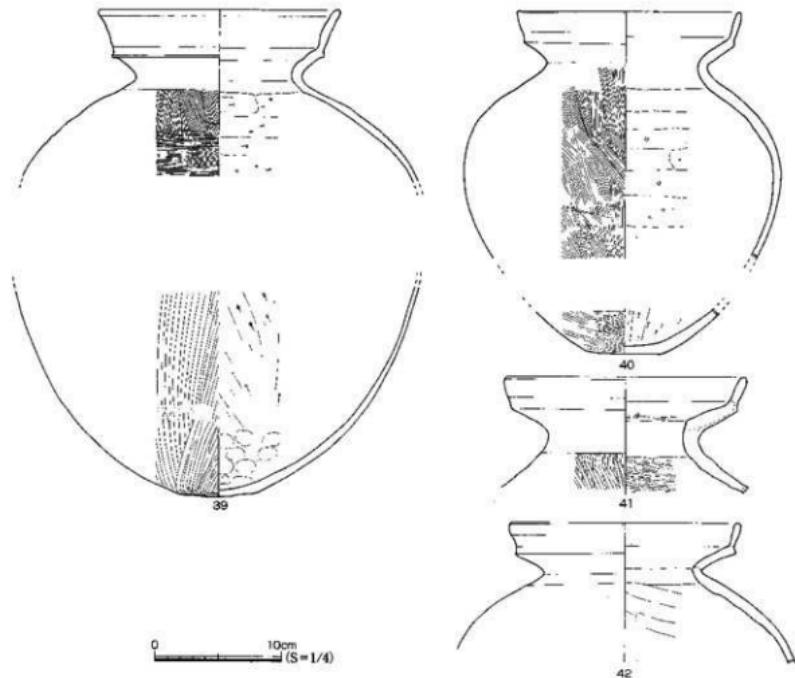


図51 土器満まり1出土遺物(4)



番号	器種	注意 (cm)	形態・手法の特徴は	出土	色調	
21	壺	20.9 6.4 35.9	(内) 口縁: ナゲ、腹底: ケズリ(内)ナゲ(外)ハケ後、部ミガキ、1/2残存、黒斑、 口縁: ナゲ、腹底: ハケ後、ナゲ(外)ハケ後ミガキ、1/2残存、黒斑竹管(×)有、黒斑	縦一継砂、角閃石	明褐色~黄褐色	
22	壺	19.8	-	横砂	暗褐色~暗茶褐色	
23	壺	11.0	-	横砂	暗褐色~暗茶褐色	
24	壺	19.0	-	横砂、表面〇(内)ハケ後(外)ハケ後ミガキ、3/4残存、黒斑、1/2残存、黒斑	乳白色	
25	壺	14.0	-	横砂、ナゲ、被熱少(中)、原成〇、不明成〇(外)ハケ後ミガキ、被熱残存〇、3/4残存、黒斑	横砂	灰褐色~暗褐色
26	壺	17.6~18.1	-	横砂: ナゲ(内)ケズリ、被熱少(中)、原成〇(外)ハケ後ミガキ、被熱残存〇、3/4残存、黒斑	横砂	暗褐色~暗茶褐色
27	壺	16.4	-	口縁: ナゲ(内)焼付△+ケグ、被熱少(中)、原成〇(外)ハケ後ミガキ、一部ハケ残る、1/2残存	横砂	灰褐色~暗褐色
28	壺	*16.6	-	(内) 原成〇(外)一剥離方向工具、壁に仕立痕1ヶ所、1/2残存	横砂	灰褐色~暗褐色
29	壺	15.0	-	(内) ナゲナゲ、焼付△+ハケ、ケズリ(外)ハケ後ミガキ、原成	横砂	明褐色
30	壺	17.0×17.2	-	口縁: ナゲ(内)ケズリ(外)ハケメ、1/2残存	横砂、角閃石〇、ウンモ	乳白色~淡乳灰褐色
31	壺	17.8	-	口縁: ナゲ(内)強い焼付ナゲ、被熱後焼付ハケ、ナゲ(外)ハケメ、1/3残存	横砂均質、ウンモ	赤褐色~黃褐色
32	壺	17.3	-	口縁: ナゲ(内)ケズリ後一部ナゲ(外)ハケ後ミガキ、1/3残存、黒斑	横砂、ウンモ〇	暗褐色
33	壺	*20.6	-	口縁: ナゲ(内)焼付後ケズリ、原成で方向、原成不明(外)ハケ後ミガキ、原成残存、1/2残存	横砂	灰褐色~乳褐色
34	壺	12.5×13.0	-	口縁: ナゲ(内)ナゲ(外)焼付、ケズリ〇(外)後焼付(外)原成〇、不明成〇、1/2残存、黒斑	横砂	乳白色
35	壺	12.1	-	(内) 口縁: ハケナゲ、ケズリ(外)焼付、被熱、被熱ハケ後ミガキ、1/2残存、被熱未著焼付1ヶ所	横砂、ウンモ、角閃石△	乳酸場色
36	壺	15.8	-	口縁: ナゲ(内)ケズリ、不明成〇(外)ハケメ、1/2残存、黒斑	横砂、角閃石△	淡乳褐色~淡灰褐色
37	壺	-	(内) 原成〇(外)ケズリ(外)焼付: ハケ後ナゲ、被熱〇、被熱〇、被熱、1/2残存、黒斑	横砂、ウンモ	暗褐色~乳褐色	
38	壺	*13.0	-	(内) 原ナゲ、盛落下: ナゲ、原成〇、不明成〇(外)原成〇、一部: ナゲ、ケズリ〇(外)焼付〇(外)2ヶ所、盛 落砂、花砂少少	灰~淡褐色~乳褐色	灰~淡褐色~乳褐色

図52 土器層まり1出土遺物(5)



番号	器種	寸法(cm)			形態・手法の特徴はか	胎土	色調
		口径	底径	器高			
39	壺	*19.0	6.2	-	(内)抜きケツ内(内)カズリ、裏底込、底端部: ハタ筋(?)跡(?)後(?)ク、底面: ミガキ、J.横筋、底面 微砂均質、力内凹石〇 淡灰褐色~淡灰青褐色	微砂均質、力内凹石〇	淡灰褐色~淡灰青褐色
40	壺	17.5	6.0	-	(内)縁: 縫合部(?)アリ(?)縫合部、底面: タグ(?)印(?)ハナツ、底面(?)底面(?)縫合部(?)、底面: 壁厚0.1、底面 粗面均質、縫合部〇 粗面均質	粗面均質、縫合部〇	乳褐色~明褐色
41	壺	19.0	-	-	口縁: 瓦ダゲ(?)内(?)断部-底ミガキ、ケズリ跡(?)オハケ後ミガキ、J.2段残存 底面: 細目縫合部〇 細目縫合部	底面: 細目縫合部〇	淡灰褐色
42	壺	18.2	-	-	(内)縁: ハナツデ、側面: 摩擦(?)外(?)剥落〇 不明瞭、側面: ハナツデ、底面: ミガキ、2/3残存 底面: 細目縫合部〇 細目縫合部	底面: 細目縫合部〇	淡灰褐色~淡灰白色
43	壺	10.6	2.2	18.5	(内)ハナツデ、縫合部: ハナツデ〇 不明瞭、側面: ハナツデ、底面: ミガキ、2/3残存、底面 微砂均質、角凹石〇 黄褐色	微砂均質、角凹石〇	黄褐色
44	壺	12.3	2.5	18.4	(内)ハナツデ後ハナツ、底部: ハナツ、押圧(?)外(?)ハナツ、J.2段残存、底面 微砂均質、ウンモ〇 明褐色~明灰褐色	微砂均質、ウンモ〇	明褐色~明灰褐色
45	壺	10.2	1.9	19.8	(内)ハナツデ〇 押圧: 不明瞭(?)外(?)剥落、側面: ハナツ、底面: ミガキ、2/3残存、底面 微砂均質、角凹石〇 黄褐色	微砂均質、角凹石〇	黄褐色
46	壺	11.2	3.0	16.6-17.3	(内)ハナツデ後ハナツ、押圧: ハナツ工芸(?)底面〇 ハナツミガキ、底面: ケズリミガキ、2/3残存、底面 微砂均質〇 微砂均質	微砂均質〇	明褐色~明灰褐色
47	壺	10.0	-	-	(内)ハナツデ〇 不明瞭(?)外(?)剥落〇 不明瞭(?)底面: 黒褐色、底部: 脱離、底面(?)脱離面あり 底面均質〇 明褐色	底面均質〇	明褐色
48	壺	11.0	-	-	(内)口縁: ハナツミガキ、底部: ナデ、底面: ナデミガキ、側面: ミガキ、J.2段残存 微砂均質〇 乳褐色	微砂均質〇	乳褐色
49	壺	-	2.2	-	(内)ハナツメ(?)外(?)ハナツ、底部: ナデ、底面: ハナツ、J.2段残存 微砂均質、角凹石〇 明褐色~明灰褐色	微砂均質、角凹石〇	明褐色~明灰褐色
50	壺	14.5	-	-	(内)ハナツミガキ、押圧: 外(?)ハナツミガキ、口縫合部: 脱離(?)底面〇 5/6残存 微砂均質〇 明褐色~明灰褐色	微砂均質〇	明褐色~明灰褐色
51	壺	7.7	3.0	12.5	(内)ハナツ、底面: 工芸(?)外(?)剥落〇 ハナツミガキ、底面(?)ハナツ、下部: ミガキ、底面: 剥離、側面 微砂均質、角凹石〇 黄褐色	微砂均質、角凹石〇	黄褐色
52	壺	16.6	3.4	21.8	(内)口縁: ハナツ、押圧: ハナツ、側面: 剥離、底面: ハナツ(?)外(?)剥落〇 ハナツミガキ、ミガキ、底面 微砂均質〇 微砂均質	微砂均質〇	加灰色~明褐色
53	壺	17.8	-	-	口縁: ミガキ、側面(?)底面(?)ミガキ、押圧(?)外(?)ハナツ〇 ハナツ、J.2段残存 微砂均質〇 微砂均質	微砂均質〇	乳褐色
54	壺	12.0	-	-	(内)ハナツ後ミガキ(?)外(?)脱離ミガキ、ミガキ、底面: 不明瞭 底面均質、角凹石〇 明褐色~明灰褐色	底面均質、角凹石〇	明褐色~明灰褐色
55	壺	-	-	-	(内)口縁: ハナツ、底面: ナデ、側面: ナデ(?)底面〇 2段残存、側面: J.2段、内部中央に円孔(?)ハ 底面均質、角凹石〇 明褐色~明灰褐色	底面均質、角凹石〇	明褐色~明灰褐色
56	壺	-	2.3	-	(内)底部: 不明瞭(?)底面〇 ハナツ、側面: ハナツミガキ、底面: ハナツ、ナデ、J.3段残存、底面 微砂均質、角凹石〇 明褐色	微砂均質、角凹石〇	明褐色
57	壺	*7.5	2.4	12.9	(内)口縁: ハナツ、底面: ハナツミガキ、底面: 黑褐色、底部: 剥離、底面: 剥離、底面(?)底面〇 1/2残存 微砂均質〇 淡灰褐色	微砂均質〇	淡灰褐色
58	壺	14.1	-	-	(内)口縁: ハナツミガキ、側面: ハナツミガキ、ナデ、ナデ(?)底面〇 剥離(?)底面〇 3/4残存 微砂均質〇 淡灰褐色	微砂均質〇	淡灰褐色
59	壺	17.8	-	-	(内)ハナツ(?)外(?)ハナツ、押圧(?)外(?)ハナツ、ミガキ、J.2段残存 微砂均質、角凹石〇 明褐色	微砂均質、角凹石〇	明褐色
60	壺	-	-	-	(内)側部: ナデ、押圧: 剥離: カズリ(?)底面〇 ハナツミガキ、側面: 工芸(?)ハナツ、底面 微砂均質、角凹石〇 黄褐色~明褐色	微砂均質、角凹石〇	黄褐色~明褐色
61	壺	-	-	-	(内)ハナツ、底面: 上部: ハナツ、下部: ハナツ〇 1/4残存、底面: ハナツ、側面: ハナツ、J.4段残存 微砂均質〇 淡灰褐色~淡灰青褐色	微砂均質〇	淡灰褐色~淡灰青褐色
62	壺	-	*7.4	-	(内)ハナツ、つながり目剥落(?)ハナツ、上部: 剥離、底面: ハナツ、J.5残存、底面 微砂均質、角凹石〇 淡灰褐色~淡灰青褐色	微砂均質、角凹石〇	淡灰褐色~淡灰青褐色
63	壺	-	7.2	-	(内)ナデ、押圧: 下部: 剥離、底面: ハナツミガキ、ハナツ、底面: 剥離、底面: ハナツ、底面: ハ 微砂均質〇 黄褐色	微砂均質〇	黄褐色
64	壺	-	6.3-6.4	-	(内)ナデ、押圧: ナデ、ケズリ(?)外(?)剥落、側面: 剥離、底面: ハナツ、底面: ハナツ、J.3段残存、底面 微砂均質、角凹石〇 黄褐色	微砂均質、角凹石〇	黄褐色
65	壺	-	5.9	31.5-32	(内)底面: 剥離、底面: ナデ、底面(?)底面(?)底面: 剥離、側面: タカラ、底面: 剥離、底面: ハ 微砂均質〇 乳褐色	微砂均質〇	乳褐色

図53 土器溜まり1出土遺物(6)

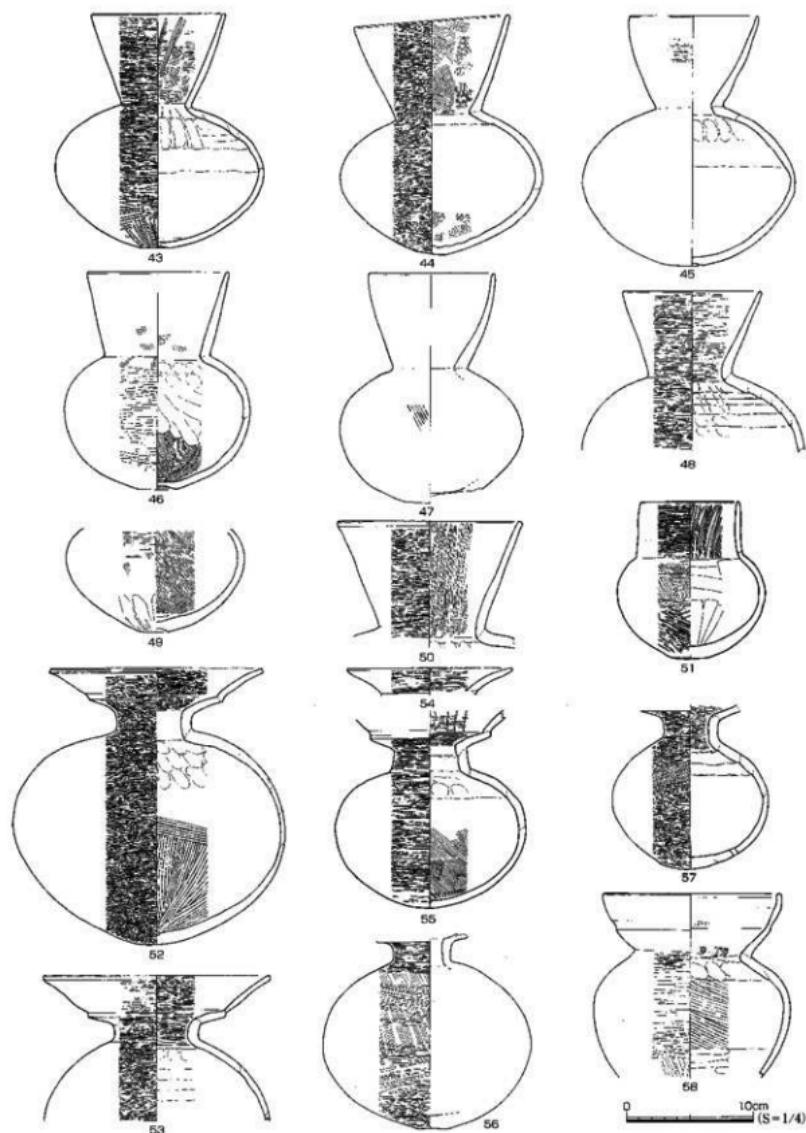


図54 土器満まり1出土遺物(7)

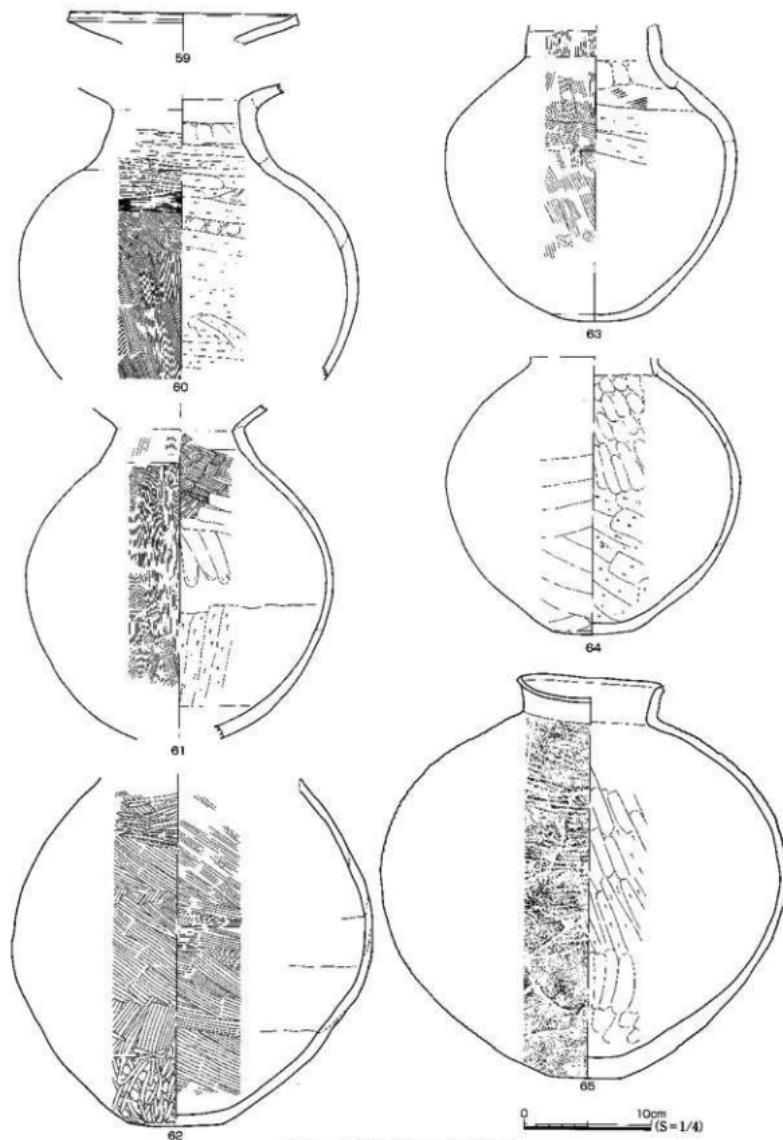


図55 土器溝まり 1出土遺物(8)

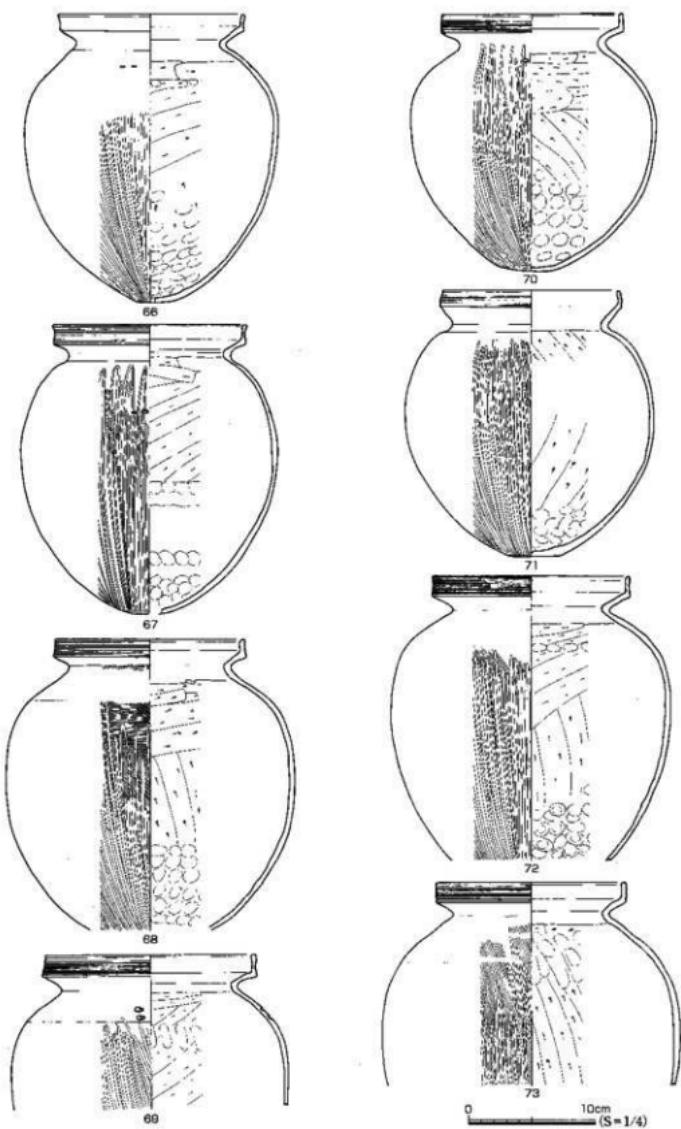


図56 土器満まり1出土遺物(9)

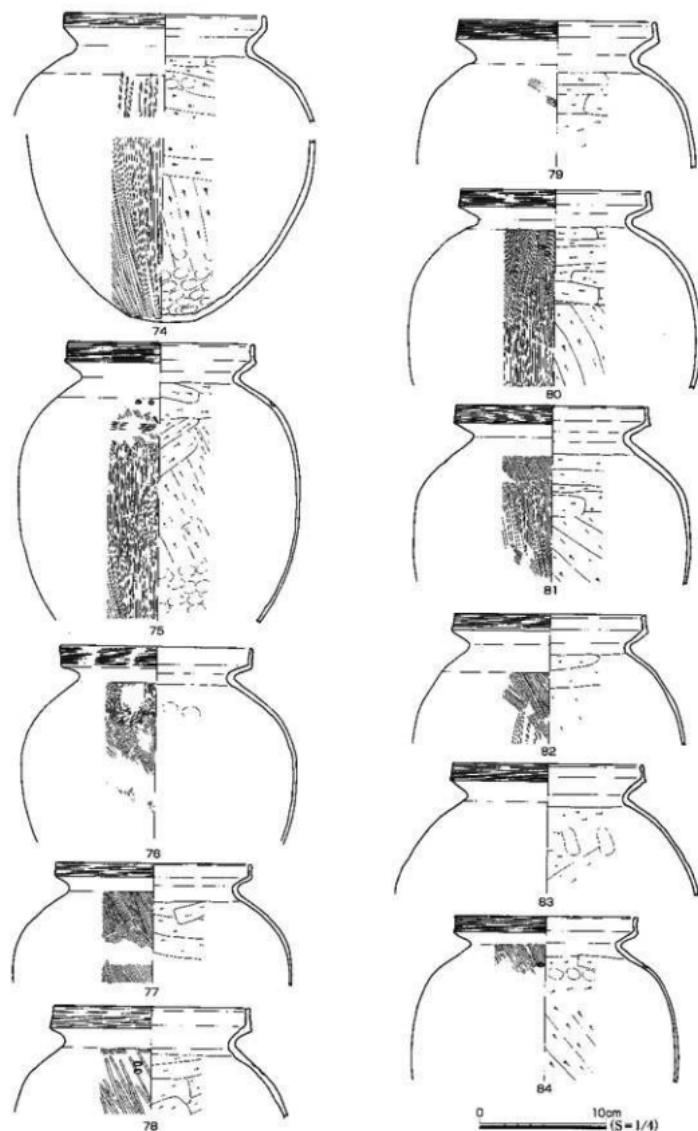
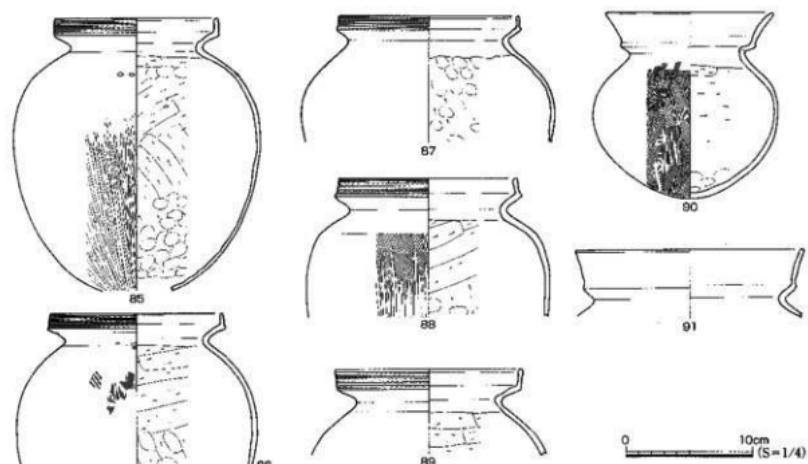


図57 土器満まり 1 出土遺物(1)



番号	器種	計量 (cm)	状況	形態・手法の特徴は		量	色調
				内径	外径		
65	壺	*147	-	22.8	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
66	壺	150	47	22.8	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
67	壺	150	-	22.8	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
68	壺	150	-	22.8	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
69	壺	157~165	-	21.0	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
70	壺	143	-	20.4	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色
71	壺	140	40	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
72	壺	*155	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色
73	壺	150	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色
74	壺	158	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
75	壺	148	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
76	壺	*152	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
77	壺	150~155	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
78	壺	134	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
79	壺	*156	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
80	壺	*150	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/淡褐色
81	壺	-	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
82	壺	147~159	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
83	壺	144~159	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
84	壺	*144	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
85	壺	136	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
86	壺	130	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
87	壺	143~144	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
88	壺	140	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
89	壺	148	-	21.0	17.5	I型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒、ウンモ？
90	壺	132~129	13	147	17.5	II型：直筒形腹内平底、下腹側に横縫目、口縁に内凹部、底部に内凹部、直筒、直筒、5.5cm高	絵炒色/角開石
91	壺	*18.0	-	(内)(外) 削落Q.	不明	(内)(外) 削落Q. 不明、1/4残存	絵炒

図58 土器満まり1出土遺物(1)

類とII系C類)を中心軸とし、その周辺に複合口縁型(I系A・C類とII系A類)が分布するものと捉えうる。

2群の構成は、I系壺2個体、II系壺3個体(分類不明1個体含む)となる。これらの分布は分散的といえる。位置59のI系壺はA2類であり、これは先の1群におけるA1類分布の一環として捉えるべきかもしれない。

3群の構成は、I系8個体(分類不明3個体含む)、II系7個体(分類不明2個体含む)となる。3群の西側に壺の分布は偏る傾向にある。西側においては、I系D類が位置77と86に各1個体分布する。両者の間で、位置86北側の81には、I系B類1個体がみられる。なお、位置92には、B類またはD類となるI系壺1個体がみられる。これらは、1群でみたような、非複合口縁型による輪状(帯状)分布を示唆する。この周辺には西部壺戸内系に位置づけられるI系A3類1個体、およびII系壺が分布する。一方、東側では、I系A1類とII系C類が各1個

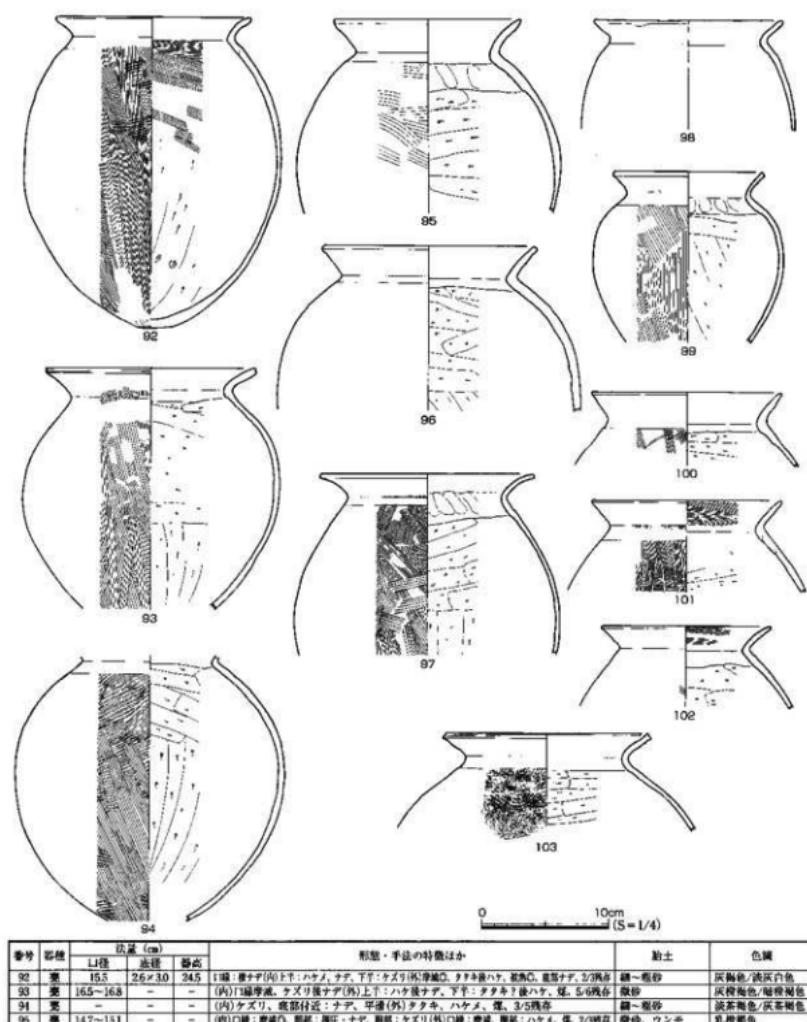


図59 土器溜まり1出土遺物12

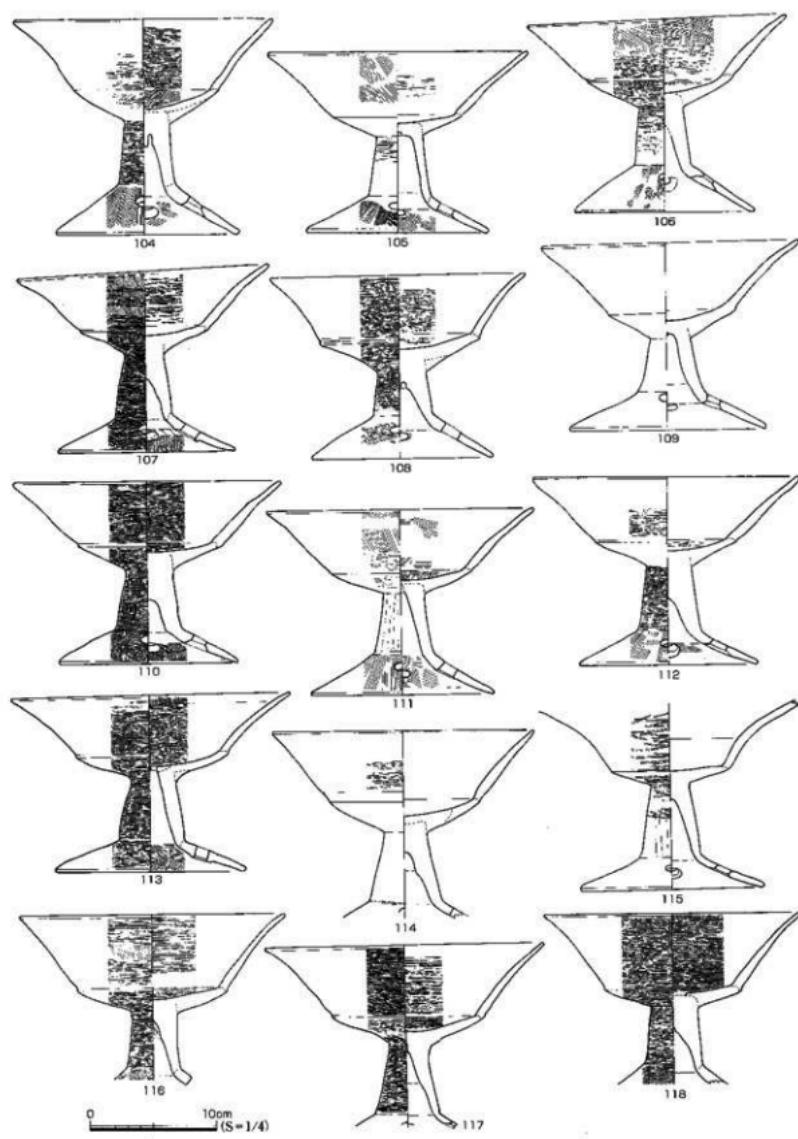


図60 土器満まり1出土遺物(3)

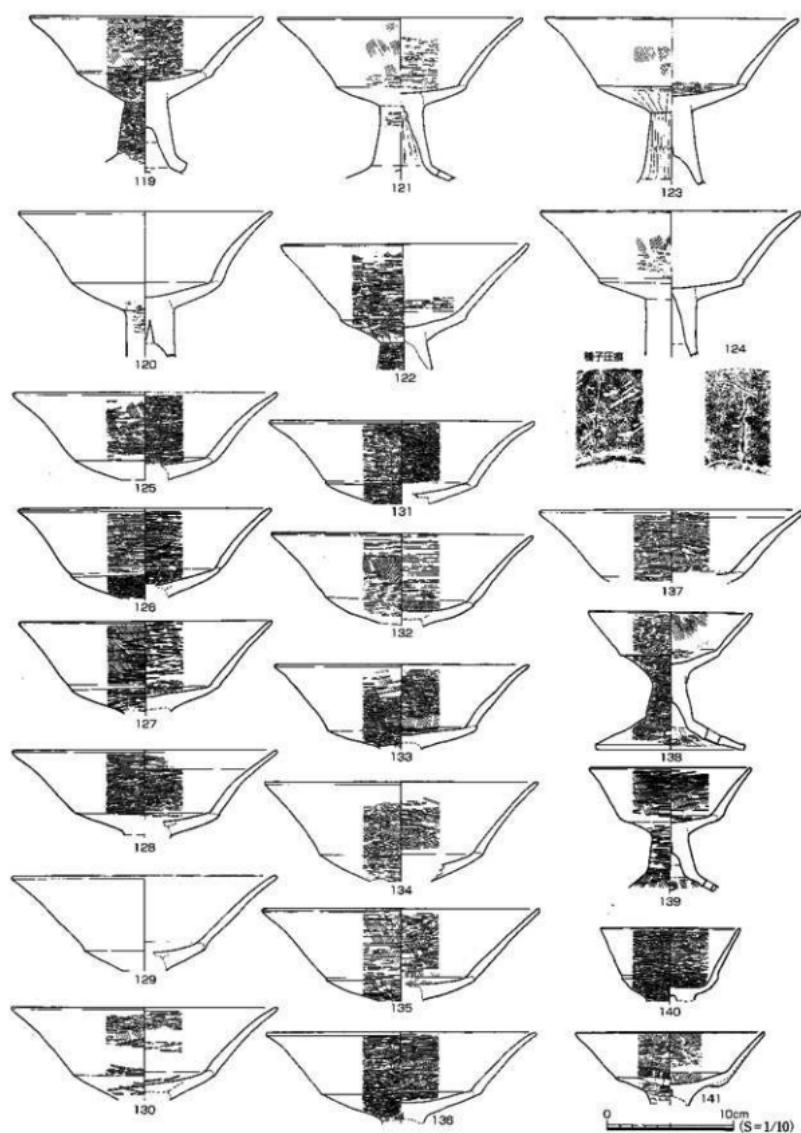


図61 土器窯より1出土遺物(1)

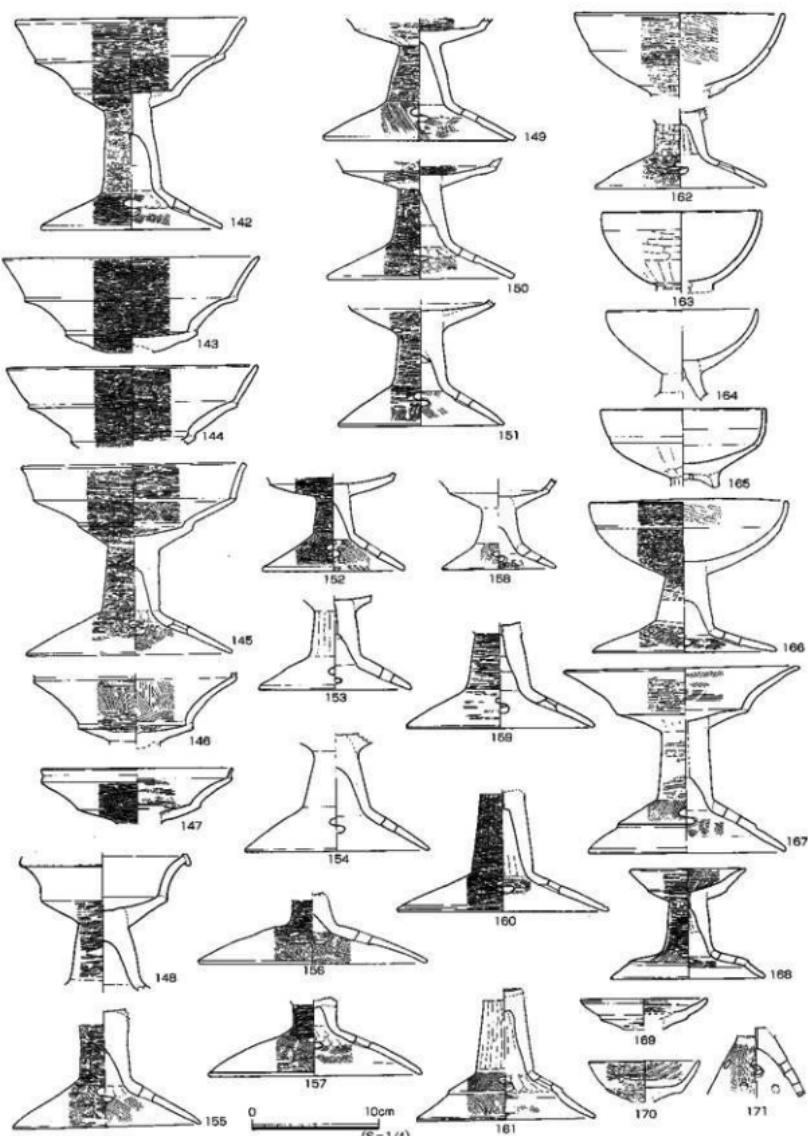


図62 土器埋まり 1 出土遺物 15

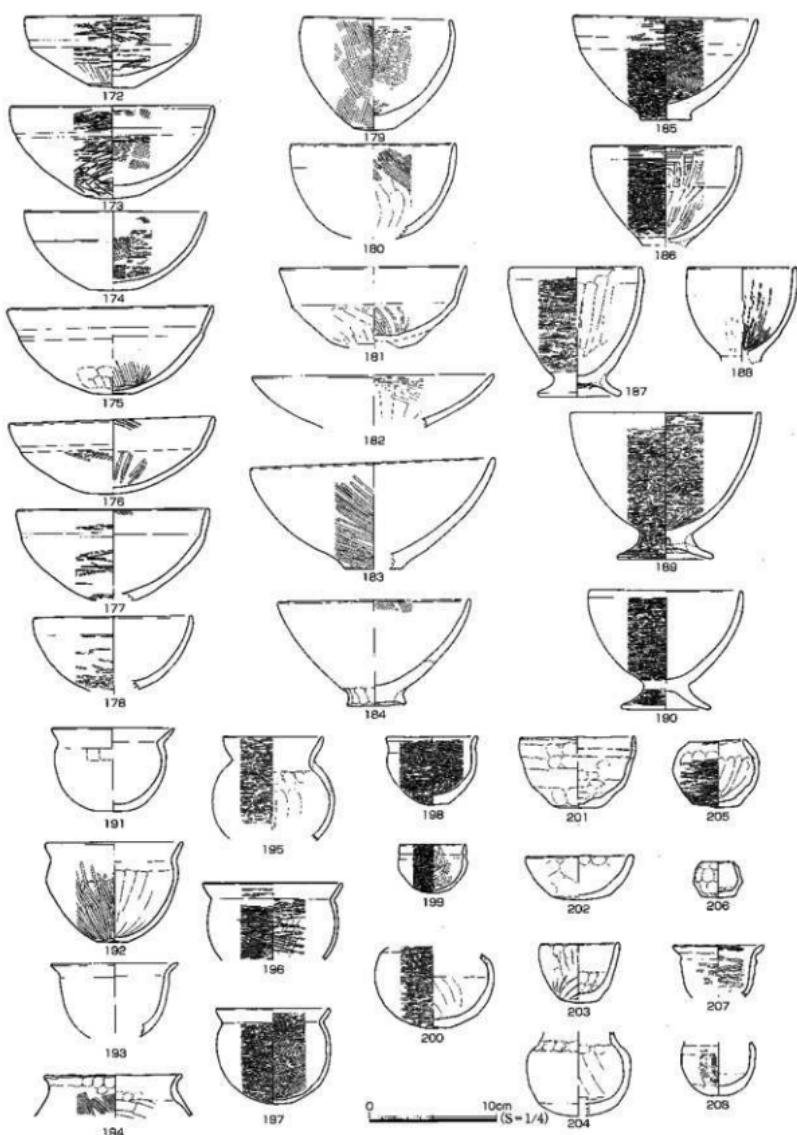


図63 土器満まり1出土遺物(6)

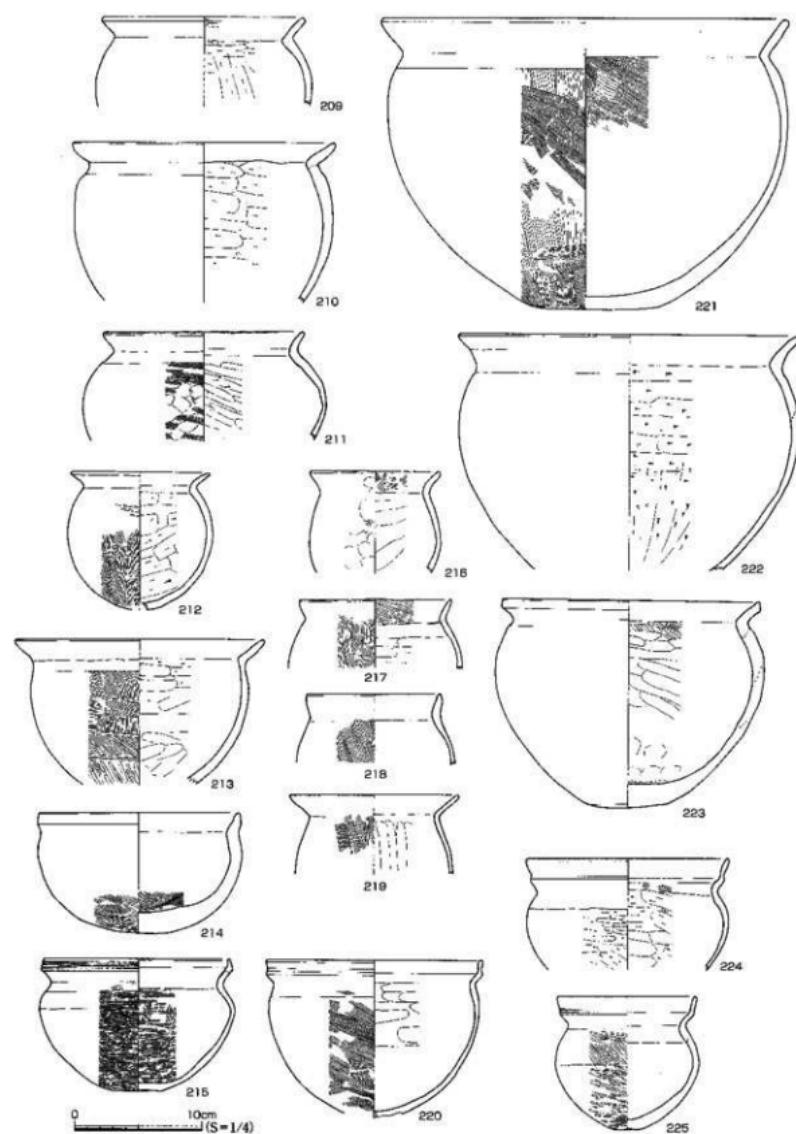


図64 土器満まり1出土遺物(1)

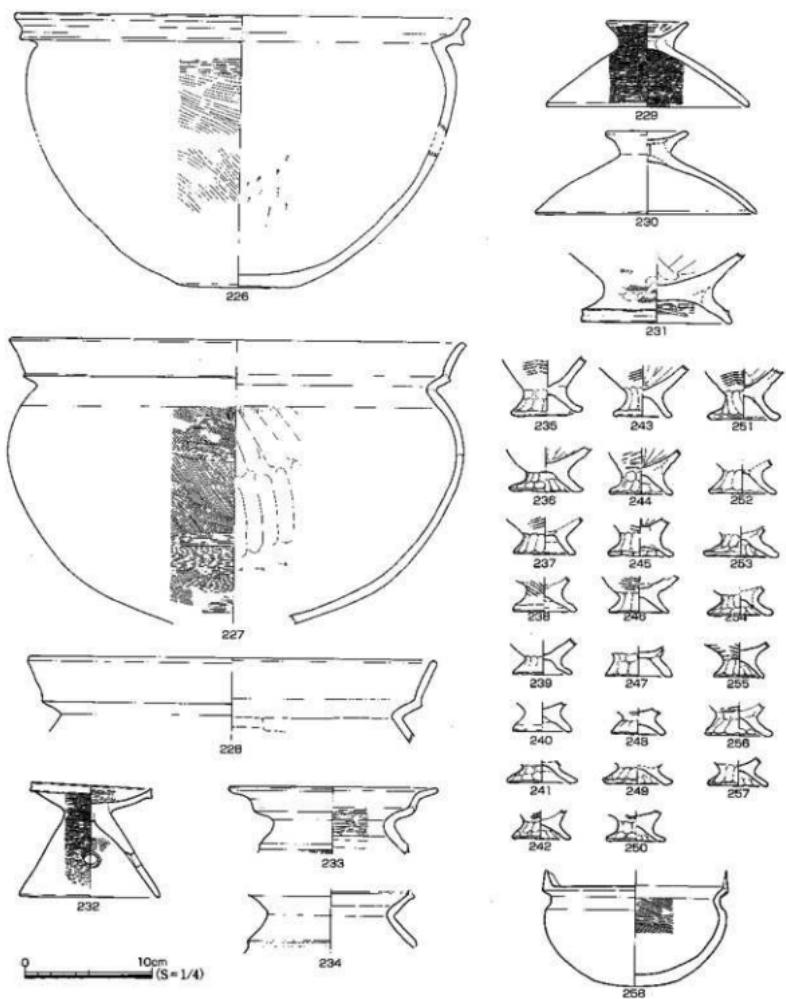
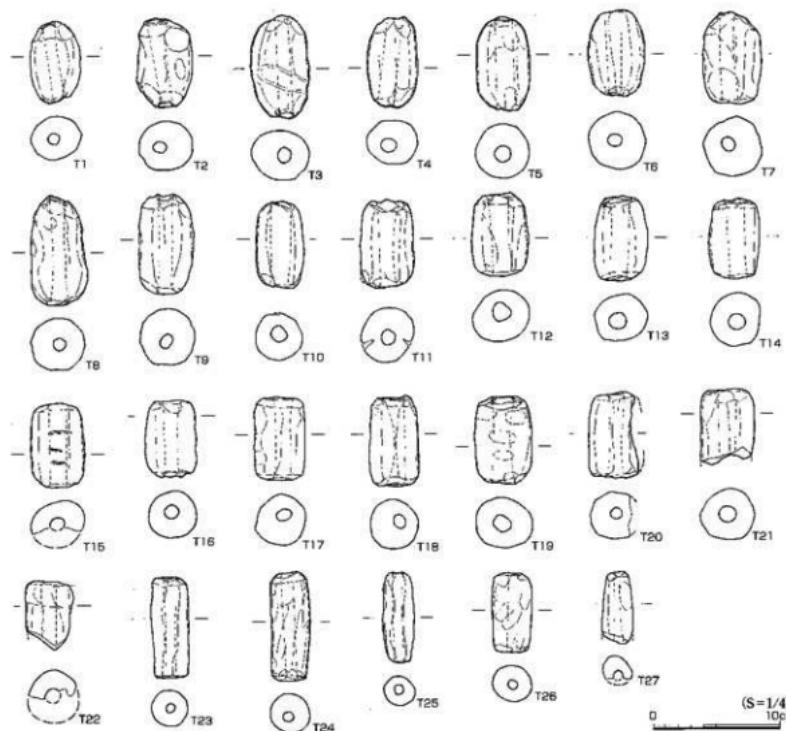


図65 土器溝まり 1 出土遺物(1)



番号	器種	重量 (g)		性質	鉱土	色調	
		最大長	最大幅				
T1	土錐	6.60	4.00	2.45	85.4	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径9mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T2	土錐	7.93	4.50	3.85	113.2	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm、黒鑄、表面一部剥落	微細・精良 淡青灰
T3	土錐	8.13	4.65	3.98	149.1	管状土錐。ナゲ、表面はかに凹凸感。孔径10mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰
T4	土錐	7.19	3.95	3.54	102.5	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰
T5	土錐	7.39	4.22	4.34	137.2	管状土錐。ナゲ、孔径10mm	微細・精良 明青灰～淡青白
T6	土錐	6.81	4.49	4.60	130.3	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T7	土錐	7.30	4.60	4.65	158	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰
T8	土錐	8.70	4.45	4.15	160.1	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T9	土錐	7.90	4.35	4.45	145	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径10mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T10	土錐	6.59	4.50	3.60	365	管状土錐。ナゲ、孔径12mm、一部欠損	微細・精良 淡青灰
T11	土錐	7.00	4.35	4.49	114.4	管状土錐。ナゲ、孔径12mm、表面一部欠損	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T12	土錐	6.65	4.50	4.05	119.7	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径11mm	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T13	土錐	6.80	4.30	3.79	110.6	管状土錐。ナゲ、孔径12mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰
T14	土錐	6.39	3.95	4.00	100.7	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径14mm、黒鑄	微細・精良 淡青灰
T15	土錐	6.66	4.19	3.83	(86.1)	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径11mm、工具痕 (?)あり、1/2残存	微細・精良 明青灰～淡青灰
T16	土錐	6.10	4.10	3.60	77.1	管状土錐。ナゲ、孔径12mm、2/3残存	微細・精良 淡青灰～淡灰灰
T17	土錐	6.60	4.00	4.10	101.7	管状土錐。ナゲ、孔径12mm、黒鑄、3/4残存	微細・精良 淡青灰
T18	土錐	7.25	3.90	3.90	115.2	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。黒鑄	微細・精良 明青灰～淡青
T19	土錐	6.90	4.50	4.00	125.6	管状土錐。ナゲ、表面はかに凹凸感。工具痕 (?)あり、孔径14.5mm、黒鑄	微細・精良 明青灰～淡青
T20	土錐	6.90	—	3.70	105.9	管状土錐。ナゲ、孔径10mm、黒鑄、4/5残存	微細・精良 明青灰～淡青灰
T21	土錐	(60.45)	4.23	4.16	(101.0)	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。孔径13mm、3/5残存	微細・精良 明青灰～淡青灰
T22	土錐	(54.65)	(39.25)	(25.9)	(35.5)	管状土錐。ナゲ、表面に凹凸感。2/5残存	微細・精良 淡青灰
T23	土錐	6.00	3.00	2.85	82.2	管状土錐。ナゲ、孔径7mm、表面剥落少し	微細・精良 黄灰～淡青灰
T24	土錐	8.75	3.12	3.90	(95.8)	管状土錐。ナゲ、孔径9mm、黒鑄、一部欠損	微細・精良 淡青灰
T25	土錐	7.10	2.50	2.20	42.5	管状土錐。ナゲ、孔径7mm	微細・精良 淡青灰
T26	土錐	6.33	3.13	2.82	66.3	管状土錐。ナゲ、孔径7mm、一部欠損	微細・精良 淡青灰
T27	土錐	(57)	2.40	2.30	(24.5)	管状土錐。ナゲ、孔径7mm、黒鑄、3/5残存	微細・精良 淡青灰

図66 土器溜まり1出土遺物(19)－土錐－

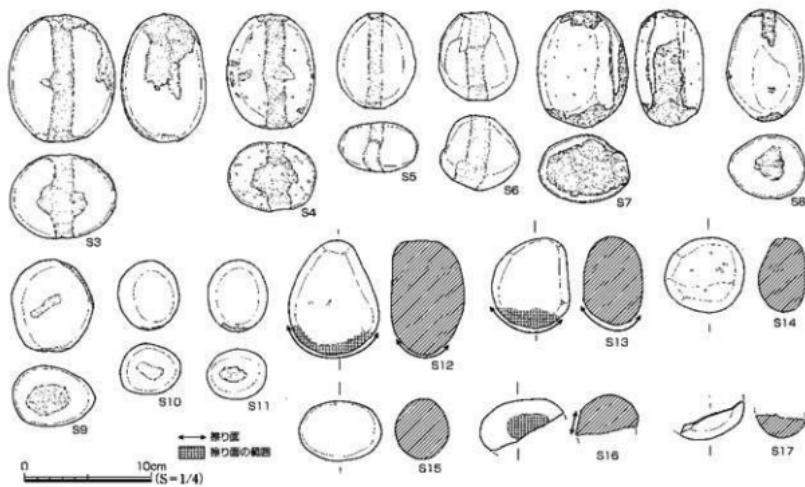


図67 土器溜まり1出土遺物20—石器一

2個体からなり、西側と東側に分布がわかる。西側は、I系の分類不明個体が6個体存在するものの、分類可能な6個体についてはI D類2個体(位置124・128)、I C類1個体(位置121)、I B類1個体(位置126)、II C類2個体(位置124・133)となる。東側は、I C類1個体と、I系分類不明2個体からなる。5b群は、I系10個体(分類不明3個体含む)、II系5個体(分類不明3個体含む)からなる。I系でみれば、A1類3個体、A2類1個体、B類1個体、D類2個体となり、やや複合口縁壺が多いことは他の群と異なる点といえる。5c群は、I系15個体(分類不明7個体含む)、II系5個体(分類不明1個体含む)となる。I系はB類4個体、D類2個体、C類2個体となり、非複合口縁壺を主体とする。I系は位置195・198を中心分布する。II系については、C類2個体、A類1個体、D類1個体となり、5c群内に分散する。D類は、口縁部が小型鉢A類の形状に類する特異な形態で、本例のみとなる。

6群の構成は、I系2個体となる。ひとつは、先述の壺形を想起させるA1類である。もうひとつは位置223にみられるE類である。E類は、本土器溜まりでは本例しか認められず、土器溜まり2および3を合わせても希少な資料といえる。こうしたE類が、土器溜まりの周縁部に位置することには何らかの意味がある可能性がある。

甕(図43) 1群においては、甕の分布が壺とほぼ重なる。北西隅を中心にまとまり、その周辺には甕の分布が

みられない。1群の壺は24個体（A1類16個体、A2類2個体、B類6個体）を数え、数量という点では他の群に比してもっとも多い。A類が中央に位置し、B類がその周辺に展開する。

2群では、壺は2個体のみ（A1類1個体、B類1個体）である。1群東側と3群西側に壺が希薄であることを考えれば、2群の壺の少なさは、2群が1・3群双方の周縁に相当する可能性を示唆する。

3群の壺は12個体（A1類9個体、B類3個体）ある。3群における壺分布は、壺との棲み分けがみられることが特徴とする。壺分布域の東隣りで、3群範囲の中央部分におおむね収まるように壺は分布する。

4群の壺は2個体（A1類1個体、B類1個体）である。壺同様に4a群に分布する。その一方で、4a群内部において、壺は壺の東隣りに位置し、3群同様に両者は分布位置を異なる。

5a群の壺は16個体（A1群15個体、B群1個体）ある。位置132・145においてそれぞれ3個体が出土しており、これらに分布の中心のひとつがある。壺分布は3・4群と同じく、壺との棲み分けがみられる。壺の東隣のほか、壺の周囲に壺が分布するかたちとなる。5b群の壺は4個体（A1群2個体、B群2個体）である。壺の分布は、壺の分布域と重複傾向にあるといえる。これは、1群でみた傾向と同じであるが、A1群とB群とで分布を異にする様相は認められない。5c群の壺は15個体（A1群13個体、B群2個体）である。壺分布は、壺と混在的ともいえるが、壺が分布する位置191・192・201・169・207には壺は認められない。したがって、壺と壺の分布には一定の棲み分けが認められる。

6群の壺は1個体（A1類）である。これは、壺棺のようにI系壺と組み合ったものである。

鉢（大型）（図44） 大型鉢としては12個体を認識した。大型鉢の分布は分散を特徴とする。「群」として認識した範囲それぞれに、1～3個体の大型鉢がみられる。群内における分布位置は、中心ではなく周縁にあたる。A・B類の類型間で、分布に違いはみられない。

鉢（中・小型）（図44） 1群は20個体（A類5個体、B類1個体、C類10個体、D類4個体）となり、最も数量が多い。分布は、全体として1群中央部分にまとまる傾向がみられる。高杯でみられた帯状分布と重なる点で、高杯と類似する傾向にある一方で、高杯よりも北西側に分布が広がる。類型間においては、C類が北半に散在する点と、A・B類が南半に分布する点、少数類型であるD類の分布に南半（3個体）と北半（1個体）で偏りがみられる点から、一定の類型によるまとまりが存在していたものと考えられる。

2群は14個体（A類2個体、B類2個体、C類6個体、D類3個体、不明1個体）である。全体的に分散している点で、高杯の分布に類似する。類型単位での目立ったまとまりは認められない。

3群は9個体（A類3個体、B類1個体、C類3個体、不明1個体）である。分布は分散的である。壺の分布域とは異なり、壺や高杯の分布と部分的に重複する傾向が窺える。ただし、壺・高杯の分布と完全に一致するわけではない。類型間の関係については判然としない。

4群は4個体（B類1個体、C類2個体）である。4a群に分布が偏る。また、分布については壺や高杯とは異なり、むしろ壺との類似性が認められる。

5a群は16個体（A類4個体、B類2個体、C類8個体、D類1個体、不明1個体）である。5a群の中央に分布がまとまる傾向が認められる。この分布は壺のそれと類似する。また類型単位で近接して出土する傾向がみられる。5b群は2個体（A類1個体、C類1個体）のみとなる。数量の少なさは、壺と類似するともいえる。5c群は12個体（A類6個体、B類4個体、C類1個体、D類1個体）である。分布は分散的であり、特定器種との明確な重複関係は認められない。同じ類型の個体が近接して置かれる状況は認められる。

6群は1個体（B類1個体）が点在するのみとなる。

高杯（図45） 1群の高杯は27個体（A類15個体、B類1個体、C類2個体、不明9個体）である。高杯の分布は、1群東半～南東部に偏る傾向がうかがえる。こうした分布は、壺・壺とは異なるものである。特に、位置16・20・29・41・43・49・下位7・下位15において高杯分布が帯状に展開することも注目される。

2群の高杯は29個体（A類7個体、不明22個体）である。2群は高杯が主体をなし、2群全体に高杯が分布することに特色がみられる。2群の高杯については、隣接の1群と3群における高杯分布との連続性も読み取りうる点が注意される。

3群では25個体（A類5個体、B類1個体、C類2個体、D類2個体、不明15個体）の高杯が出土した。3群の高杯は、壺の分布と大きな差異がみられない一方で、甕とはいいくぶん分布を異にする。これは、高杯が甕とともに甕の周辺に分布する状況を示すものと考えられる。

4群の高杯は12個体（A類2個体、不明10個体）である。4a・4b群ともに高杯は認められる。4a群では、群の東辺に高杯分布が偏る傾向にある。この傾向は、甕の東側に高杯が置かれた状況を示唆する。

5a群の高杯には37個体（A類10個体、B類3個体、C類3個体、D類1個体、不明20個体）である。南東辺と北西部に分布が偏り、中央付近が希薄となる点に分布の特徴がみられる。5b群の高杯は19個体（A類8個体、B類1個体、C類2個体、不明8個体）である。分布のあり方は壺と類似する。5c群の高杯は33個体（A類13個体、B類1個体、C類2個体、D類2個体、不明15個体）である。甕や甕が分布しない位置169に最大5個体が認められる。また南東端の位置225にも最大6個体が集中する。他は、1～2個体単位で壺や甕と分布が重複する。

6群では4個体（B類1個体、不明3個体）の高杯が出土した。甕棺の可能性がある位置220以外において、1～2個体が点在する様相となる。

ミニチュア土器・器台・蓋形土器・手焙形土器（図46） ミニチュア土器は、1群に1個体、3群に6個体、5a群に1個体、5c群に2個体が分布する。すべての群に分布するものではなく、3群への集中が顕著といえる。3群におけるミニチュア土器の分布は、他の特定器種と高頻度で重複するものではない。それは、甕の分布とも一部重なりつつ、壺と同様に甕の周辺に分布するものと捉えることも可能である。

器台は、5c群に2個体、1・3・5b群にそれぞれ1個体が分布する。出土位置における器種の組み合わせをみると、壺と高杯と同一位置から出土する場合が多いが、他の器種との組み合わせもみられ、一定ではない。

蓋は1群に2個体がみられるのみである。2つの個体は形態的に類似している。類似する希少器種が、ひとつ群内に収まることには、何らかの意味があるものと考えられる。

手焙形土器は、1・2・6群にそれぞれ1個体が分布する。本土器窓よりの西側の群に偏った分布ともいえる。**製塙土器（図47）** 製塙土器は、2箇所の集中域を形成するとともに、他の箇所において単体で分散的に分布する。集中域は位置101・216であり、いずれも4群に属する。位置101において10個体、隣接する103からも1個体出土した。216では7個体出土し、東隣の217で2個体、218で1個体出土している。101の範囲内では、個体として数えられるものの他、細片や細粒化した製塙土器と、炭粒・灰がまとまって出土した。これらは集落近辺で煮熟作業を行った後の廃棄物であろう。また、101には石錐1個体が伴っていた。216においては調査時に確認していないが、101と同様の状況であった可能性は排除されない。

一方、製塙土器が単体で分散的に分布する様相は、3群以外に認められる。a～d区単位で取り上げた資料もあるため、単独で廃棄されたかどうかはわからないが、出土量からみれば仮に多くても2～3個体単位と考えられる。これらの出土位置の近辺において、土錐や石錐がみられる点は注意される。水産資源に関する道具として、製塙土器と土錐・石錐が同じカテゴリーで廃棄されたものと考えられる。

土錐・石錐（図47） 土錐は31個体が出土した。出土位置番号が判明する個体が25個体ある他、a区で1個体、b区で1個体、c区で4個体、d区で1個体、位置不明が1個体の構成となる。土錐には2箇所の集中域とその他の分散域がみられる。集中域については、ひとつは4a群の位置117・118であり、もう一箇所は5a群の位置145・148・142・155～158である。4a群の集中部では、整理作業の結果、8個体の土錐を確認した。c区において出土した4個体も、本来は集中部に属するものの可能性がある。出土位置のわかる6個体については、南北0.7

m、東西0.3mの範囲におさまり、その配列は網につけられた状態を想起させる。土錐の標高は、土器片よりも4cmほど高い傾向がある。117において出土位置がわかる土錐5点の上面標高の平均が1.083mであるのに対し、117内の土器片12点の平均上面標高は1.042mとなる。このように、土錐の上面標高が土器片よりも高くなる傾向は、土錐の厚みも考慮する必要があるが、土器を置いた後に、土錐がつけられた網を土器の上に廃棄したために生じたものと考えられる。5a群の集中部からは土錐11個体が出土した。土錐の位置関係は、南北と東西に列をなすように見受けられる。このことから、土錐が装着された複数枚の網が廃棄された可能性がある。5a群の集中部においても、位置145では土錐2点の上面標高が1.090mと1.055mに対し、土器片12点（0.985～1.070m）の平均上面標高は1.032mとなる。また位置148では、土錐片3点（2個体）の平均上面標高が1.018mに対し、土器片3点の上面標高平均は0.993mとなる。こうした上面標高差は、4a群の集中部と同様に土器の後に網が廃棄されたことから生じた可能性がある。

分散的に分布する土錐は、1群に2個体、5b群に1個体、5c群に1個体みられる。上面標高は、土器片とともに取り上げたため不明である。a・b・d区より3個体の土錐が出土しているが、それらを勘案しても別の集中域が本来存在していた可能性は低い。したがって、分散的に出土した土錐については、1個程度の土錐を装着した網が廃棄された可能性も排除されないものの、土錐単体で廃棄された可能性が高いものと考えられる。

石錐は7個体出土しており、その内、位置が判明するものは4個体で、残りはa区、d区、位置不明がそれぞれ1個体となる。2群で1個体、4a群で1個体、5c群で2個体が出土している。4a群では製塙土器集中部の中で、製塙土器とともに石錐1個体が出土した。以上の分布状況から、石錐は網に装着された状態ではなく、石錐のみが単体で廃棄されることを基本としたものと考えられる。

磨石・敲石・円礫（図47） 磨石は、その可能性がある1点を含めて4点出土した。2群の位置47において磨石の可能性がある石器が出土し、残りはb区で1点、d区で2点出土した。敲石の可能性がある石器は2点あり、3群の位置94および5b群の下位25からそれぞれ1点出土した。円礫は、石錐や磨石と石材が同一で形態が類似するが、加工痕跡がみられない資料である。円礫は1群の位置4、5a群の位置120、5c群の位置183から各1個体出土し、他に位置不明な資料が1個体ある。円礫の用途は不明であるが、他の石器との共伴関係も認められない。上記の石器については、分散的分布を示すものといえる。

以上、遺物分布について、設定した各群における関係を整理しながら概観した。群および器種のあり方についてまとめれば以下のようになる。

- ア) 大型鉢以外の基本的器種である壺、甕、中・小型鉢、高杯でみると、壺・甕を核とする器種構成（1・3・5a～5c群）と、高杯と中・小型鉢を主体とする器種構成（2・4群）がある。
- イ) 個体数の多い壺、甕、高杯、中・小型鉢については、群内で器種ごとに一定のまとまりがみられる。
- ウ) 5群内の細分単位も含めて、1～5群には大型鉢1～3個体を伴う。
- エ) 器種を細分した類型単位でも、同一類型がまとまりを有する場合がみられる。
- オ) 群には、製塙土器集中を伴うもの（4a・4b群）や、土錐集中を伴うもの（4a群・5a群）がある。

4) 遺物の特徴

出土した土器の大半は在地系の土器と考えられるが、搬入土器も少量であるが含まれる。壺I系A3類である20は、西部瀬戸内系の範疇で捉えうる。甕A2類である90・91は山陰系にみる口縁部の拡張に類似する。また、壺I系D類の内、35・38については、内面の押さえが特徴的であるが、こうした土器は在地のものとは異なる可能性がある。甕B類には、近隣地域で製作された場合も含まれるものと推測される。一方、厚手のつくりで内外面のハケ調整が特徴的な92は西部瀬戸内系と考えられる。また、内面ケズリ成形の上端位置が低く、頭～肩部内面付近を押さえによって成形する99は四国系の様相を示す。他にも、タキ成形がなされた94や色調が灰白色となる97、肩部に波状文を有する103も搬入土器である可能性がある。器台である233・234は、全体形が判然としな

いが鼓形器台の変種と考えられる。壺とした2点(229・230)は、山陰地域でみられる低脚杯に類似するが、土器溜まり2において壺と認識した器形との類似性から分類したものである。

土器溜まり1の時期は、壺の底部が明確な平底である点、壺A類の底部が平底の様相を残す点、高杯の杯受け部内面の水平化が未完了である点を考慮すれば、古墳時代初頭、『鹿田遺跡1』編年の鹿田・古・1a期に相当する。

土器溜まり2

1) 検出状況(図68~70-1)

土器溜まり2はBP~BQ46区に位置する。検出面は(6層)である。本土器溜まりからは37箱(1箱28ℓ)の遺物・漆が出土した。規模は残存部分で南北6.4m、東西2.2mを測る。本調査区で検出した3箇所の土器溜まりの内、中規模のものとなる。本土器溜まりの東側は、中世段階の南北溝(32・33)と現代の建物基礎、調査時の飼溝設置によって失われた。これら溝の底面標高は、溝32が0.86m前後、溝33が0.50m前後となることから、溝掘削時に当該箇所の土器溜まりは破壊されたものと考えられる。溝や東側溝、建物基礎部分からも、本土器溜まりに関連するものと考えられる土器が出土している。側溝の東側は、現代のコンクリート管路が存在したため、本土器溜まりの東への広がりについては判然としない。ただし、第15次調査地点では、該当する土器が見つからなかったため、本来の範囲は第13次調査区の範囲内に収まるものと考えられる。したがって、本土器溜まりの東西幅について復元するならば、側溝の東辺までと仮定し、東西3.3mとなる。

土器溜まり2は、窪地内に形成されていた。この窪地は北西~南東方向にのびるもので、土器溜まり1が形成された窪地に連なるものと考えられる。窪地の範囲は、部分的に不明瞭となる。これは窪地内の土と周辺の土とに類似性がみられたためである。この点は、土器溜まり1でみた様相と同じである。窪地の幅は3.5m前後を測る。

窪地の上面標高は1.28m、底面標高は0.94~0.98mを測り、南の方が北よりも底面がやや低くなる。この窪地は、下層の(8層)段階の窪地の影響のもとに形成

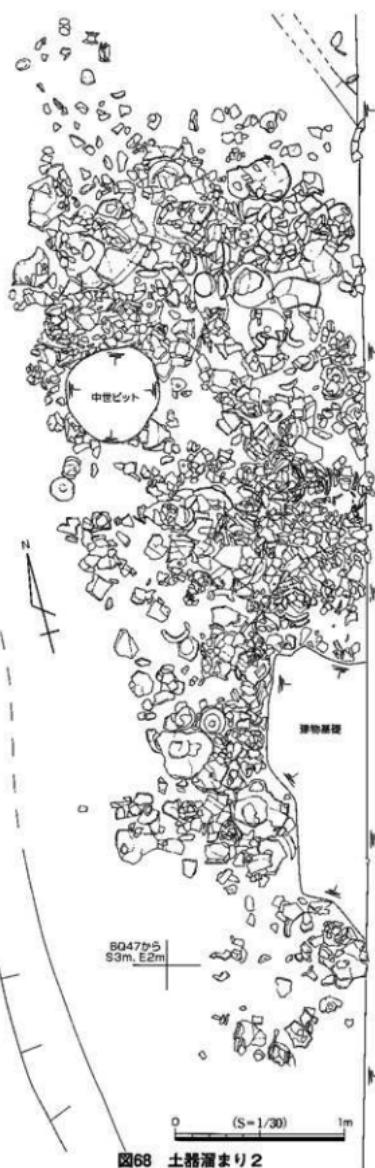


図68 土器溜まり2

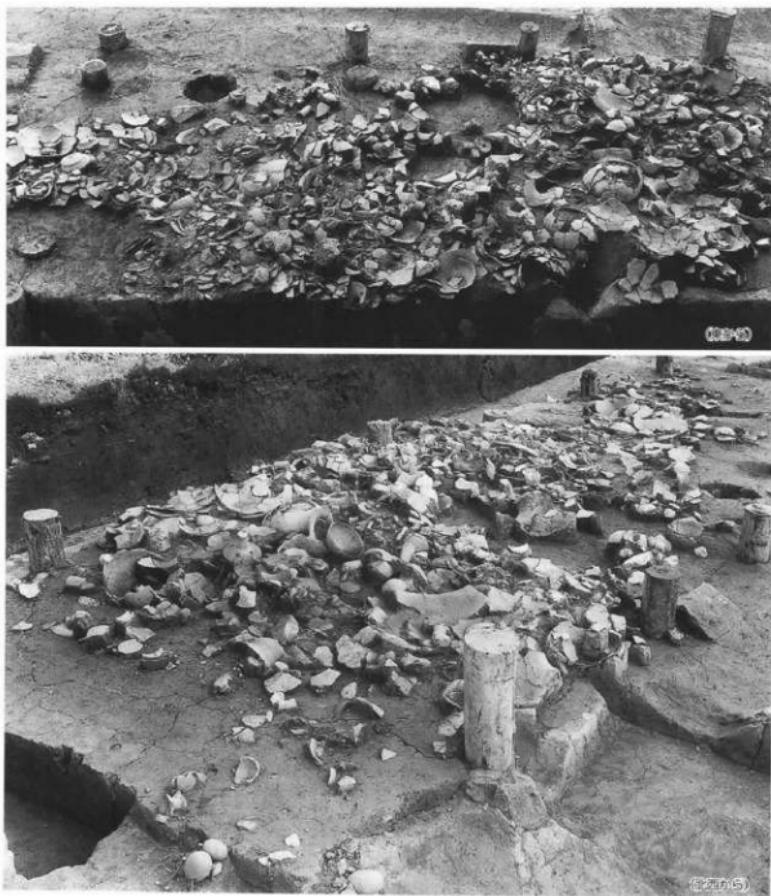


図69 土器溜まり2遺物出土状況

されたものである。窪地内の埋土は、明黄色砂質土の〈6①層〉、および淡黄色砂質土の〈6②層〉からなる。これらは、〈6層〉と類似する自然堆積土で、基本土層の範疇で認識しうる。土層断面では、土器溜まりが上層の〈6①層〉に包含される状況を確認した。〈6①層〉の底面標高が1.01(南側)～1.12(北側)mとなり、いくぶん起伏がみられる。実際の土器の底面標高をみると北側で1.04m、南側で1.12mとなり、〈6①層〉の範疇に収まる。したがって、窪地に〈6②層〉が堆積した後に土器溜まりが形成され、それを〈6①層〉が覆ったものと考えられる。本土器溜まりは、窪地の底面直上に形成された土器溜まり1とは異なるものといえる。ただし、この



ことをもって、土器満まり1の方が本土器満まりよりも早くに形成されたものと直ちに評価することは、両者の地点が離れているため直接的な土層の切り合ひ関係を確認しないことにより難しい。なお、土器と土器の間には、〈6①層〉が詰まっていたものの、間層と呼べる層位の形成は認められなかった。

遺物の取り上げに際しては、出土状態にあわせて、0.5m前後～1.0mの任意の範囲を設定した（図71-1、出土位置番号1～39）。なお、下位1～17として

取り上げた遺物は、遺物の重なりが比較的顕著であった部分について、別途取り上げ範囲を設定したものである。下位出土遺物と周辺遺物の底面標高に違いはなく、したがって下位とした箇所が特別に掘んでいたことを示すものではない。

遺物出土状況については、完形に近い状況の土器や、一個体として復元可能と考えられる資料によって構成されているように見受けられた。すなわち、完形の土器の集積によって、土器満まりが形成されたものと考えられる。遺物は一様に面的に広がっていたわけではなく、北東～東側に遺物分布の中心がみられた。検出時においては2～7・10～13と、15・17・23～25・30・31に特に遺物が多く、完形に近い土器が重なるように出土する状況が認められた。上面標高は遺物の残存状況によって異なるが、遺物が濃密に分布する地点のうち、位置10の完形に近い處がL29mとなりもっとも高くなる。同じ遺物密集部の位置4では上下逆となった高杯脚部上面がL28m、位置2でもL20前後となる。遺物が散漫となる位置21・29ではL15m前後、位置38・39ではL10m前後となる。遺物密集部では、土器の間に土は詰まっていたものの、間層と呼べるものは認められなかった。そのため、特に土器が密集する箇所については、土器を上下に重ねて置く場合があったものと推定される。例えば位置10では、先述の壺の前方に鉢がみられるが、両者の出土状況は壺の上に鉢が重ね置かれた状況を示唆する。

土器満まり1と同様に、土器には表面が風化によって劣化しているものがみられることから、土器満まり形成後に、自然堆積によって埋没するまでの一定期間、土器が露出していたものと考えられる。また土器満まり1と同じく、土器において被熱によって破碎片と土器本体とが接合する状況や、躍（317点）において被熱と判断される赤色化したもの（5点）が確認される一方、意図的に火が焚かれたような痕跡は土中にはみつかっていない。土器満まり埋没以前に偶発的に火を受けたか、あるいは別地点で被熱した資料が混ざっていた可能性が考えられる。

2) 遺物の個体数と組成（表5～7）

土器満まり2出土土器の個体数は、最小で228個体、最大で295個体となる。これは土器満まり1の約1/2、土器満まり3の約3倍の量となる。土器満まりの範囲に比して、本土器満まりの土器出土量は多いものといえる。このことは、検出状況において述べたように、土器密集部分において土器が上下に重ねて置かれたことを一因とするものと考えられる。土器の組成は、壺、甕、高杯、鉢（大型）、鉢（中・小型）、ミニチュア土器、手焙形土器、器台、蓋、製塙土器となる。この器種組成は、量比は別として、土器満まり1と変わりない。なお脚台は、器種としては壺または大型鉢に属するものである。基本的器種（壺、甕、高杯、中・小型鉢、大型鉢）の内訳をみると、①高杯（40%）、②甕（25%）、③中・小型鉢（20%）、④壺（13%）、⑤大型鉢（2%）となる。甕の量が多



図70 土器満まり2土層断面

表5 土器満まり2土器個体数

(総個体数)

総個体数	並	差	共	大型	中・少	高杯	脚台	ミニチュア	手形	上器	差	製造	土器	表面
最小個体数	228個体	27	51	5	40	82	2	9	1	5	1	5		
最大個体数	295個体	39	52	5	57	119	2	9	1	5	1	5		

個体数カウントについて、いずれの器種においても破片資料については部位ごとに径1/3以上残存するものを個体数として認識した。ただし、1/3未満の破片でも特徴的個体認識可能なものについては個体としてカウントした(表7参照)。

(差)

	合計	A系								B系		
		A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類	E類	難型不明	A類	B類	C類
①完形に準じるor口縁部と底部の対応判明	9個体	5個体	1個体	0	0	1個体	2個体	0	0	0	0	0
②1個体(無数のカウント可能なもの)	15個体	1個体	0	1個体	1個体	7個体	0	0	0	0	0	0
③側部(側面像としてカウント可能なもの)	3個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
④底部(円錐・円筒などの対応不可)	12個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22個体	6個体	2個体	0	1個体	2個体	9個体	0	0	0	0	0	0
最小個体数*1	28個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
最大個体数*2	39個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

*1 最小個体数：①+②+③

*2 最大個体数：①+②+③+④

(差)

	合計	A系		
		A1類	A2類	B類
①完形に準じるor口縁部と底部の対応判明	10個体	8個体	1	1個体
②口縁部(～側部)：1/3以上or側部 底部カウント可能なもの	41個体	39個体	0	2個体
③側部～底部	1個体	1個体	0	0
最小個体数*1	31個体	47個体	1	3個体
最大個体数*2	53個体	48個体	1	3個体

*1 最小個体数：①+②

*2 最大個体数：①+②+③

(鉢(大型))

	合計	A系		B系	
		A類	B類	A類	B類
①完形or完形に準じる	3個体	2個体	1個体	0	0
②口縁部	2個体	2個体	0	0	0
③底部	0	0	0	0	0
最小・最大個体数	5個体	4個体	1個体	0	0

(鉢(中・小型))

	合計	A系		B系		C系		D系		難型不明	
		A類	B類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類
①完形or完形に準じる	18個体	6個体	3個体	9個体	0	0	0	0	0	0	0
②口縁部(～側部)	22個体	5個体	5個体	11個体	1個体	0	0	0	0	0	0
③底部	2個体	2個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
最小個体数*1	40個体	11個体	8個体	20個体	1個体	0	0	0	0	0	0
最大個体数(板張型) *2	42個体	13個体	8個体	20個体	1個体	0	0	0	0	0	0
最大個体数(全体) *3	57個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

*1 最小個体数：①+②

*2 最大個体数(型別)：①+②+③(A類)

*3 最大個体数(全體)：①+②+③

(高杯)

	合計	A系		B系		C系		D系		E系	
		A類	B類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類
①完形or杯と脚の対応判明	39個体	31個体	5個体	3個体	0	0	0	0	0	0	0
②杯部(径1/3以上)	18個体	10個体	1個体	7個体	0	0	0	0	0	0	0
③杯底部	19個体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
④輪～脚	10個体	0	0	8個体	0	0	0	0	0	0	0
⑤輪	33個体	0	0	0	0	33個体	0	0	0	0	0
最小個体数(類型) *1	59個体	41個体	6個体	10個体	0	0	0	0	0	0	0
最小個体数(全体) *2	82個体	0	0	82個体	0	0	0	0	0	0	0
最大個体数	119個体	0	0	0	0	121個体	0	0	0	0	0

*1 最小個体数(類型)：A～C…①+②、D…④

*2 最小個体数(全体)：①+④+⑤

最小破片数：2,584点

接合した破片数：889片

接合不明破片数：1,695片

〈ミニチュア土器〉

	合計
① 完形or準完形	4個体
② 口縁	5個体
③ 腹部	0
最小・最大個体数	9個体

〈蓋〉

	合計	A類	B類
完形or準完形	5個体	2個体	3個体
最小・最大個体数	5個体	2個体	3個体

〈手焙形土器〉

	合計
完形or準完形	1個体
最小・最大個体数	1個体

〈製塙土器〉

	合計
カウント可能個体数	1個体
最小・最大個体数	1個体

〈脚台〉

	合計	A類	B類
完形or準完形	2個体	2個体	0
最小・最大個体数	2個体	2個体	0

〈脚台〉

	合計
カウント可能個体数	5個体
最小・最大個体数	5個体

表6 土器溜まり2土製品・石器個体数

総個体数	土錐	石錐	円錐	磨石	鐵石
10	0	6	3	1 * 1	0

* 1 磨石の可能性のある個体1点含む

い点が土器溜まり1とは異なる。壺の少なさは、II系の数量が少ないことが要因として挙げられる。壺の類型のバリエーションは、土器溜まり1において希少類型であったA3類やE類を欠くが、その他については一定数がみられる。土器溜まり1に顕著であった製塙土器集中は、土器溜まり2には認められない。また、土器溜まり2からは土錐は出土していない。一方、石錐・円錐については、土器量に比べれば多い点が特徴的である。これは、石錐・円錐がまとまりをもった位置関係において一定量出土したことによる。

その他に、土器溜まり内からは、5~10cm前後の環(角環・円環)が317点出土した。この数量は、土器との量比という点では土器溜まり1とほぼ同様の傾向を示すといえる。

以上のことから、本土器溜まりの遺物組成については、土器溜まり1・3と基本的には類似するものといえる。一方で、面積に比して土器個体数が多い点、すなわち、土器溜まり1・3よりも土器の密集性が高い点は、本土器溜まりの特徴と考えられる。

3) 遺物分布(図71・72、表7)

個別の土器については、ひとつの位置の中および隣接位置同士の破片が接合するパターンを基本とする。したがって、元々完形であった土器が廃棄されたものと考えられる。一方、離れた位置の破片同士が接合する場合も少數ながら認められた。こうした接合状況は、土器溜まり1においても確認されたものであり、その要因を厳密に特定することは難しい。一定期間土器が露出していたことを考慮すれば、当初から破片を別々の位置に廃棄したことを積極的に肯定しうる状況とはいえない。

遺物分布については、土器溜まり2全体がひとつのまとまりを形成しているように見受けられる。一方、復元した土器個体数をもとに、土器の分布を検討すると、土器量の粗密や器種別の分布傾向を知ることができる。土器の数量が多いのは、北西隅の位置7・14、東辺の位置23・30、南側の位置29・33・34である。前二者では、これらの密集地点を中心に周辺にかけて土器量が減じる傾向が窺える。土器溜まり1・5群では、遺物が全体的にまとまりを形成しつつも内部でおよそその細分単位が認められた。しかしながら本土器溜まりにおいては、土器数量の多さも一因となり、5群の細分単位にあたるもの抽出することには、困難な面も存在する。したがって、上述の土器量の多い3箇所を中心とした範囲を、細分した群単位として認識しうる蓋然性は高いものの、ここでは土器溜まり2をひとつの群として捉えつつ、遺物の器種別に分布状況を概観する。

表7 土器埋まり2遺物一覧

個体数としてカウント可能なものについて、個体ごとに記載。「出土位置」は取り上げ単位、「番号」は掲載図の遺物番号に対応。「状態」は分類時の所見に基づく。

(表)

器種	出土位置	番号	状態	類型
壺	下位17・34	1	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	9・2・13・10・29	3	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	15・23・24	4	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	10	10	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	35・34・21・25	-	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	土器埋まり2	-	口縁～底部(半完形) I	A1
壺	27・23・下位12	2	口縁～底部(半完形) II	A2
壺	14・7	-	口縁小片～底部 I	A2
壺	21	7	口縁小片～底部 I	A2B
壺	37	-	口縁下半小片～底部 I	A2B
壺	壺33	-	底部1/4～底部 I	A2B
壺	15・17	6	口縁1/2～底部 I	A2B
壺	3	8	口縁～底部(半完形) I	C
壺	34	-	口縁1/4～底部 I	C
壺	14・15	12	口縁1/4～底部(半完形) I	D
壺	7	5	口縁1/2～底部 I	D
壺	上器埋まり2	-	口縁1/2～底部 I	D
壺	11	9	口縁1/3～底部 I	D
壺	6	10	口縁1/3～底部 I	D
壺	28	11	口縁1/4～底部 I	D
壺	下位16	-	口縁1/4～底部 I	D
壺	35・37	-	口縁1/4～底部 I	D
壺	30	-	口縁1/6～底部 I	D
壺	17	-	口縁1/6 I	I
壺	下位16・33	13	底部～底部 I	I
壺	29・28・21・15・27	-	底部I/1	I
壺	26	-	底部I/1	I
壺	32	-	底部I/4	I
壺	29	-	底部I/2	I
壺	29	-	底部I/2	I
壺	34	-	底部I/3	I
壺	36	-	底部I/3	I
壺	壺32	-	底部I/4	I
壺	土器埋まり2	-	底部I/2	I
壺	29	-	底部I/2	I
壺	33	-	底部I/2	I
壺	下位16	-	底部I/4	I
壺	17・25	14	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	10・下23	15	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	15	-	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	8・7	17	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	9	21	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	下位25	22	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	1・下位1	-	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	27・3・11・2	-	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	26・28・25	18	口縁I/1～底部 I	A1
壺	24・30・23	19	口縁I/1～底部 I	A1
壺	29	25	口縁I/1～底部 I	A1
壺	27	26	口縁I/1～底部 I	A1
壺	24・26・25	-	口縁I/1～底部 I	A1
壺	14・8	-	口縁I/5	A1
壺	15	21	口縁I/4～底部 I	A1
器種	出土位置	番号	状態	類型
壺	18・19	67	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	22	68	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	24	69	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	23	70	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	27	71	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	32・33	-	口縁～底部(半完形) A	A1
壺	15・下位7	-	口縁I/2～底部 I	A
壺	下位11・23・33	-	口縁I/3～底部 I	A
壺	15	-	口縁I/4～底部 I	A
壺	下位7	-	口縁I/6～底部 I	A
壺	14	-	口縁小片～底部 I	A
壺	下位15	-	底部I/1～底部 I	A
壺	23	-	底部I/1～底部 I	A
壺	27	81	底部I/1～底部(半完形) B	B
壺	10	83	口縁～底部(半完形) B	B
壺	30	84	口縁～底部(半完形) B	B

(表)

器種	出土位置	番号	状態	類型
高杯	7・下位7・13・15	89	口縁～底部(半完形) A	A
高杯	2	90	口縁～底部(半完形) A	A
高杯	34	88	口縁～	A
高杯	28	-	口縁	A
高杯	24・下位16	87	口縁～底部(半完形) B	B
高杯	18・25	-	口縁～底部(半完形) C	C
高杯	26・25	-	口縁～底部(半完形) C	C
高杯	11・22	42	底部～底部(半完形) A	A
高杯	下位23	43	底部～底部(半完形) A	A
高杯	13・4・7	44	底部～底部(半完形) A	A
高杯	7・13・10・14	45	底部～底部(半完形) A	A
高杯	下位6	46	底部～底部(半完形) A	A
高杯	15	47	底部～底部(半完形) A	A
高杯	6・下位17	48	底部～底部(半完形) A	A
高杯	2	49	底部～底部(半完形) A	A
高杯	下位15	50	底部～底部(半完形) A	A
高杯	2・下位2・29	51	底部～底部(半完形) A	A
高杯	13・下位6	58	底部～底部(半完形) A	A
高杯	1	-	底部～底部(半完形) A	A
高杯	2	-	底部～底部(半完形) A	A
高杯	12	-	底部～底部(半完形) A	A

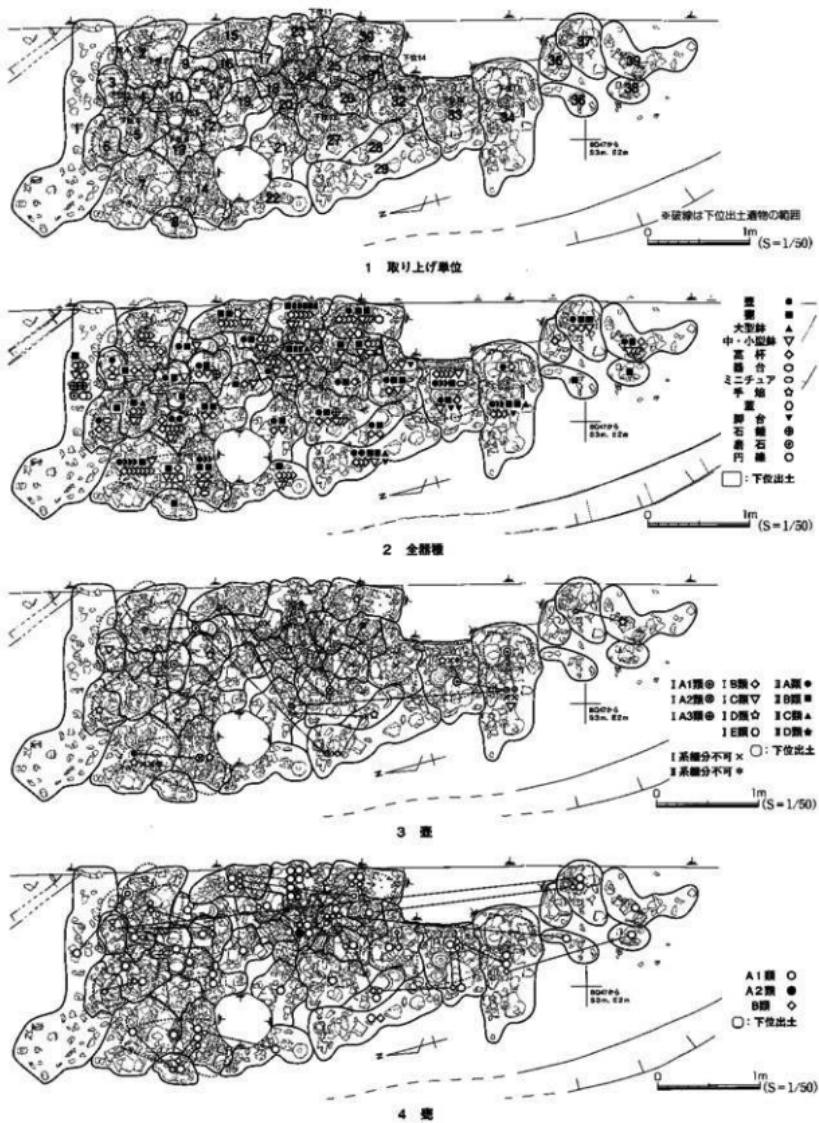


図71 土器満まり2器種別分布(1)

調査の記録

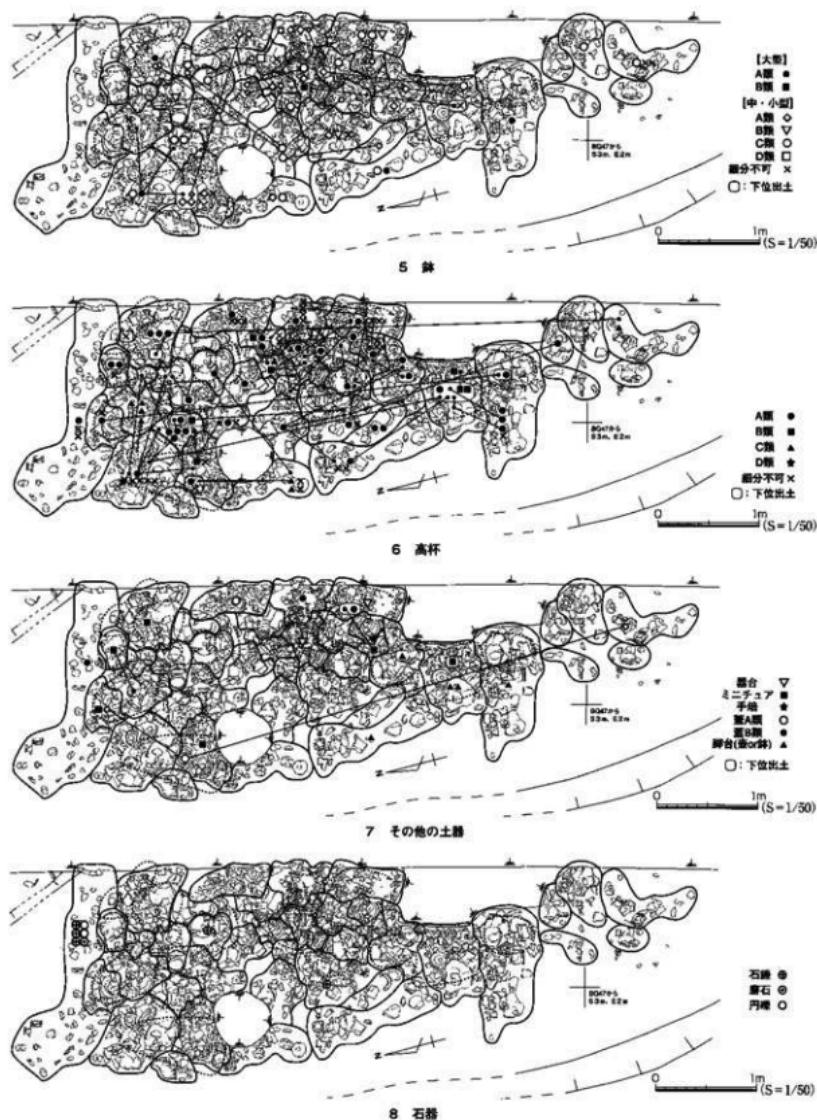


図72 土器満まり2器種別分布(2)

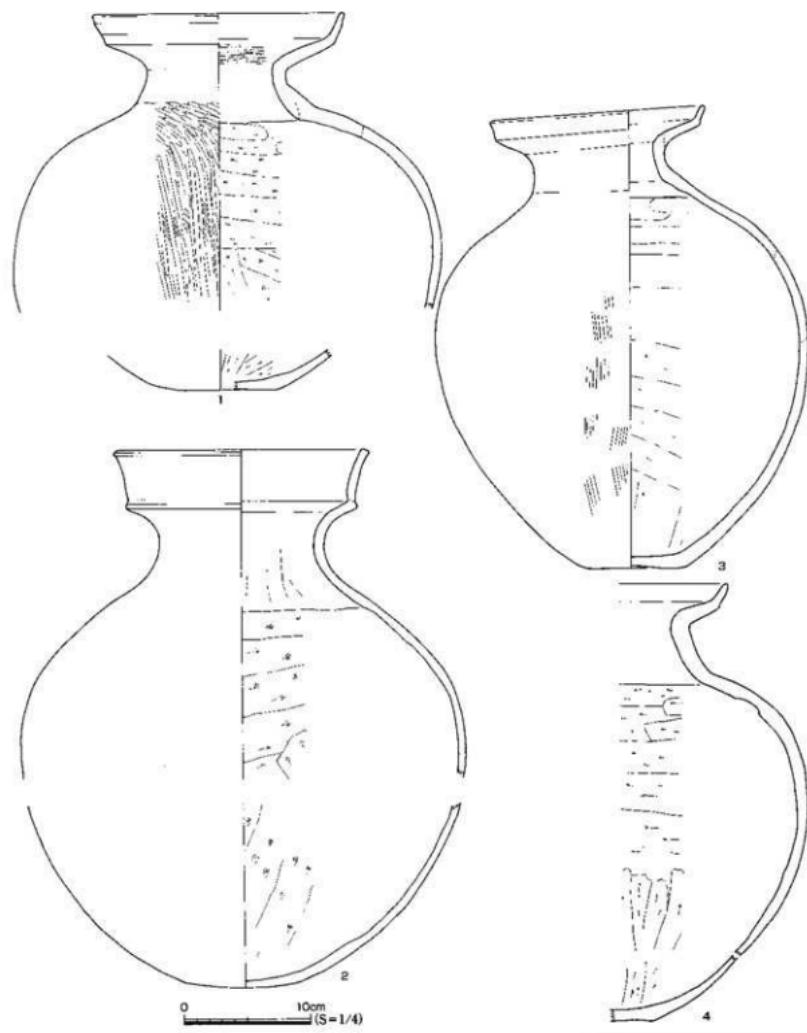


図73 土器満まり2出土遺物(1)

番号	器種	注意(cm)			形態・手法の特徴ほか	胎土	色調
		口径	底径	高さ			
1	壺	19.9	-	9.7×10.2	口縁：ナダ（内）ケズリ、底部：ミガキ（内）ハケ後ミガキ。腹部毛、底毛：ケズリ、底足：曲一継糸	微細	明黄褐色～灰褐色/明黄褐色
2	壺	*20.2	9.2	-	口縁：ナダ（内）ケズリ（外）摩滅〇、不明瞭、L3残存	粗糸	淡乳白色
3	壺	17.1	8.0	36.1	口縁：ナダ（内）ケズリ、底部〇、不明瞭、ハケ、腹部：ハケ後ミガキ、L2残存	繊糸	淡青褐色～茶褐色～淡青褐色
4	壺	-	-	-	口縁：ナダ（内）ケズリ、表面に大きなえぐり（内）複数：ナダ、底部：ハケ、ハケ後ミガキ、L3残存	微～粗糸、角内石	青褐色

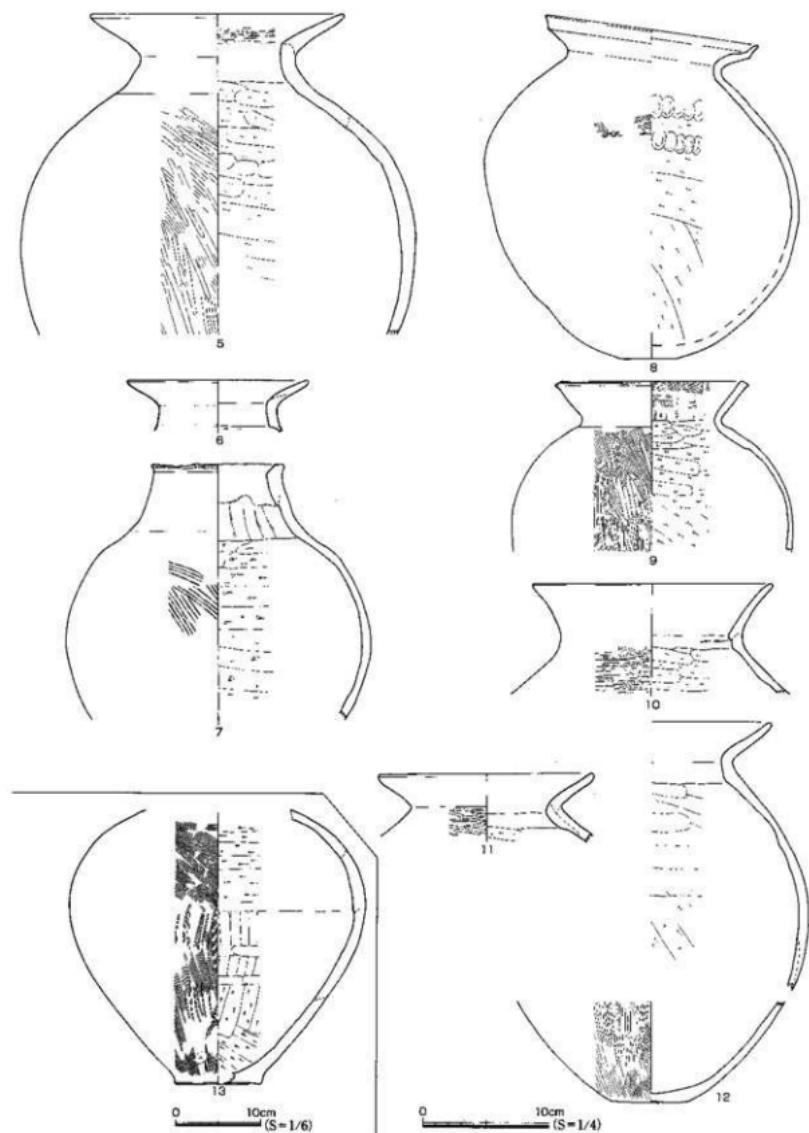


図74 土器窯より2出土遺物(2)

番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	胎土	色調
		口径	底径	高さ			
5 磁	壺	20.0~20.3	-	-	(内)口縁:ミガキ、頸部:ナデ、胴部:ケズリ、一部押正(外)摩滅〇、ハケ後ミガキ	細砂	茶褐色/暗茶褐色
6 磁	壺	14.2	-	-	(内)口縁:ミガキ、ケズリ(外)摩滅〇、剥落〇、1/3残存	微砂	稍淡茶色/暗褐色
7 壺	-	-	-	-	(内)腹部:擦ナデ、胸部:ケズリ(外)摩滅消滅〇、頭部剥離〇、底部打欠き、胸部2/3残存	粗一粗砂	暗灰褐色/灰灰褐色
8 壺	壺	16.5	4.5	21.8~27.2	(内)口縁:擦ナデ、押正、ケズリ(外)摩滅消滅〇、擦地、底部、2/5残存	細砂	黄褐色
9 磁	壺	15.2	-	-	(内)口縁:擦ナデ、底部:ケズリ後抹〇、ケズリ(外)摩滅〇、ハケ後匂いガキ、1/2残存	微~細砂	暗褐色
10 壺	-	19.0	-	-	口縁:横ナデ(内)ケズリ(外)ハケ後擦ナデ、1/2残存	細砂、角閃石?	明褐色
11 壺	壺	15.8	-	-	口縁:横ナデ(内)擦地、丁寧なナデ、ケズリ(外)ミガキ、1/4残存	細砂	明褐色/弱褐色
12 磁	-	-	-	(内)口縁上半:ケズリ、素地〇(外)口縁:摩滅〇、胴部:ハケメ、摩滅〇、底部	粗一粗砂	明褐色	
		-	6.0	-	(内)摩滅〇、不明原(外)摩滅〇、ハケ、不明跡	粗砂、粗砂△	灰褐色
13 壺	-	-	10.2	-	(内)制鉢上半:ケズリ、下半:ナデ、ケズリ(外)ハケ後ミガキ、藍子庄山口訛、底部:削正、1/4残存	粗~細砂	淡黃褐色/褐色

壺 (図71-3) 壺の分布は西辺に比較的多く、東辺には散在する傾向が見受けられる。この分布のあり方は、壺とは様相を異にする。西辺においては、ひとつの取り上げ位置に2~4個体の壺が分布する。現状においては、西辺に帶状に壺が並ぶというよりも、その中において北側（位置7・13・14）と南側（位置29・33・下位16+34）の二箇所に分布の核が認められる。西辺北側では壺I系7個体（D類2個体、B類1個体、A2類1個体、不明3個体）とII系1個体（細分類型不明）、南側では壺I系9個体（A1類2個体、C類1個体、D類1個体）、II系1個体（細分類型不明）をそれぞれ核とする。西辺北側にみられるA2類は、後述のように山陰系に位置づけられるものである。西辺北側周辺においては、位置3・6・9~11に壺I系が散在している（A1類2個体、D類2個体、C類1個体）。西辺南側周辺では、位置26・27・30・32・39においてI系6個体（D類3個体、A2類1個体、不明2個体）が分布する。西辺南側周辺のA2類も山陰系に属する。西辺北側・南側周辺の中間的位置である17・18においてはI系A1類1個体・細分類型不明1個体がみられる。

したがって、西辺北側とその周辺においては、基本的にはI系の非複合口縁壺を核としながら、周辺にI系複合口縁壺が展開するとともに、II系をごく少量含むという構成が想定される。対して、西辺南側とその周辺では、細別類型単位の分布の規則性は明瞭とはいはず、北側および周辺とは様相を異にする。一方、周辺域を含めた西辺北側と南側の共通性としては、山陰系のI系壺を有する点が挙げられる。

壺 (図71-4) 壺分布については、東辺の位置23を中心としつつ、1~2個体が全体的に分布する傾向がみられる点が特徴的といえる。位置23では7個体（A1類6個体、B類1個体）がみられる。これらすべての壺が位置23に置かれていたというよりも、むしろ個溝際であることから、本来は個溝位置に置かれていた個体の破片が位置23に混ざっている可能性がある。しかしながら、位置23の周囲にあたる位置16・24・30においても2~3個体が出土しているため、位置23を中心に壺分布の中心が形成されていた点は確かなものと考えられる。他に、比較的の分布がまとまるのは、位置12・14、および位置29・32・33+下位16・34・37である。その他の位置においても、壺1個体が広く分布している。壺が全体にわたって分布する状況は、土器溜まり1・3においては明瞭に認められなかったものであり、本土器溜まりの特徴といえる。類型別の分布については、現状では差異を見出すことができない。

鉢 (大型) (図72-5) 大型鉢としては5個体を確認したが、それらは位置2・7・24・29・34に分布し、分散傾向が明確である。このように大型鉢が分散する状況は、土器溜まり1と同様である。土器溜まり1では、1~3個体の大型鉢が細分した群内にみられた。したがって、本土器溜まりにおいてもいくつかの群に細分しうる可能性を、大型鉢の分布状況は示唆するものと考えられる。

鉢 (中・小型) (図72-5) 中・小型鉢の分布は、偏りをもった分布として捉えることができる。また、高杯や壺のような全域にわたる分布の広がりをみせない。分布の中心は、東辺の位置15・17・23・24・30、北側の14+下位7・5・13付近にある。位置21・22・27は、東辺・北側の中間的位置にあたる。南側にも位置39で3個体が確認される。このような中心の分布は、高杯における分布の中心位置に近い。また、大型鉢の分布とは部分的に

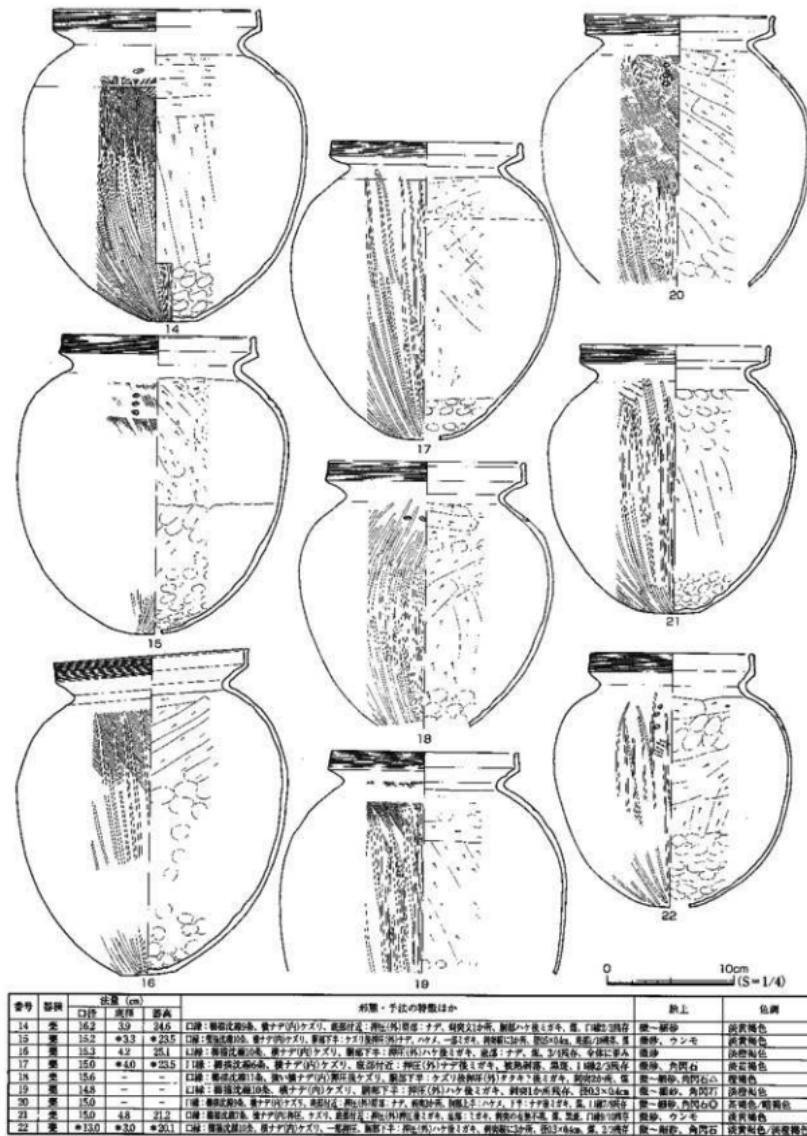


図75 土器満まり2出土遺物(3)

しか重ならない。中・小型鉢の類型による分布の偏りは明確ではない。ただし東側の中心域にはすべての類型が含まれるが、北側の中心域はA・C類によって構成されるという違いはみられる。

高杯（図72-6） 高杯は全面にわたって分布しつつ、東辺の位置15・23・30、北西の位置5・7・13、南の位置33+下位16・34+下位17という、主に3箇所の集中域およびそれらの周辺域を形成しているものと考えられる。ただし、その3箇所の境界については不明確な部分がある。特に西辺の位置22にも4個体が確認され、ここについても中心域とみなしうる可能性がある。その場合には、各中心域・周辺域の境界が、よりあいまいなものとなる。類型別にみると、主体をなすA類については広範な広がりを有する一方、希少類型についてはB類が位置33

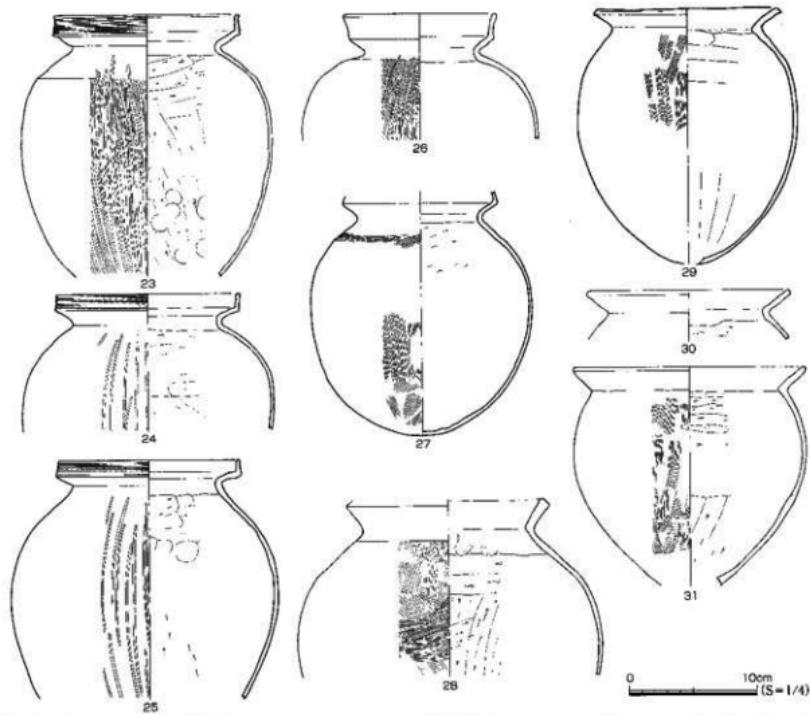


図76 土器満まり2出土遺物(4)

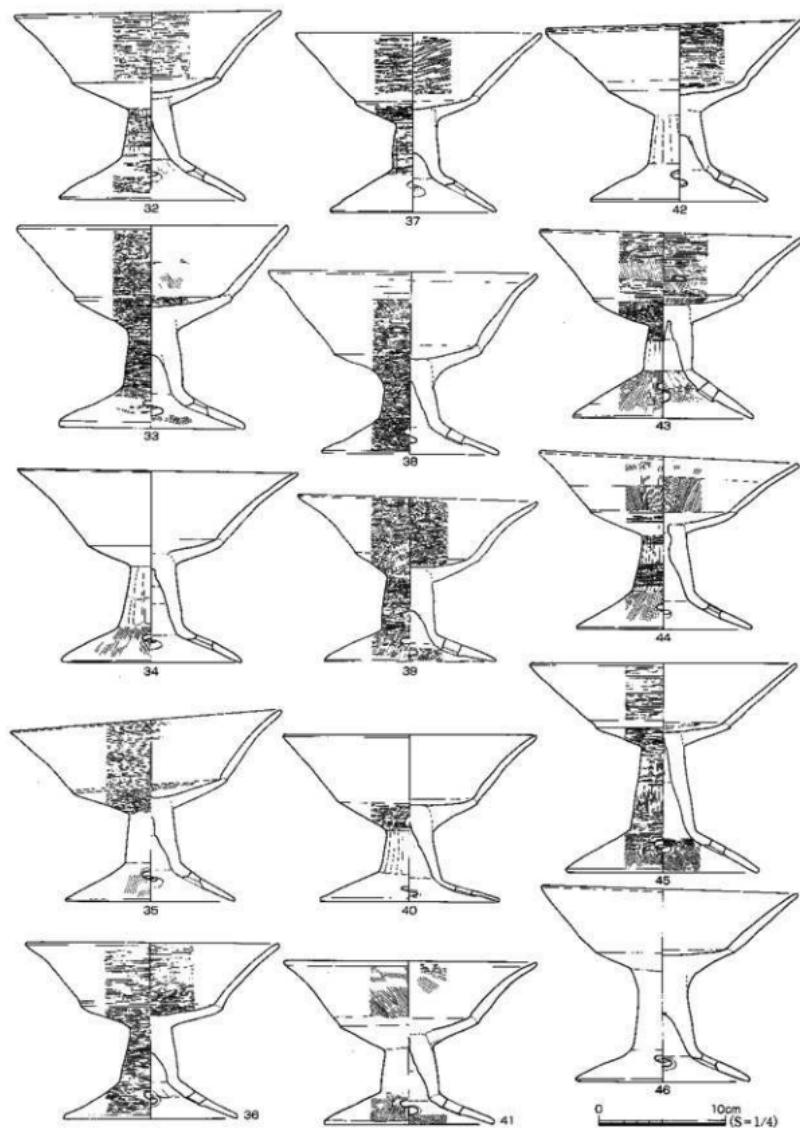


図77 土器満まり2出土遺物(5)

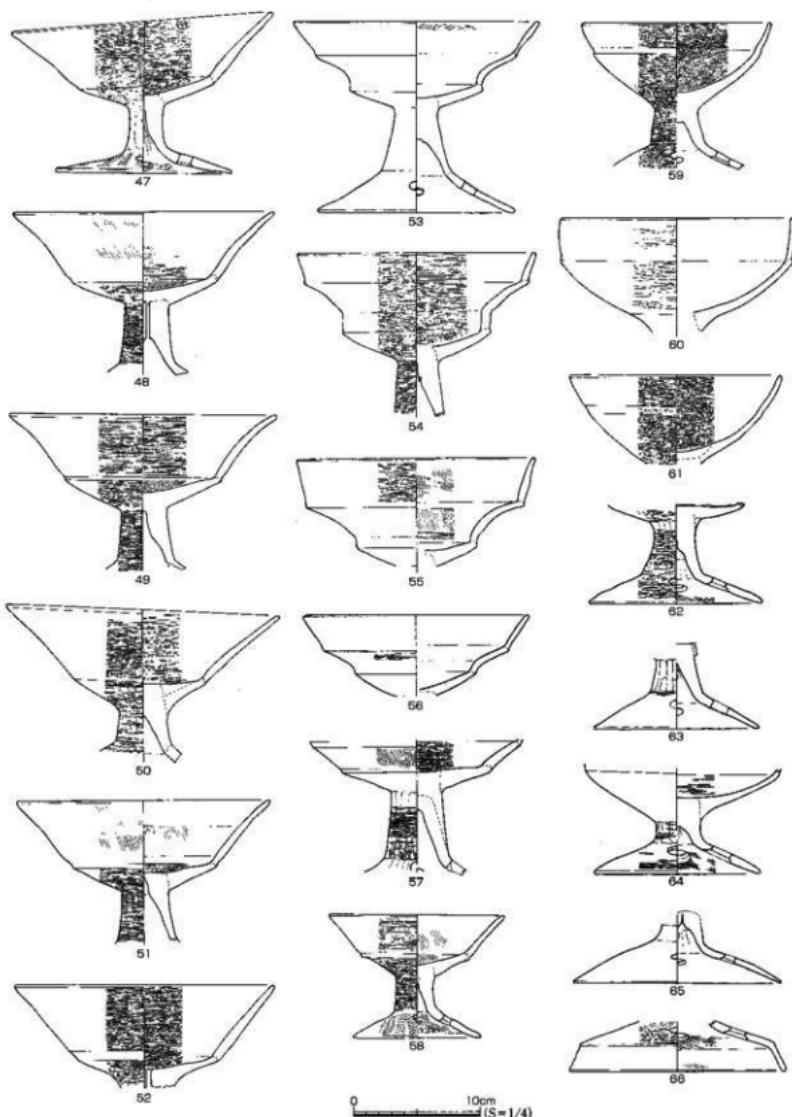


図78 土器溝まり2出土遺物(6)

番号	器種	法線 (cm)			形態・手法の特徴はか	胎土	色調
		内径	底径	厚さ			
32	高杯	21.1	14.6	14.8	(内径: 29.4、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
33	高杯	*21.5	14.6	16.0	(内径: 30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	明褐色	褐色地色
34	高杯	22.0	14.4	15.1	(内径: 30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
35	高杯	21.3	13.3	13.4~15.0	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	淡褐色	褐色地色
36	高杯	20.0	13.7	13.8	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
37	高杯	19.4	13.0	14.1	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	淡褐色	褐色地色
38	高杯	21.2	14.0	14.4	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
39	高杯	18.8~18.9	13.6	12.5~13.3	(内径: 18.8~18.9、外径: 20.0cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
40	高杯	20.0	14.9	13.2	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
41	高杯	20.0	13.4	12.9	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
42	高杯	10.3	14.0	14.0	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
43	高杯	20.8	14.2	14.3~14.7	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
44	高杯	20.5	13.9	13.2~14.1	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
45	高杯	*21.6	15.2	16.5	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
46	高杯	20.3	13.8	15.2	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
47	高杯	20.1~20.7	13.6	11.0~12.3	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
48	高杯	20.6	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
49	高杯	21.1	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
50	高杯	21.5	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
51	高杯	20.0	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
52	高杯	20.3	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
53	高杯	19.4	15.5	15.2	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
54	高杯	18.8	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
55	高杯	*18.8	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
56	高杯	17.8	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
57	高杯	-	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
58	高杯	13.8	10.0	9.6~9.8	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
59	高杯	*15.0	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
60	高杯	*18.6	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
61	高杯	16.7	-	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
62	高杯	-	13.6	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
63	高杯	-	13.1	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
64	高杯	-	13.1	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
65	高杯	-	16.4	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色
66	高杯	-	17.0	-	(内径: 29.4~30.0、外径: 31.2cm)、脚部: ナジマ、胎土: ナジマ、表面: リガキ、底面: 1.8cm、円孔: 3.5cmφ	黒砂	褐色地色

+下位16に3個体が集まり、C類が位置5に4個体みられる点が注意される。最も希少なD類については、現状では北側中心域に偏る傾向がある。また南側の中心域とその周辺にはC類が希薄である。したがって、それぞれの分布の中心的まとまりにおいて、すべての類型がセット関係として揃う状況は認められないものといえる。

ミニチュア土器・器台・蓋形土器・手焙形土器 (図72-7) ミニチュア土器については、数量が少ないものの、北側の位置2・3・6のはか、西辺～南側などにも認められる。こうした分布は、高杯や中・小型鉢の分布に重なる傾向にあるといえる。器台2個体については、いずれも東辺に分布する点が特徴的である。手焙形土器1個体についても、器台と同様に東辺に位置する。蓋については、東辺(位置15・23)に2個体の他、北辺(位置1)に1個体、北西(位置14)に1個体が分布する。こうした分布は、ミニチュア土器や高杯、中・小型鉢の分布と類似するものといえる。蓋の類型別の分布については違いが覗えない。

石器 (図72-8) 石器としては石錐・円鏃・磨石が出土している。これらの分布は、北辺(位置1)に6個体がまとまることが大きな特徴といえる。石錐については、他に2個体が分布するが、これらは単独で分散する。

4) 遺物の特徴

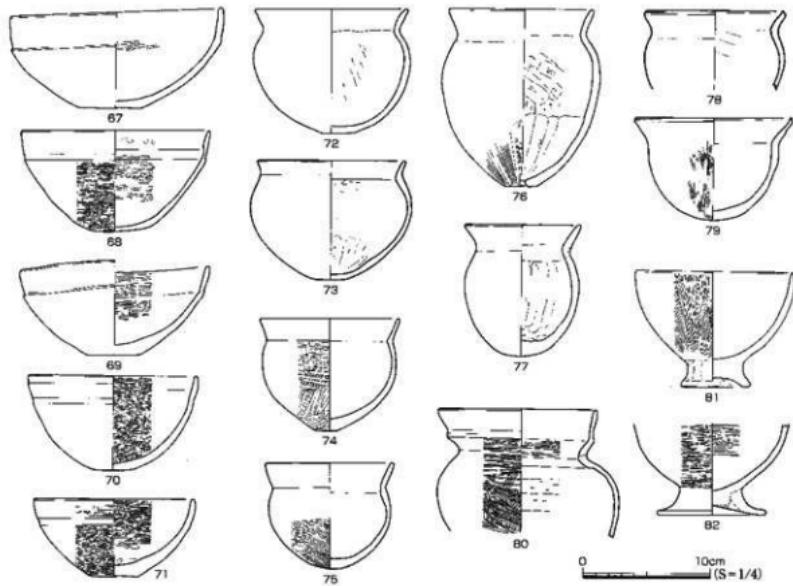
土器溜まり2出土土器は、大半は在地系であるが、搬入土器と考えられる資料も少数ながら確認される。壺I系A2類の2は、口縁部の形態の他に胎上が白色であることを特色とするもので、在地の壺とは明らかに異質といえる。同類型で同様の胎土を有する壺痕片がもう1個体出上している(位置14・7)。これらは山陰系土器として理解することができる。山陰系のI系壺の出土は、本土器溜まりに特徴的要素といえる。壺A2類とした27もまた、頸部に横方向のハケ目が一周しており、これについても山陰系の範疇に含まれる。これらの山陰系の壺・壺については、搬入品の可能性が高い資料である。

蓋B類の93は、高杯の脚部の形態となるが、上端面中央に窪みが施された状態で焼成されたものである。器台91は小型高杯に含めることも可能であるが、杯部底面から脚部にかけて孔が貫通した状態で焼成されていること

と、小型である点からここでは器台に含めている。

土器溜まり2の時期は、土器の特徴から土器溜まり1出土土器と同様に、古墳時代初頭、「鹿出遺跡1」編年の鹿田・古・1a期に相当する。

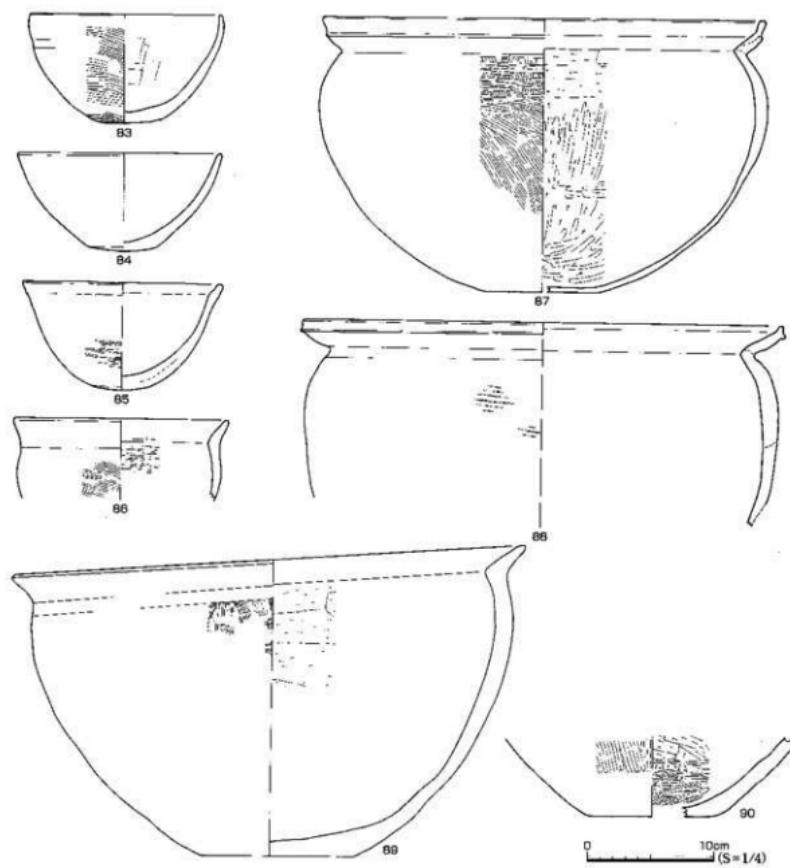
なお、I系壺の13については、底部の造りから弥生時代後期前半に遡るものと考えられる。こうした後期の資料は他に、図化はしていないが長頸のI系壺片が認められるのみである。古墳時代初頭における土器溜まり形成時に、これら古相の土器も廃棄したものと考えられる。



番号	形種	比較 (cm)	形種	子法の特徴ほか	断面	色調
67	鉢	16.7 50	22~8	(内) 2.ガキ(外)側面、腹底O、腹底不規則、底足、2/3残存	微砂粒質	明黄色
68	鉢	149~133 45~48	80	(内) 口縁、ハサウエー、肩部とガマ、肩部分外側に横一筋のテラ、腹底O、底足、ほぼ完全	微砂粒質	褐色
69	鉢	145~132 41	65~75	(内) 1.ガキ(外)口縁、腹底O、底足、ほぼ完全	微砂粒質	褐色
70	鉢	*134 33	75	(内) 1.ガキ(外)腹底O、小底、1/3残存	微砂粒質	褐色
71	鉢	126 40~43	61	(内) 1.ガキ、下子掌底O、底足、ナガ(内)口縁:ナガ、ハケ後ミガキ、1/2残存	微砂粒質	褐色褐色
72	鉢	*129 26	97~99	口縁:ナガ(内)ケイ(外)後ミナタガ(内)底足O、小底、底足:ナガ、底足、1/2残存	微砂粒質	黄褐色
73	鉢	116 25~26	94	口縁:ナガ(内)ケイ(外)後ミナタガ(内)底足O、小底、底足:ナガ、底足、1/2残存	微砂粒質	灰褐色褐色
74	鉢	*109 16~19	89	(内) 頂部O、小底(外)口縁、底ナガ、ハケ後ミガキ、1/2残存	微砂粒質	褐色褐色
75	鉢	10.1	-	ナガO、不明、丁寧な仕上がり外:リム、底ナガ、ハケX、底足、2/3残存	微砂粒質	褐色褐色
76	鉢	*11.4 26	139~141	(内) 口縁:深緑色、ナガ(内)ハシム、下子:ナガ(内)子掌底O、底足、腹底不規則、底足O、底足:ナガ、底足、1/2残存	微砂粒質	明黄色褐色
77	鉢	9.1	-	ナガO、不明、丁寧な仕上がり外:リム、底ナガ、ハケX、底足、2/3残存	微砂粒質	褐色褐色
78	鉢	*11.0	-	-	微砂粒質	褐色褐色
79	鉢	*124	-	ナガO、底足O、底足:沈没条件(内)工芸ナガ(外)ナガナ?、丁寧な仕上げ、底足、1/2残存	微砂粒質	褐色褐色
80	鉢	120~126	-	-	微砂粒質	明黄色褐色
81	鉢	125×129 5.1×55	9.0~93	(内) 丁寧なナガ(外)ハケ底、脚部:押正+ナガ、ほぼ完全	微砂粒質	灰褐色褐色
82	鉢	-	8.6	(内) 腹底O、ミガキ、赤色化(外)ミガキ、脚部:強い優色、赤色化、1/4残存	微砂粒質	褐色褐色

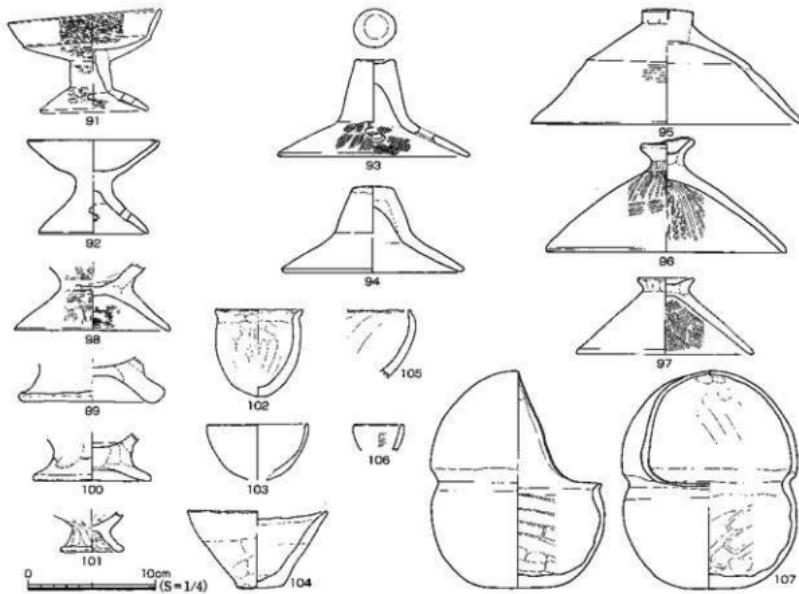
図79 土器溜まり2出土遺物7)

調査の記録



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴はか	胎土	色調
		口径	底径	器高			
83	鉢	15.2	4.8	8.5	(内)口具ナデ、底部：押印、ナデ(外)1縁：模ナデ、ハケメ、出窓、調糸か?	粗砂、難移ら、角閃石	明黄褐色/明黃褐色~黃白色
84	鉢	*16.2	5.3	7.7~7.8	摩滅○、底部○、調糸不明、1/3残存	粗砂均質	明黃褐色/明黃褐色
85	鉢	*15.7	*4.3	8.5	摩滅○、詳細不明、丁寧な仕上がり(外)ミガキ痕、1/4残存	粗砂均質	淡黃褐色/淡黃褐色~淡綠色
86	鉢	*16.9	-	-	(内)口縁：模ナデ、不明瞭、腹部：ミガキ(外)口縁：模糸、ナデ、側部：ハケメ、1/3残存	難移均質	黃褐色
87	鉢	*35.0	*9.0	21.5	口縁：模ナデ(内)磨落○、ケズリ痕(外)タタキ? 後ナデ、1/4残存	粗砂	明黃褐色褐色/明黃褐色
88	鉢	*38.0	-	-	(内)口縁：模ナデ(外)磨落○、ケズリ痕(外)タタキ? 後ナデ、1/4残存	粗砂、角閃石	深灰褐色
89	鉢	40.4	12.2	23.2	(内)口縁：ナデ、腹部ナデ、ナメ、丁寧な底面：ナデ、底下不規、難移、1/2残存	難一粗砂、角閃石	明黃褐色/暗黃褐色
90	鉢	-	*10.0~11.0	-	(内)ケズリ、ミガキ(外)ハケメ、底部付近：押印、ナデ、底部：ナデ、1/4残存	粗一粗砂	明黃褐色/灰黃褐色

図80 土器溜まり2出土遺物(8)



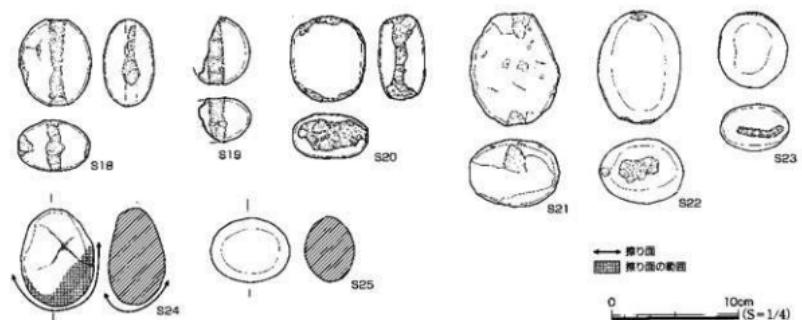
番号	器種	法量(cm)			断面・手法の特徴のほか	粘土	色調
		口径	底径	器高			
91	器台	12.0	8.5	7.7	(内)ミガキ、中央部直通、一部ハケメ(外)ナダ、腹部：ミガキ消失、1/2腰残存	微細、赤色斑	南褐色
92	器台	10.4×10.3	8.7×8.8	7.4×7.6	腹底O(内)ナダ後ミガキ、小明窓(外)小明、円孔4か所、1/2腰残存	微細均質	明褐色
93	壺	—	15.0	—	(内)ナダ、ハケメ(外)丁寧なナダ、ハケメ、円孔4か所、完存	微細均質	褐色
94	壺	14.4	—	6.8	(内)摩滅O、ナダ? (外)丁寧なナダ、完存	微細均質、灰白色	淡黃白色
95	高杯(蓋)	—	—	—	(内)摩滅O、蓋部+側面摩滅O、1/4、結合部付近に1/2腰切削して形成O、1/2腰	水蓮紹土	明褐色
96	壺	16.8	—	18.7~19.0	(内)ミガキ、ナダ、つぶし痕、ナダ(横)、上半：ミガキ、下半：ナダ、1/2腰	微細均質	淡黃褐色、暗褐色
97	壺	13.9	—	6.0	(内)ハケメ、1腰部、肩ナダ、つぶし痕、ナダ(外)ナダ、つぶし痕、ほぼ完全	繊維	淡黃褐色、明褐色
98	台状きず?	—	12.2	—	(内)押圧？ナダ、磨擦O、ハケメミガキ	繊維	淡黃褐色、深褐色、黃白色
99	台状きず?	—	11.5	—	(内)ナダ、半径、磨擦：押圧？ナダ(外)押圧？ナダ、黒斑、1/2腰存	繊維	灰褐色化→灰褐色、明褐色
100	台状きず?	—	9.8	—	(内)摩滅O、ナダ？押圧？押圧？ナダ(外)ナダ、磨擦、押圧、ナダ	繊維+繊維、粗粒	明褐色
101	堅底土器	—	5.9	—	(内)ナダ、堅底、腰L+ナダ(外)ナダ、堅底、赤色、4/5残存	繊維	灰青褐色、暗褐色
102	ミニチュア鉢	6.1×6.8	1.9	6.8~6.9	(内)ナダ、押圧(外)押圧、ナダ、織衣の跡附れO	繊維	灰褐色、暗白色
103	ミニチュア鉢	8.0	—	—	(内)ナダ、押圧、1/2腰存	微細均質	淡褐色
104	ミニチュア鉢	10.1×11.0	3.6	5.4~6.0	(内)押圧、ナダ(外)押圧、底部：丁寧なナダ、黒斑	微細均質	淡黃褐色、灰青褐色、一部褐色
105	ミニチュア鉢	—	—	—	(内)ナダ(外)ナダ、押圧、1/2腰存	繊維均質、微粒	明褐色
106	ミニチュア鉢	(4.0)	—	—	(内)ハケメ(外)ナダ、押圧、1/2腰存	微細均質	淡黃褐色、一部紫色
107	手筋割十形	—	4.5	17.2	(内)上半：直底O、直角部：ナダ、下半：第1ナギ(外)押圧、ナダ、上半1/2腰	繊維、少色斑	褐褐色/暗褐色

図81 土器溜まり2出土遺物(9)

土器溜まり3

1) 検出状況(図83~87)

土器溜まり3はBQ~BR49~50区に位置する。検出面は〈6層〉および〈7層〉上面である。調査区南壁にも土器溜まりの統きが認められたので、規模は南北3.5m、東西6.7mを測る。北側への広がりについては、中世溝の影響で判然としない。本土器溜まりからは21箱(1箱28ℓ)の遺物・釋が出土した。3箇所の土器溜まりの内、土器個体数としてはもっとも小規模となる。



番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	特徴
		最大長	最大幅	最大厚			
S18	石錐	68.35	56.70	39.60	226.0	流紋岩	敲打による浅い溝が長軸では一列、側面では二列しない
S19	石錐	52.20	(41.25)	34.80	(92.8)	角閃岩	長軸に敲打による浅い溝、小窓、2次残存
S20	石錐	67.45	59.45	36.05	224.8	流紋岩	敲打による3方向の浅い溝
S21	石錐	88.85	70.55	53.45	420.0	花崗岩	一列しないが長軸に敲打による浅い溝
S22	石錐	89.00	66.00	52.00	465.6	流紋岩	上端・両側に敲打痕、左側縁に擦痕
S23	石錐	58.50	54.50	37.00	157.6	流紋岩	一列しないが側面に敲打による浅い溝
S24	磨石	76.65	58.10	43.90	299.7	角閃岩	両面研摩下手に削り跡
S25	円錐	62.50	50.50	39.00	188.3	角閃岩	

図82 土器溜まり2出土遺物(1) 一石器

遺物の出土状況は、土器溜まり1・2に比べれば散漫である。また、後述するように、土器の数量に比して標が全体的に多く分布する傾向が認められた。遺物の取り上げに際しては状況に応じて0.3~1.0m程度の取り上げ範囲を設定した。下位川土遺物としたものは、遺物の重なりによって別途取り上げ範囲を設定したものである。

遺物は微高地から斜面に至る箇所に位置する。調査区南壁の上層を参照すると、〈7 b層〉上面から〈6 b層〉が東方へ緩やかに落ちる位置に土器溜まり3が形成されたものと考えられる。〈7 b層〉は北西~南東方向へ島状にのびる上面幅4m程度の細長い微高地をなす。実際に、遺物の上面標高をみると、西側（位置1~10・21・29~40）が1.20~1.30mとなるのに対し、それより東側は1.05~1.20m前後となる。また、下位出土遺物として取り上げ範囲を設定した箇所は東側に認められるのは、傾斜する地形を反映したものと考えられる。南壁を参照すると、上記の西側部分が〈7 b層〉上面にあたり、東側部分が〈6 b層〉中にあたることになる。遺物の出土状況が、現状において北西~南東方向に帯状に見受けられるが、これは同方向にのびる〈6 b層〉の落ちラインを反映した分布状況を示すものと考えられる。ただし東側部分が（6 b層）が残存しており、それによって覆われていたのかといった点が判然としない。特に前者の場合、微高地上と考えられる西側部分の遺物分布については、上層の平安時代~鎌倉時代の土層の影響を受けている可能性もある。

2) 遺物の個体数と組成 (表8~10)

土器溜まり3出土土器の個体数は、最小で89個体、最大で108個体となる。これは土器溜まり2の約1/3、土器溜まり1の約1/6の量となる。基本的器種（壺、甕、高杯、中・小型鉢、大型鉢）については、大型鉢が調査範囲においてはみつかっていない。基本的器種の内訳をみると、①高杯（36%）、②中・小型鉢（25%）、③甕（22%）、④壺（17%）、⑤大型鉢（0%）となる。大型鉢がみられないことを除けば、こうした比率は土器溜まり1に近い。壺については、希少類型であるI系E類1点を含む。また、I系B類のひとつには、全土器溜まり資料中で唯一の絵画資料が含まれる。また壺II系B類は、本土器溜まりのみで1点確認した。一方、高杯については、

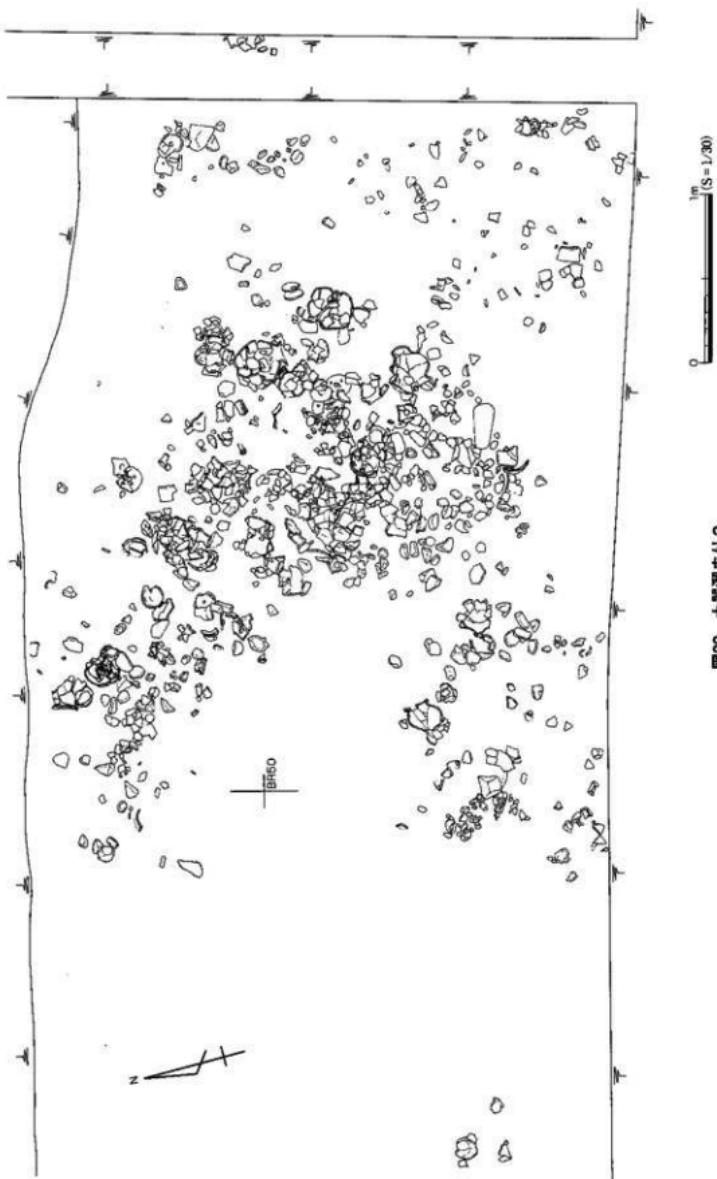


図63 土器埋まり3



図84 土器溜まり3遺物出土状況

もっとも含有量が高くなる。礫の多くは角礫で、礫の大きさは5~25cmと幅があるが、10cm前後のものが多い。被熱の可能性がある礫は4点あるが、この数量は土器溜まり1・2と比べて多いとはいえない。礫は西側の微高地部分に多く分布する傾向にある。落ち部分の礫は、流失した可能性もあるが、土器が残存していることから、礫のみが流失した可能性は低いものと考えられる。

以上、遺物組成の点からは、土器の基本的な器種構成は土器溜まり1・2と同様であるといえる。相違点としては、壺において希少類型と絵画土器を有する点、手焙形土器の多さ、礫含有量の高さが挙げられる。

3) 遺物分布 (図85~87)

個々の遺物の出土状況については、ひとつ取り上げ位置内部において接合関係がみられることを基本とする一方で、離れた位置間での接合も少数ながら確認された。こうしたあり方は土器溜まり1・2同様といえる。

遺物は、地形の落ちに沿いながら北西~南東にかけて帯状に分布するとともに、微高地にも散在する。本土器溜まりについても土器溜まり1と同様にいくつかの群に分かれる可能性はある。しかし、他の土器溜まりと比べて土器の個体数が少ないと、器種別に一定のまとまりがみられることから、ここでは本土器溜まりをひとつの群として捉えることとし、その内部の細分は行っていない。以下、出土位置が判明する遺物について、種類ごとに概説する。

壺 (図85) 壺の分布には、壺周辺に分布するパターン（位置9・19・22・37・39・40・44・下位4）とその他（位置30）が確認される。前者では、I系D類が4個体で最も多く、I系B類が2個体、I系E類とII系B・C類、類型不明が各1個体みられる。I系B類の絵画土器は位置9から出土した。

甕 (図85) 位置20周辺にひとつの分布の核がみられるとともに、それより周囲にも分布の広がりを確認できる。少数類型のB類が周辺に分布する傾向が見受けられる。こうした類型別の分布差は、土器溜まり1~1群でみられた状況と類似する。

鉢 (中・小型) (図86) 中・小型鉢の分布は比較的散在的である。その分布域は、壺とは異なるもので、壺とはいくぶん分布にずれが認められる。また、高杯の分布よりも広がりを有する。類型別の分布には明確な差は認められない。

高杯 (図86) 高杯はいずれもA類であり、位置16を中心に、北側の微高地~斜面部分に分布が偏る傾向がみられる一方、位置46・47や位置31にも点在する。こうした分布は、壺とは大きく異なる一方で、甕や中・小型鉢とは差異を有するものの類似性も認められる。また、手焙形土器や器台の分布とも重なりを有する。

いずれもA類となり、希少類型であるB~D類が確認されていない。その他の器種については、手焙形土器の個体数が多い点（4個体）が本土器溜まりにおいて特徴的である。土製品・石製品については、土鍾1点、石鍾1点、その他の石器1点が出土した。

遺物以外のものとして、礫が478点出土した。この数量は土器溜まり2（317点）よりも多く、土器溜まり1（567点）に近い。土器溜まりの面積からみれば、

表8 土器満まり3土器個体数

(総個体数)

総個体数	壺	甕	釜	鉢 中・小	高杯	盤台	ミニ チュア	手把装 土器	壺	甕	鉢
最小個体数	89個体	14	18	0	20	29	1	1	4	0	1
最大個体数	108個体	20	19	0	24	37	1	1	4	0	1

個体数カウントについて いざれの器種においても破片資料については部位ごとに径1/3以上残存するものを個体数として認識した。ただし、1/3未満の破片でも特徴的で個体認識可能なものについては一箇体としてカウントした(表10参照)。

(壺)

	合計	I系						II系					
		A類	A2類	A3類	B類	C類	D類	E類	類型不明	A類	B類	C類	D類
①完形に準じるor口縁と底部の対応判明	3個体	0	0	0	1個体	0	1個体	0	0	0	1個体	0	0
②口縁部(個体数のカウント可能なもの)	11個体	0	1個体	0	1個体	2個体	4個体	1個体	0	0	0	2個体	0
③側部(個体数としてカウント可能なもの)	0				0					0			
④底部(山牆部との対応不明)	6個体				5個体					1個体			
最小個体数(類型別)*1	14個体	0	1個体	0	2個体	2個体	5個体	1個体	0	0	1個体	2個体	0
最小個体数(全体)*2	14個体				11個体					3個体			
最大個体数*3	20個体				16個体					4個体			

* 1 I系・II系とともに①+②

* 2 II系は①+④

* 3 ①+②+③+④

(甕)

	合計	A類	A2類	B類
①完形に準じるor口縁部と底部の対応判明	3個体	3個体	0	0
②口縁部(～脚部): 1/3以上or個体数カウント可能なもの	15個体	14個体	0	1個体
③側部	1個体	0	0	1個体
④底部	0	0	0	0
最小個体数*1	18個体	17個体	0	1個体
最大個体数*2	19個体	17個体	0	2個体

* 1 最小個体数: ①+②

* 2 最大個体数: ①+②+③+④

(鉢(中・小型))

	合計	A類	B類	C類	D類	類型不明
①完形に準じるor口縁と底面の対応判明	9個体	2個体	1個体	5個体	1個体	0
②口縁部(～脚部)	9個体	4個体	1個体	3個体	0	0
③底部	6個体	4個体	0	0	2個体	
最小個体数*1	19個体	6個体	2個体	8個体	1個体	2個体
最大個体数*2	20個体	9個体				
最大個体数*2	24個体	13個体		8個体	1個体	2個体

* 1 最小個体数: ①+②

* 2 最大個体数: ①+②+③+④

(高杯)

	合計	A類	B類	C類	D類
①完形に準じるor杯と蓋の対応判明	7個体	7個体	0	0	0
②杯部	8個体	8個体	0	0	0
③杯底部～脚部	2個体		2個体	0	0
④脚部	11個体		11個体	0	
⑤蓋のみ	9個体		9個体		
最小個体数(類型)*1	15個体	15個体	0	0	0
最小個体数(全体)*2	29個体		29個体		
最大個体数	37個体		37個体		

* 1 最小個体数(類型): ①+②

* 2 最小個体数(全体): ①+②+④+⑤

〈ミニチュア土器〉

	合計
①先端or平定形	6個体
②口縁（～脚部）	5個体
③底部	5個体
最小個体数	11個体
最大個体数	16個体

〈器台〉

	合計	A類	B類
定形に準じる	1個体	1個体	0
最小・最大個体数	1個体	1個体	0

〈製塙土器〉

	合計
カウント可能個体数	1個体
最小・最大個体数	1個体

〈脚台〉

	合計
カウント可能個体数	1個体
最小・最大個体数	1個体

表9 土器溜まり3土器品・石器個体数

既観体数	土鍤	石鍤	円座	磨石	石鑿？敲石？
3	1	1	0	0	1

器台・手焙形土器（図87） 器台と手焙形土器については類似した分布位置を示す。位置10では、高杯2個体の他、器台と手焙形土器が1個体ずつ出土した。手焙形土器は、4個体のうち出土位置が判明する資料は2点あるが、それらは近接した位置に分布する。この2つの手焙形土器は、大きさ・造りとも極めて類似性が高いものであり、同一の製作による所産とも考えられる。こうした両者の出土位置の近接性には、製作～使用状況の一端が反映されているものと考えられる。

土鍤・石鍤（図87） 土鍤と石鍤は1個体ずつ出土したが、両者が近接して（位置1・2）分布することを特徴とする。土器溜まり3に帰属する土鍤・石鍤は他に確認していないが、両者は漁撈具としてセットで置かれたものと考えられる。

4) 遺物の特徴

土器溜まり3は基本的には在地系の土器で占められていたものと判断される。搬入品と考えられる資料としては、タキを有する壺（図89-15）が挙げられる。

絵画を有する壺（図88-1）についても、土器そのものは在地系の範疇に含まれる。絵画の内容についてみてみよう。絵画は沈線によって描かれたもので、壺頭部を一周する。絵画は主として①逆L字形の文様、②下半に線がのびる縦長の紡錘形文様、③連続する山形文様からなる。逆L字形文様は、3条の沈線からなる。3条の沈線のうち、中央のそれが最も強く施されている。逆L字形文様は上から下へのびる直線と、向かって左から右へのびる下辺部の直線との接続からなる。逆L字形文様の左端には、上端に強い筆跡の「へ」字形の線刻を有し、山形文様に連なる「ノ」字形線刻がなされる。逆L字形文様の3条線中央の線刻と、この「ノ」字形線刻には接觸する部分がみられ、両者の切り合い関係は判然としないが、「ノ」字形線刻が逆L字形文様を切っている可能性がある。「へ」字形線刻付きの「ノ」字形線刻は、上半部、すなわち逆L字形文様の左横に相当する部分が強く描かれており、両者の関連性も窺える。逆L字形文様の右側には、独立した1本の線刻がみられる。これは、その右側の崩れた山形文の一部を構成するものとも考えられるが、逆L字形文様の縱軸と平行し、かつ上下の位置も一致しており、逆L字形文様との関連も想起される。紡錘形文様は、独立した文様である。それは二対の線刻で構成されるが、左側の線刻が文様の軸となる。左側の線刻は、上半が弧状、下半が直線的となる。その上半の対として、右側の弧状のラインが描かれることで、下半に線がのびる紡錘形文様となる。山形文様は、紡錘形文様と逆L字形文様の間に描かれる。紡錘形文様を基準にみると、十器に向かって右側に、7つの頂部（逆L字形文様にかかる斜めの線刻も含む）を有する山形文が描かれる。紡錘形文様の右隣の山形文は、2つの頂点距離が他に比べ長い。その右へ2個目の頂点から下へのびる山形文の下端の位置が低くなり、それより右隣の山形文の下

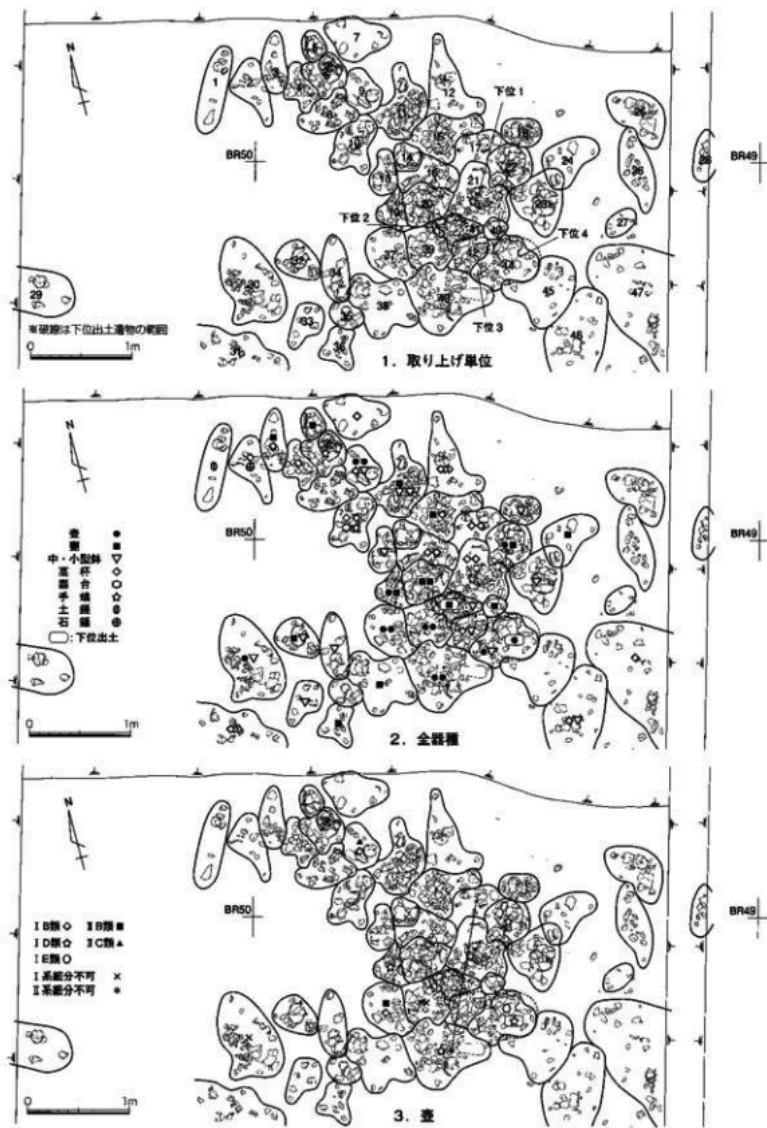


図85 土器遺跡 3器種別分布(1)

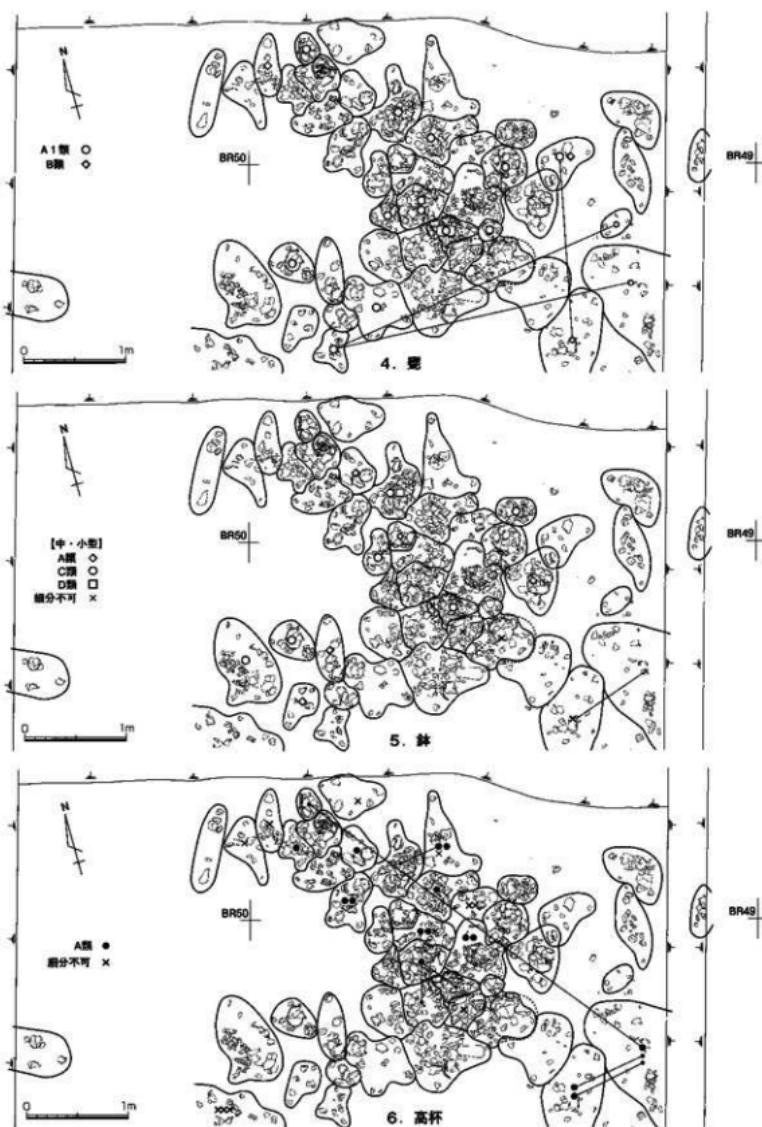


図86 土器埋まり3器種別分布(2)

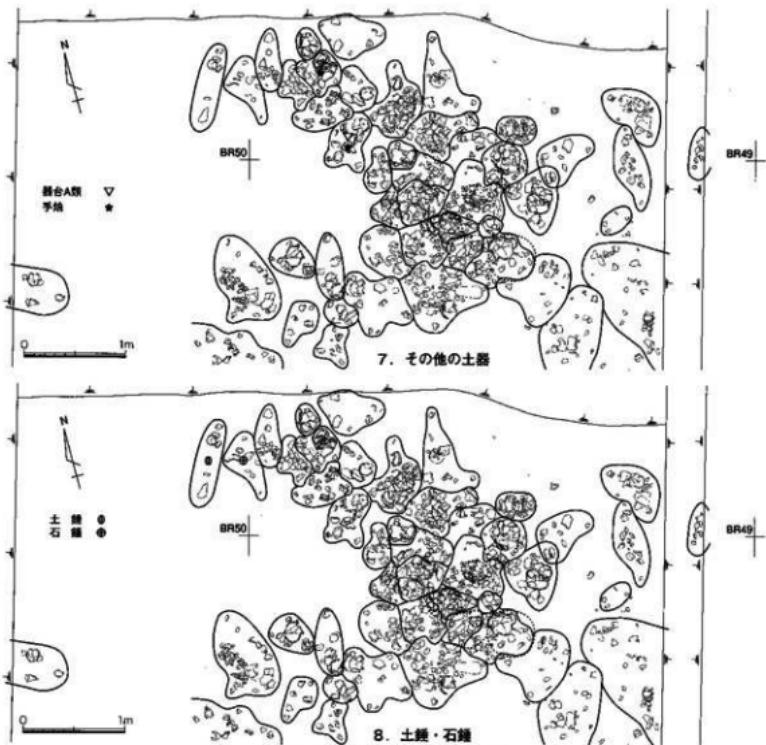


図87 土器溜まり3器種別分布(3)

端もまた低くなる。このことにより、山形文と逆し字形文様との上下のレベル差が生じている。一方、紡錘形文様の左側には、右側よりも崩れた山形文が描かれる。この崩れた山形文は、上下の位置に関しては逆し字形文様と同一レベルにある。なお、崩れた山形文では、土器の器壁に対して右斜めから工具が当てられて線刻が描かれたことが明瞭であり、右利きの作者が想定される。

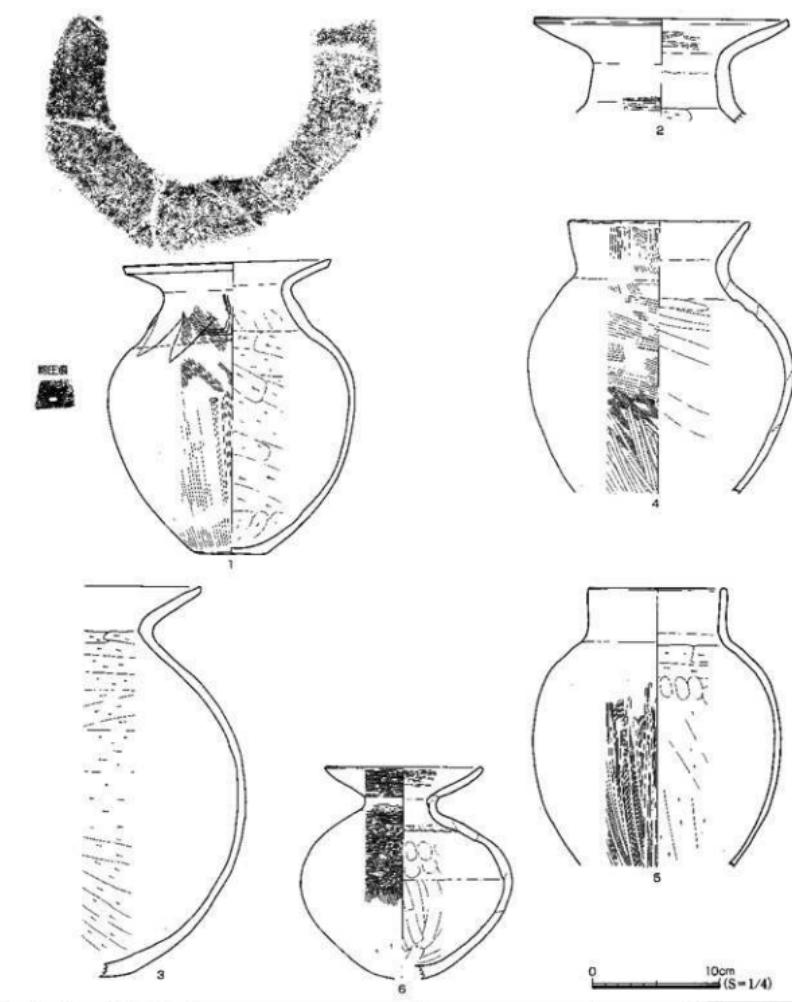
こうした絵画の類例については、壺頸部に描かれるという点では、倉敷市酒津遺跡の資料¹⁾がある。ただし、同資料はいわゆる擬形文の組み合わせであるため、今回の資料とは文様内容を異にする。一方、逆し字形文様に着目すれば、弥生時代後期～古墳時代初頭に展開した、人面文の鬚等のバーツ表現であり、もうひとつは盤子文状の弧帶文の一部などの類例が考えられる。

土器溜まり3の時期は、土器の特徴から土器溜まり1・2と同様に古墳時代初頭、鹿田・古・1a期に相当する。

(光本)

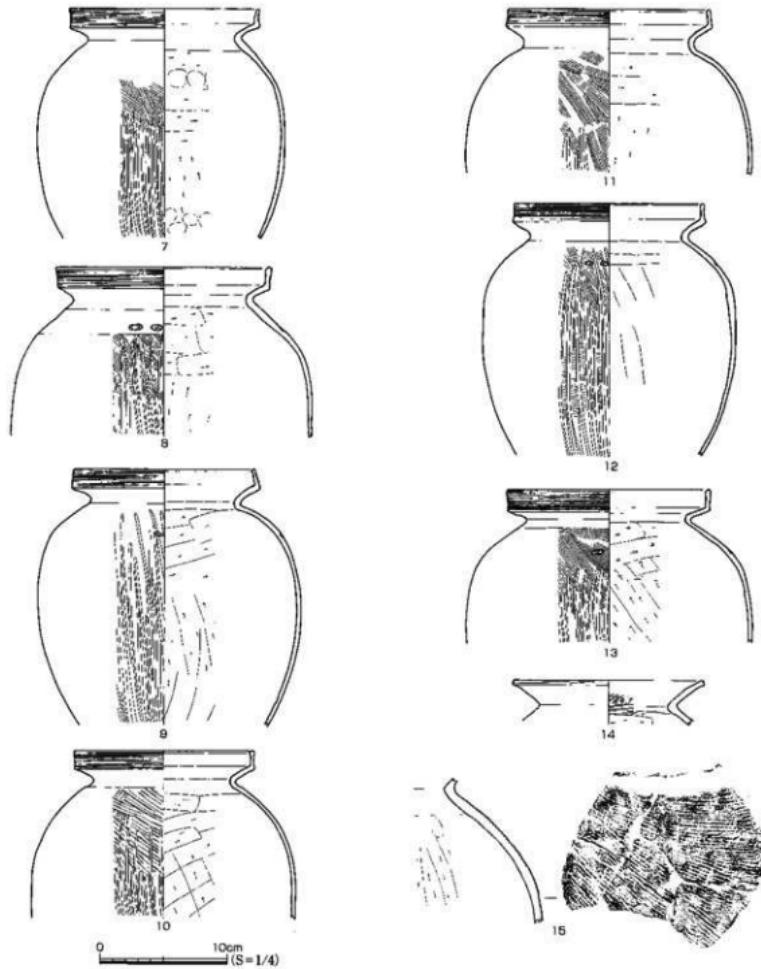
註

1 同壁忠彦1958「倉敷市西津及び新屋敷遺跡出土の上器」『瀬戸内考古学』第2号



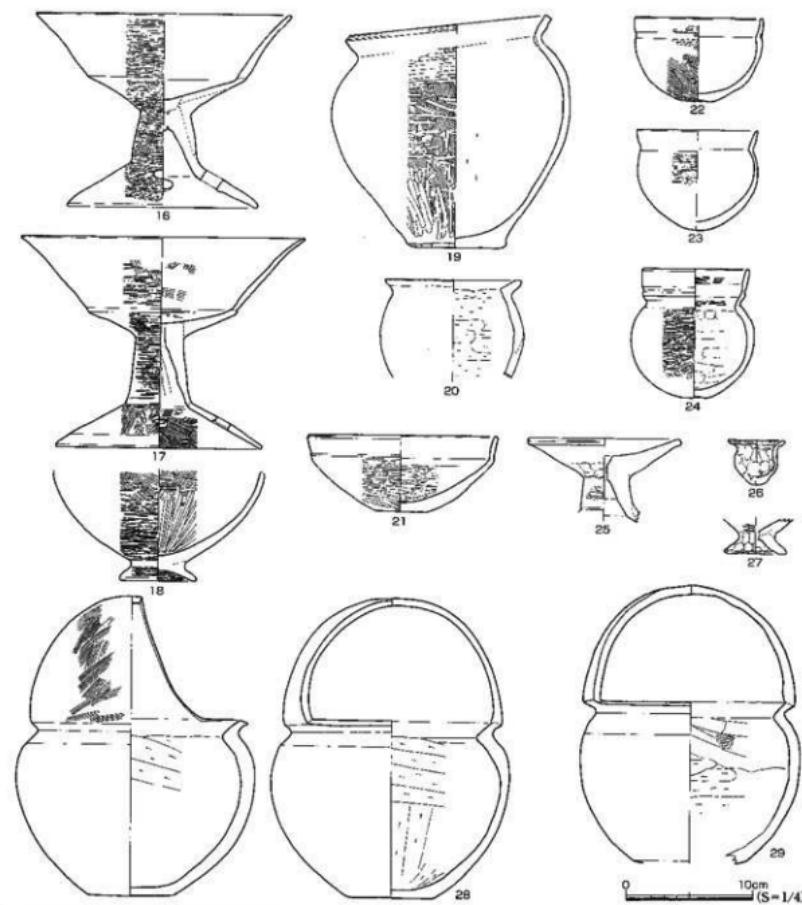
番号	器種	底量 (cm)		形態・手法の特徴は?	胎土	色調
		口径	底径			
1 突	壺	16.3	5.8	22.9 口縁：素ナマ(内)施墨(外)、輪郭：ケズリ(内)施墨(外)、ハナ、表面に墨、底は直立形、もじりかね付墨あり、1/2残存	墨跡～飛墨、あざき色沙粒	洪乳褐色
2 突	壺	*20.0	-	口縁：素ナマ、一部にガキ(内)施墨(外)、ハナ、表面：ナマ、ケズリ(外)ハケ墨とガキ、1/2残存	飛沙均質	丸眉褐色/洪乳褐色
3 突	壺	-	-	31.9 口縁：施ナマ(内)ケズリ(外)ハナ、全体に墨、表面：ナマ	墨砂	灰褐色/洪乳褐色
4 突	壺	*14.2	-	口縁：施ナマ(内)ケズリ(外)ハナ、下部：ナマ(外)ハナメ、下半：ハケ墨とガキ、1/2残存	墨砂	洪乳褐色/洪乳褐色
5 突	壺	*11.0	-	口縁：全周、不規(引)施墨(外)、ハナ、ナマ、網目：網正、ナマ(外)ハナ(内)ハケ墨とガキ、1/2残存	墨砂	丸眉褐色/洪乳褐色
6 突	壺	13.2×13.4	-	0.0(1層)：1ガキ、裏部：施ナマ、網目：上部ナマ(外)ハケ墨とガキ、ハナメ、3/4残存	墨砂均質	明褐色

図88 土器滿まり3出土遺物(1)



番号	器種	法面 (cm)	形態・手法の特徴はか	粒度	色調
7 美	器	150×15.5	-	-	-
8 美	器	169	-	-	-
9 美	器	144	-	-	-
10 美	器	158~16.0	-	-	-
11 美	器	160	-	-	-
12 美	器	15.0	-	-	-
13 美	器	169	-	-	-
14 美	器	15.0	(内)口縁: ハケヌナダ、ケズリ(外)ナダ。一部ハケヌ純毛。1/2残存	細砂、角閃石△	乳白色/青褐色
15 美	器	-	(内)器底: ナナ、貝殻、骨灰、ケズリ(外)ナダ。	細砂、角閃石△	淡灰色/青褐色

図89 土器湖まり3出土遺物(2)



番号	器種	径景 (cm)		形態・手法の特徴ほか	地上	色調
		1面	底面			
16	高杯	φ30.0	15.0	15.2 (内)直腹口、下部腰乳突1箇所、下方凹部、腹部側面心に2箇所凹部。口縁は一輪型。底面 内側に2箇所、外側に1箇所、腰乳突1箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	乳白色地、瓦赤褐色地色	乳白色地、瓦赤褐色地色
17	高杯	φ23.3	16.1~16.5	16.5 (内)ハンドル2箇所、腰乳突1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	淡黄色地、瓦赤褐色地色	淡黄色地、瓦赤褐色地色
18	杯	16.6	6.1	8.9 (内)直腹口、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	乳白色地	乳白色地
19	杯	16.5	7.8×7.7	18.4 (内)直腹口、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	乳白色地	乳白色地
20	杯	16.7	-	口縁、横ナギ(内)2枚(6枚)1枚、底面、底盤、底盤：北北、1/2輪形	褐色地質	黄褐色地、青褐色地
21	杯	15.0	4.0	8.9~9.3 (内)口縁、横ナギ(内)2枚(6枚)1枚、底面、底盤、底盤：北北、1/2輪形	褐色地質	褐黃色地、青褐色地
22	杯	16.0	2.2	6.6 (内)丁字足2穴式(内)2穴、ナギ、上手今輪脚：北へ、円(内)腰乳突1箇所、底盤、1/2輪形	褐色地質	明黄色地、白色
23	杯	9.6~10.0	-	7.9 (内)口縁：ハンドル2箇所、腰乳突2箇所、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	褐色地質、半赤色	明褐色地、瓦褐色
24	杯	8.5	1.9	10.2 (内)口縁：ハンドル2箇所、腰乳突2箇所、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	褐色地質	明褐色地
25	器台	11.8×12.0	-	- (内)ナギ、ナギ(内)2枚(6枚)1枚、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	褐色地質	乳白色地
26	ミニチュア瓶	4.4	0.5	3.5 (内)(外)肩広、ナギ、外曲1か所腰乳突、1/2腰乳突	褐色均質、半白色	乳白色地
27	雙耳土瓶	-	5.0	- (内)側面、ナギ(5枚)2枚、押出し、一次焼成による吹泡。表面のみ定穴	褐色の	灰褐色地、灰褐色
28	子短形土瓶	-	6.8	23.7 (内)丁字足2穴式(内)2穴、ナギ(5枚)2枚、上手今輪脚：北へ、底盤、ナギ(5枚)2枚、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	褐色地質、半赤色	黄褐色地、青褐色地
29	平柄形土瓶	-	-	- (内)丁字足2穴式(内)2穴、ナギ(5枚)2枚、上手今輪脚：北へ、底盤、ナギ(5枚)2枚、斜縫目1箇所。身の内側に2箇所腰乳突2箇所。ハンドル2箇所。斜縫目1箇所。身の内側に2箇所 腰乳突2箇所。	褐色均質、内凹形	暗青灰褐色、深灰褐色

図90 土器涵まり3出土遺物(3)

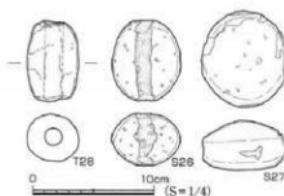


図91 土器満まり3出土物(4)
—土鍤・石器—

番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴	粘土	色調
T28	土鍤	6.66	4.26	3.86	196.6	管状土鍤、ナデか、直面剥離	微細・粗粒	黒褐色
S26	石器	9.67	5.05	4.38	230.9	破損致	粗粒	黒褐色
S27	石器	7.65	(6.20)	4.16	309.8	断片部端面に削打痕、直面は研磨か	粗粒	黒褐色

2. 古墳時代後期

概要(図25) 古墳時代後期の遺構として、調査区南半で溝2条を検出した。これ以外に当該期の遺構は検出されず、希薄な状況である。古墳時代後期の基幹水路の可能性がある。

a. 溝

溝14(図92)

調査区の東半部、BO～BR47～52区に位置する。(6層) 上面で検出した。検出面の標高は西側では1.15m、南側では1.25mである。西北西～東南東方向に直線的に掘削されている。長さは約27.7m、幅は西側で約1m、南側で約1.5mである。断面形は直形を基調としている。底面標高は西側で0.86m、南側で0.80mである。検出面からの深さは西側で0.29m、南側で0.45mである。埋土は3～4層に分層したが、いずれも淡黄灰色～淡灰褐色砂質土を主体とする。a断面3層には灰白色砂が、b・c断面4層には鉄分が顯著にみられ、水利機能を有した溝と考えられる。

遺物は、外面格子タキ・内面青海波文タキの須恵器大甕片が出土した。遺構の時期は、出土遺物や検出面から古墳時代後期と判断される。

溝15(図93)

調査区の南西部、BQ50区に位置する。(6層) 上面で検出した。検出面の標高は北側で

1.05mである。ほぼ南北方向に掘削され、長さ南北約2.17m、幅0.56mを測る。断面形は歪んだ逆台形で、底面標高は北側で0.77m、深さは北側で0.28mである。埋土は淡灰褐色砂質土を主体とする。最下の3層には鉄分が顯著にみられ水利機能が想起される。

遺物は出土しておらず、遺構の時期を特定できない。近接する溝14との位置関係、底面標高の近似、埋土の類似などから、関連性が高いと推定される。その場合、溝14に取り付く小溝と考えられ、古墳時代後期の遺構であると判断した。(野崎)

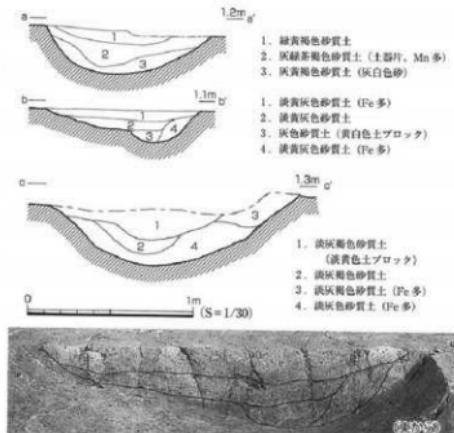


図92 溝14

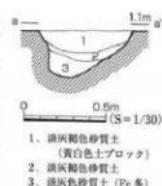


図93 溝15

第5節 平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物

概要（図94） 平安時代～鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物5棟、井戸9基、炉1基、土坑5基、溝19条、ビット141基、段を検出した。そのうち、出土土器より平安時代中頃に属することが判明した遺構は井戸3のみであり、その他はいずれも平安時代後半～鎌倉時代の所産と考えられる。検出面は〈4層〉～〈6層〉上面にわたるが、遺構認識の関係で、〈5層〉・〈6層〉検出遺構については、本来の上面が定かでない場合もある。

平安時代中頃には、調査区中央・東寄りに井戸3がつくられた。この井戸以外に、当該期の確実な遺構は本調査区では検出されなかった。現状では、集落の中心から外れた箇所に構築されたものと考える。

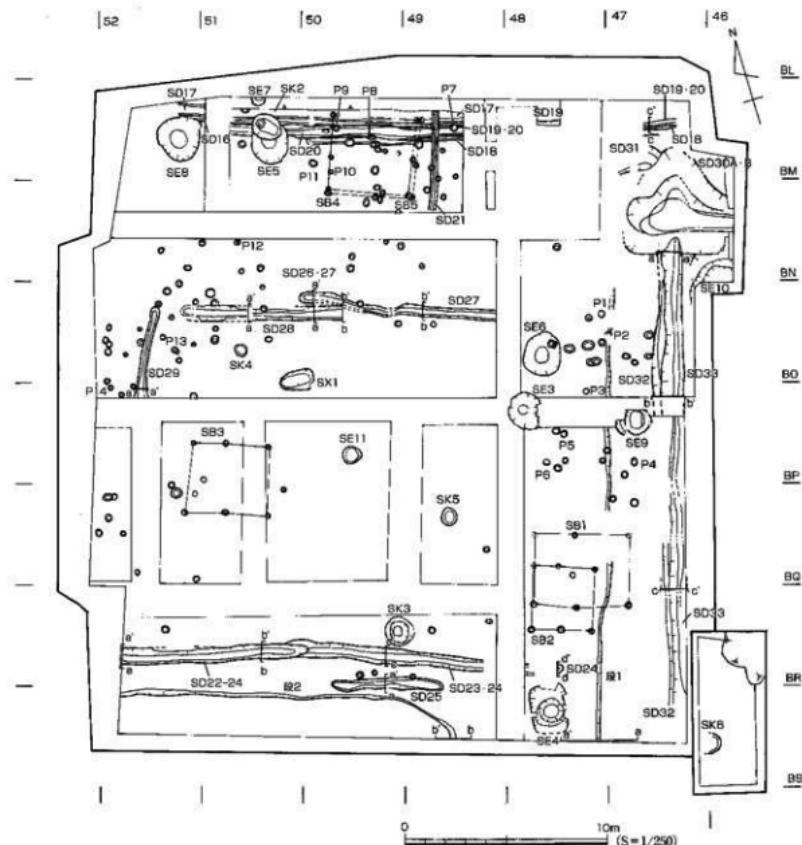


図94 平安時代～鎌倉時代遺構全体図



図95 平安時代～鎌倉時代遺構全景

平安時代～鎌倉時代の遺構は、調査区全体に分布する。遺構の時期は、11世紀後半～12世紀中頃と、14世紀前半の二時期に大別される。11世紀後半～12世紀中頃は調査区北辺と南辺に位置する東西溝群による区画と、井戸4～7、土坑2を中心として構成される。ピット群については、この時期の遺物を出土したものが認められなかつたため、こうした区画や井戸に伴う建物等の構造物については定かでない。

一方、14世紀前半については、前代よりは遺構密度が高くなる傾向がある。調査区中央および東辺の溝群による区画、および井戸8・9を中心に構成される。溝による土地区画の位置は、前代とは異なる位置に設定される。東辺の溝群は、南北溝と、大型溝等で構成されており、これらは大型溝の存在から当該期の屋敷地の外郭を区画するものであったと評価される。また、大型溝には振り出し状の施設も付属しており、他の調査地点における同規模の溝との関連性の点でも注目しうるものである。中央の溝群は、L字状に構成されるものであり、遺物が出土していないため年代的確定ができないものの、周辺の建物3や炉1などともに、屋敷の一角を構成していたものと考えられる。また、建物4・5付近、中央の溝群付近、建物1・2付近に分布するピット群の一部からは、13世紀～14世紀の土器が出土している。このことから、ピットの主体は当該段階のものと考えられる。

段（图96） 調査時には、〈4層〉～〈6層〉において中世段階の遺構を検出したが、平面的調査や、最終的に調査区壁面を精査・記録する中で、段状の地形の成形が判明した。それにより、同一層序と考えていた包含層にも、細かな先後関係が生じることとなった。こうした状況を平面的に認識したのは〈5層〉の調査時である。その際、2つの段の存在を認識した。段1は、47ライン上に南北方向にのびる段で、調査時には平面的に東側のみに落ち込むものと捉え、段2は、東西方向にのび、49ライン西1mで南東に屈折する平面形態をなす段である。

その後、調査区壁面の精査において、以下のような段の認識に至った。調査区南東で、段1にあたる調査区南

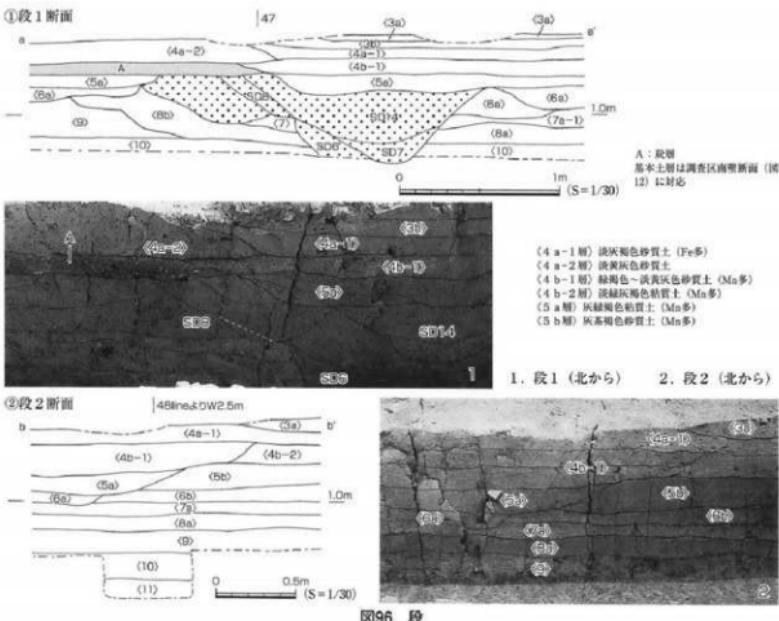


図96 段

壁(図96①)をみると、ここでは、(6層)段階の段状の落ちの上部において段が形成されており、そうした段が少なくとも(4層)まで反復されることが判明した。(5a層)では東西両側がカットされて、上面幅0.70mの畔状ないしは道状の段がつくられる。(4層)段階には、西側へのカットが(4a)・(4b)において形成される。段2においても、(5a層)・(4b層)におけるカット面がみられた(図96②)。

各層位の時期について、出土遺物と遺構の切り合いを考慮すれば以下の通りとなる。まず段①をみると、網掛けしたA層(炭層)は、炭・焼土を多く含む特徴的な層で、火災等の後の整地層と考えられる。本層からは12世紀初頭の土器が出土した。A層上に堆積する(4a-2)層上面では、13世紀末～14世紀の溝を検出したため、(4a-2層)の時期もそれに近いものと判断される。一方、(4a-2層)をカットした後に西側に堆積する(4a-1層)については、近世まで降る可能性

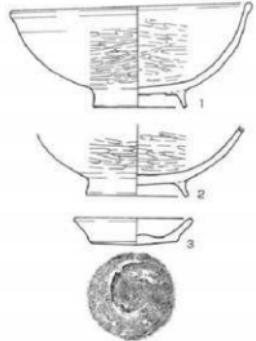


図97 A層出土遺物

番号	種類・器種	法量 (m)			形態・手法等	埴土	色調：内・外
		口径	底径	高さ			
1	土器骨・施	15.1-15.5	5.7-5.8	6-6.5	(内・外)「ガリ」(音台・底)ヨコナギ、(縁)1/2(内外)「ガリ残	繊砂	暗墨灰・乳白
2	土器骨・施	8.2	6.2	—	(内)ヨコ(外)スズ(底)ヨコナギ・ヘラキリか?	繊砂・粗砂△	淡黄褐色白・灰黑
3	土器骨・施	8.4	6.6	1.7	(底)ヨコ(縁)ヘラキリ、(底)2/3残	繊砂・粗砂△	淡黄褐色

が考えられる。それは〈4a層〉として一律に認識して掘り下げた際に、主体をなす中世土器の他に近世陶磁器が出土したためである。〈4b-1層〉は、近世陶磁器を含まず、かつA層を切ること、および井戸4が本層から掘り込まれていた可能性を考慮して、12世紀初頭に近い時期に比定される。〈4b-2層〉はA層の年代から12世紀頃に位置付けられる。〈5層〉は、遺構との関連から11~12世紀初頭頃の年代が考えられる。なお、段と個別遺構との関係は、遺構上面自体に削平の可能性がかかるため、厳密に特定することは困難であることを付記する。

a. 掘立柱建物・ピット

5棟の掘立柱建物を検出した。これら建物の年代については、出土遺物を伴わず、また検出面を下げた段階で発見したことから、確定は難しい。一方、建物周辺のピットについてはピット1・2が13世紀後半、その他のピットが14世紀前半の年代を示す。したがって、建物の年代に関してはピットの年代を考慮し、13世紀後半~14世紀前半におさまる可能性が考えられる。

掘立柱建物1 (図98)

本遺構は、調査区東部、BP~BQ46~47区において検出した。検出面は〈6層〉である。建物2と位置が重なるが、先後関係等については定かでない。本遺構の柱穴としては、4本が残存していた。北東角および北西角の柱穴は、擾乱によって失われていた。2間×1間の建物と復元できる。推定桁行きは北側で4.12m、南側で4.60m、推定梁行は西側で3.44m、東側で3.45mを測る。建物南北軸はN-15°-Eであり、鹿田地区の地割りと合致する。

柱穴は、いずれも円形を呈し、その大きさは径28~30cmとなり均質である。深さは18~28cmを測り、底面の標高は0.78~0.90mとなる。いずれの柱穴にも柱痕跡が残存していた。柱痕跡は淡灰色~淡褐色砂質土を主体とする。その柱痕跡から推定される柱径は約12cmである。掘り形内埋土は淡褐色系統の砂質土・粘質土によって構成される。南辺P1~3の柱下面には礎板が敷かれていた。礎板は、完全な状態では残っていないが、長さ・幅が10cm前後で、厚さ2.0cmを測る。それぞれの柱に1枚が敷かれていたものと推測される。今回の調査で礎板が出土した建物は本遺構のみである。なおP1では礎板の下に淡灰色粘質土となる2層が堆積していた。こうした状況は、柱の立て直しの痕跡の可能性もあるが、他の柱穴では認められなかった。

礎板以外に、柱穴からの出土遺物はない。建物の軸方向から判断すれば、本遺構は、平安時代~鎌倉時代におさまるものと考えられる。東側に位置する南北溝32・33(13~14世紀)と本遺構は関連する可能性が考えられる。

掘立柱建物2 (図98)

本遺構はBP~BQ47区に位置し、〈6層〉上面調査時に検出した。1間×2間の間取りとなる掘立柱建物である。残存していた柱穴は5基である。北西角の柱穴は、現代の基礎による擾乱のため失われていた。桁行は東側で3.12m、梁行は南側で2.98mを測る。建物の南北軸は、N-18°-Eであり、鹿田地区の地割りとほぼ合致する。

柱穴は、いずれも円形を呈する。径は22~34cmを測る。P1については底面標高が他よりも高く、1.05mとなり、深さは10cmと浅い。P2~5は、標高が0.87~0.90mの範囲に収まり、深さ16~20cmとなる。柱穴埋土は、灰色系の砂質土を基本とする。なお、柱穴からの出土遺物はないが、建物の軸方向から判断すれば平安時代~鎌倉時代におさまるものと考えられる。本遺構は、その空間的位置関係より、建物1と同様に周辺遺構との関連する可能性が考えられる。

掘立柱建物3 (図99)

本遺構はBQ~BP50~51区に位置し、〈6層〉上面調査時に検出した。2間×1間の掘立柱建物である。本遺構は、残存していた6基の柱穴から構成される。桁行は北側で3.65m、南側で4.08m、梁行は西側で3.51m、東側で3.44mを測る。北側の桁行が南側に比べて短いことと、P2の位置が少し建物内側に寄ることから、ややいびつな平面形をなす建物といえる。建物南北軸は、N-21°-Eであり、鹿田地区の地割りとほぼ合致する。

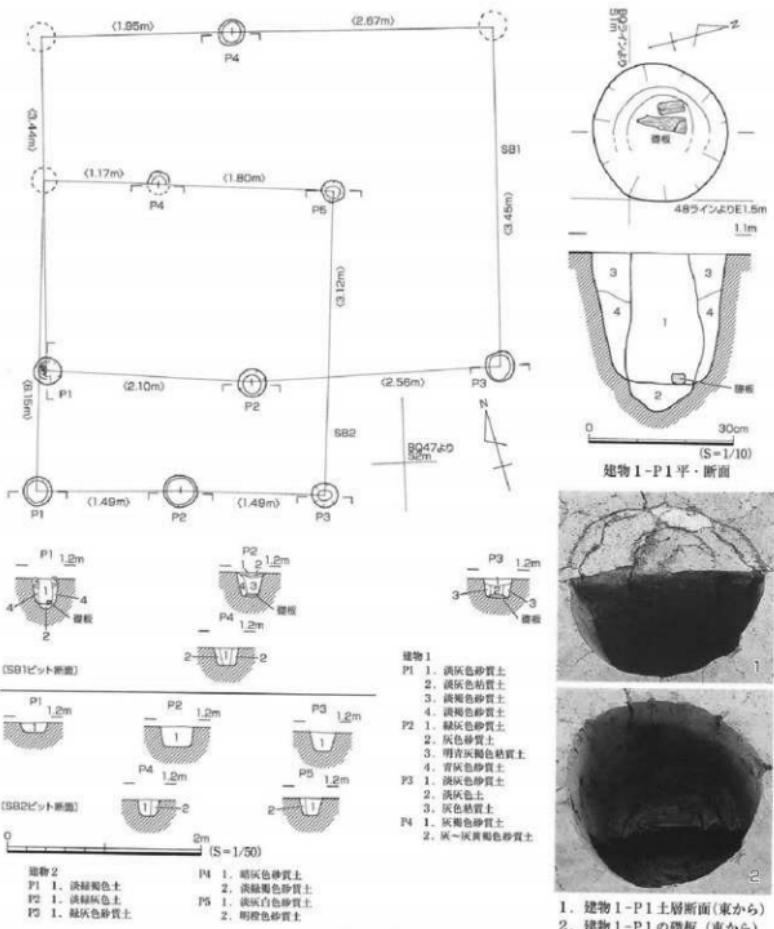


図98 建物1・2

柱穴は、いずれも円形を呈する。径は24~32cmを測る。柱穴底面の標高は、0.87~0.97mとなる。柱穴の深さは、検出した標高が特に低かったP3（深さ8cm）を除けば、17~23cmとなる。北西角のP6は礎石を伴う。礎石は、長さ14cm、幅12cm、厚さ7.5cmを測り、平坦な面を上に向けて設置されていた。柱穴埋土は、緑褐色ないしは茶褐色系の砂質土を基本とする。P1・2・6には、堆積状況より柱痕跡と考えられる土層が残存していた。柱穴内からの出土遺物はない。本遺構の位置は、L字状をなす清28・29（14世紀前半）との関連性を想起させる。

調査の記録

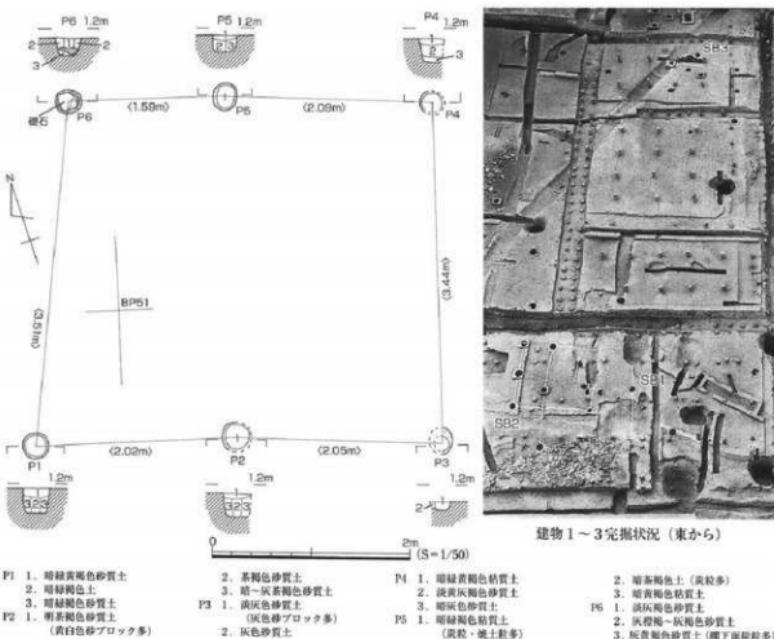


図99 建物3

掘立柱建物4 (図100)

本造構は、調査区北辺のBL～BM48～49区に位置する。(6層) 上面調査時に検出した。本造構では1回の建て替えがなされていた。柱穴の切り合ひ関係から、最初に建てられたものを「建物4-1」、建て替えによるものを「建物4-2」とする。両者は、西辺を共有する一方、建て替えによって規模を縮小したものと考えられる。両者とも現状において1間×2間の間取りと考えられるが、建物の北辺としたラインは調査区北壁際にあたるため、さらに北側へ建物範囲が広がる可能性も存在する。両者に共通するP1が、溝17埋土を切るかたちで掘り込まれているため、建物4は溝17埋没後の11世紀以降に建てられたものと考えられる。なお、本造構周辺には、他にも柱穴が多くみられるため、付近に建物等の構造物が存在していた可能性が高い。

〔建物4-1〕本造構に伴う柱穴としては、5本(P1～5)を検出した。北東角の柱穴については、調査時に検出し得ていない。溝17の埋土とともに、柱穴埋土を掘り上げた可能性が考えられる。桁行は南側で4.15m、梁行は西側で3.90mを測る。やや北辺が南辺よりも幅広な平面形となる可能性が高い。建物長軸は、N-21°-Eであり、鹿田地区の地割りとほぼ合致する。

柱穴は、いずれも円形を呈する。径は、検出面が低いP2(径20cm)を除けば、24～33cmとなる。底面標高は、0.70～0.82m、深さは30～55cmである。P4・5では、柱穴痕跡と考えられる土層(暗灰褐色～暗茶褐色土)がみられた。柱穴埋土は、灰色～灰茶褐色土を基本とする。柱穴内からの出土遺物はない。

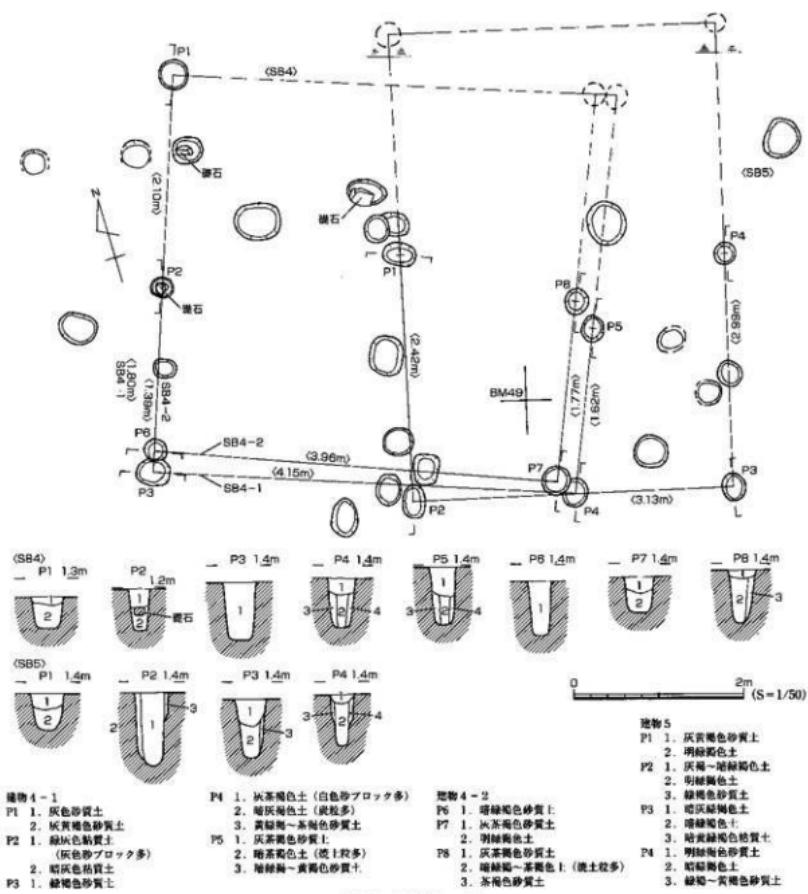


図100 建物4・5

〔建物4-2〕本建物に伴う柱穴としては、5本（P1・2・6～8）を検出した。建物4-1同様、北東角の柱穴については、調査時に検出しえなかった。桁行は南側で3.96m、梁行は西側で3.69mを測る。建物4-2は、建物4-1よりも桁行・梁行とともに20cm程度小さい。建物南北軸は、建物4-1同じくN-21°-Eである。

柱穴は、いずれも円形となる。径は24～30cmを測る。底面標高は0.70～0.85m、深さは30～52cmである。新たに設置された柱穴（P6～8）は暗緑褐色～茶褐色砂質土となる。P8では柱痕跡と考えられる層がみられ、推定柱径は13cmである。柱穴内から遺物は出土していない。

掘立柱建物5（図100）

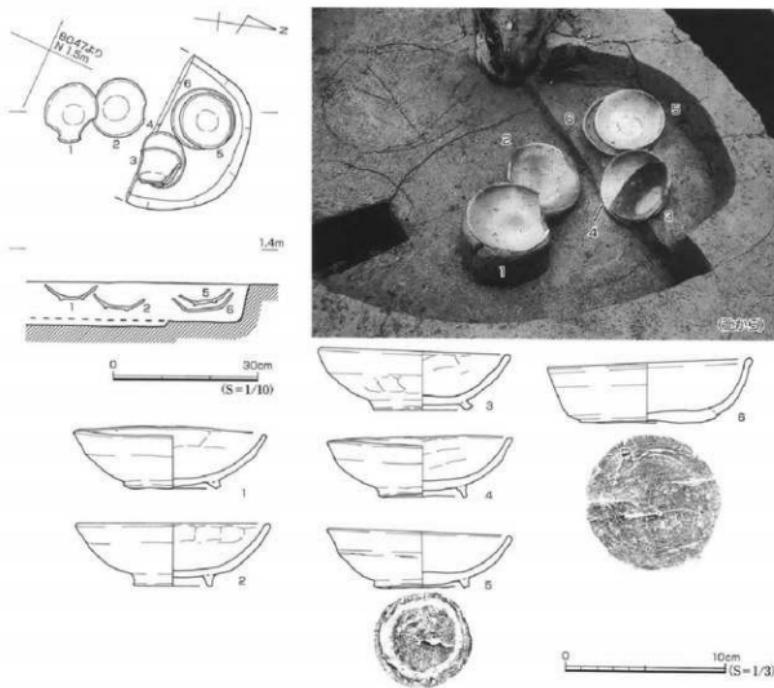
2間×1間の掘立柱建物である。（6層）上面調査時に検出した。本建物は、残存していた4基の柱穴から構成

される。北辺の柱穴については、側溝のため定かでない。桁行は西側で推定4.57m、東側で推定4.52m、梁行は南側で3.13mを測る。建物南北軸は、N-14°-Eであり、鹿田地区の地割りとはほぼ合致する。

柱穴は、円形ないしは梢円形を呈する。径は、25~33cmを測る。底面標高は、0.60~0.94m、深さは0.35~0.60mと、ばらつきがみられる。埋土の堆積状況から、柱穴痕跡とみられる埋土（暗緑褐色砂質土）が、P 2~4に認められる。P 1 の暗緑褐色土も柱穴痕跡の可能性がのこる。柱穴内からの出土遺物はない。本建物の時期については、建物4と前後する11世紀以降の時期と推定される。

ピット1（図101、図版16）

調査区中央東側のBN47区において検出した。検出面は〈4層〉である。平面形については一部のみの確認であるが、円形ないしは梢円形を呈するものと考えられる。ピットの埋土については、他のピットと比べて、炭や焼



番号	種類・器種	法線（cm）			形態・手法等	地土	色調：内／外
		口径	底径	厚さ			
1	上部質・碗	11.5~12.0	5.6~6.1	3.3~3.9	(内)工具ナデ・重ね焼き痕(外)ナデ(高台)接地面未調整、3/3残	微粉	淡青白
2	上部質・碗	■12.0	5.3	3.4~3.9	(内)重ね焼き痕(外)ナデ(高台)接地面未調整、口縁1/3残	微粉	暗灰褐
3	上部質・碗	12.0	6.0	3.4~3.9	(内)工具ナデ・重ね焼き痕(外)ナデ(高台)接地面未調整	微粉	淡黄白・淡桃白
4	上部質・碗	11.5~11.8	5.3~5.9	3.2~3.9	(内)工具ナデ・重ね焼き痕(外)ナデ(高台)接地面未調整	微粉	淡黄白
5	上部質・碗	11.5~11.7	6.0	3.3~3.8	(内)重ね焼き痕(外)ナデ(高台)ハラ瓶・接地面未調整	微粉	淡灰褐・暗灰褐
6	上部質・杯	12.7~13.1	8.4	3.4~4.0	(内)赤色斑駁(外)ココナデ(底)ハラカリ後板正直、口斜形・瓶丸方形	微粉、赤色斑	淡青(白)白/淡灰白

図101 ピット1・出土遺物

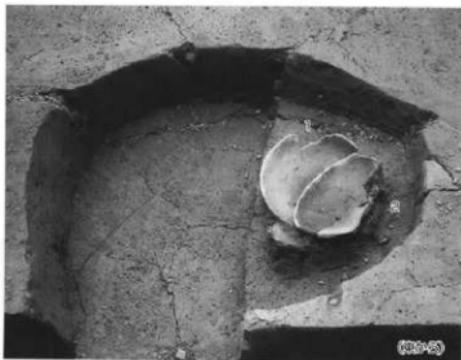
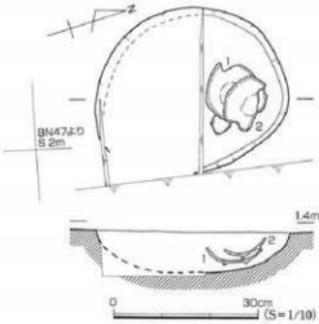
土等が多く含まれるものでもなく、むしろ〈4層〉の土質と類似した。そのため南半の外形については明確に輪郭を検出しえなかった。ピットの規模は、残存長18cm、残存幅33cm、深さ8cmを測る。ピットの底面標高は1.25mとなる。

ピット中からは、6個体の土師質土器がほぼ完形の状態で出土した。うち、5点は高台付きの土師質土器碗であり、1点は土師質土器杯である。土器は絶じて大きさや造形が類似するものであり、製作地の同一性を示唆するものといえる。出土状況から、土器は2個で1セットとなるものと理解できる。その組み合わせは、1・2、3・4、5・6である。3・4および5・6は、それぞれ入れ子状に重なった状態で出土した。1・2のセットもまた、入れ子状での出土ではないが、重なりをもって出土した。2個体の土器を重ねて置く方式は、近接する位置、かつ同時期のピット2においても認められることから、一定の儀礼的手法に基づくものと考えられる。出土土器から、本造構の時期は13世紀後半に位置づけられる。

ピット2（図102、図版16）

本ピットは、ピット1に近接するBN47区、〈4層〉において検出した。ピットの平面形は楕円形である。規模は長さ40cm、幅33cm、深さ8cmを測る。底面標高は1.30mである。本ピット埋土については、ピット1同様に、〈4層〉に類似し、特に目立った含有物はみとめられなかった。

ピット内からは、2個体の高台付土師質土器碗（1・2）が、上下を正位の向きで重ねられた状態で出土した。なお、先行して調査したピットの南半部からは土器は出土していない。出土土器から、本造構の時期は13世紀後半に位置づけられる。ピット1と同一時期に属するため、一連の儀礼行為の所産と考えられる。



番号	種類・器種	計量 (cm)			形態・手法 等	着土	色調：内/外
		13層	底径	厚さ			
1	土師質・碗	12.9	5.9-6.4	2.5-3.8	(内)スス付着(底の可能性あり)(高台)ナメ、接地面に軽圧痕	微弱	黒-灰白/淡白
2	土師質・碗	11.8-12.0	5.5-6.0	3.4-4.2	(内)重ね焼き痕(高台)黒斑、接地面未溝痕(高台内)ナメ	微弱	明灰白

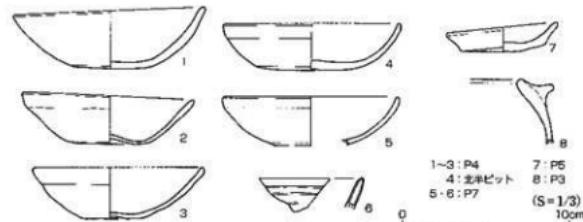
図102 ピット2・出土遺物

その他のピット (図94・103、図版16)

第13次調査地点において、掘立柱建物1～5およびピット1・2も含め、検出面や出土土器から平安時代～鎌倉時代に属すると考えられるピットを141基検出した。検出面は〈4層〉～〈6層〉上面である。検出面が複数層位に渡るのは、〈4層〉上面ではピット埋土と基本土層とのちがいを認識することが困難であったためである。したがって、〈6層〉上面で検出したピットについても、時期に関しては埋土や構成等を加味して決定した。

ピット群は、建物1北側、建物4・5周辺、溝28・29周辺にまとまる傾向があり、これらの地点に何らかの構造物が構築されたものと考えられる。礎石を有するピットは、建物3-P1、建物4-P2の他に8基ある(図94-P3・6・8・9・11～14)。礎石は、いずれも長さ30cm以内におまり、平坦面を上に向けるように設置された。礎石を有するピットの分布に規則性は認められず、地盤の状況に応じて適宜据えられたものと判断される。ピットからの出土遺物としては土師質土器焼と骨片がある。土器は、いずれも14世紀前半に属する。こうしたピットの年代観からみれば、柱穴から土器が出土しなかった上述の建物1～5の年代も同様の時期の所産である可能性も浮かぶ。土師質土器焼が礎石の上に置かれたものもあり(P12)、柱抜き取り後の地盤行為と考えられる。骨小片は、ピット10の埋土上半から出土したもので、鑑定の結果、小～大型哺乳綱と判明した。

ピットの機能としては、建物の柱穴のほか横列の可能性も考えられる。溝28北側のピット群は、東西方向に2



～4基のピットが列状に2・3列並ぶようにも見受けられる。同様に溝29の西側についても、南北方向に2～4基のピットが2・3列並び、横列の可能性を考えるものである。(光本)

番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法等	胎土	色調: 内(胎)/外(釉)
		口径	底径	深度			
1	土師質・焼	11.4	4.8	31～37	素面、ステ付有、口縁1/2残	泥砂	淡乳白/白
2	土師質・焼	10.3	4.8	26～31	(内) 丁寧なT字ナット(底) 焼(表) オサエ・ナゲ、凹み部あり	泥砂	淡乳白/白
3	土師質・焼	*10.0	3.5	29～33	(内) 丁寧なT字ナット(底)・(表) オサエ・ナゲ、凹み部あり、口縁1/5残	泥砂	淡乳白/淡灰白
4	土師質・焼	10.6	6.2	28	(内) 丁寧なT字ナット(底) オサエ・ナゲ(表) オサエ、凹み部あり	泥砂	淡乳白/淡灰白
5	土師質・焼	*10.4	-	-	(内) 丁寧なナゲ(底)、高台の輪郭で割れている可能性大、1/4残	泥砂	白
6	青磁・碗?	-	-	-	(内) 極薄文、施釉ない	泥砂	(淡灰)/オリーブ
7	土師質・黒	6.6	5.0	11～18	(内) 外ヨコナタ(底) ヘラクリ後ナゲ、クロコ彫転左	泥砂	淡灰黑
8	瓦質・羽茎	-	-	-	(内) 構造的「凸ナット(底) オサエ・施灰の「月ナット(底)・スス	泥砂	淡灰/灰黑

図103 ピット出土遺物

b. 井戸

井戸3 (図104～106、図版15・20・21)

調査区東半中央部、BO47区で検出した。井戸の直上には東西方向、西側には南北方向の近代建物基礎が通り、上部は大きく破壊される。当初、この東西方向の擾乱を挟み、〈4層〉上面で南北方向に長軸を有する長楕円形の落ち込みを検出し、井戸の掘り形と考えて調査を進めた。しかし、主軸線が井筒中心より東にずれること、平面形の違いが大きいこと、検出面から約0.4m下位までの埋土が下半部の土層に比して乱れた堆積状況を示すことから、同一の構造と考えることはできないとの結論に達した。そこでこの落ち込みは井戸の上部に重複したものと判断し、近世土坑(土坑28)として報告している。したがって井戸は土坑で上半部を失っていることとなり、土坑底面で確認できた井戸の上面標高は0.85mとなる。平面形は、標高0.9m前後の近世土坑底面で検出した掘り形ラインが径1.8m前後の円形に復元でき、底面では径約0.6mの円形を呈している。底面は標高-0.65mに位置し、上面からの深さは1.5mである。底面には曲物が残存していた。曲物は南半分を近代の建物基礎杭および調査時の

掘削により破損したが、北半部は平面的に検出した。北から東にかけては、濠が外れて側板から大きく離れ、その間には暗灰色粘土が詰まっている。断面形は、標高0m付近の傾斜変換線を挟み、その下位では筒状の掘り形が約0.6mの深さを有し、標高0m付近から上方へは、緩い傾斜で開く逆台形状を呈する。

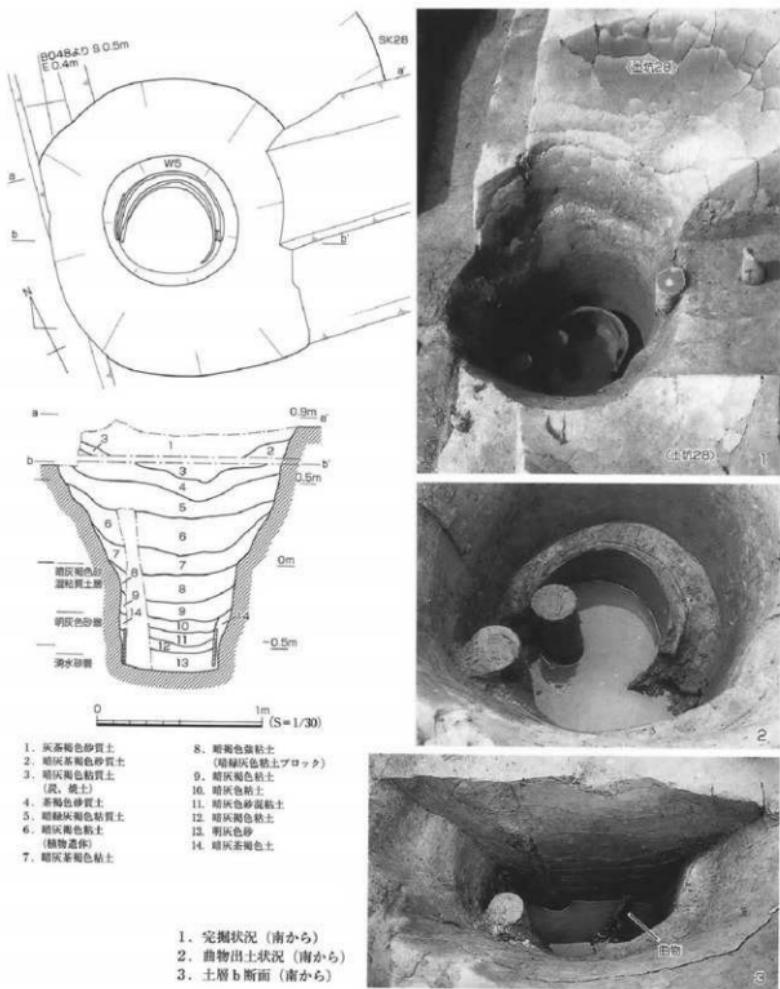


図104 井戸3

調査の記録

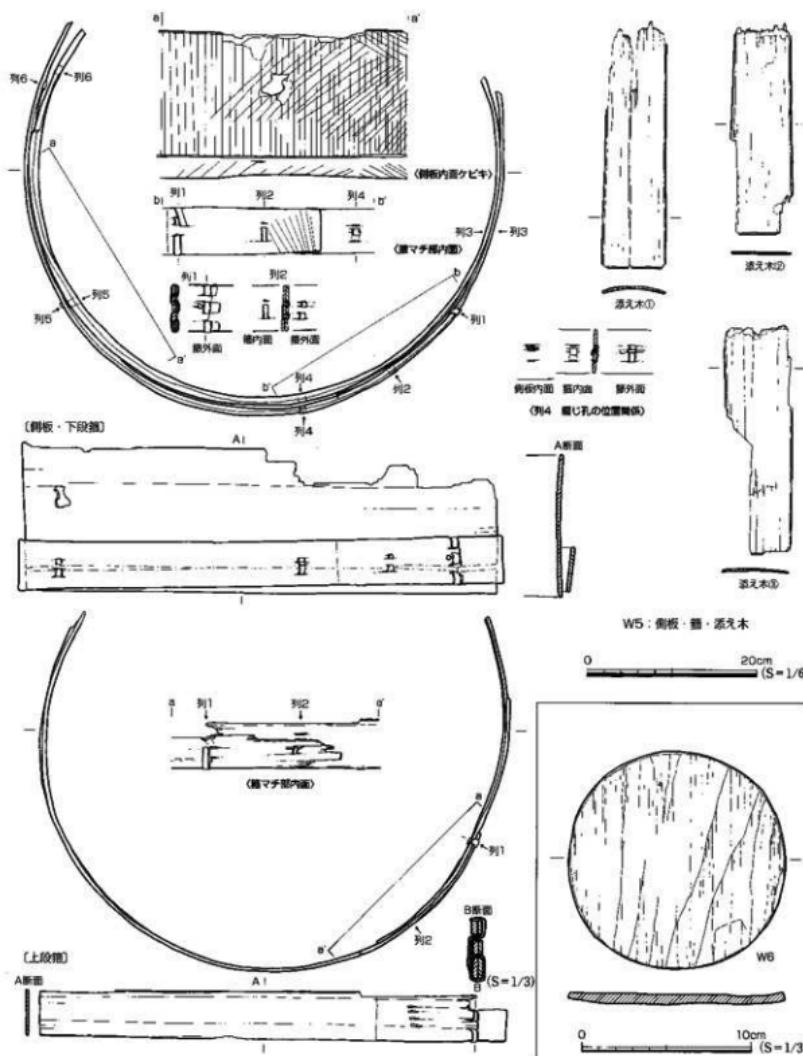


図105 井戸3出土遺物(1)ー木製品ー



図106 井戸3出土遺物(2)

埋土は14層に分層した。井戸廃絶時の埋土であるI群(1~9層)は、2単位に細分でき、I-1群(1~4層)は茶褐色沙質土を主体とする。堆積の過程で炭・焼土を多量に含む3層が形成されている。I-2群(5~9層)は暗灰褐色粘土を主体とした埋土である。6層で植物遺体、8層で暗緑灰色粘土ブロックなどの包含物が観察された。10~13層は包含物のない粘土層と砂層や砂混じり粘土層が互層状に堆積した土層である。このうち、12・13層は井戸底に設置された曲物内の堆積土である。最下の砂層では湧水が認められた。井戸使用段階の堆積土(II群)の可能性がある。14層は最下に据えられた曲物の上位に堆積し、棒の内面から連続した垂直方向の層界が認められる。このことから、本来標高-0.3m前後までは枠状の構造物が入っており、14層はその裏込め土(III群:井戸構築時の土層)であったと考えられる。

井戸底面に据えられた曲物については、破損が著しいため、側板底面近くで周辺の土ごと切り取って取り上げた。その後の洗浄の過程で、曲物最下の側板内から土師器皿2枚(図106-3・4)がみつかった。井戸内部での本来の位置を復元すれば、底面北側付近にあたる。皿のうち、4は2片に割れ、ともに縦位に立った状態で割れ面を下方に向けていた。また両者は内面で向かい合わせとなっていた(図106)。さらにこの2片の間ににおいて数片に割れた皿(3)が確認され、井戸最下面には二枚の皿が置かれていたことが判明した。したがって、二枚の皿は曲物設置前に置かれたものであり、その設置の際に割れた可能性が高い。

遺物には土器・木器がある。土器はコンテナ1/2箱が出土し、土師器杯2点と上述の土師器皿2点を図化した。その他、白色の土師器椀1点、土師器鍋6片、須恵器甕2片、須恵器杯1片、器種を特定できない土師器30片が出土しているが、大半は小片であり、図化困難であった。木器は井筒に用いられていた大型曲物1点、小型曲物の底板1点が出土した。大型曲物は側板1点・底2点・添木3点が残存している。添木は、曲物底面から約10cm下に突き出されていた。本遺構の埋没時期は、出土遺物から10世紀末~11世紀初頭にあたると考えられる。

(野崎)

井戸4(図107・108、図版15・20)

第13次調査区の南東付近、BR47区の(4層)において検出した井戸である。現状の上面標高は1.37mで、これ

調査の記録

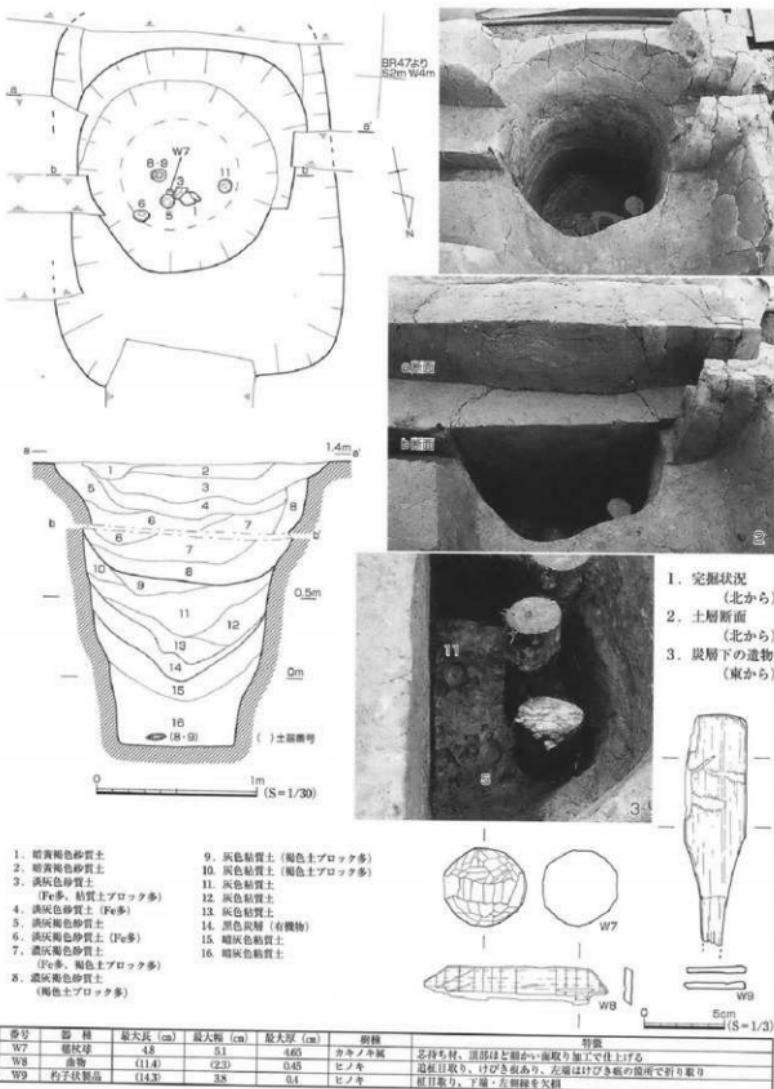
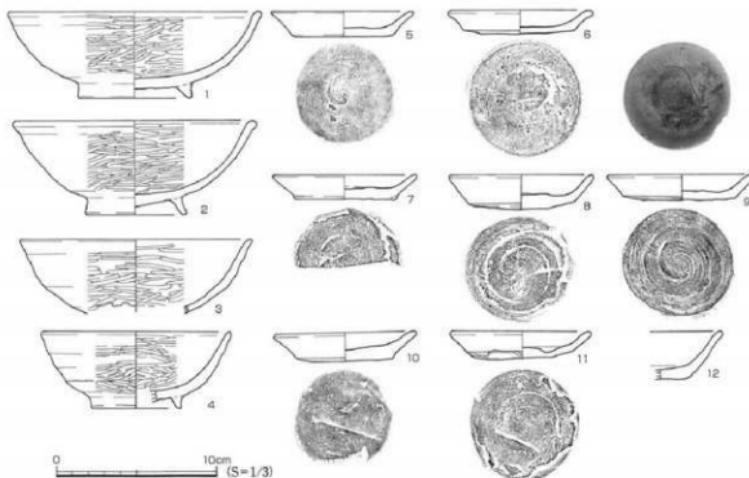


図107 井戸4・出土遺物(1)ー木製品



番号	種類・器種	法量(cm)		形態・手法等	胎土	色調：内/外
		口径	底径			
1	黑色土器・碗	●158	7.1	54 (内) 黒灰褐色、(内面) ミガキ面(高台)ヨコナギ、口縁1/4底3/4残	微緻	黒/黒褐色～白
2	土師質・碗	●152	6.3	39 (内) 黒・斜面ガラス、外底(高台内) カリヨコナギ 口縁1/4底3/4残	微緻	暗灰褐色
3	土師質・碗	●153	6.3	(内) 黒・斜面ガラス(高台内) カリヨコナギ 口縁1/4底3/4残	微緻	淡灰褐色～黒/淡黄褐色
4	土師質・碗	●116	●5.5	48 (内) 黒・ミガキ面(高台内) ヘラナギ、口縁1/4底3/4残	粗緻	打抜き
5	土師質・碗	8.9	6.2	16 (内) 黒(土上げナギ) 黒ヘラナギ	微緻	淡灰褐色
6	土師質・碗	9.0	7.0	13-16 (内) 黒・スス(底) ヘラナギ 緩回転ナギテ、板压痕、ロクロ回転左	微緻	淡灰褐色
7	土師質・碗	●6.0	●6.5	16 (内) 黒・スス(底) ヘラナギ 緩回転ナギテ、板压痕、ロクロ回転左	微緻	淡灰褐色
8	土師質・皿	9.0	6.5	22 (内底) 土上げナギ(底) 緩回転ヘラナギ	微緻	淡乳白色
9	土師質・皿	9.0	6.5-6.8	16 (内・外) ヨコナギ(底) スス(底) 回転ヘラナギ	微緻	淡乳白色
10	土師質・皿	8.8	5.8-6.0	19 (内) 厚底(底) ヘラナギ切刃ナギテ、板压痕、ロクロ回転左	微緻	明灰褐色
11	土師質・皿	8.6	6.6	15-19 (内底) 土上げナギ(底) 回転ヘラナギテ、板压痕、ロクロ回転左	微緻	淡灰褐色
12	土師質・杯	-	-	30 (底) ヘラナギ後(底) 板なすナギ、口縁1/8残、ロクロ回転左	微緻	淡乳白色

図108 井戸4出土遺物(2)

は調査区南壁の〈4 b-1層〉に相当する面である。ただし後述のように、埋土の理解によっては上面の認識に変更が必要となる可能性もある。平面形は、上面が隅丸方形、中盤～底面が円形を呈する。断面形は逆台形であるが、井戸上端部において外側へ聞くかたちとなる。また標高0.7m付近で壁面が外側へゆるやかに開くのは、井戸にたまつた水の作用により壁面が崩落したためと考えられる。規模は現存長2.26m、幅1.78m、深さ1.76mを測る。底面標高は-0.43mである。井戸の底面は、湧水層を掘り下げて作られていた。

埋土は16層からなり、I群(1～14層)とII群(15～16層)という2つの群に大別しうる。I群は、井戸廃絶時の埋土と考えられる。I群は、I-1群(1～8層)とI-2群(9～14層)に細分できる。I-1群は、土質と堆積状況から、1・2層：暗黄褐色砂質土、3・4層：淡灰色砂質土、5・6層：淡灰褐色砂質土、7・8層：濃灰褐色砂質土に分かれる。隅丸方形と認識した本造構の上面形は、I-1群によって規定されている。本造構は近世土坑分布域の縁辺にあたることと(第6節参照)、本造構の上面標高が他と比べて高いことを考慮すれば、I-1群は近世土坑と評価しうる可能性がある。この場合、平面が円形の井戸の上に、隅丸方形の近世土坑がつくられたことになる。ただし、I-1群埋土中から、近世の遺物は出土していないため、明確な結論付けは困難である。本書では、上半の埋土の評価によって、単体の井戸となる場合と、井戸と近世土坑の重複となる場合の2つの可能性があることを指摘し、今後の調査研究の進展を待ちたい。I-2層については、9～13層：灰

色粘質土と14層：黒色炭層に大別される。14層は、厚さ約20cmの炭層の堆積層である。この炭層がⅢ群直上に堆積することから、井戸廃絶にあたって火を焚く儀礼がなされたものと考えられる。Ⅱ群は、井戸底に堆積する層で、井戸廃絶時の最初に投入されたものか、あるいは井戸使用段階の埋土を含むものと考えられる。

遺物としては、上器および木製品が出土した。土器は約70点（小片含む）が出土し、その内訳は土師質土器碗6個体以上、土師質皿9個体以上、土師質杯1個体、鍋小片、甕小片、須恵器片となる。土師質皿が碗よりも主体となることが、土器からみた本井戸の特色といえる。木製品は、槌杖球（W7）と杓子状製品（W9）、曲物片（W8）がそれぞれ1点出土した。遺物の出土状況は次のような。炭層（14層）より上半において土師質土器皿（6）が出土した。炭層中からは、土師質土器皿（7）が出土した。炭層より下位の15層からの出土遺物はやや多く、土師質土器皿2点（5・11）および槌杖球（W7）が出土した。井戸底面からは、土師質皿2点（8・9）が口縁を合わせた状態で置かれていた。加えて、炭層より下位の層として取り上げたものに、ウマ中節骨1点がある。この他にウマの骨は出土していない。井戸における儀礼行為のひとつとして、骨の一部が使用されたものと考えられる。出土土器から、本遺構の廃絶時期は11世紀後半に位置づけられる。

井戸5（図109～112、図版15・17・21）

本遺構は第13次調査区北辺のBL50区に位置する。曲物が井戸側として据えられた状態で残存していた井戸である。検出面は〈5層〉である。溝16～19を切る形で本遺構は構築されていた。平面形が南北方向にいくぶん長い楕円形で、規模は長径2.13m、短径1.79m、深さ1.72mを測る。井戸側径（=曲物径）は0.60mとなる。底面標高は-0.42mである。断面形は逆凸形を呈する。上半部分の断面形がラッパ状に上方へ開くいっぽう、下半部分は垂直気味に掘り込まれるかたちとなる。井戸の底面は、一段内側に設けられ、涌水層を掘り下げて作られていた。

埋土は、堆積状況からⅠ群（1～22層）、Ⅱ群（23・24層）、Ⅲ群（25層・26層）に大別しうる。Ⅰ群は、井戸廃絶時の埋土と考えられる層で、Ⅰ-1群（1～20層）とⅠ-2群（21・22層）に細分可能である。Ⅰ-1群は淡灰色砂質土を中心とするが、標高が下がるにしたがい地下水の影響で粘質土となる。本遺構の上半部分の断面形態および上面形態を規定するのがこのⅠ-1群である。Ⅰ-2群は、淡黄緑色ブロックを含む粘質土で、井戸廃絶時における最初の段階の埋土と考えられる。同群22層中より、節抜竹が傾いた状態で出土していることから、井戸を埋めるに際して、最初に節抜竹を立てる行為がなされたものと考えられる。節抜竹は、腐食していたが長さ10cm、径3cmという短いものである。Ⅰ-2群埋土の堆積の特徴は、下面が曲物上端に達し、次のⅡ・Ⅲ群埋土を切るように見受けられることがある。埋土堆積後の作用によって埋土下面が中央に向かって落ち込んだ可能性も考えられるが、底面付近であるため、その可能性は積極的なものとはいえない。したがって、Ⅰ-2群埋土が投入される前に、曲物上端まで手が加えられたものと考えられる。Ⅱ群は、曲物内部に残る砂混じり粘質土であり、使用段階の堆積層の可能性がある土層である。Ⅲ群は曲物周辺の裏込め土と考えられる緑灰色粘質土であり、井戸構築段階の埋土といえる。Ⅲ群25層は曲物上端よりも上位に堆積することに注目すれば、井戸使用時には残存していた曲物の上にも別の曲物が重ねられていたと考えられる。このことは先のⅠ-2群埋土下面の様相とも整合的であり、曲物上端外面が4.5cm幅で厚みを減じていることも、曲物が上に重ねられていたことを示唆する。

曲物については、底板を取りはずした2個体（W10・11）が重ねられていた。2点の曲物は、下段（W10）が上下を逆にした状態、上段（W11）が正位の状態で重ねられている。下段の曲物は、その底面が井戸底よりも約8cm上に設置されていた。いっぽう上段は、裏込め土によって周囲が固められていた。なお、Ⅰ群埋土において、火を用いた井戸祭祀をうかがわせる炭層の形成はみられなかった。ただし、本遺構の埋没後、北半部を切る形で後述の土坑2が作られており、そこでは火を焚いた痕跡が明瞭である。両者については時期的にも接続しているため、両者の関連性もまた考慮する必要がある。

以上の堆積状況、および井戸の平面形・断面形を考慮すると、井戸廃絶の様相は次のように考えられる。ア) 本井戸の本來の断面形態をとどめるのは下半部分であること、イ) 2段の曲物の上に当初は曲物が重ねられてい

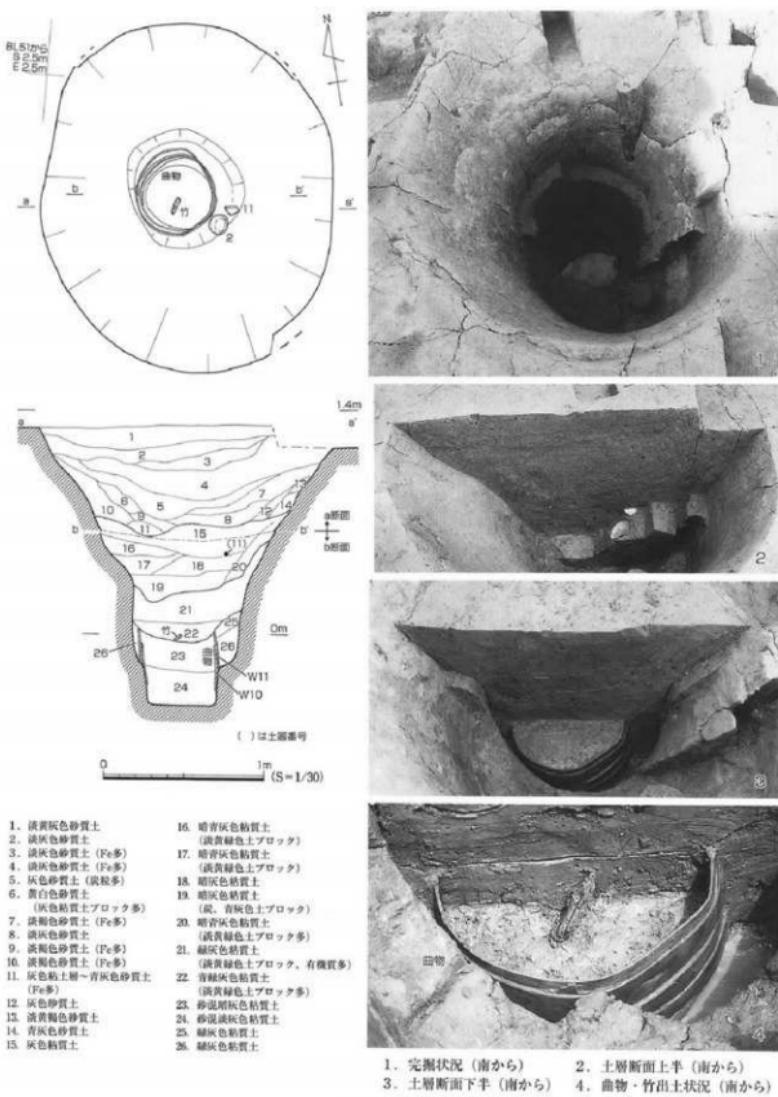
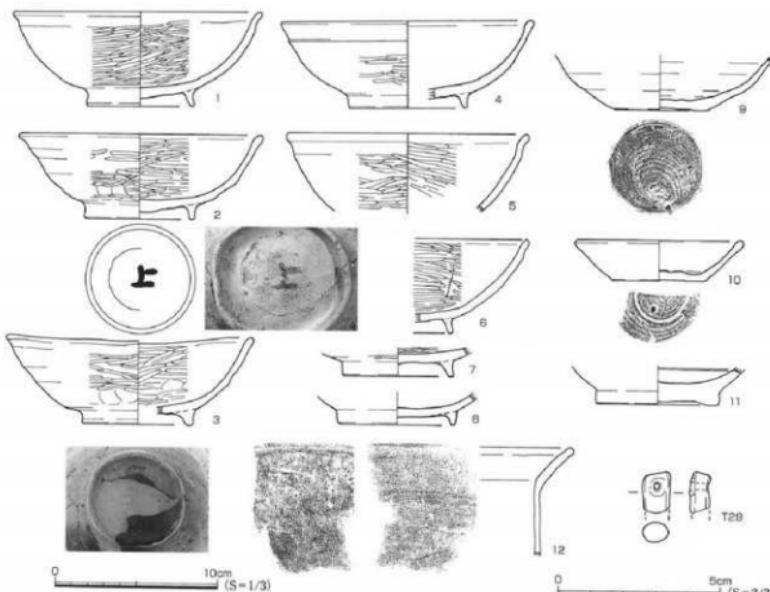


図109 井戸5



番号	種類・器種	法長(cm)			形態・手法等	胎土	色調：内(胎)/外(縁)
		口径	底径	器高			
1	土師質・楕	*15.0	6.7	-	(内)口付直面(内)スズの重ね焼き痕(外)スズ(高台)局部に焼痕、口縁1/4強	微妙・繊妙△	黒褐色/白
2	土師質・楕	14.8-15.3	6.7	8.3	(内外)口サエ後付(内)スズ(高台)局部に「上」の墨書	微妙・繊妙△	白
3	土師質・楕	15.1-15.8	6.8	5.0-5.5	(内)口サエ後付(内)スズ、底面、口縁1/4強(重み) 硬質	微妙・繊妙△	白~淡黃白
4	土師質・楕	*15.6	7.3	*5.4	(内)マツタケの焼痕(外)ミガラ、口縁1.8cm(1/4強) 硬質	微妙・繊妙△	白
5	土師質・楕	*15.0	-	-	(内)口サエ後付(内)強いヨコナギ、口縁1/4強、軟質	微妙・繊妙△	白
6	土師質・楕	-	-	-	(内)口サエ後付(内)強いヨコナギ	微妙・繊妙△	白
7	土師質・楕	-	6.8	-	(内)ミガラ、底面(重み)スズ、3.4cm	微妙・繊妙△	白~淡桃白
8	土師質・楕	-	7.2	-	(内)口サエ後付(内)強いヨコナギ、底面(重み)スズ、3.4cm	微妙・繊妙△	淡灰白
9	須恵器・楕	-	5.6	-	(外)絞輪サグレ(内)素面(外)ロクロ回転左	微妙・繊妙△	淡黃白
10	須恵器・楕	*10.4	*5.6	2.5	(内)ココナギ(外)口縁に重ね焼き痕(重み)口縁1.8cm(1/3強)	微妙・繊妙△	灰
11	白磁・楕	-	7.5	-	(内)粗面(高台)削り直し面台、無輪、被熱、1/2強強	精良	白(口)オリーブ淡灰白
12	土師質・楕	*20.0	-	-	(内)ハケ、スズ(外)オキナ・ハケ、スズ△、口縁1.8cm	微妙・繊妙△	淡灰白

番号	器種	最大長(cm)		最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特徴	胎土	色調
		最大長(cm)	最大幅(cm)						
129	土拂	-	-	1.7	1.2	5.2	ナテ・両面空孔	稍良	淡乳白色

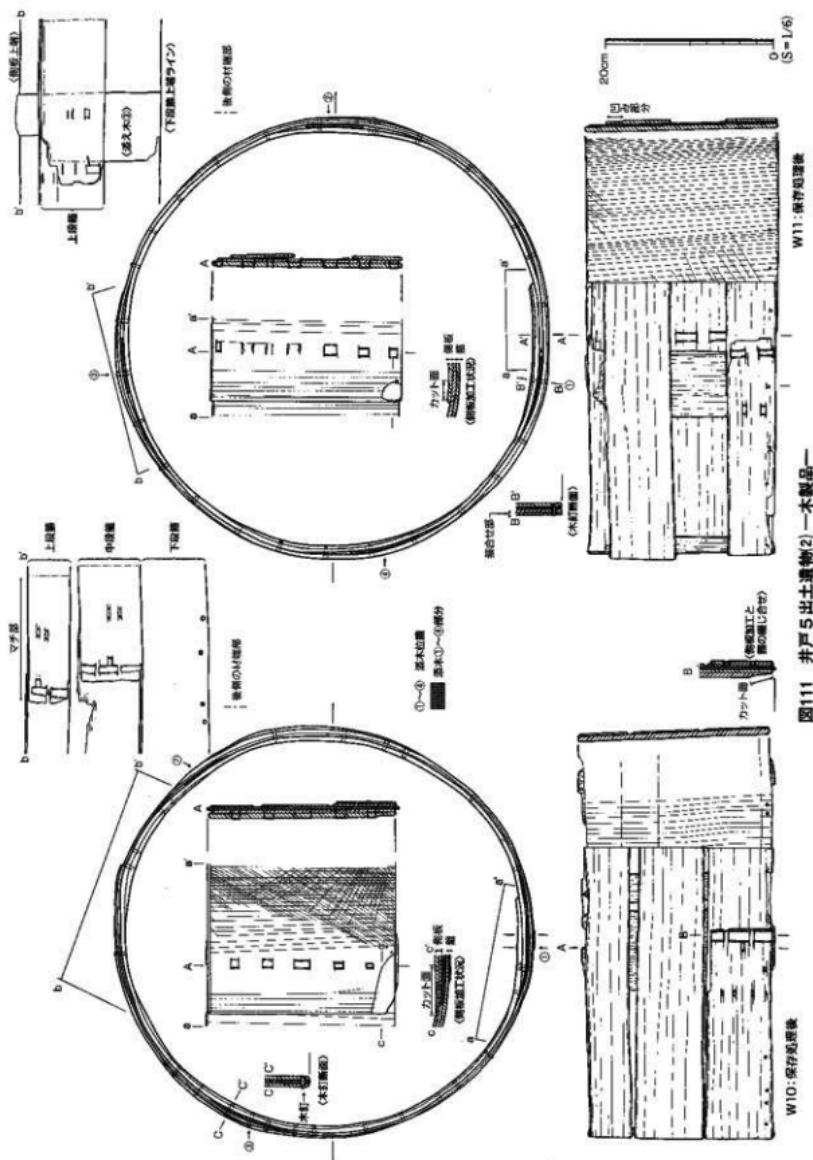
図110 井戸5出土遺物(1)

たこと、ウ) 井戸底絶時に曲物の一部を取り出すために井戸の壁面を壊したことが推定される。

出土遺物は、土師質土器楕7個体以上、土師質皿小片、土師質鍋小片、須恵器皿1個体、須恵器楕1個体、須恵器片、瓦器楕小片、白磁片1点、土鍤1点、節抜竹1点、井戸側の曲物2点である。白磁片(11)と、底面に「上」の墨書を有する土師質土器楕(2)は15層中において出土した。曲物は、上段・下段とともに類似した構造となる。これら曲物は、鹿田遺跡第7次調査出土の12世紀末～13世紀初頭の曲物^⑪と、規模(最大径50.8cm・最大高31.6cm)や添え木使用の点で類似する。本遺構の廃絶時期は、出土土器より11世紀後半と判断される。

(光本)

註 1 山本悦彦編2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告23 岡山大学理歴文化財調査研究センター



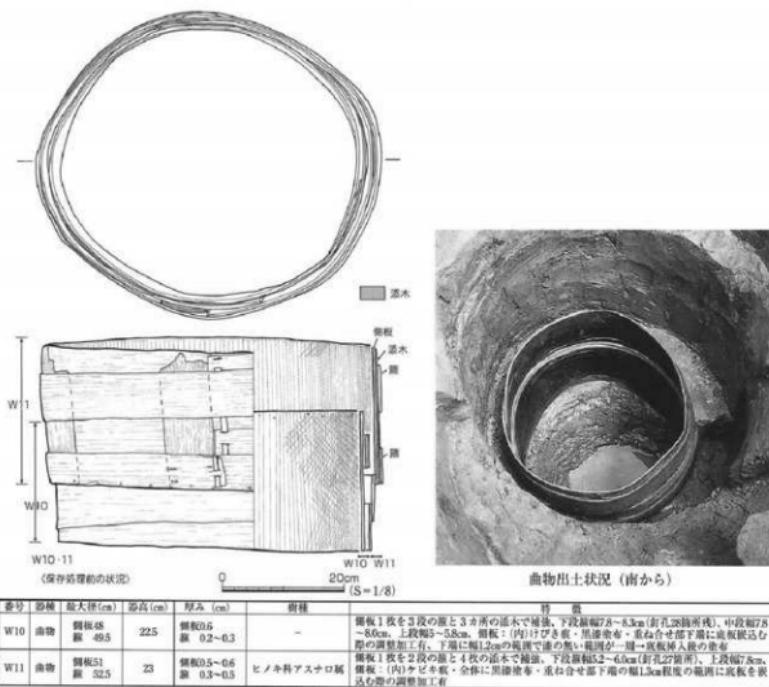


図112 井戸5出土遺物(3)-木製品

井戸6 (図113)

調査区東半中央、BN47区の(5層)で検出した。検出面の標高は1.26mである。上面形は南北方向にやや長い楕円形に近い梢円形を呈し、長径約2.16m、短径約1.88mである。底面の形状も上面同様、南北にやや長い梢円形を呈し、長径0.83m、短径0.68mである。断面形は標高0.5m付近から下方はほぼ垂直で筒状を呈するが、上半部は上方に大きく広がり、全体ではY字状となる。底面標高は-0.53mで、深さは約1.78mである。

埋土は13層に分層した。井戸廃絶時以降の土層(I群)、使用時の堆積土を含む可能性がある(II群)に大別され、I群はさらに細分できる。I-1群(1層)は炭・焼土塊を多く含む層で上面に人頭大的礫がある。井戸の中心部に広がっており、井戸埋没の最終段階に火を用いた祭祀が行われた可能性を示す。I-2群(2~4層)は砂質を帯びる黄褐色土であり、炭・焼土粒・ブロック・土器片等の包含物を多く含む層である。レンズ状の堆積状況を示す。I-3群(5~9層)は灰茶褐色砂質土を主体とする土層である。この一群は東から西に向かって堆積が進行するという特徴がみられる。いずれも黄褐色砂質土ブロックや灰褐色粘質土ブロックを含む包含物の多い層であり、そのうち6層は炭・焼土を多く含む層である。火を用いた祭祀行為が行われた可能性もある。8層は井戸下半の筒状部から連続して縦位に立ち上がる層界がみられ、明黄褐色土ブロックを含むものの、井筒等の構造物を備えておらず、井戸廃絶時に投入されたものと考えられる。I-4群(10~11層)は灰黄色粘質土

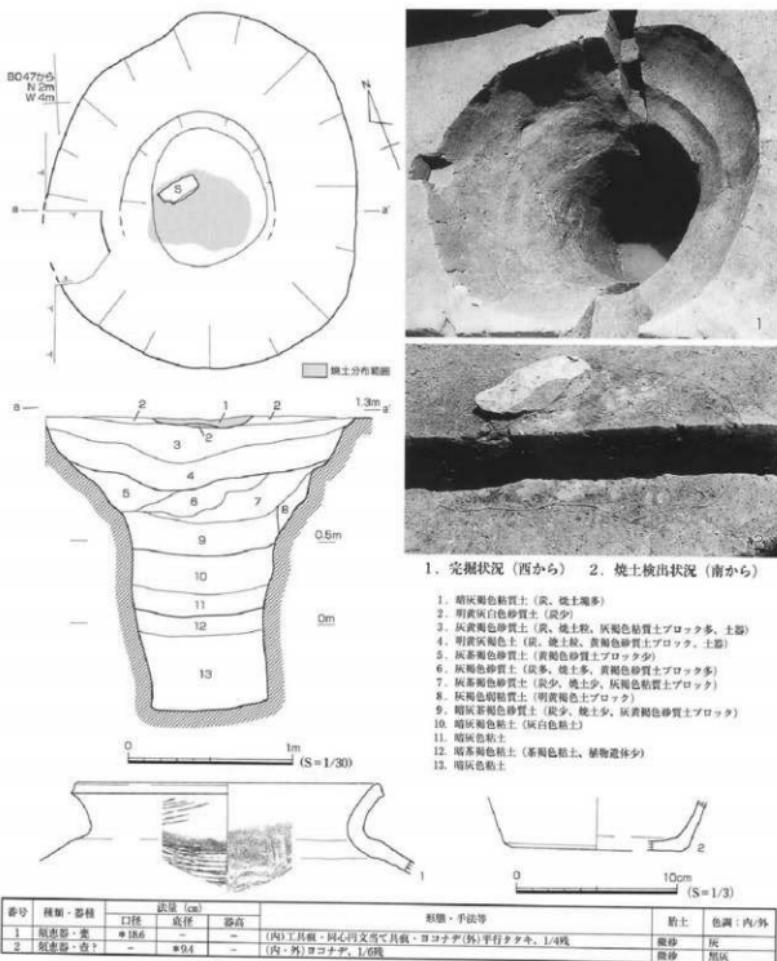


図113 井戸6・出土遺物

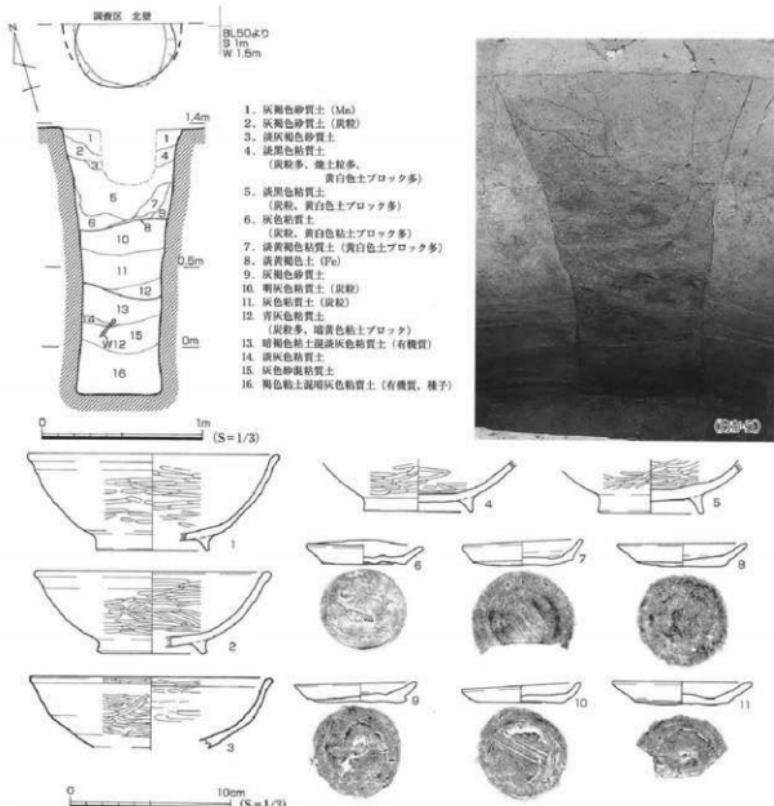
ブロックや灰白色粘土を含む層である。II群（12～13層）は粘性の強い粘土である。12層は植物遺体を含んでおり、使用段階の堆積土の可能性もある。

遺物はコンテナ1/2箱分が出土した。須恵器2点を図示したほか、土師質土器碗3片、杯小片20片、鍋9片、竈1片、須恵器8片、亀山焼1片がある。出土遺物から、本遺構の埋没時期は12世紀代と考えられる。（野崎）

調査の記録

井戸7 (図114、115、図版16・20)

本遺構は、第13次調査区北壁際の、BL50区に位置する。平面における検出面は〈5層〉であるが、調査区北辺の側溝掘削中に土師質土器等が出土し、本遺構の存在がわかった。北壁の土層観察の結果、本井戸は〈4層〉上



番号	種類・器種	測量 (cm)			形態・手法等	胎土	色調：内/外
		口径	底径	厚さ			
1	土師質・碗	15.7	7.1	6.0	(内)ミガキ(外)ナサニ・ミガキ(高台)ヨコナギ・1/4縁	粗砂・細砂土	淡青白
2	土師質・碗	14.6	6.6	5.2	(内)重ね焼(外)ナサニ・ナサニミガキ(高台)波美南製直瓶	粗砂・細砂の塊状	淡青白
3	土師質・碗	15.0	-	-	(内)・外)ミガキ	粗砂・細砂	淡青白
4	土師質・碗	-	6.8	-	(内)ミガキ少・ヌス(外)ナサニミガキ(高台)ヨコナギ・1/4縁	粗砂	淡青白
5	土師質・碗	-	6.6	-	(内)外)ミガキ・ヌス(外)ヨコナギ(高台)ヨコナギ・1/4縁	粗砂	淡青白
6	土師質・瓶	7.5	5.1~5.4	1.1~1.5	(内)被焼？(内)波美南製(外)ヘラキリ・瓶直瓶、ロクロ回転左	粗砂・細砂の塊状	淡青白
7	土師質・瓶	7.5	6.2	1.2~1.7	(内)波美南製(外)ヘラキリ	粗砂・細砂	白/淡青白
8	土師質・瓶	8.0	5.5	1.2~1.5	(内)波美南製(外)ヘラキリ	粗砂	淡青白/淡灰褐色
9	土師質・瓶	7.7	5.6~5.9	1.1~1.3	(内)・外)被焼の可逆性あり(外)ヘラキリ・瓶直瓶、口縁3/4周	粗砂・赤色泥	青褐色
10	土師質・瓶	7.5	5.5	0.8~1.0	(内)・外)アゲ(外)ヘラキリ・瓶直瓶、外)ヌス	粗砂	淡灰/暗灰
11	土師質・瓶	8.8	6.0	1.4	(内)・外)ヨコナギ(外)ヘラキリ直瓶、1/4周	粗砂	褐色

図114 井戸7出土遺物(1)

面より掘り込まれていることが判明した。本遺構の北側約3分の1は北壁中にあり、調査を行ったのは南側約3分の2の範囲である。平面形は円形と考えられる。上面規模は長径0.62mとなる。底面標高は-0.27mであり、深さ1.64mを測る。底面径は0.54mとなる。井戸の断面形は箱形で、井戸壁面が直線的となるが、底面においていくぶん裾広がりとなる。底面付近の幾面において、水位による明確な抉れは確認されていないため、こうした断面形が井戸掘削時の状況を反映していた可能性は残るが、底面の裾広がりとなる断面形については、水位の影響によって二次的に生じたものと解釈する方が妥当と思われる。井戸の底面は、湧水層を掘り下げる作られていて。なお、上面中央部分の擾乱は、中世段階のピットによる。

埋土は16層からなり、I群(1～14層)、II群(15・16層)に大別される。I群は井戸廃絶時に施された埋土と考えられる。これはさらにI-1群(1～9層)、I-2群(10～12層)、I-3群(13・14層)とに細分しうる。I-1群では、淡黒色粘質土となる4・5層および灰色粘質土である6層は炭粒を含むとともに、特に4層では焼土粒も多くみられた。それら周辺の7～9層は褐色系でしまりの堅い埋土であることから、火を焚く儀礼がなされたものと考えられる。I-2群もまた炭粒を含む埋土である。特に同群下位の12層において炭粒が多く堆積しており、この段階においても火を焚く儀礼の存在が窺える。一方、I-3群は、淡灰色粘質土を中心とする埋土であり、ここでは炭等の火を焚いた痕跡はみられなかった。13層から15層にかけて、短い節抜竹が傾いた状態で出土しており、井戸の廃絶にあたっての最初の儀礼行為がなされたものと考えられる。II群は、15層が灰色砂混じり粘質土、16層が有機質や種子を含む暗灰色粘質土であり、井戸廃絶時の最初に投入された埋土か、使用段階に堆積した土層を含むものと考えられる。

以上の埋土の堆積状況からみると、儀礼行為の順序は、節抜竹の設置(I-3群)→火を焚く儀礼(I-2群)→火を焚く儀礼(I-1群)であると考えられる。I-1群段階の方が、堅くしまった褐色系の土を炭層の周囲に形成することから、I-2群段階よりも強力な焼成がなされたことが推測される。

出土遺物は、土器類としては土師質土器8個体以上、土師質皿7個体以上、土師質片8点、土師質鉢片15点、甕片1点、木器としては節抜竹1点(W12)と箸2点(W13・14)が出土した。陶磁器類の出土はない。本遺構の廃絶時期は、出土土器より12世紀前半と判断される。なお、本遺構の調査終了後に、断面の測量を取り実施し、展示会等の公開活動や教育・研究において活用している。

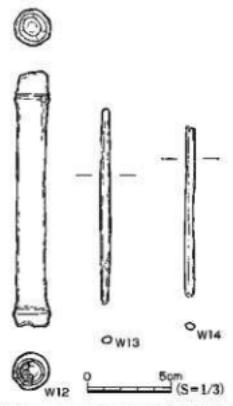


図115 井戸7出土遺物(2)―木製品―

井戸8(図116・117、図版20)

本遺構は、第13次調査区北西隅付近のBL51区に位置する。検出面は〈5層〉である。平面形は、上面がやや不整な円形で、底面についてはほぼ円形を呈する。上面規模は、長径2.28m、短径2.19mを測る。底面標高は-0.35mで、深さは1.72mとなる。断面形は逆凸形を呈する。底面に近い9層以下の断面形が簡略で、かつ底部部分で袋状に裾広がりとなるのに対し、8層より上部については外側に大きく開くかたちとなる。10層以下の断面形については、水位の影響により壁面が崩れたことによるものと判断される。井戸の底面は、湧水層を掘り下げる作られていて。

埋土は10層からなり、堆積状況から1～6層と7・8層、9・10層に大別される。青灰色～淡灰色砂質土となる1～6層は、その断面形からみれば、井戸廃絶後に掘り込まれた可能性がある。その場合、掘り込みの時期に

番号	種類	最大長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚さ(cm)	断面形
W12	節抜竹	15.3	2.2	2.3	竹
W13	箸	(11.7)	0.6	0.4	ビノキ
W14	箸	(10.25)	0.6	0.4	スギ

断面形を切削加工により真直ぐ取り、(所定)細かく取り加えし不規則な六角形、上端部陥化

断面形を切削加工により真直ぐ取り加えし不規則な六角形

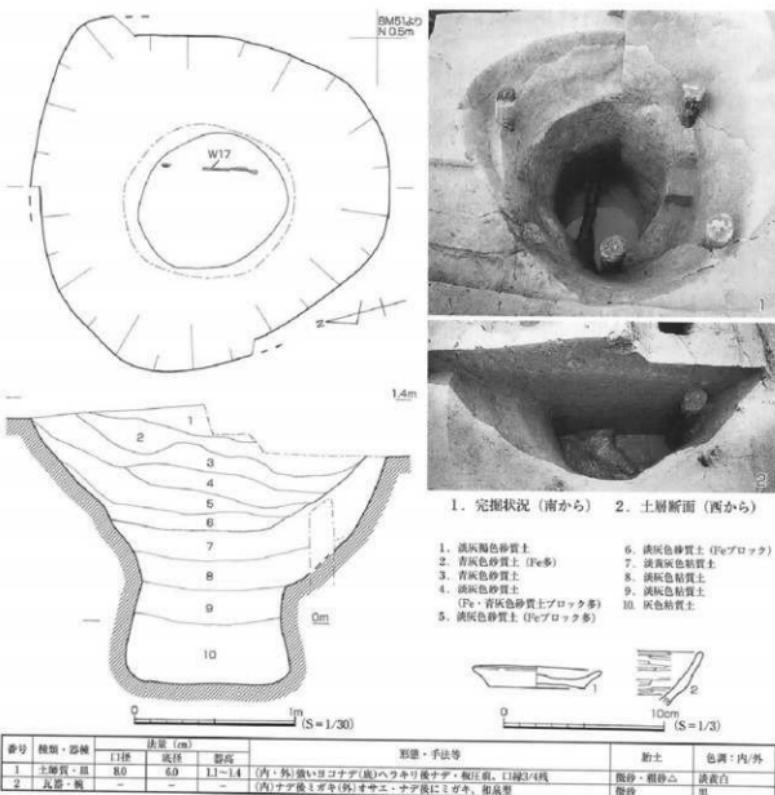
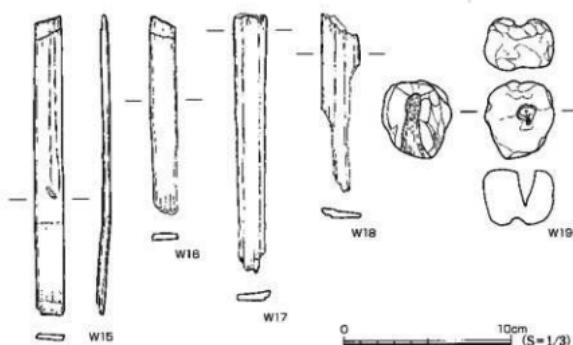


図116 井戸8・出土遺物(1)

については、近世以降の遺物が発見されていない点、付近にも近世土坑が認められないため、古代末・中世段階の可能性が高い。ただし、平面的に1~6層のまとまりを認識するには至らなかった。また1~6層において、特別な儀礼痕跡や遺物は認められなかったため、井戸埋め立て後に掘り込む際の意図を推定することは難しい。一方、7・8層については、7層が1~6層によって切られるものの、その堆積範囲は南側に断面形がふくれる部分が含まれる。この南側の断面形が、本来の掘り形であったのか、二次的なものであったのかについては、いずれの可能性も想定しうるものであり、どちらかに断定しうる材料はない。ただし、それでも、7層が現状の上面まで堆積が認められることから、いつの段階かは確定しえないものの、その標高から、廃絶時に投入された埋土と考えられる。9・10層は、井戸の断面形が筒状となる底面付近に堆積しており、井戸廃絶段階に投入された埋土か、あるいは使用段階の埋土と考えられる。なお、本道構では、井戸側に伴う痕跡は発見されていない。

出土遺物は、土器類としては土師質土器碗片15点、土師質皿1個体、土師質杯片5点、土師質鍋片7点、須恵

器片2点、瓦器片3点、木器としては木片5点および不明製品1点が出土した。陶器器類の出土はみられない。



本片については、W15～18が籌木の可能性がある細長い板材で、W17・18が底面、W15・16が10層中から出土した。また出土位置はわからないがW19は軸穴と有する面取り加工がなされた不明製品である。本井戸は、他の井戸と比べて遺物量が少ないものといえる。本遺構の廃絶時期は、出土土器より12世紀中頃までと判断される。

番号	形・質	最大長(cm)			測定	特徴
		最大幅(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)		
W15	加工無ある板材	(18.0)	1.7	0.3	木と鐵	板面取り、西側縁・東側は平滑に加工し、削り取りの切れ目痕あり
W16	加工無ある板材	(11.9)	1.5	0.4	木と鐵	削り取り、西側縁・東側は平滑に加工し、削り取りの切れ目痕あり
W17	加工無ある板材	(13.6)	(19.0)	5.6	木と鐵	(削り取り) 平面に加工し(運搬) 手で取るの切れ目痕あり
W18	加工無ある板材	(10.7)	(2.3)	4.25	木と鐵	削り取り、W17と同一個体の可能性あり
W19	不明木製品	4.6	4.1	3.1	ツバギ風	表面に孔(貫通せず)、裏面に薄次加工痕あり

図117 井戸8出土遺物(2)―木製品―

井戸9 (図118)

本遺構は第13次調査区の東側、BO46区に位置する。検出面は〈4層〉である。遺構の北側部分は、調査区中央を東西へ走る建物基礎の攪乱の影響で、調査時には失われていた。平面形は、中端より底面に至る箇所においては方形を呈する。また、上面部分についても、検出標高に差があるため判然としないが、最も検出標高が高い西側部分においても方形状をなしている。現状における規模は、長さ1.70m、幅1.22mを測り、上面の復元長は2.12mとなる。断面形は逆台形を呈する。14層西側の壁面がやや外側にふくれるのは、水位の作用によって壁面がいくぶん抉れた結果と考えられる。底面標高は-0.43m、深さは1.70mを測る。井戸の底面は、湧水層を掘り下げて作られていた。

本遺構については、検出当初は1～5層部分を近世土坑として認識していたが、その後の調査の過程で、1～5層部分が下部の土層と連続するものであったことから、一連の井戸であるものと認識するに至った。当初近世土坑と認識したのは、本遺構の位置が近世土坑が多くみられる場所にあったという点と、それら近世土坑が〈4層〉において検出されていたことによる。しかしながら、当初の遺構範囲が下部の井戸の範囲と連続すること、および両者の埋土の類似性について、調査過程において判明したことから、最終的には一連の井戸として理解がなされたものである。なお、1～5層部分の調査時においては、埋土中から近世に属する遺物は出土していない。

埋土は16層からなり、土層の性格から、I段階(1～14層)とII段階(15～16層)とに大別される。I段階は、1・2層を除けば、井戸廃棄時に投入されたと考えられる埋土である。淡黒褐色砂質土をなす上層の1・2層は、井戸廃棄後に生じた渦巻き流入した土層である可能性が高い。3～14層は、全体的にブロックを含む層が多い一方、炭層や焼土の厚い堆積はみられない。II段階は、15層が砂混じり粘質土であることから、使用時に堆積した埋土であるものか、井戸廃棄時の最初の埋土と判断される。なお全体の土層を通じて、井戸側にかかる痕跡はみつかなかった。

本遺構からは、土器がビニール袋で1/4袋、破片数で10片程度出土したのみである。こうした出土遺物の少なさは、炭・焼土の堆積が土層において認められたこととも関連して、井戸の使用時および廃棄時における土器

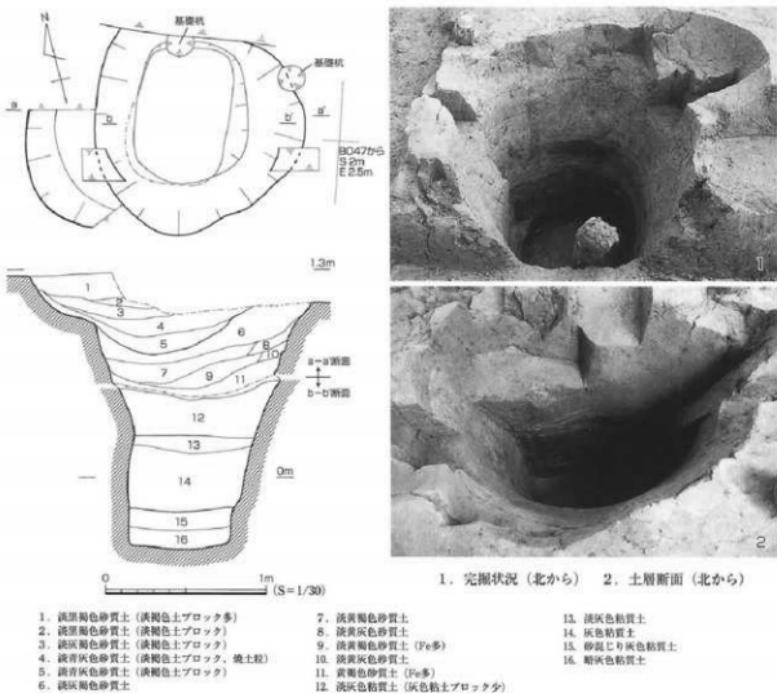


図118 井戸9

の儀礼的使用が、本井戸においては希薄であったことを示すものといえる。土器の内訳は高台付土器・埴小片と須恵器片であるが、小片のため実測に耐えうるものではなかった。本遺構の時期は、出土土器が少ないためおおよその比定となるが、12世紀～13世紀前半と考えられる。

井戸10（図119・120）

本遺構は第13次調査区の東側張り出し部分の隅、BM～BN45～46区に位置する。検出面は〈4層〉である。本遺構は約1/4強が調査範囲内にあったため、その箇所について調査を実施した。本遺構の西側上面ラインについては、側溝設置により本遺構調査時には失われていたため不明である。平面形は円形と推定される。上面の残存長は2.30m、残存幅2.00mである。検出した平面形から本遺構の中心部分を推定した結果、井戸の中心は調査区外に位置するものと考えられる。上面の復元径は約4.36mとなる。この復元径は、今回報告の井戸の中では最大のものとなるが、それが、井戸掘削当初の掘り形であったかどうかは、後述のように検討の余地を残すものである。断面形は、逆台形の範疇に含まれるが、掘り形斜面が二段の階段状を呈することも特徴的である。現状の底面の標高は-0.41m、深さは1.87mとなるが、調査範囲の制約から確実な井戸の底面を押さえることはできなかつた。ただし5層底面付近において水がしみ出る状況を確認したため、調査終了面である-0.41m付近は、井戸底面に

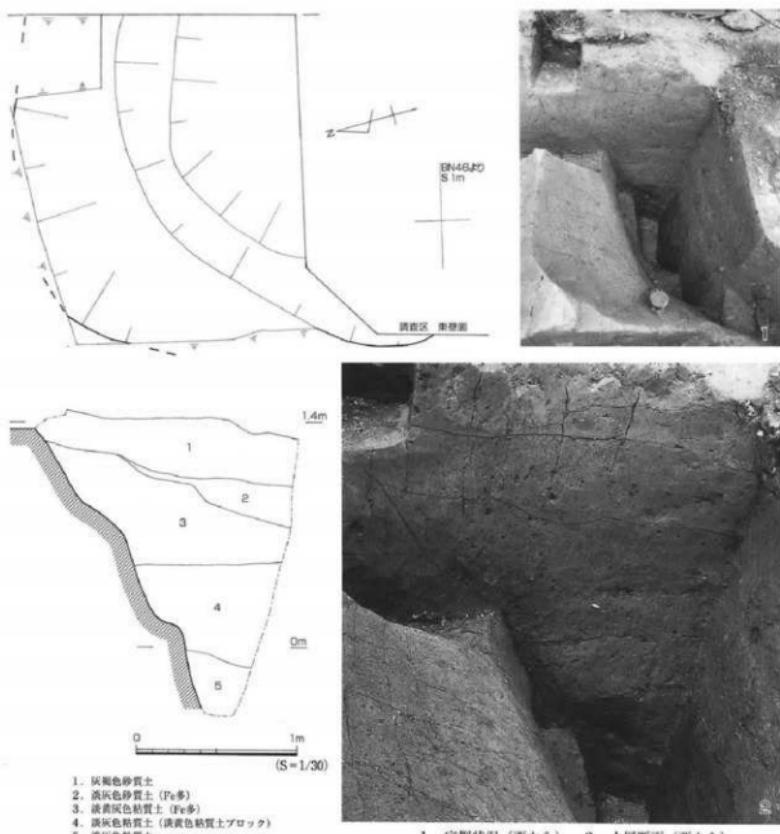


図119 井戸10

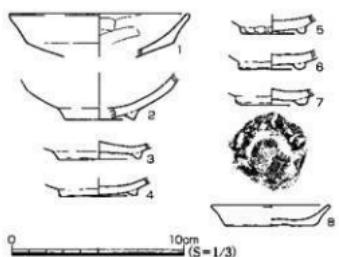
近いものと判断された。

埋土は5層からなる。井戸底面が確定的なものではないことから、井戸廃絶時に投入された埋土や、使用段階の埋土といった、埋土の性格により区分については厳密には決しがたい。ただし、堆積状況から判断すれば、灰褐色砂質土の1層および淡灰色砂質土の2層については、最終的に投入された埋土と考えられる。また、ほぼ水平堆積をなす3層、および粘質土ブロックを多く含む4層も、投入された埋土の可能性があるといえる。5層は、4層と色調が類似する淡灰色粘質土であるが、現状の遺構底面に堆積するものである。5層が上述の埋土と同じ性格か、あるいは井戸使用時のものかについては判然としない。なお、今回の調査範囲においてはいずれの層でも、儀礼の痕跡を示唆する炭層が厚く堆積する状況は認められなかった。また、井戸櫛の存在を示すような土層

の堆積も確認されなかった。

出土遺物は、土師質土器碗10個体以上、皿1個体以上、鏹9小片、須恵器片少星である。これらの遺物は、特定の土層面に集中して出土したものではなく、散在的な出土状況であった。陶磁器や木製品の出土はみられない。本遺構の廃絶時期は、出土土器より14世紀初頭に位置づけられる。

以上のように、遺構の約1/4の範囲のみの調査であったため、現状で本遺構の全容を知りうるのは難しい側面が



みられた。特に、最大規模となる復元径や、段状になる断面形状が、本来の井戸の掘り形を示すものかどうかについては、現状において確定することは難しい。先述の井戸5のように、井戸廃絶時に井戸側の再利用のために井戸周辺を掘削したと推定される事例もあるためである。こうした観点からみれば、井戸構築時の埋土が確認されなかつことは、井戸5に類する状況を想起させる要素としても評価しうる。したがって、本遺構の全体的構造については、今後の調査における重要な課題となろう。

(光本)

番号	種類・部材	法面 (cm)			形態・手法等	出土	色調：内/外
		口径	底径	高さ			
1	土師質・碗	*30.4	-	-	(内) 1.5ナマ(外)一部ハラキリ痕残る、1.8cm	黒砂	淡灰白
2	土師質・碗	-	*4.0	-	(内) ナマ(外) 薄成形底無、高台	黒砂	淡灰色～淡黄褐色
3	土師質・碗	-	4.8	-	(高台)ヨコナギ(高台内)オサキか、1.3cm	黒砂・粗砂△	灰黄白
4	土師質・碗	-	4.5	-	(内) ナマ(外)ヨコナギ(高台)ヨコナギ、1.2cm	黒砂・粗砂△	淡灰白
5	土師質・碗	-	3.8	-	(内・外)ナマ(高台)折十縁を不整形に貼り付け・オサエ	黒砂	淡灰白
6	土師質・碗	-	3.5-3.9	-	(内・外・高台)ナギ、7.7cm	黒砂・細砂△	淡灰白
7	土師質・碗	-	3.7	-	(内)ナマ(高台)ナギ・接地面にモミ板あり、1.2cm	黒砂	白
8	土師質・皿	*6.9	5.5	1.3	(内・外)ヨコナギ(底)ハラキリ底ナギ、口縁1.3・底3.4cm	黒砂	淡乳白

図120 井戸10出土遺物

井戸11 (図121)

調査区中央、BO49区で検出した。埋土と周辺の土層との識別が困難で、(5層)上面から約0.1m掘り下げた段階で検出した。検出面の標高は約1mである。井戸本体の南側には、すり鉢状にひらく土坑状の落ち込みが確認された。当初、井戸にともなう掘り込みとも考えたが、前述のように(5層)上面では周囲の土層との差が小さく層界も不明瞭であり、人為的な掘り込みではない可能性がある。また、形状も検出したラインからは長楕円形に復元されることや、中心が井戸の中心とも合致しないことから、井戸11との関連を認めるることは困難であると判断された。このような理由から本報告では、井戸11の南側に土坑状の落ち込みが存在した可能性があることをここであわせて報告しておく。

上面の平面形は東西0.93m、南北は南側が断ち割りで失われ、0.86mとなるが、ほぼ円形に復元される。底面は標高-0.37mにある。底面の平面形は北半を断ち割りで失い、また壁面を大きく抉る不整形な部分もあって全形を確認できないが、確認できた範囲や断面の幅を参考にすれば、径約0.65mの円形に復元されよう。断面形は大きくはU字形を呈するが、壁面には凹凸がある。上半は直径約0.9~0.95mではほぼ垂直に掘削され、標高0.25~0.4mで屈曲して段をもつ。この段より下半は再びほぼ垂直な掘り形を有する。標高約-0.2m付近から底面までの約0.2mの範囲では壁面を抉るようなふくらみを有しており、水の作用による抉れと考えられる。

埋土は4層に分層している。1層はレンズ状に堆積する砂質土層である。流入土と考えられる。2層は少量の炭や多量の白色土ブロックを含む淡灰色粘質土層で、平面・断面図に示した約15~20cm大の疊を含むなど包含物の多く認められる層である。人為的に埋められた土層であると評価できよう。3・4層は淡灰色~灰色粘質土層で、混入物の希少な粘土層である。ただし4層では標高-0.1~0m前後に粘土層の間に薄く植物遺体の堆積層がレンズ状に観察されており、分層は困難であったが、4層の下半部は使用段階での堆積の可能性もある。

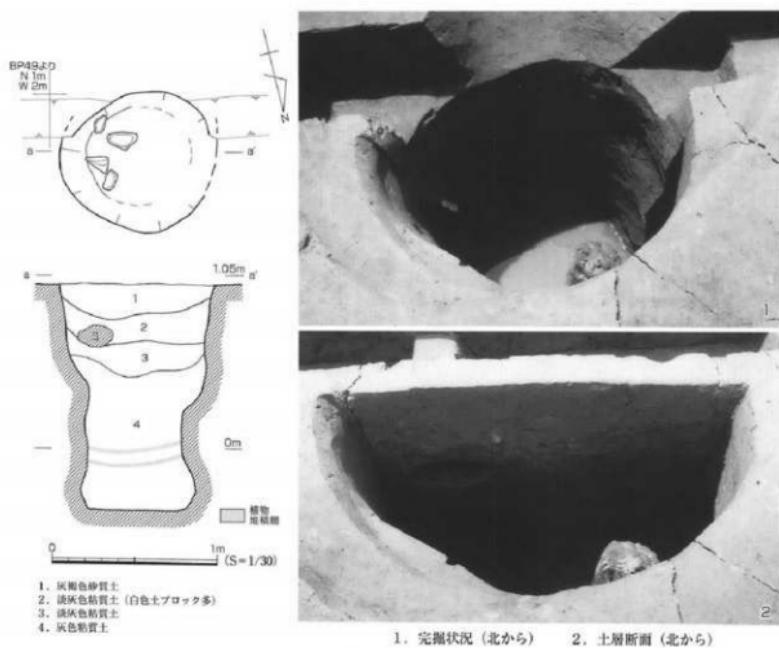


図121 井戸11

遺物は土師質土器碗、同皿、鍋の小片20片が出土しているが、いずれも固化するにはいたらなかった。本遺構の時期を絞り込む材料は多くないが、検出面や出土遺物からは13世紀代の遺構と推定される。

(野崎)

c. 炉

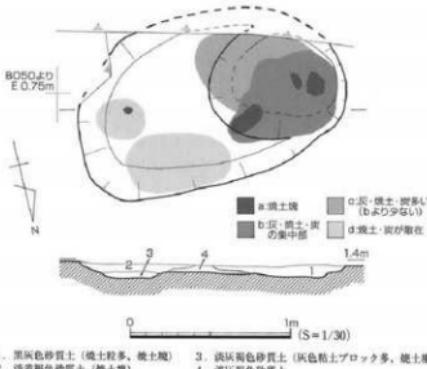
炉1 (図122)

本遺構は調査区中央部西寄りのBN-BO49-50区に位置する。(5層)において検出した。平面形は、隅丸長方形をなすもので、長さ1.66m、残存幅は1.02mを測る。断面形は浅い皿形であるが、底面が凸凹をなす。底面標高1.30m、深さ0.09mである。

本遺構の特色は皿形をなす断面形態とともに、土層中に焼土塊や炭層・灰層が多く含まれることにある。これらのことから、本遺構について炉として機能していた可能性が高いものと判断される。ただし、その具体的用途については、焼成物等が検出されておらず、定かとはいえない。焼土や炭の平面的分布範囲は、大きくみれば西側と東側の2カ所に分かれる。西側は、焼土塊や灰・炭の分布が濃密であるのに対し、東側はそれらが散在する状況であった。すなわち、西側は焼土塊(範囲a)と灰・焼土・炭の集中部(b)、および灰・焼土・炭の多い範囲(c)からなる。一方、東側は、焼土・炭が散在する程度となる(d)。

埋土は4層に分かれる。黒灰色砂質土である1層は、西側の焼土塊等が形成された際の土層に該当する。淡黄

褐色砂質土の2層および淡灰褐色砂質土の3層は、東側の焼土等分布域が形成された時の所産である。2・3層堆積箇所は、1層時よりも約5cm深く掘り込まれた部分にある。淡灰褐色砂質土である4層は、順序としては1~3層形成前のものである。4層には目立った焼土等が含まれていない。4層については、1~3層以前の活動時において形成されたものか、あるいは整地等の役割が想定される。



1. 黒褐色砂質土(燒土跡多、炭土塊)
2. 淡黄褐色砂質土(燒土塊)
3. 淡灰褐色砂質土(褐色粘土ブロック多、炭土塊)
4. 淡灰褐色砂質土



番号	種類・器種	法量(cm)			形態・手法等	動土	色調：内／外
		口径	底径	基高			
1	土師質・瓶	-	*6.6	-	(内)ナデ、直ね焼き痕(外)ナデ(高台)ヨコナデ、1/6西	微細・細緻△	灰白・淡黃白
2	土師質・瓶	-	6.5	-	(内)直ね焼き痕(高台)ヨコナデ	微細・細緻△	灰灰～淡黃白/灰白

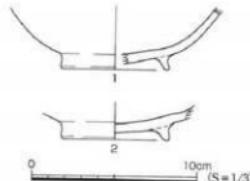
図122 炉1・出土遺物

d. 土坑

土坑2 (図123、図版15・17)

本遺構は、調査区北辺のBL50区に位置する。検出面は〈5層〉である。本遺構は、井戸5に重なる形で築かれた土坑であり、その北半部の埋土を切るように塗かれていた。平面形は梢円形をなす。長さ1.44m、幅1.18mを測る。断面形は、レンズ形をなす。底面標高1.00m、深さ0.40mとなる。なお、本遺構の中央部付近は、中世の柱穴の掘り込みにより失われていた。本遺構の上面において、中央付近に炭鉱の集中域を検出した。炭集中は、埋土の1層にあたる。ただし、被燃による土の変色や硬化は認められなかった。この炭集中範囲を中心に、土師質土器瓶と壺片、鍋片、角縁がまとまって出土した。これらの炭と出土遺物は、儀礼的行為の反映とみられる。

埋土は3層からなる。1層は、暗緑灰色砂質土であり、炭集中域に関連する炭粒が多く含まれる土層である。



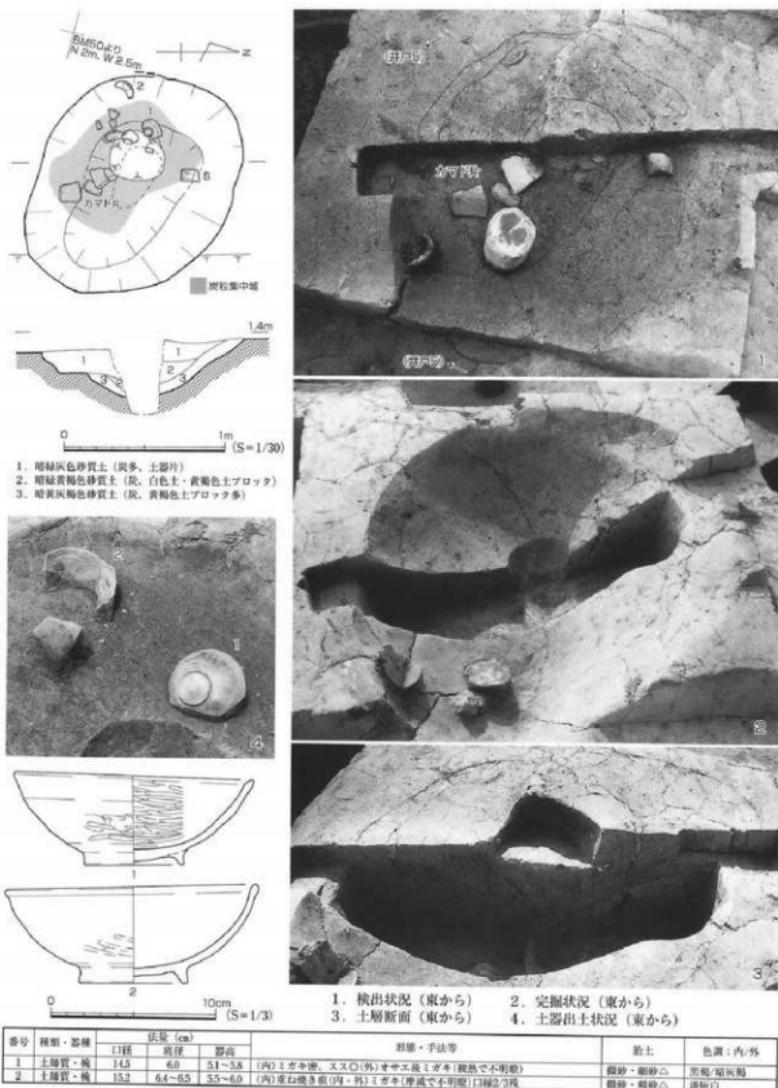


図123 土坑2・出土遺物

2・3層にも炭粒は含まれるが、それらは1層に比べれば散漫なものであった。2層は暗緑黃褐色砂質土で、レンズ状に堆積する。3層は、最初の埋め土であり、黄褐色ブロックを多く含む暗黃灰褐色砂質土となる。

本遺構からは、土師質土器輪2個体と小片約40点、銅片10点、甕片1点、須恵器片3点、和泉系の瓦器輪小片2点が出土した。本遺構の廃絶時期は、12世紀初頭と考えられる。時期からみると、本遺構は井戸5と近接する時期にあり、両者の密接な関係が想起される。井戸5では炭層が認められなかつたことを考慮すれば、井戸5廃絶の一環において火を焚く儀礼の専用土坑として、本遺構がつくられたものと評価される。(光木)

土坑3(図124)

調査区南半中央、BQ48・49区で検出した。(5層)上面で検出しており、検出面の標高は134mである。

上面の平面形は円形を呈し、径1.45~1.47mである。標高約0.85m前後の上端での平面形は、南北2.14m、東西1.78mのやや不整な隅丸方形を呈する。底面の形状は南北0.5m、東西0.42mの方形を呈する。本土坑の平面形は、上面での掘り形形状が円形で傾斜変換線以下の掘り形が方形を呈する点が特徴的である。枠状の構造物を設置していた可能性も考えられるものの、調査時の所見では該当する痕跡はみられなかった。断面形はほぼ逆台形を呈している。方形を基調に掘削された底面から標高0.85mまでは急角度で直線的に立ち上がり、ここから上方に向かっては、やや傾斜を緩めて聞く形状をとる。底面は標高0.35mに位置し、検出面からの深さは0.99mである。底面が勇水層まで達しないことから、本遺構については土坑の範疇で考えている。

埋土は5層に分層している。1・2層はレンズ状に堆積し、炭や暗緑褐色土ブロックを多く含む暗緑褐色粘質土を主体とした土層で、土坑廃棄時の埋土と考えられる。3層の下面是東西とも傾斜変換点に接しており、凹凸がみられることなどから、これも土坑廃棄時の埋土と考えられる。4・5層は暗緑褐色粘土を主体とする土層であ

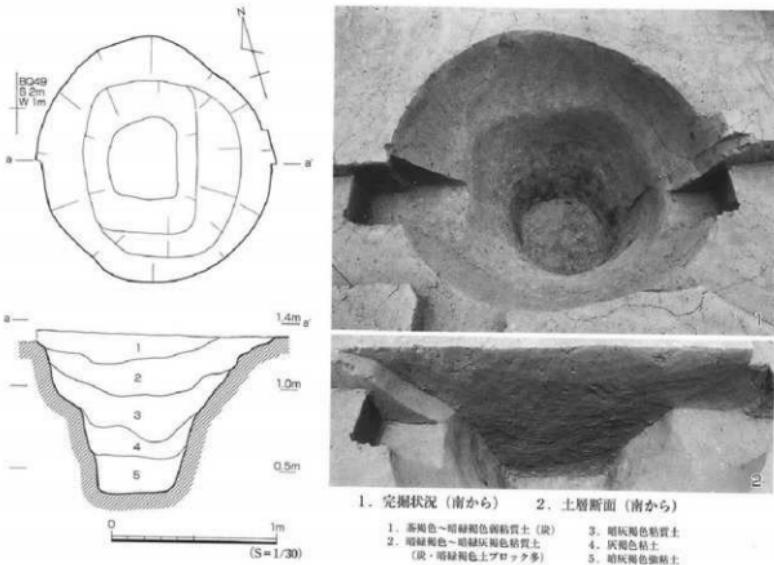


図124 土坑3

り、包含物はみられなかった。先述のように、4・5層が堆積する部分の土坑の掘り形は方形を呈しており、この部分に柱状の構造物が設置されていたとすれば、土坑の機能していた段階の堆積土であることも考えられる。

遺物は須恵器小片、土師質土器・鍋などの小片25点が出土したが、いずれも小片のため同化には耐えない。出土遺物や検出面から、本遺構は11～12世紀頃に属すると考えられる。

(野崎)

土坑4（図125）

本遺構は、調査区西半部、BN50区に位置する。検出面は〈5層〉である。中世の柱穴群の分布域に本遺構は所在するが、周囲の柱穴よりも規模が大きいものであるため、土坑として扱っている。平面形は梢円形を呈する。長さ0.60m、幅0.58mを測る。断面形はほぼ垂直に掘り込まれた箱形を呈し、底面標高は0.51mで、深さは0.65mとなる。

埋土は4層からなる。淡灰色砂質土を基本とするが、特徴的な使用状況を示唆するような土層は認められなかった。出土遺物は認められないが、検出面から11～12世紀以降のものと判断される。

平面形・断面形からみると、本遺構は柱穴と類似する。したがって、機能としては柱穴と同様に、柱状のものを立てるために掘り込まれた土坑であることが考えられる。

土坑5（図126）

本遺構は、調査区南半部、BP48区に位置する。〈5層〉上面において検出した。

平面形は梢円形で、長さ0.90m、幅0.73mを測る。断面形はレンズ形であり、底面標高0.94m、深さ0.16mとなる。

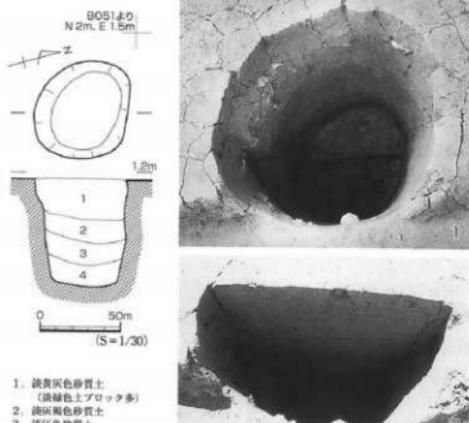
埋土は灰色砂質土の一層であり、(5層)とは明確な差をみせた。底面の一部には鉄分が沈着していた。本土坑の機能は不明であるが、底面の鉄分の沈着から一時的であったにせよ水がたまる状況が生じていたものと推定される。

出土遺物は認められないが、検出面から考えれば11～12世紀頃のものと判断される。

(光本)

土坑6（図127）

第15次調査区、BR45区で検出した。〈8層〉で検出したが、擾乱を受けており、本来はさらに上層から掘削されていたものと思われる。検出面の標高は0.99mである。西半部は擾乱で失われており、



1. 完掘状況(東から) 2. 土層断面(東から)
図125 土坑4

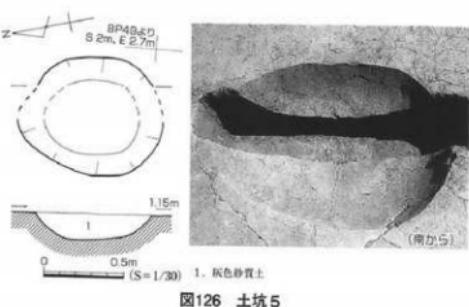


図126 土坑5

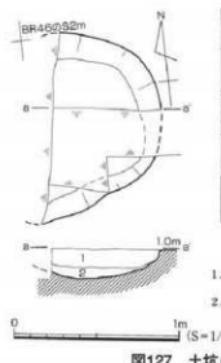


図127 土坑6



完掘状況（西から）

残存している範囲での上面の規模は、南北1.15m、東西0.65mをはかる。東西断面の底面の形状をみてみると、西側に向かって立ち上がりはじめており、本来は東西も長さ1m前後の規模を有していたものと考えられる。したがって、この土坑は不整な梢円形を呈していたと考えられる。断面

形は浅い皿形を呈している。底面の標高は0.81mで、検出面からの深さは0.18mをはかる。

埋土は2層に分層したが、灰黄色砂質土を主体とする。1層には明緑色ブロックを含み、2層には鉄分の沈着が頭著にみられた。

遺物は出土していない。検出面も擾乱により大きく下げられており、遺構の時期を絞り込む手がかりに欠けるが、13次調査区での遺構の検出状況を参考にすれば、中・近世に土坑が多数確認されていることから、本土坑についても中世以降の土坑と考えておきたい。
(野崎)

e. 溝

平安時代～鎌倉時代に属する溝を18本検出した。溝については、一定の群をなして構築されていたため、ここではそうしたまとまり、および遺構の時期を考慮し、調査区北辺（溝16～21）、南辺（22～25）、中央（26～29）、東辺（30～33）の順序で記載する。

①調査区北辺の溝群（図128～131）

調査区北辺において幅50cm前後の5本の東西溝（16～20）と1本の南北溝（21）を平面的に検出した。東西溝は、いずれも西から東へと水が流れる構造となる。溝の切り合い関係としては、溝16→溝17・19→溝21、および溝18→溝19→溝20→溝21という関係が認められる。

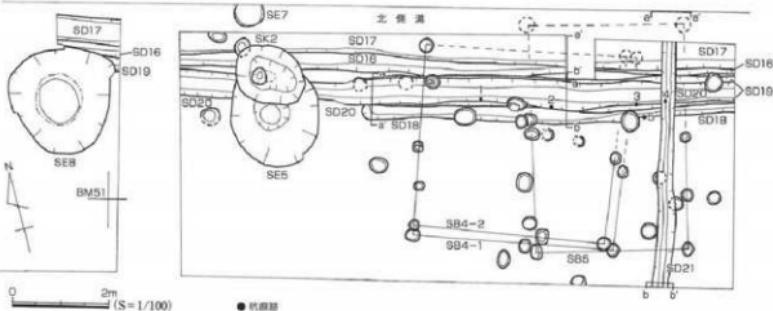


図128 調査区北辺の溝群とその他の遺構

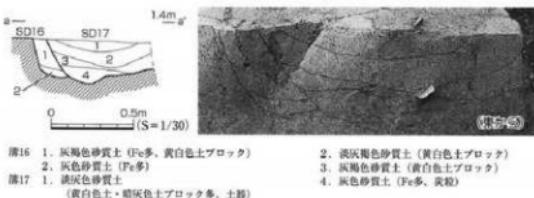


図129 溝16・17

東については同様の埋土が壁面 (k'-k'断面)において見つかっていない。本遺構の上面標高は1.47m、底面標高は1.07mとなり、埋土は上層が暗褐色粘土質、下層が黄褐色砂質土となる。やや南にふくれるようにのびる溝が、北壁にかかっていたものと推定する。

溝16 (図129)

本遺構はBL48～51区に位置する。調査区北辺に沿う形で東西方向にのびる溝である。検出面は〈6層〉に相当する。本遺構は、北肩を溝17によって切られており、埋土の多くは失われていた。また南肩についても溝19によって一部切られている。溝の長さは13.8mとなる。溝の両端については、平面的に確認していない。西端部分については、溝の走行方向から判断すれば、調査区西壁のコーナー付近に該当する埋土が存在することが推定されたが、当該箇所については標高1.2m以上の部分が擾乱によって失われていたため、その痕跡は定かでない。したがって、北側に隣接する溝17同様に調査区西壁まで溝のがびていたか、あるいは西へいくにつれて深さを減じることを考慮すれば、井戸8北側の近代の擾乱付近で収束したものと考えられる。東端についても、平面的には48ライン付近の近代の擾乱や、調査区北辺における側溝設置の関係で明確ではなく、東壁においても該当する埋土は確認されなかった。このことから、東端については46～48ライン付近にそれを求めることが妥当と判断される。溝の残存幅は0.20～0.44mを測る。断面形は逆台形を呈する。底面標高は西側で1.19m東端で1.07mとなり、西から東へ流れる構造となる。深さは西側で0.14m、東側で0.23mとなる。

埋土は2層からなる。1層は灰褐色砂質土で、ブロックが含まれることから、溝廃棄時の埋土ないしは流入土と考えられる。2層は灰色砂質土であり、ブロックは顕著でなく、溝使用時の堆積土と考えられる。本遺構の埋土は溝17の埋土と全体的には類似しており、溝16・17埋土の堆積環境が類似していたことが推察される。

本遺構の埋没時期については、溝の走行方向と埋土の内容から、付近の東西溝群と同程度の時期幅に収まるものと考えられる。本遺構では中世段階の遺物が出土していない。本遺構および溝17からは、弥生時代後期および古墳時代初頭の甕小片が出土しているが、これは当該期の微高地が広がっていたことによるものと考えられるため、これらは混入品と判断される。本遺構の埋没時期は、遺構の切り合い関係から判断すれば、井戸8 (12世紀中頃)、土坑2 (12世紀初頭) に切られていることから、11世紀代の範疇に収まるものと考えられる。

溝17 (図129)

本遺構は調査区北辺、BL48～51区に位置する。検出面は〈5層〉である。本遺構は、溝16を切る形で構築された東西方向の溝である。本遺構の北肩は、51ライン付近を除けば、先行して掘削した調査区側溝によって失われていた。溝の長さは13.8mとなる。溝16と同様に、溝の西端・東端部については平面的には確認されていない。西端部については調査区北壁において該当する遺構埋土を確認した。この遺構埋土は、51ラインから西へ2.5～3.8mの範囲に認められる青灰色粘土ブロックを含む褐色砂質土で、上面標高1.40m、底面標高1.20mを測る。土質と底面標高がほぼ一致することから、本遺構は北壁まで伸びるものと考えられる。一方、東端部については北壁・東壁に該当する遺構埋土がなく、46～48ライン付近に本来存在していたことが推定される。断面形は逆台形を呈す。

なお、これらとは別に、調査区北壁には中世段階の東西溝の可能性が高い埋土が、51ライン西1.7m地点から49ライン東3.1m地点にかけて認められる (図14 g-g'・h-h'断面)。後者の地点より東側 (i-i'断面)についても擾乱のため壁面観察をなしえなかつたが、47ライン以

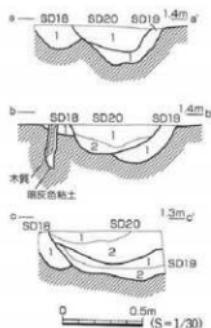
する。幅は両肩がのこる51ライン付近で0.52mとなるが、49~50ライン付近にかけて南にややふくれる平面形態となり、東側では残存幅0.68mを測る。底面標高は、西側で1.22m、東側で1.06mとなり、西から東へ向けて底面が傾斜する。深さは西側で0.13m、東側で0.25mを測る。

埋土は4層からなる。灰褐色ないしは灰色系統の砂質土からなる。1~3層は黄白色ブロックを含む土層で、溝を埋めた土層の可能性が指摘しうるが、1層については暗灰色ブロックも加わることから、流入土ととらえることも可能といえる。底面に堆積する4層(灰色砂質土)は、鉄分を多く含むものであり、溝が機能していた段階の堆積土と考えられる。

本遺構では古代末~中世の出土遺物は認められない。付近の溝との切り合い関係から、本遺構の埋没時期は11世紀頃と推定される。

溝18(図130)

本遺構はBL48~49区に位置する東西溝である。検出面は(5層)である。本遺構は、溝19・20によって、1/4~1/2程度切られている。長さは18.6mを測る。西端部は、50ライン付近において平面的に確認した。東端部については、東壁において本遺構の埋土を確認しているため、調査区外東方にのびる。溝の残存幅は西側で0.29m、東側で0.30mを測る。底面標高は西端部で1.11m、東端部(調査区東壁)で0.93mとなり、西から東へ底面が低くなる。断面形はボウル状~逆台形となる。深さは西端部で0.15m、調査区東壁部分で0.26mを測る。



溝18

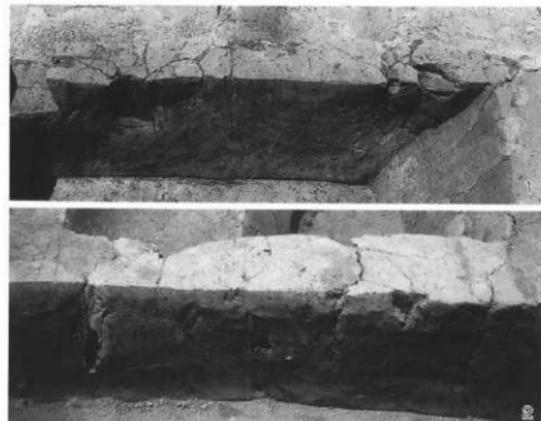
1. 灰褐色砂質土
(Fe-Mn多、灰白色土ブロック)

溝19

1. 灰褐色砂質土
(黄色土ブロック多、土器片)
2. 灰褐色砂質土
(黄色土、白色砂質土ブロック)

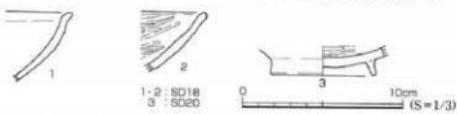
溝20

1. 灰褐色砂質土(灰茶褐色土ブロック)
2. 灰褐色土(灰茶褐色土ブロック多)



1. 溝18~20上層a断面(東から)

2. 溝18~20上層b断面(東から)



番号	種類・器種	底面(cm)			形態・手法等	胎土	色調：内/外
		口径	底径	厚さ			
1	土師質・楕	-	-	-	(内) 壁面(外)ミガキ	粗沙・板砂○	淡黃白
2	瓦質・楕	-	-	-	(内) ミガキ(外)オサエ・ミガキ薄み、初乳層	粗沙	黑色/黒灰~暗灰
3	土師質・楕	-	6.6	-	(内) ミガキ、重ね焼き(高台内)ナラ焼ミガキ	粗沙・細△	白

図130 溝18~20・出土遺物

埋土は、暗緑灰色砂質土の1層からなる。灰白色土ブロックを含むことを特徴とする。溝の南縁において、杭痕跡と考えられる暗灰色粘質土が1箇所認められた(杭5、b-b'断面)。この杭痕跡は本遺構に伴う可能性もあるが、同様の痕跡が後述の溝20において4箇所確認されることから、それらと一連の所産の可能性が高い。

本遺構からは、土師質土器焼片2点、鍋片1点の他、瓦器小片、黒色土器片、古墳時代初頭頃の土師器片が出土地した。周辺には鎌倉時代の柱穴群も存在するため、検出していない柱穴の遺物が混入したものと判断した。遺構の切り合い関係から本遺構の埋没時期は11世紀代と考えられる。

溝19(図130)

本遺構はBL46～51区に位置する。検出面は〈5層〉である。本遺構は、溝18を切るとともに、溝20によって切られている。溝の残存長は24.8mを測る。溝東端部については、東壁において本遺構の埋土を確認しているため、調査区外の東方に位置するものといえる。溝西端部については、調査区西壁付近に該当する埋土が存在することが推定されたが、標高1.2m以上の部分が擾乱によって失われていたため、その痕跡は定かでない。したがって、調査区西壁まで溝がのびていたか、あるいは井戸8北側の近代の擾乱付近で収束したものと考えられる。溝の残存幅は西側で0.29、東端部で0.30mを測る。断面形は、ボウル状～逆台形をなす。底面標高は西側で1.11m、東端で0.88mとなり、西から東へ向けて底面が低くなる。深さは西側・東端部とともに0.24mとなる。

埋土は、西半については暗緑褐色砂質土の1層(a-a'・b-b'断面)、東端部については、下層に暗褐色砂質土が加わる形となる(c-c'断面)。両層とも黄色土ブロックを含むことを特色とする。

本遺構からは年代を特定しうる出土遺物が認められなかった。本遺構が井戸5(11世紀後半)・井戸8(12世紀中頃)によって切られることから、本遺構の時期は11世紀頃と判断される。

溝20(図130)

本遺構はBL46～51区に位置する。検出面は〈5層〉である。本遺構は、溝18・19を切る形で構築された溝である。溝の残存長は24.8mを測る。溝19同様に、溝東端については調査区東壁において該当する埋土が確認されており調査区外東方に伸びること、また西端については調査区西壁の擾乱により埋土の有無が確認できなかつた点から、調査区西壁まで溝がのびていたか、あるいは井戸8北側の擾乱付近で収束したものと考えられる。溝の残存幅は西側で0.55m、東端部で0.70mを測る。溝の断面形はボウル状～逆台形をなす。底面標高は西側で1.20m、東端部で1.03mとなり、西から東へ向けて底面が低くなる。深さは西側で0.14m、東端部で0.20mとなる。

本遺構の南辺に沿うように、4箇所の杭痕跡(杭1～4)が認められた。杭痕跡は暗灰色粘質土で、径6cm、深さ26cm程度の円形を呈する。断面形は先が細くなる形状である。これら4基の杭痕跡は、位置関係から本遺構との関連が強いものと考えられる。なお溝21の底面において検出した杭4は、本遺構に伴うものであろう。杭間の長さは、杭1～2間が1.45m、2～3間が1.70m、3～4間が0.60mとなる。また、溝18南辺にも杭痕跡が認められるが(杭5)、杭3～4間が他よりも狭いことを考慮すると、杭5もそれらと一連の所産と判断される。

溝の埋土は、灰緑褐色砂質土と暗緑褐色土の2層からなる。いずれも、灰茶褐色ブロックを含むものである。

本遺構からは12世紀代まで降る土師質土器焼片小片が出土したが、これについては周辺遺構からの混入品と判断した。井戸5との切り合い関係から、本遺構の廃絶時期については、11世紀頃と判断される。

溝21(図131)

本遺構はBL～BM49区に位置する。溝16～20を切る形で構築された南北溝である。本遺構は調査区北壁からBMラインより南1.5mにかけて検出した。検出面は〈5層〉である。平面的には標高1.32m前後において溝プランを確認したが、溝の断面形態の全体がわかる北壁(a-a'断面)を検討すると、本遺構の上面標高は1.50mとなる。北壁の状況からも、本遺構の上面は〈5層〉相当面となる。溝の残存長は5.6mを測る。溝の北端については調査区北方へのびるものと考えられるが、南端部分についてはBMライン南1.5～2.8mが東西基礎の擾乱部分にあたるため判然としない。それより以南には、該当する溝の痕跡が確認されていないことを考慮すれば、この擾乱部

分に溝の南端が位置するものと考えられる。断面形態は逆台形をなし、深さは北壁で0.22mを測る。溝の幅は北壁で0.54、南側については検出面が低いことにより0.34mを測る。底面標高は北壁で1.27m、南側で1.21mとなり、北から南にかけて底面が低くなる。

埋土は2層でいずれも茶褐色～灰茶褐色弱粘質土となる。上層は青灰色、下層は白色・明緑色ブロックを含む。

本造構からの出土遺物はみられなかつたため、埋没時期の特定は困難といえる。造構の切り合い関係から、本造構は11世紀以降に掘削されたものと考えられる。

②調査区南辺の溝群（図132・133）

溝22（図132）

本造構はBQ49～51区に位置する東西方向の溝である。検出面は（5層）に相当する。調査時は、本造構と溝24に該当する埋土を、ひとつの溝として認識していた。しかしその後の整理作業における検討によって、本造構は溝24によって上半を切られたものであるという理解に至った。それは、溝24の埋土がa～d断面を通じて共通して存在していたためである。なお、本造構と溝23との切り合い関係はないため、両者の先後関係は定かでない。

溝の残存長は9.5mを測る。西端部は、調査区西壁に当該埋土が確認されることから、調査区外にまでのびるものと考えられる。東端部については、50ライン東0.6mの地点に位置する。残存幅は西端部で0.45m、東端部で0.39mとなる。断面形は箱形を呈するが、上半の状況は不明である。底面標高は西端部・東端部とともに0.73m、中央付近は0.76mとなり、明確な傾斜をなすものではない。また、本造構の底面は、溝23・24の底面よりも一段低くなっている。深さは西端部で0.25m、東端部で0.34mとなる。

埋土は3層からなる。淡黄褐色粘質土ないしは淡灰褐色粘質土によって構成される。

造構の廃絶時期を示す遺物が認められなかつたため、本造構の時期を特定することは難しい。溝24との切り合い関係から、本造構は12世紀代かそれ以前のものと推定される。

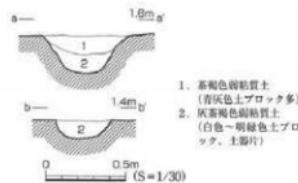
溝23（図132）

本造構はBQ48～50区に位置する東西方向の溝である。検出面は（5層）である。本造構は並行する溝24によつて北半部を切られる。本造構については、断面精査時に存在を認識したため、平面的広がりについては確定するに至らなかつた。溝の残存長は、b～c断面間の距離として、6.0mを測る。残存幅は0.28mとなる。断面形は逆台形に近い形状を呈する。底面標高はb-b'断面で1.03m、c-c'断面で0.95mとなり、東側の底面の方が低いが、二者の比較であるため傾斜方向については確実とはいえない。深さは0.18～0.24mとなる。埋土は、淡灰色粘質土の1層からなる。

本造構に確実に帰属する遺物はみられない。本造構か、あるいは溝24から出土した遺物として、土師質土器焼片1点がある。この遺物の年代は12世紀頭のものであり、溝24出土遺物の年代の範疇に入る。両溝が一連のものとするならば、本溝の年代も12世紀代頭と推定しておきたい。

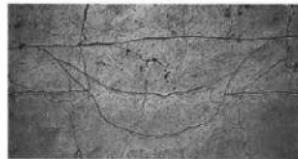
溝24（図132）

本造構はBQ47～51区に位置する東西方向の溝である。検出面は（5層）である。溝22・23を切る形で構築されている。溝の残存長は21.8mを測る。西端部は、調査区西壁に当該埋土が確認されることから、調査区外にまでのびるものと考えられる。東端部については、47ライン西2.1mの地点に位置する。残存幅は西端部で0.73m、東端部で0.46mを測る。後者の数値が小さいのは、検出面が低かったことによる。断面形は逆台形を呈する。底面



土層a断面（南から）

図131 溝21



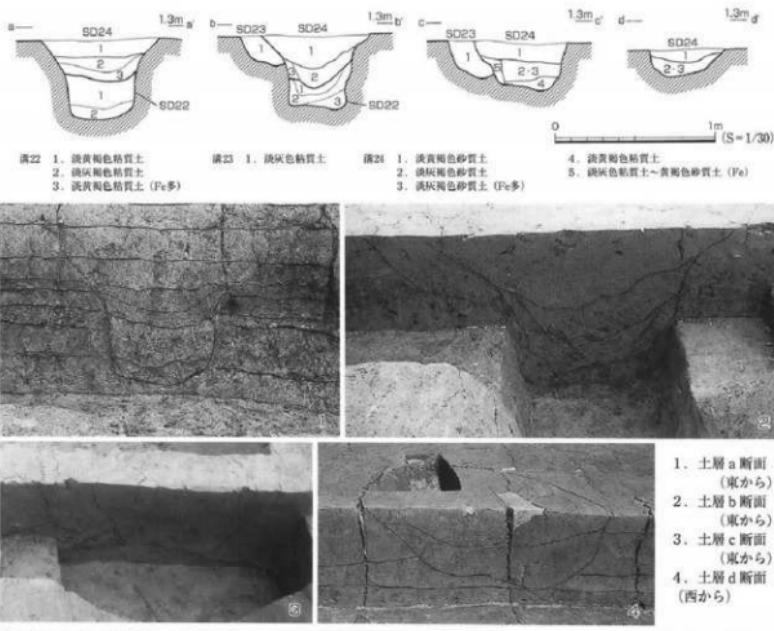


図132 溝22～24・出土遺物

標高は西端部・東端部ともに0.96mとなる。深さは西側で0.32m、東端部で0.18mとなる。

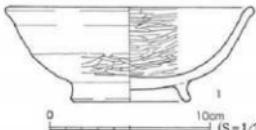
埋土は5層からなる。1層である淡黄褐色砂質土は、最終的に本造構を埋めた廃絶時のものと考えられる。c-c'断面では淡灰色粘質土である5層が、溝南斜面に最初に堆積し、流路側が垂直気味となる状況がうかがえる。こうした堆積は、矢板状のものが溝南側のc-c'断面付近に設置されていた可能性を示唆する。その場合5層は、矢板の裏込め土と考えられる。

遺物の取り上げ時に分離できなかったが、本造構または溝23の出土遺物として、土師質土器1個体がある。この土器は12世紀前半頃に比定されるため、本造構の廃絶時期もそれに近いものと推定される。

溝25（図133）

本造構はBQ48～49区に位置する東西方向の溝である。検出面は（5層）である。溝22～24の南方に位置する。平面形がやや不定形な溝である。溝の残存長は5.5mを測る。溝の残存幅は0.41～0.65mとなる。断面形はボウル状を呈する。底面標高は西端部で1.13m、東端部で1.01mとなり、西から東へかけて底面が低くなる。深さは0.04～0.15mである。

埋土は、2層からなる。いずれも淡灰褐色砂質土であるが、上層の方が下層に比べて炭粒が多く含まれていた。



本遺構からは、古墳時代の土器底まり間隔の土器が含まれていたものの、廃絶年代を示す遺物は出土していない。遺構の位置関係と検出面から、溝22~24と近い12世紀代のものと推定される。

③調査区中央の溝群(図134~137)

溝26(図134)

本遺構はBN48~49区に位置する。本遺構については、平面的に確認しえなかったが、溝28直下のa-a'断面、およびb-b'断面において見出したものである。検出面は上面標高が1.12~1.14mとなり、(6層)相当となる。本来の溝の上上がりは(5層)以上となる可能性がある。溝の残存長は、断面間の距離であるが、5.4mとなる。溝の幅は西側(a-a'断面)で0.83m、東側(b-b'断面)で0.50mとなる。溝の断面形はボウル状を呈する。底面標高は西側で0.97m、東側で0.94mを測る。二者のみの比較ではあるが、東側の方がやや低くなる状況は、本遺構の北側につくられた溝27と同様である。深さは西側で0.19m、東側で0.15mとなる。

本遺構は溝28の直下、かつ溝27の南側にある。b-b'断面では溝27に切られる状況が認められるため、本遺構は溝27に先行するものと考えられる。本遺構の平面形態は、断面位置からの推定であるが、溝27と同様にまっすぐグリッド東西にのびるものではなく、a-a'断面~b-b'断面間で斜めに(南方に)屈折するものと考えられる。本遺構と溝28は、平面的には同一の東西ラインにあり、関連が推定される。本遺構の底面標高が溝28のそれよりも低くなることから、直接的には両者はつながらない。後述の溝28では、東端を確認できていないが、a-a'断面付近に溝28の東端があると仮定すれば、本遺構は溝28に連なる形で、底面が一段低い溝として構築されたものであった可能性が高い。底面標高が本遺構と類似する溝27についても、溝28と一連の溝として捉えることが妥当と判断される。本遺構の埋土は2層からなる。1層が淡灰白色~灰白色砂質土で、2層が淡緑灰色砂質土である。1層については、溝27埋土の一部と質が類似する。

本遺構からの出土遺物はないが、溝28との関係から、本遺構は14世紀以前には掘削されたものと考えられる。

溝27(図134)

本遺構はBN48~49区に位置する。検出面は(6層)である。土層断面からみると上面標高は1.12~1.14mとなるが、溝の上上がりが中世層である(5層)以上に及ぶかどうかについては判然としない。溝の残存長は

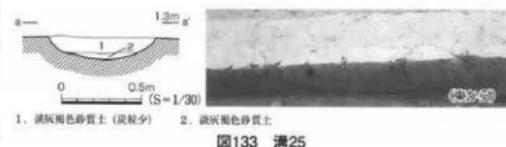


図133 溝25

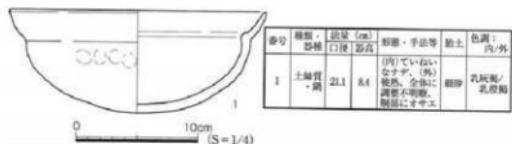
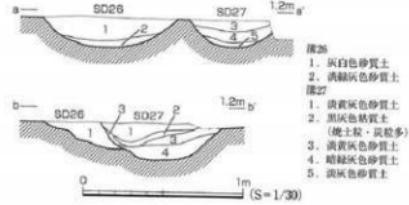


図134 溝26・27

9.6mを測る。東端部については、48ライン以東ではみつかっていない。48ライン付近は南北の建物基礎による擾乱のため、複数個所において溝が収束した可能性が考えられる。西端部については溝28の北側に位置する。これは本造構の平面形が、48～49ラインにかけてはグリッド東西にまっすぐ平行するものの、49～50ラインにおいて北方向へやや屈折するためである。残存幅は断面部分において西側（a-a'断面）で0.52m、東側で0.74（b-b'断面）mを測る。断面形はボウル状を呈する。底面標高は西側で0.97m、東端部で0.88mとなり、東に向かって底面が低くなる。深さは0.17～0.23mとなる。

埋土は5層からなる。特徴的な埋土が2層の黒灰色粘質土である。これは焼土粒と炭粒を多く含む。また淡黄色砂質土である3層にも焼土粒が多く認められ、2層と一連の土層と考えられる。少なくとも1～3層は、溝掘削時の埋土であるものと考えられる。暗緑灰色砂質土である4層は西端のみに広がる。底面に堆積する淡灰色～灰色砂質土については比較的均質であり、溝使用時に堆積したものと判断される。

本造構からはほぼ完形の土師質鍋1点が出土したが、それから年代を確定することは現状では難しい。ここでは溝28との関係から、本造構は14世紀以前には掘削されたものと判断しておく。

溝28（図133・134、図版16・17）

本造構はBN50～52区に位置する。検出面は〈5層〉であり、上面標高は1.32mとなる。ただし、〈4層〉掘り下げ中に、近辺において土師質土器柄が多く出土したことから、その当初より造構の存在を推定して検出を行った。しかしながら、〈4層〉段階には本造構の平面形に関する明確な把握は困難であった。こうした経緯から、本造構の掘り込み面は、実際には〈4層〉まで上がる可能性が高いものと判断される。このことは、出土遺物からみた本造構の時期とも整合的である。なお、〈4層〉掘削中に出土した土師質土器は、本造構出土のものと同時期のものである。溝の残存長は7.7mを測る。東端部については、平面・断面の精査を行ったものの確認していない。西端部については、51ライン西1.0mに位置する。なお、本造構西端部より西へ1.1mには、南北溝である溝29の北端部が位置する。溝の幅は、0.79～0.81mを測る。溝の断面形はボウル状をなす。底面標高は西端部で1.16m、東側で1.14mとなり、西から東へ向けて底面が低くなる。深さは残りのよい西側で0.29mとなる。

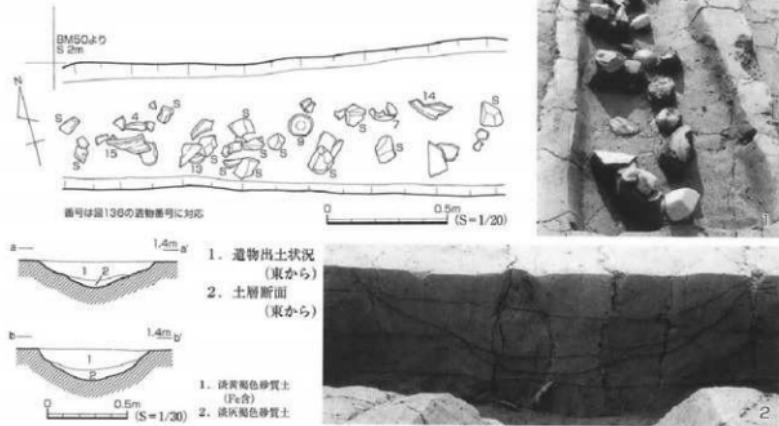
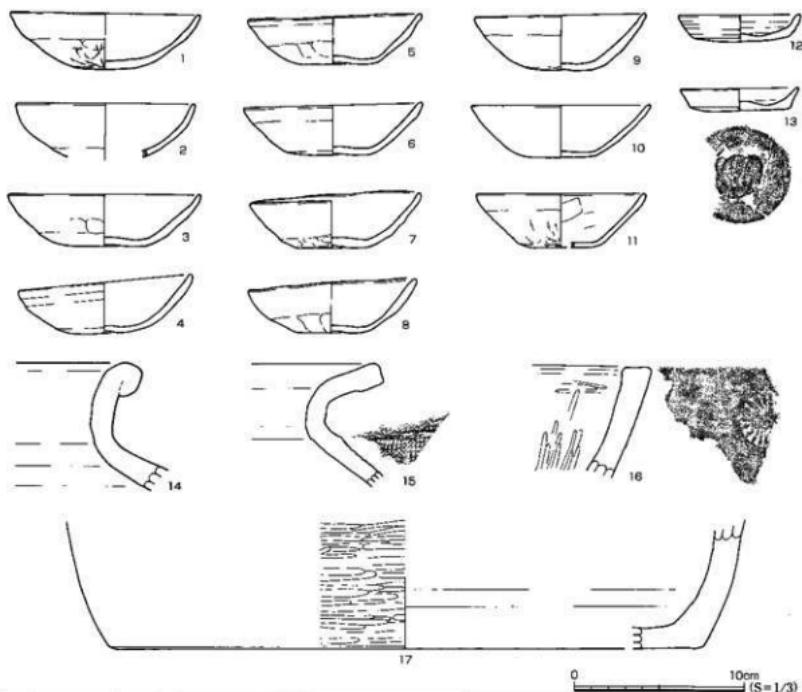


図135 溝28



番号	種類・器種	正量 (cm)			形態・手法等	出土	色調：内/外
		口径	底径	器高			
1	土師質・輪	*11.2	*3.7	3.3	(内) T.高ナデ(外)オサエ・ナデ丸脛(底)ナデ、1/3残	織物・織物△	淡乳黃△
2	土師質・輪	*10.6	-	-	(内) T.ナデ(外)ナデ(底)ナデ、1/4残	織物	淡黃白
3	土師質・輪	*11.2	*4.4	3.1	(内) スヌ(外)サエ・ナデ(底)アカル部有(径1.4cm)、1/4残	織物・織物△	淡黃白
4	土師質・輪	10.3	5.5	2.6-3.2	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)凹み部有(径1.4cm)	織物	淡乳白
5	土師質・輪	10.3	4.5	2.6-3.0	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)凹み部有(径2cm)	織物・織物△	淡黃白
6	土師質・輪	10.5	3.8	2.8-3.1	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)ナデ、凹み部有	織物	淡乳白
7	土師質・輪	10.0	4.5	2.7-3.4	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)凹み部有(径1.7cm)	織物・織物△	明赤紅
8	土師質・輪	9.9	4.5	2.5-3.2	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)凹み部有(径1.3cm)	織物	淡黃白
9	土師質・輪	10.1	4.3	3.1-3.4	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ(底)凹み部有(径6mm)	織物・織物△	淡乳白
10	1脚質・輪	*10.5	4.0	3.1	(内) ナデ(外)ナデ(底)オサエ・ナデ丁度、1/1残	織物・織物△	淡乳白
11	土師質・輪	*10.0	*4.8	3.2	(内) T.高ナデ(外)オサエ・ナデ、1/3残	織物	淡乳白
12	土師質・底	7.3	5.5	1.7	(内) 砂利付蓋(底)ヘラトリ後ナデ	織物	明赤紅/淡乳白
13	土師質・底	7.0	5.8	1.4	(内) ナヨコナグ(底)ヘラトリ後ナデ・板正度、口縁3/4残	織物・赤色絞	灰青
14	梅前焼・大皿	-	-	-	(内) 黒通いヨコラ	織物	黒灰
15	亀山焼・大皿	-	-	-	(内) ヨコナデ(外)オサエ・コノダエ・施子口タタキ、やや瓦質	織物・織物△	淡乳黃
16	瓦質・奈良火鉢	-	-	-	(内) ミガキ(外)瓦質スクリン	織物・半透明	暗紅色
17	瓦質・奈良火鉢	-	*34.2	(内) タナナ一日コナデ(外)ミガキ(底)瓦質、1/6残	織物・赤色絞	暗紅色	

図136 溝28出土遺物

埋土は、2層からなる。1層は淡黄褐色砂質土、2層は淡灰褐色砂質土であり両層は比較的類似する。

本造構からは、遺物が多く出土した。土師質土器碗14個体以上、土師質土器皿2個体以上、土師質杯2片、土師質鍋片11片、土師質甕片11片、備前焼1片、亀山焼13片、その他須恵器片13点、白磁片2点、瓦器片1点、火鉢片12点が出土した。これらの遺物は、その下端が標高1.22~1.32mに位置し、1層中において出土したものである。出土レベルが一定することから、溝廻絶時に一括して廃棄されたものと考えられる。なお、本造構から出

土した火鉢片は、溝29出土のものと接合した。このことから、両溝の廃絶が同時期になされたことが判明した。その他、混入と思われる遺物として、縁輪片1点、黒色土器片1点、本造構下の土器溜まり1に関連するものと考えられる土器片38点が出土した。出土遺物から、本造構の埋没時期は14世紀前半に位置づけられる。本造構は、廃絶時期および遺物の接合関係から、溝29と一連の区画溝と考えられる。両溝は、間隙をもったL字状の遺構配置をなす。遺構配置の観点からは、本造構および溝29は、建物3との関連性が想起される。ただし建物3の年代は、遺物が出土していないため確定的とはいえない。

溝29(図137、図版17)

本造構はBN～BO51区に位置する。検出面は(6層)であり、上面標高は1.15mとなる。溝の残存長は4.5mである。南端部については、周辺に該当する埋土が確認されなかつたことから、近代の建物基礎による擾乱部分

(BOライン南0.7～1.5m)にあたるものと推定される。溝の残存幅は北側で0.38m、南側で0.68mを測る。断面形はボウル状を呈する。底面標高は北端部で1.06m、現状の南端で0.94mとなり、北から南にかけて底面が低くなる。深さは0.07～0.19mとなる。

埋土は3層からなる。いずれも淡灰色砂質土であるが、2層に黄白色土ブロックが多く含まれた。

本造構の出土遺物は、土師質土器片4個体以上、土師質土器皿片2点、土師質鍋片4点、火

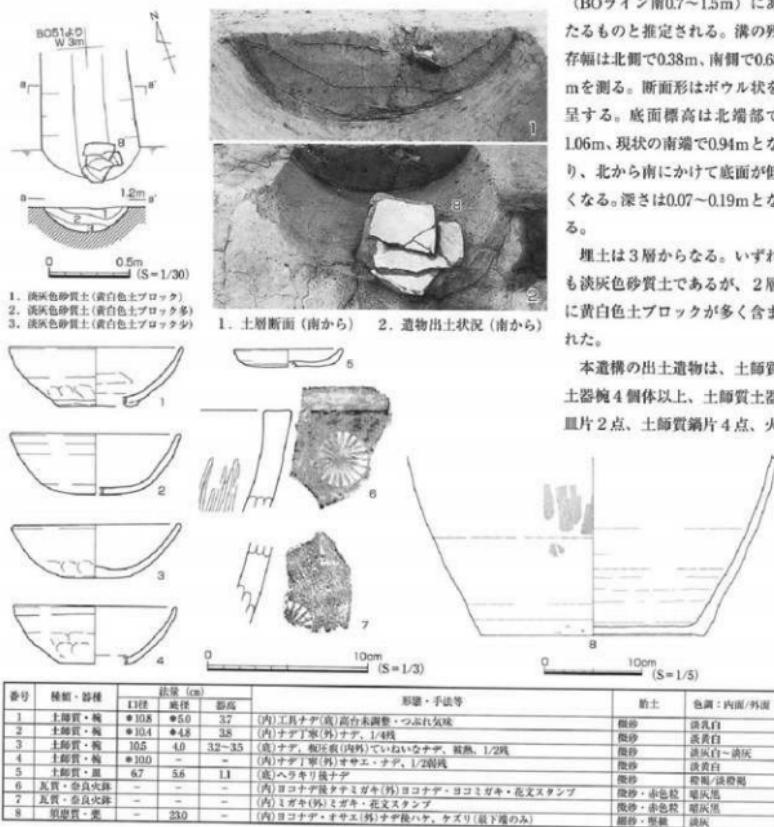


図137 溝29出土遺物

調査の記録

鉢片1点、須恵器壺1個体、亀山焼片2点、その他須恵器片4点となる。須恵器壺は、溝の南端においてまとまといた状態で出土した。ただし、東西基礎の影響により、個体の一部は失われていた。また、火鉢片については、溝29出土資料と接合関係にあり、両溝の発掘時期の同時性を示す。なお、本造構下に位置する古墳時代の土器渣まりに間連する土師器片が少量出土した。

出土遺物より、本造構の発掘時期は14世紀前半に位置づけられる。前述の通り、本造構は溝28とともに、L字状の小区画をなしていたものと考えられる。

④調査区東辺の溝群（図138～

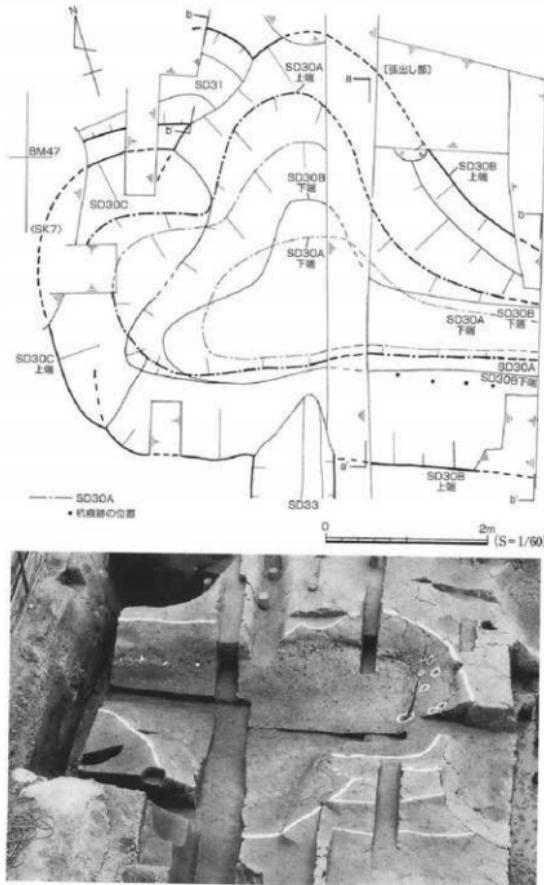
142）

溝30（図138、図版17）

本造構はBL～BM45～46区に位置する。東西方向の大型溝の西端部にあたり、調査区東方にのびるものである。本造構は埋土の状況から、少なくとも四段階の掘削・再構築が平・断面において確認された。構築順に溝30A→30B→30C→30Dとし、前二者が中世～近世、後二者が近世に属する。以下、本節では溝30A・Bについて概説する。

溝30A 本造構は、溝30における最古段階にある。溝30Bによって上半部を切られているため、平面的に検出したのは造構の底面付近のみとなる。したがって、どの包含層から掘り込まれたのかは定かでない。平面形は北側に張り出し部を有する特徴的形態である。張り出し部については、後述の溝30B段階にも踏襲されるが、近世の30C・D段階には消失する。こうした張り出し部は、鹿田遺跡内においても第7次調査地点（基礎研究棟）の大型溝や、それに達なる第17次調査地点（総合研究棟（医学系））の大型溝においても確認されている。

なお、後述の溝30B段階には、溝31～33と接続する状況を確認



溝30B完掘状況（北から）

図138 溝30A・B

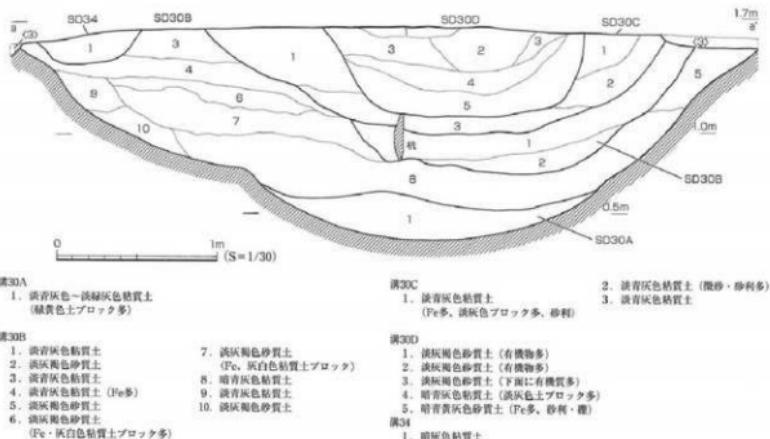
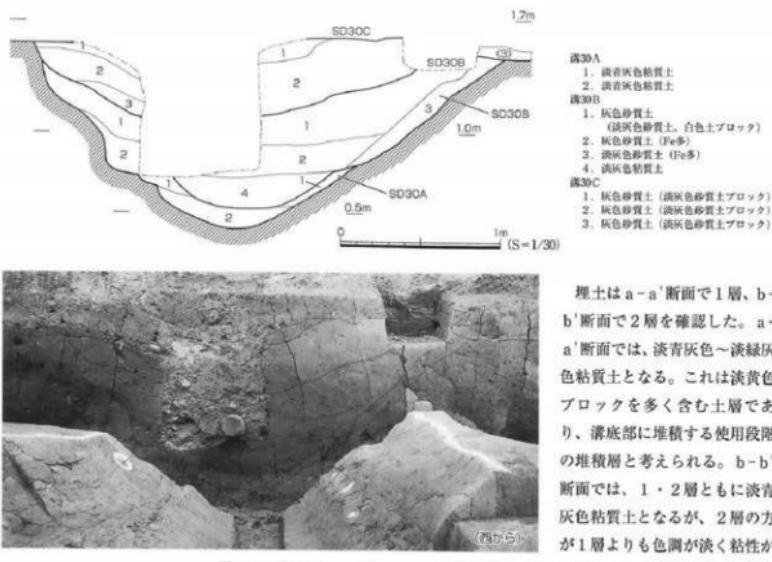


図139 溝30(1)

したが、本遺構においては、上半部が失われているため判然としない。しかし、これら溝と本遺構の時期から判断するならば、本来は本遺構もまた溝31～33と接続していたものと考えられる。

溝の残存長は5.6mとなる。残存幅は西側で2.03m、張り出し部で3.40m、東側で0.95mを測る。断面形はボウル状を呈する。また、溝の中軸と張り出し部の中軸が交差するBM47から東3.5m、南2m付近（以下中央部）が最も底面が低い形状となる。底面標高は西端付近で0.77m、中央で0.35m、東端で0.39mとなる。深さは、中央で0.53m、東端で0.62mを測る。中央部がやや低くなるのは、溝の本線と張り出し部が交差することによって底面に窪みが生じたことによるものとが推定される。したがって、水の流れとしては西から東方向と推定される。

張り出し部の規模は、残存長1.47m、残存幅2.10mを測る。



えられる。

本遺構に伴う遺物は出土していないため、埋没年代を特定することはできないが、溝30Bの年代より、14世紀以前のものと推定される。

溝30B 本遺構は、溝30の第二段階にある。上半部は溝30Cによって失われているが、南側の肩については〈4層〉において検出した。西端部については土坑7によって切られている。本遺構は、張り出し部の西辺に溝31、南辺に溝32・33が接続する形となる。

平面形は、溝30A同様に北側に張り出し部を有する形態となる。溝の残存長は5.3mを測る。残存幅は西側で4.07m、張り出し部で5.13m、東端で2.66mとなる。断面形は逆台形を呈する。また溝30Aと同じく、最も底面を低くするBM47から東3.5m、南2m付近（以下、中央部）は、溝の中軸と、張り出し部の中軸および溝32・33が交差する部分にある。底面標高は西側で0.47m、中央部で0.42m、東端で0.52mを測る。深さは中央部で1.14m、東端で0.98mとなる。本遺構に接続する溝32・33は、いずれも本遺構との接続部から南に向けて底面を低くすることから、本遺構の水は溝32・33によって南方へ流されたものと考えられる。すなわち、今回検出した箇所は、南方への分水地点に当たるものと評価できる。

溝南東部の底面においては、東西に並ぶ杭列を1列確認した。杭列は、4本の杭で構成される。上層の溝30C底面でも杭を確認したが、それは溝内に群在していたため、列をなす本例とは異なる。杭列は南辺の護岸を企図したものである可能性がある。

埋土については、a-a'断面で10層、b-b'断面で4層を確認した。張り出し部を横断するa-a'断面をみると、淡青灰色粘質土となる1層および淡灰褐色砂質土である2層については、両者で逆台形の堆積を示す。こう

- 説30A
 1. 淡青灰色粘質土
 2. 淡青灰色粘質土
 説30B
 1. 灰色砂質土
 (淡灰褐色粘質土ブロック)
 2. 灰色砂質土 (Fe多)
 3. 淡灰褐色粘質土 (Fe多)
 4. 淡灰褐色粘質土
 説30C
 1. 灰色砂質土
 (淡灰褐色粘質土ブロック)
 2. 灰色砂質土 (淡灰褐色粘質土ブロック)
 3. 灰色砂質土 (淡灰褐色粘質土ブロック)

埋土はa-a'断面で1層、b-b'断面で2層を確認した。a-a'断面では、淡青灰色～淡緑灰色粘質土となる。これは淡黄色ブロックを多く含む土層であり、溝底部に堆積する使用段階の堆積層と考えられる。b-b'断面では、1・2層ともに淡青灰色粘質土となるが、2層の方が1層よりも色調が淡く粘性が強い。両層が類似することから、これらも使用段階の堆積層と考えられる。

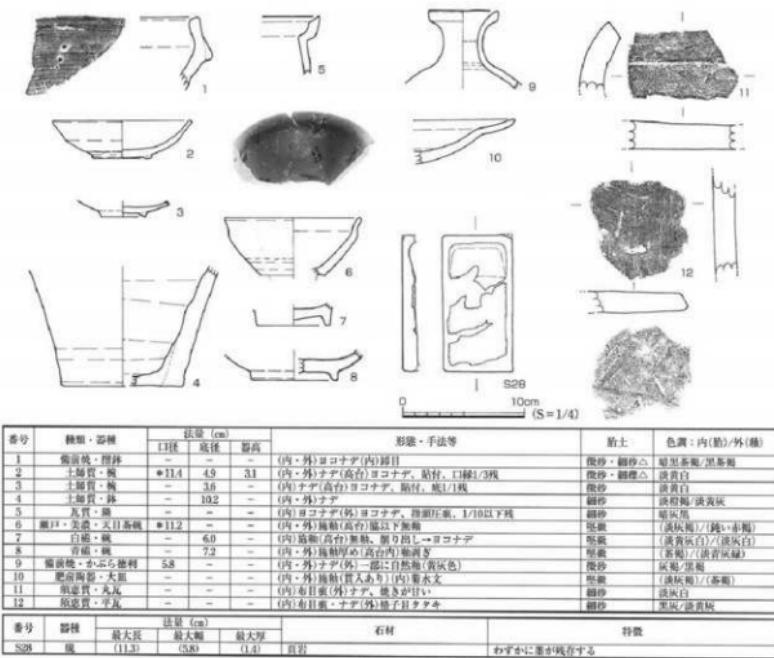


図141 満30B出土遺物

したラインは、溝の現状における上面にあたる5層を切るものであり、溝30Bの途中段階における浚渫の痕跡の可能性が高い。1・2層と、水平堆積を示す淡青灰色粘質土3・4層との関係については、直接的な切り合がないため、先後関係は判然としないが次の2つの可能性が考えられる。まず、1・2層が3・4層に連なる場合には、この溝においても張り出し部が機能していたものと考えられる。一方、前者が後者を切っていた場合には、すでに張り出し部の機能が失われていたことを示す。この場合、1・2層は本来は溝30B段階というよりも、むしろ溝30C段階に含めて捉えることが適切となろう。

また、灰白色粘質土ブロックを含む淡灰褐色砂質土の6・7層、および暗青灰色粘質土の8層も同様に、逆台形のラインをなす。これらは張り出し部に堆積した最初の堆積層である9・10層を切る形となり、浚渫後に堆積した層であるものと考えられる。6～8層の断面において、北側の傾斜が緩やかになるのは、張り出し部が意識されていたことを示す。

b-b'断面については、灰色砂質土となる1・2層は、それ以前の堆積の3層（淡灰色砂質土）を、逆台形状に切る形となる。これらもまた、浚渫痕跡の可能性が高い。逆台形状を呈する点からみると、これらはa-a'断面における6～8層段階に対応するものと考えられる。その場合、a-a'断面においては底面標高が0.52mに対し、b-b'断面のそれは0.70mとなり、東から西へと底面を低くするものとなる。東斜面に堆積する淡灰色砂質土の3層、および底面に堆積する淡灰色粘質土の4層は、初期の堆積層と考えられる。

以上の、2つの断面にみる浚渫状況については、平面的には検出していないが、溝30Bとして平面・断面の状況から認識したまどまりは、さらに三ないしは四段階に細分しうることを示唆するものといえる。すなわち、1段階（a-a'断面9・10層、b-b'断面3・4層）、2段階（a-a'断面6～8層、b-b'断面1・2層）、3・4段階（a-a'断面3・4層、および1・2層）である。3・4段階についてはb-b'断面では確認し得ていないが、このことは次の溝30Cの構築による消失や、a-a'断面が張り出し部を横断することも一因として挙げられる。

本遺構からはコンテナ1箱分の土器・陶磁器が出土した。出土遺物の年代は、14世紀初頭（土師質土器碗：2・3）、16世紀末～17世紀初頭（瀬戸・美濃焼天目茶碗：6）、17世紀中頃～後半（肥前陶器大皿：10）に分かれる。本遺構の使用～最終的な埋没に至る時期幅は、14世紀初頭～17世紀中頃・後半と考えられる。こうした長期間にわたる使用は、数度の浚渫が断面において確認されたことと対応するものと考えられる。

溝31（図142）

本遺構はBL～BM46区に位置する。検出面は〈4層〉となる。本遺構は北側に弧を描きながら、溝30Bの張り出し部西面に接続する溝である。本遺構の西端については、搅乱および近世十坑の影響で失われていたため定かでない。48ライン以西においても、本遺構の埋土は確認されなかっただため、47～48ライン付近で遺構西端部は終息した可能性が高い。溝の残存長は21m、残存幅は1.2mを測る。断面形はボウル状を呈する。底面標高は、西端で1.13m、東端で1.08mとなる。この状況から、本遺構が溝30Bへの排水機能を有していたことが推定される。ただし、検出箇所が溝30Bとの接続部付近に当たるため、こうした底面の傾斜が本遺構の西端部まで続いているかどうかは不明である。深さは西端で0.22m、東端で0.32mとなる。

埋土は2層からなる。1層は暗黄青灰色粘質土、2層は淡褐色砂質土であるが、両層それぞれにブロックを多く含む。本遺構の埋土は、溝30Bの張り出し部の上層埋土（a-a'断面：3・4層）と類似していることが注意される。こうした類似性は、張り出し部が埋まる段階で、本遺構もまた廃絶したことを示すものといえる。

本遺構からは出土遺物は認められなかったが、溝30Bが機能していた時期と、本遺構の使用時期は重なることは、接続関係と埋土の状況から明らかである。溝30Bが14世紀初頭～17世紀中頃・後半まで、長期にわたり存続していたため、そうした時間幅の中に本遺構の使用時期は収まるものと考えられる。ただし、本遺構の下限については17世紀中頃・後半となるが、上限については明確な根拠は見出しえない。本遺構が溝30Bの全時期にわたって存在したのか、15～16世紀に新たに掘削されたのかという点については、判然としないものの、後者については本調査区で当該時期の遺構が他に検出されていないことから、その可能性は低いものと判断される。したがって、本遺構の掘削時期については溝30Bと同様に14世紀代のものと考えることが妥当と考えられる。

溝32（図143・144）

本遺構はBM～BR46区に位置する南北溝である。検出面は〈4層〉である。後述の溝33によって東半部を失っていた。溝の北端部は溝30Bと接続する一方、南端部については調査区南壁以南にのびる。溝の残存長は24.8m、残存幅は0.36～0.67mとなり、溝33の影響で一定しない。断面形はボウル状を呈する。底面標高は北端部で1.03m、南端部で0.86mとなり、北から南へ向けて底面を低くする。深さは北端部で0.35m、南端部0.72mとなる。

埋土は5層からなる。溝の北半（a-a'・b-b'断面）は、灰色砂質土による1・2層の堆積がみられた。南端付近（c-c'断面）に至ると、淡灰褐色～淡褐色の埋土となり、底面に鉄分の沈着が認められた。

本遺構からは、土師質土器碗3個体、同皿1個体以上、鐵片、白磁片1点が出土した。土師質土器碗の年代は、11世紀～13世紀末ごろまで幅があり、本遺構の廃絶年代は14世紀初頭に位置づけられる。その他、9世紀頃の須

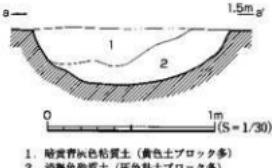


図142 溝31

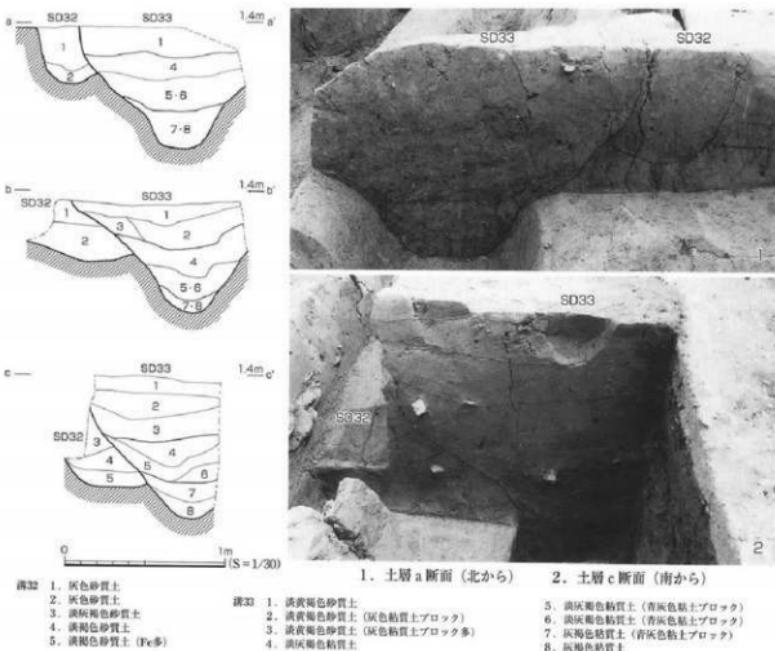


図143 溝32・33

恵器片や、古墳時代の土器満まり2に関連する土師器がコンテナ1箱（1箱28ℓ）出土している。

溝33（図143・144、図版17）

本遺構はBM～BR46区に位置する、南北溝である。検出面は〈4層〉である。溝32東半を切る形で構築されており、溝32と同様に溝30Bに北端部を接続する。南端部については調査区南壁以南にのびていく。本遺構の東辺は、擾乱によって失われていた。溝の残存長は24.8mを測る。残存幅は0.80～1.10mとなる。断面形はすり鉢状を呈する。こうしたすり鉢状の断面形は、本調査区の中世溝の中では特徴的である。先行する南北溝32よりも深く、機能的な水路を整備しようとした意图がうかがえる。底面標高は北端部で0.58m、南端部で0.50mとなり、北から南に向けて底面を低くする。深さは北端部で0.70m、南端部で0.87mを測る。

埋土は8層からなる。大別すれば、淡黄褐色砂質土の1～3層、淡灰褐色粘質土の4～6層、底面に堆積する灰褐色粘質土の7・8層に区分しうる。7・8層は、使用段階に形成された土層と考えられる。1～6層については、ブロックを含む土層が多く、流入土あるいは意図的な埋立ての土である可能性がある。

本遺構からは、土師質土器陶6個体以上、同皿1個体、亀山焼他の須恵器片約30点、白磁片1点、瓦片2点が出土した。その年代観から、本遺構の廃絶時期は14世紀初頭に位置づけられる。こうした年代からも、本遺構が溝32の廃絶に際して付け替えられた溝であるものと評価される。その他、土器満まり2関連の土師器がコンテナ1箱（1箱28ℓ）出土している。

(光本)

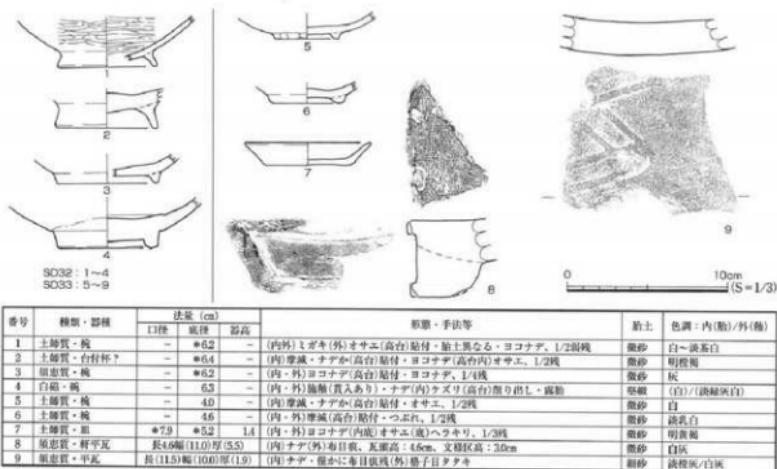


図144 溝32・33出土遺物

第6節 近世・近代の遺構・遺物

1. 近世

概要 (図145・146) 近世の遺構は土坑28基、溝3条からなる。遺構の検出面は〈4層〉である。近世の包含層については、調査区壁面の検討によって〈4a～1層〉を認識した。〈4a～1層〉は南壁～西壁、および第15次調査地点にみられるが、調査区全体に広がりを有するものではない。また、〈4層〉およびその遺構群の上面は近代の耕作域の整備によって削平を受けていた。したがって、近世の包含層の多くは近代の耕作土である〈3層〉。

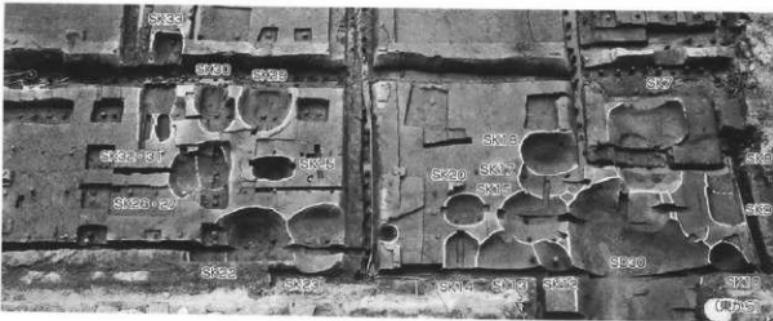


図145 近世遺構全景

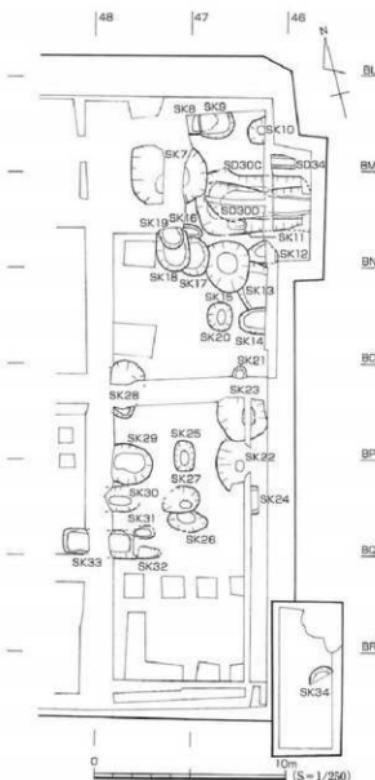


図146 近世遺構全体図



によって削平された可能性が高い。

近世には、中世以来の調査区北東部の大型溝が、規模を縮小し、かつ構造に変化をみせた。この大型溝周辺から調査区南半にかけて、土坑群が切り合い関係を生みながら連続的につくられた。これら土坑群は南北へ帯状に展開するとともに、その内部でまとまりを形成するものである。こうした土坑群の分布は、近世の土地区分と関連するものと考えられる。一方、土坑群よりも西側については、当該期の遺構が発見されていない。土坑群の存在から、西側の土地については耕作地であった可能性もあるが、該当する畦畔等の施設は

みつかっていない。このような、西側に遺構がみあたらない状況に関してても、上層の〈3層〉による削平の可能性が想定されるところである。

a. 土坑（図146～153、表11、図版18）

28基の土坑を〈4層〉上面で検出した。本書では、個々のデータをもとに若干の分類を試みながら、土坑群をまとめて報告する。なお、調査区北壁で近世土坑の可能性がある埋土を確認しているが、本例もふくめれば土坑数は29基となる。

分布 土坑群はBL～BP46～47区、BP49区、BR45区に分布する。土坑の分布は、全体としては南北に帯状にみられる。この分布域の内部をみると、以下のようなA～Cのまとまりに区分することができる。

A群：BL～B0ラインまでの一群（土坑7～20）

B群: BO~BQラインまでの一群 (土坑21~33)

C群: BRライン以南 (土坑34)

A群は溝30C・D周辺に分布するものである。特に溝30C南側において切り合い関係が多くみられる。ここでは土坑12~20が分布するが、これらは東から西へと場所を移動しながら掘削されたものである。すなわち、土坑12→13→14・15→17→18という切り合い関係をなす。溝の西端につくられた土坑7は、溝30Dとの切り合いは不明であるが、溝30Cを切る形となり、溝30C埋没以降の所産である。土坑11は、溝30Cを切る一方、溝30Dに切られていた。溝の北側の場合、土坑8→9へ、すなわち西から東と変遷する。

B群は南北方向に3列に連なるように土坑が分布するものである。すなわち東列 (土坑21~24)、中央列 (土坑25~27)、西列 (28~33) である。列内で切り合い関係がいくつか確認される。東列では土坑21は擾乱のため他のとの関係が不明であるが、土坑22~24において構築順序を推定できる。すなわち、土坑22~23の切り合いと、位

表11 近世土坑の分類

面積	平面	円形	椭円形	本の形	扇形	扇形	数量
箱形	21	14	13	9, 16, 28, 32, 33	8 (29%)		
ボウル形	17, 19, 20, 24, 34	15, 18, 29, 30	12	7, 8, 25, 31	14 (50%)		
描跡形	10, 22	23	26, 27	11	6 (21%)		
数量	8 (29%)	6 (21%)	4 (14%)	10 (36%)	n = 28		

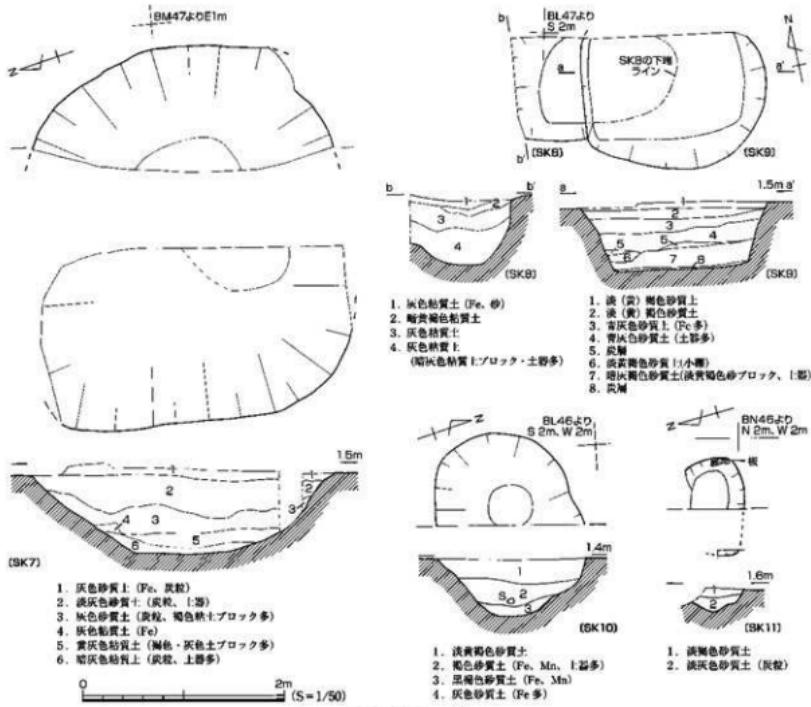


図147 近世土坑(1)―土坑7~11―

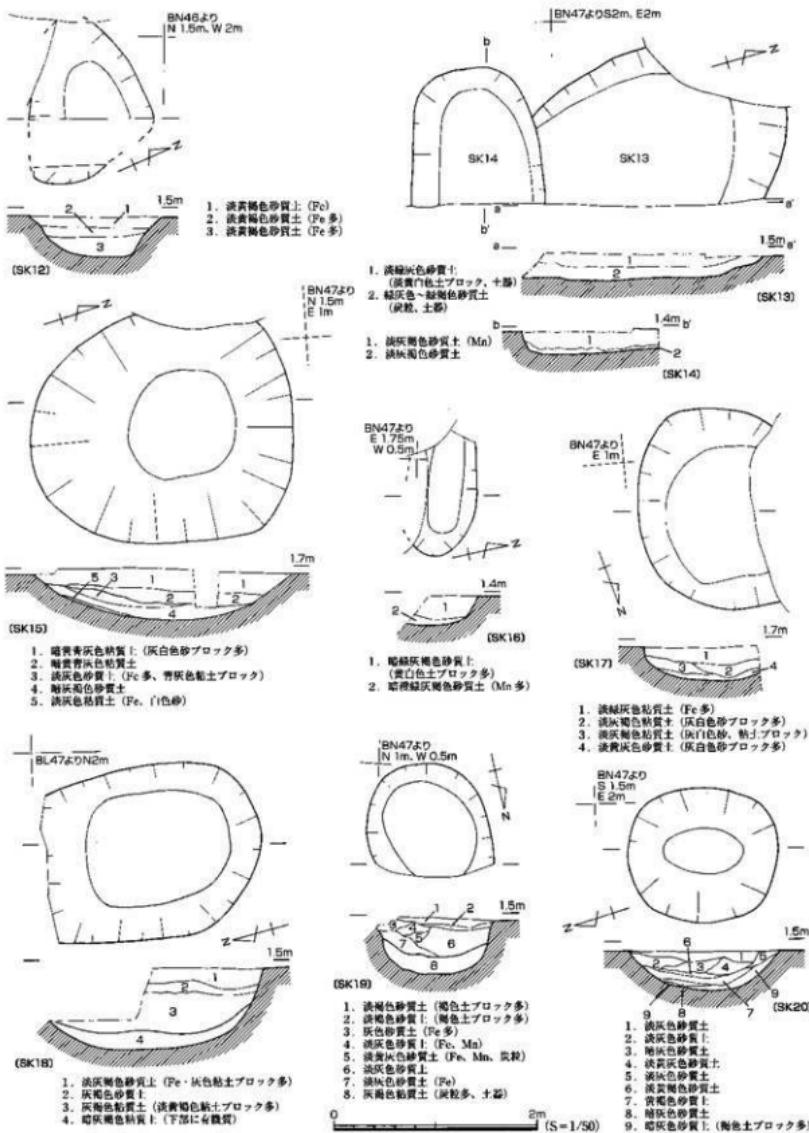


図148 近世土坑(2)-土坑12~20-

調査の記録

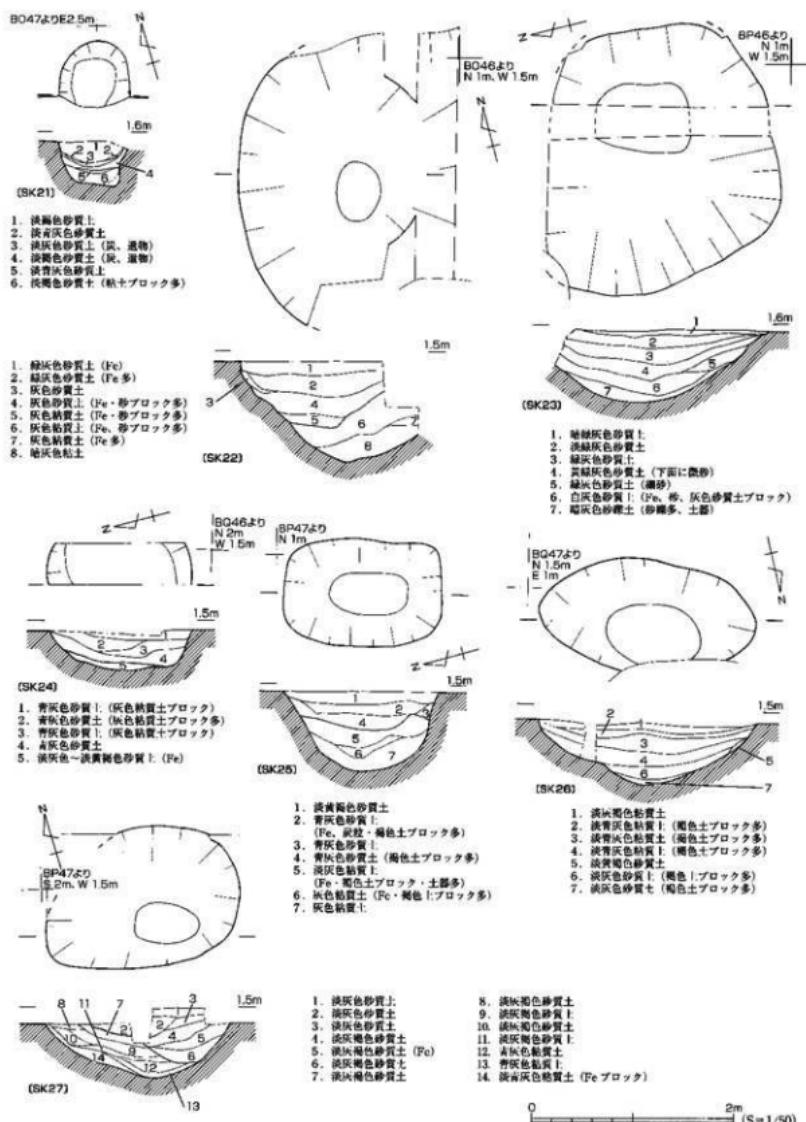


図149 近世土坑(3)―土坑21~27―

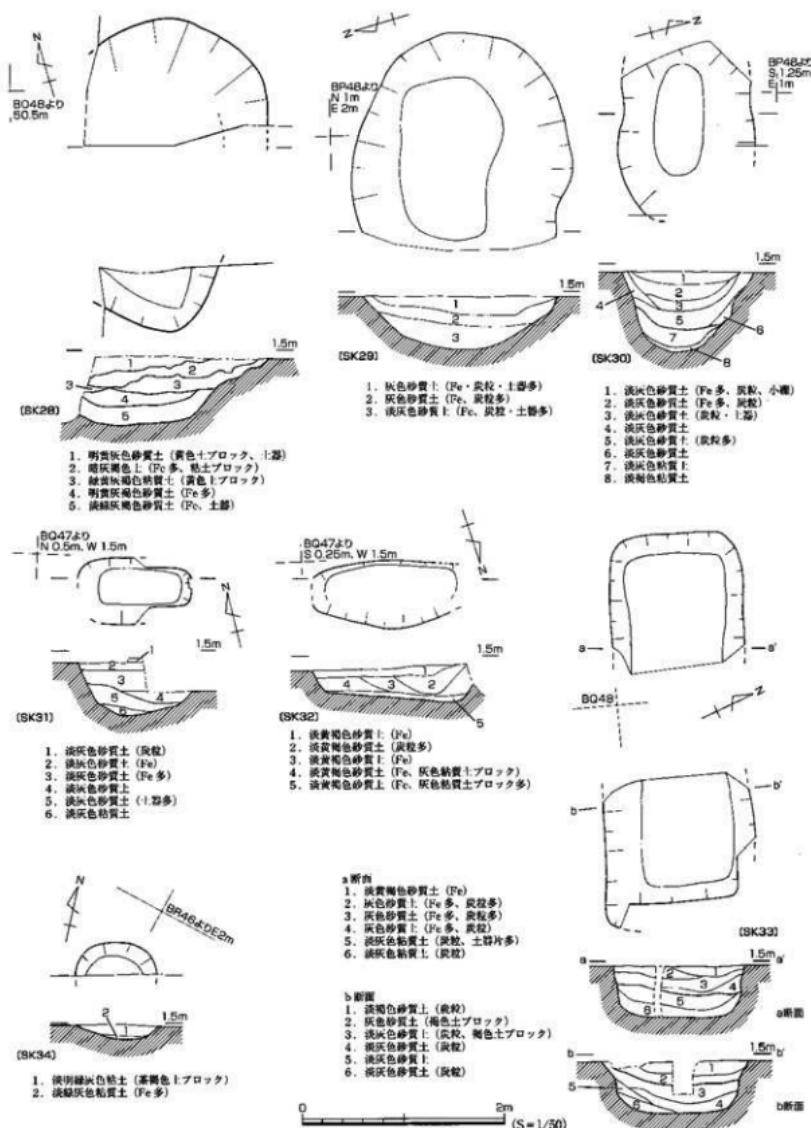


図150 近世土坑(4)—土坑28~34—

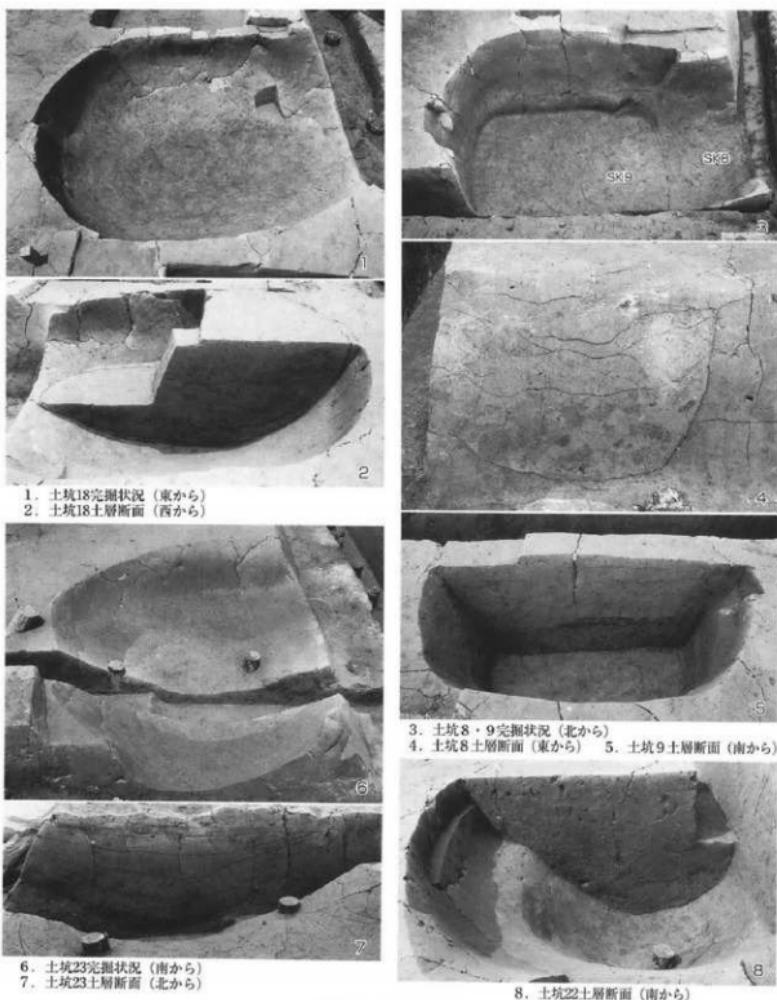
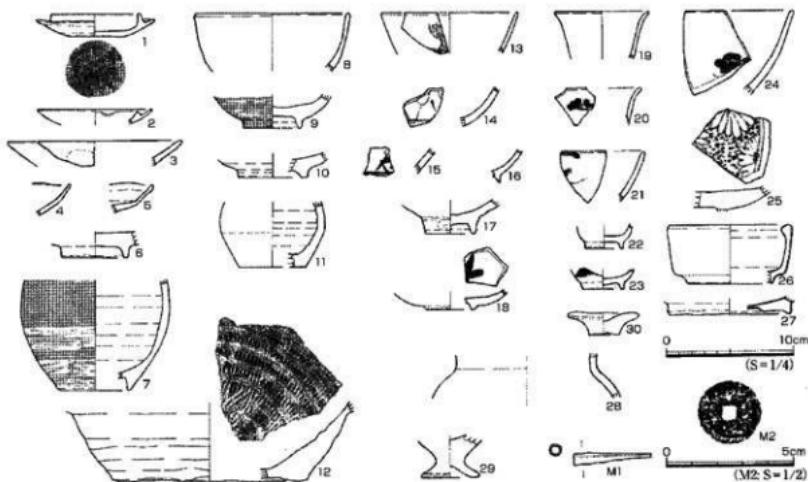


図151 近世土坑(5)

置関係から土坑22→24の順序が想定される。したがって、東列では土坑22→23・24の順序が考えられる。中央列では、土坑26→27の切り合い関係がみられる。西列では土坑32→33の切り合いを確認した。土坑31と33に関係については、当該箇所が近代の擾乱部分に当たるため判然としない。



番号	遺構	時期・器種	法量 (cm)			形態・子法等	地土	色調・跡/痕
			口径	底径	高さ			
1	SK27	埋葬式・灯明器	7.0	3.9	1.9	(内) (外)コヨナデ、(底)直切り縁ヘラケズリ、留土	微砂・堅板	暗赤褐色
2	SK27	埋葬式・灯明器	*9.0	-	-	(内) (外)コヨナデ(底)直切り後にヘラケズリ、留土	微砂・堅板	茶褐色
3	SK22	店洋鏡・鏡	*13.8	-	-	(内) (外)施錫、一毫鏡	堅板	茶褐色/灰ナリーブ
4	SK9	上質鏡・鏡	-	-	-	(内) (外)ヨコナデ	堅板	灰褐色
5	SK9	陶器・竹筒	-	-	-	(内) (外)施錫	淡灰・黄褐灰	
6	SK27	肥前陶器・鏡	-	*5.5	-	(内) (外)施錫、留人入、(高台)直付縁脚、移付巻、4/5規	微砂・堅板	淡灰白/灰褐色
7	SK26	肥前系陶器・拂利	-	*5.6	-	(内)ヨコナデ(外)施錫、白口による刷毛目装飾	微砂・堅板	淡灰・暗褐色
8	SK23	肥前系水波紋陶器・鏡	*12.1	-	-	(内) (外)施錫、素面大、1.6倍、内ノ山系の可能作あり	微砂	灰褐色/透明
9	SK26	肥前陶器・鏡	-	4.7	-	(内) (外)施錫、白口による刷毛目、(高台)輪削ぎか?	微砂・堅板	暗茶褐色/透明
10	SK19	肥前陶器・鏡	-	5.5	-	(内)施錫(外)施錫(底)留人出し、底1/2残	堅板・堅板	暗褐色/灰白色
11	SK7	陶器・瓶	-	*5.2	-	(外)ナデ、下部膨らみ口足?	微砂・堅板	2.5倍
12	SK19	肥前陶器・瓶	-	*15.4	-	(内)ヨコナデ(底)吹抜状目付(外)ヨコナデ、底1/4残	微砂・堅板	淡茶褐色/淡青緑
13	SK9	肥前系陶器・瓶	*10.8	-	-	輪削・斜削: 素板、1.6倍	堅板	断手跡
14	SK19	肥前系陶器・瓶	-	-	-	輪削: 素板、2.5倍	微砂・堅板	淡白/透明
15	SK22	肥前系陶器	-	-	-	輪削: 素板、2.5倍	堅板	灰白色
16	SK9	肥前系陶器?・瓶	-	-	-	輪削: 素板: 色	微砂	淡白/淡青白
17	SK25	肥前系陶器・瓶	-	4.3	-	(内) (外)施錫、(高台)無輪だが一部赤味ある。割り出し	堅板	淡褐色/淡青灰
18	SK30	肥前系陶器・瓶	-	*4.0	-	輪削: 素板: 色見込みの変遷不明、(變付)変形	堅板	淡白/白
19	SK26	白口・盤口	*7.4	-	-	(内) (外)施錫、口幅1.6倍	堅板	白/青白
20	SK27	瓶・小瓶	-	-	-	(内) (外)施錫、青口は炭鉱灰色	堅板	灰白/淡青白
21	SK26	瓶・小瓶	-	-	-	輪削: 素板: 暗・茶灰不明	堅板	淡白/青白
22	SK33	白口・小瓶	-	3.0	-	(内) (外)施錫、(高台)無輪だが、變付は輪削、2.5倍	堅板	白/透明
23	SK27	瓶・小瓶	-	3.3	-	輪削: 白口: 色: (高台)無輪だが、變付は輪削、2.5倍	堅板	白/青白
24	SK29	肥前伊万里・瓶	-	-	-	輪削: 素板: 色: 色見込み不明	堅板	淡白/白/青白
25	SK29	肥前伊万里・萬字・瓶	-	-	-	輪削: 素板: 萬字: 花火鉢: 文	堅板	淡白/青白
26	SK26	白口・瓶	*9.8	*6.8	17	(内) (外)施錫、(高台)無輪だが、1.5倍	堅板・堅板	白/淡青白
27	SK7	肥前青磁・罐	-	*9.2	-	(内) (外)施錫、(高台)無輪だが、底1/4残	微砂・堅板	淡白/灰褐色
28	SK33	青磁・香炉	-	-	-	(内)無施錫(外)施錫、1.5倍度残	堅板	淡茶褐色/青オリーブ
29	SK22	肥前系陶器・脚鉢	-	*4.6	-	(内) (外)施錫、(高台)無輪但し、底付は無輪、ヨコナデ	堅板	淡白/青白
30	SK26	磁器・蓋or鉢	5.6	-	1.8	(内)施錫(外)1.1倍底で施錫し底付は無輪、ヨコナデ	堅板	灰白/淡青白
番号	出土遺構	種類	最大径 (cm)	底大径 (cm)	最大高 (cm)	重量 (g)	参考	
M1	SK30	キセキ・瓶口	6.2	0.9	0.1	37	堅板	
M2	SK9	瓶	-	2.5	0.1	17	薄びが著しく、表面剥落	

図152 近世土坑出土遺物(1)

C群については、現状では土坑34のみとなる。ただし、古代末の井戸4の上半部を近世土坑として分離するならば、それは本群に含まれることとなる。

形態的特徴(表11) 検出した土坑群については、規模や平面形、断面形において多様性が認められる。したがって、土坑については整然とした区分をなすものではない。

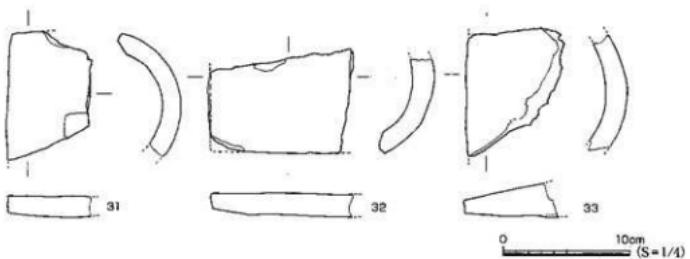


図153 近世土坑出土物(2)

平面形については円形、楕円形、木の葉形、隅丸長方形がある。断面形については、底面が平坦になるものと、丸みを帯びるものとで大別しうる。前者については箱形とし、後者については、ボウル形と掘鉢形に細分した。

まず平面形でみると、隅丸長方形がもっとも多く、以下、円形→楕円形→木の葉形の順となる。ただし、円形と楕円形は平面形が類似するともいけるため、両者をあわせれば円形/楕円形がもっとも多くなる。断面形については、ボウル形がもっと多く、以下、箱形→掘鉢形の順となる。

平面形と断面形の組み合わせをみると、一定の傾向が読み取れる。もっとも多い組み合わせは隅丸長方形・箱形であり、円形・ボウル形、楕円形・ボウル形がそれに続く。平面形ごとに断面形との組み合わせをみると、隅丸長方形は箱形との組み合わせが最も多く、以下ボウル形、掘り鉢形の順となる。円形と楕円形は類似した傾向を示す。円形の場合、ボウル形→箱形→掘鉢形の順となり、楕円形の場合ボウル形→箱形・掘鉢形となる。木の葉形は数量が4基で少ないので、他の平面形において最少である掘鉢形が2基と多い。以上から、典型的な組み合わせとしては、「隅丸長方形・箱形」、「円形・ボウル形」、「楕円形・ボウル形」、「木の葉形・掘鉢形」という四類型が挙げられる。円形と楕円形は、平面形としても類似することから、両者をあわせば「円形/楕円形・ボウル形」がもっとも主要な構造となる。

規模については、切り合いや擾乱によって全体像を知りうる例は多くなく、上記の平面形・断面形の組み合わせとともに、相関は見出せない。全体をみれば、最大規模が長さ3.95mの土坑7、最小が長さ0.69mの土坑21となる。土坑の性格が一律でないことは、規模の面からも推測しうる。

特徴的な形態としては、隅丸長方形・箱形の土坑33が挙げられる。これは、中央部分を近代の建物基礎によつて失っているが、形態と埋土の類似性から一つの土坑として認識しうる。隅丸長方形の土坑としては、最も長大であり、長さ3.49m、幅1.50mを測る。

埋土に関して特徴的なものとして、隅丸長方形・箱形の土坑9では、底面および下牛の層(5・6層)に炭層を形成する。比較的類似する例として、円形・箱形の土坑21では、中位の3・4層に炭が多く含まれる。一方、楕円形・掘鉢形の土坑23では、底面に砂礫を多く含む層が堆積していた。なお、掘鉢形を呈するものには、土坑26・27のように、埋土の単位が細かいものがみられる点も注目される。円形/楕円形・ボウル形については、土坑19や20のように上半に土坑廢棄時の埋土と考えられる塊状の土層が多くみられる例の他は、埋土数が少ない傾向がうかがえる。

類似する平面・断面形や規模の土坑が、近接して築かれる場合がみられることも、機能を考える上で注目しうる。A群の溝30南側には円形/楕円形・ボウル形の形態が多く、木の葉形を呈する土坑12・13も切り合いを有す

番号	出土場所	種類・特徴	法面(cm)			地盤・予法等	駿土	色調: 内/外
			最大高	最大幅	最大厚			
31	SK23	瓦質・丸瓦	(6.5)	(10.2)	1.3	(内)埴縫ケズリ(外)ナデ	無砂・粗砂△	褐色/灰~暗灰
32	SK23	瓦質・丸瓦	(11.4)	(8.2)	1.6	(内)埴縫ケズリ・ナデ(外)ナデ	無砂・粗砂△	暗灰
33	SK19	瓦質・丸瓦	(7.3)	(9.1)	1.7	(内・外)ナデ(端面)ケズリ	無砂・粗砂△	褐色

る。B群では土坑23・24、土坑26・27が規模や形態が類似するもので、いずれも切り合い関係にある。

多くの上坑からは、陶磁器・瓦が数点出土した。時期は17世紀前半から18世紀を中心とする。分布における各群の時期的様相をみてみよう。まずA群では、土坑19からは、17世紀前半の陶磁器が複数個体出土した。土坑19は切り合い関係でみれば、溝30南の土坑12~19の中では最も新しいものである。したがって、土坑12~18は17世紀前半以前の所産と位置づけられる。一方、土坑7は肥前青磁皿(27)は18世紀に位置づけられる。また土坑9からは18世紀末~19世紀初頭の肥前磁器碗(13)が出土している。したがって、A群内においては、溝30南のグループが17世紀となり、西~北に分布する土坑が18世紀~19世紀に位置づけられる。

つぎにB群では、東列の土坑22が唐津焼皿(3)から17世紀前半に位置づけられる。本土坑は切り合い関係としても古いものである。中央列の土坑25からは肥前磁器碗(25)が17世紀中頃に比定される。同列の土坑26からは比較的多くの破片が出土したが(陶磁器10点、瓦5点)、肥前系徳利(7)の年代から17世紀後半に位置づけられる。西列では、土坑29において17世紀中頃の伊万里焼(24・25)が出土した。土坑33からは18世紀代と思われる青磁番炉(28)のほか17世紀後半の破片も出土している。このようにみると、B群の列間ではそれほど大きな年代差ではなく、同時期に列が併存していたものと考えられる。

陶磁器以外のものとしては、土坑9からは古銭1点、土坑30からは煙管の吸口1点が出土した。桶などの構造物はいずれからも出土していない。

上記の遺物の年代観からは、17世紀代に土坑構築のピークのひとつがあり、A群の溝30南のグループと、B群の多くがつくられたことがわかる。その後、18世紀頃にA群の溝30西~北のグループ、およびB群西列の長大な土坑33が築かれた。この段階のB群土坑33とA群土坑9は、距離は約20m離れているものの、ともに東西に主軸をなす隅丸長方形・箱形の土坑であり、性格の共通性も想定される。

土坑の性格については、墓や水溜、肥溜などの機能が想定しうるが、上述の類型が特定の機能にのみ対応する根拠は得られていない。ただし、断面形が擂鉢形のものは、墓よりもむしろ水溜の機能に適するものと考えられる。また、土坑33や古銭が出土した土坑9は墓を想起させるものである。

b. 溝

溝30(C・D)(図154・155、図版19)

本遺構はBL~BM45~46区に位置する。検出面は(4層)である。中世段階から継続的に使用された大型溝(溝30A・B)の西端部にあたる。平面と断面において、以下の溝30C・30Dを確認した。これらは、出土遺物より近世段階の遺構と位置づけるものである。

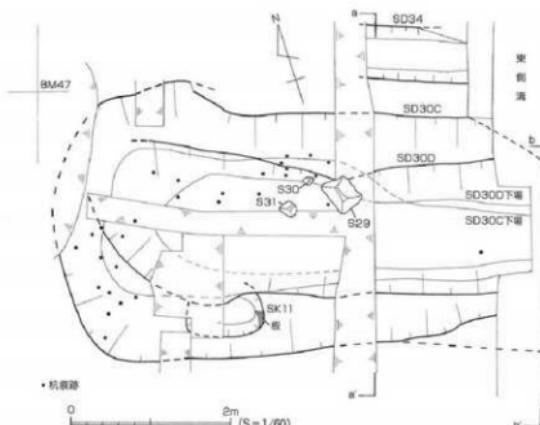
溝30C(図154・155) 溝30B同様に、本遺構の西端部の埋土は土坑7によって、また東側肩の埋土は近代の畦畔の整備の際に切られている。また、土坑11は本遺構の埋没後につくられたものである。

溝の平面形は西端が幅広となるのにに対し、b-b'断面において北側肩が南へ屈折することで幅狭となる形態である。本遺構は、溝30A・B段階と異なり、北側の張り出し部が消失するとともに、溝30~32のような接続する溝も認められない。溝の残存長6.0m、残存幅は西側が3.45mで最大となり、東端が2.70mとなる。断面形は逆台形を呈する。底面標高は西側で1.19m、東端で1.10mとなり、西から東へ向けて底面を低くする。深さは西端西側で0.54m、東端で0.50mを測る。

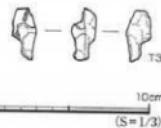
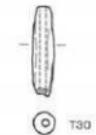
本遺構の底面を検出した段階で、西端~北辺にかけて杭群を確認した。杭は30本あり、1本のみは東端中央付近で検出した。底面から30cm前後が露出し、地中に20~30cmほどの深さまで打ち込まれてた。これら杭は、列ではなく群をなさず、規則的な状況は示さない。杭以外に横木等は出土していないが、杭群は西端と北辺部の護岸施設の名残と考えられる。

埋土としては、a-a'・b-b'断面とともに3層を確認した。a-a'断面では、淡青灰色粘質土となる。1層はブ

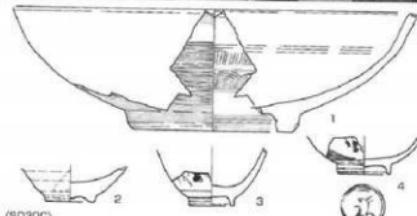
調査の記録



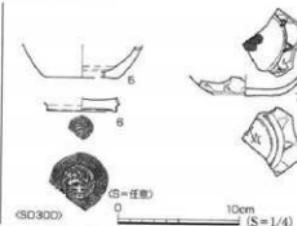
1. 溝30C 完掘状況(北から)
2. 溝30D 石器出土状況(東から)



0 10cm
(S=1/3)



(SD30C)



(SD30D)

0 10cm
(S=1/4)

番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法等	地土	色調：勘(内)/基(外)
		口径	底径	厚さ			
1	磨削陶器・大鉢	*33.0	14.0	10.0	(内)白色灰土・施釉、見込みに重ね焼き痕(外)三筋手、底1/2残	細砂・灰土	茶系(深)
2	磨削陶器・碗	-	4.0	-	(内)施釉、一部焼付着(外)施釉(高台)削り出し、施釉	細砂・灰土	灰灰(深)
3	磨削陶器・碗	-	3.7	-	素胎、表面：薄黄色、(受付)裏面、一部焼付着	堅土	黄白(青白)
4	磨削陶器・碗	-	4.2	-	素胎、表面：薄黄色、(受付)裏面、高台内一部に粗砂付着、1/3残	堅土	灰白(青白)
5	磨削陶器・碗	-	6.0	-	(外)ヨコギザ、切妻形施釉土、1/3残	堅土	(茶系) / (青系)
6	磨削陶器・碗	-	5.7	-	(内)施釉(高台)削り出し、無釉、中央に斜口(小舟形)、1/2残	堅土	灰灰(深)
7	通用肥厚陶器・瓶	-	-	-	素胎、表面：白色、(内)施釉(小舟)外)施釉(高台)X文字?	堅土	淡灰(青白)
番号	器種	法量 (cm)			特徴	地土	色調
		最大径	底径	厚さ			
T30	上縁	5.00	1.35	1.40	9.5 管状土縁、ナメ、丸形5mm。	微砂・粘土	淡灰白
T31	人形土製品	(3.2)	(1.4)	(3.2)	3.8 下平底のみ残存、内部に穿孔あり。	微砂・粘土	淡灰白

図154 溝30C・溝30D・出土遺物(1)

ロックを多く、2層は砂利が多く含まれる。3層は上層に比べれば均質な様相をなす。a-a'断面にみられる杭は、上端が溝30Dによって失われた状況を示す。b-b'断面では、淡灰色砂質ブロックを含む灰色砂質土を確認した。これら土層断面にみる層は、いずれも使用段階に堆積した層と考えられる。

本遺構からは兩面器類がコンテナ1箱分出土した。出土遺物は17世紀後半～18世紀前半の範疇に収まる。また、本移行を切る土坑7は18世紀代に位置づけられるものである。したがって、本遺構の廃絶時期は18世紀前半と判断される。

溝30D（図154・155） 残存長は5.48m、残存幅は西側で1.86m、東側で1.66mとなる。b-b'断面では、基礎による擾乱の影響で本遺構を見出しえなかつたが、擾乱の範囲から、東端において幅狭な形態に移行する可能性がある。断面形は逆台形を呈する。前段落と比べて、最も直線的な断面形となる。底面標高は西側で0.90m、東側で1.10mを測り、底面が西へ向かって低くなる。深さは西側で0.49m、東側で0.56mとなる。

埋土はa-a'断面で5層を確認した。底面に堆積する暗青灰灰色砂質土の5層は、砂利・礫を多く含み、鉄分も多い。4層は色調としては5層に類似するものである。上半の淡灰褐色砂質土である1～3層には有機物が多く含まれていた。これら1～5層は、土質と堆積状況から、使用時の堆積を基本とするものと判断される。

本遺構の北斜面では、斜めに落ち込むような形で、いわゆる豊島石製の石祠の屋根（大型：S29、小型：S31）と、それらに間連する側辺部の石（S30）が出土した。また石造物の近辺から骨片が出土している。こうした石製品は、近隣における宗教施設の存在を示唆するものである。

本遺構からは遺物がコンテナ1箱分出土した。溝30の中でも最も陶磁器が多く出土した。他に土人形（T31）や

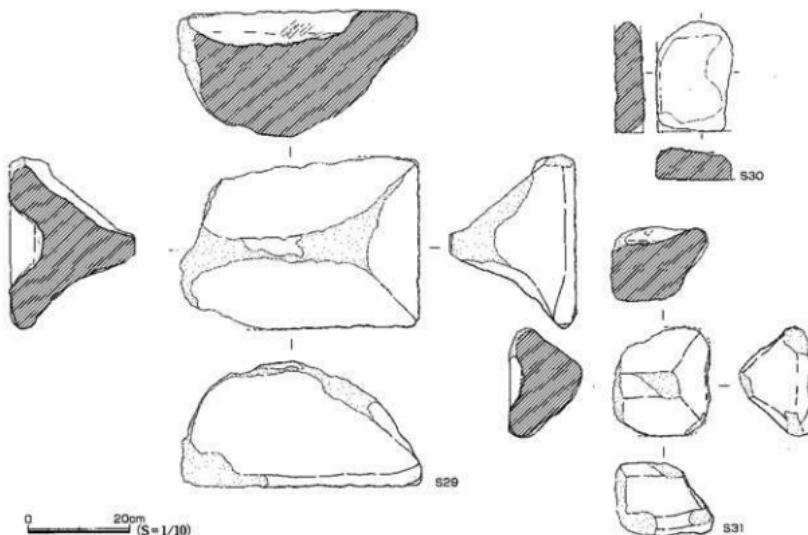


図155 溝30D出土遺物(2)一石製品

土錐（T30）が出土した。遺物の年代は溝30Cと同様に17世紀後半～18世紀前半を示す。18世紀前半に溝30Cが埋没した後に、本遺構が掘削されたものと考えられるが、下限の時期についても出土遺物からみると18世紀前半の範囲に収まる。このことから、比較的短期間の内に廃絶されたものと考えられる。あるいは、上部に大畦畔が築かれる頃を下限とみなすことも可能ではあるが、出土遺物からの確実な根拠はみられない。

溝34（図139）

本遺構はBL45～46区に位置する。検出面は〈4層〉である。残存長は125m、幅0.68mを測る。a-a'断面より西側については、検出を行ったが本遺構の続きは認められなかった。したがって、a-a'断面のある南北懸済において、本遺構の西端は收まるものと考える。底面標高は1.46mである。検出した範囲が短いため、底面の傾斜は判然としない。

埋土は暗灰色粘質土の一層からなる。

遺物は出土していない。溝30と並走するところから関連する小型溝と思われるが、本調査区内においては両者の接続状況は認められなかつた。

2. 近代

概要（図156） 近代の遺構は畦畔のみで構成される。近世土坑群の上面を削平する形で、南北方向と東西方向に小畦畔がつくられた。また、調査区北東部の近世の大型溝があった箇所は、東西方向の大畦畔として整備された。

近代の畦畔については、本調査地点の南東20mに位置する第7次調査地点（基礎研究棟）でも確認されており、一連の耕作域であったものと考えられる。

a. 畦畔（図156・157）

本遺構はBL～BR46～50区に位置する。検出面は発掘開始面の〈3a層〉である。一部〈2層〉の残存部分では〈2層〉も含めて検討を行った。東西・南北方向にのびる小畦畔と、調査区北東部の大畦畔を検出した。

小畦畔については、〈3層〉段階と〈4層〉段階にそれぞれ畦畔が削り出されていたことが判明した。調査区全面で検出したのは〈4層〉段階の畦畔である。

〈3層〉畦畔については、一部のみを平

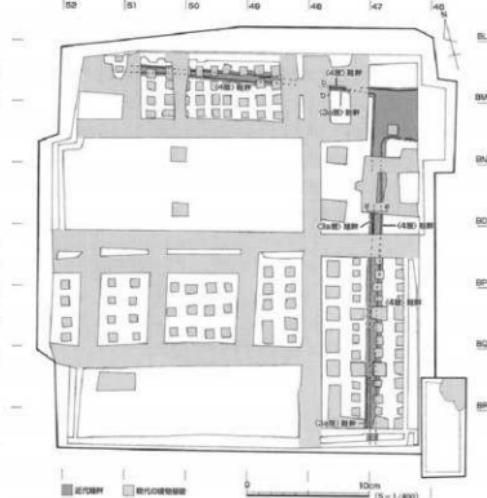


図156 近代遺構全体図



図157 畦畔

東西方向の小畦畔については、鹿田の東西グリッドから6°北に振れる。構築状況は南北小畦畔と類似するが（3層）段階の小畦畔の様相が明瞭である（b-b'断面）。（3層）畦畔は、上面標高1.69m、推定幅44cm、高さ10cmを測る。（3層）畦畔は、（4層）畦畔の上部につくられた。（4層）畦畔の上面標高1.55m、高さ11cmを測る。

大畦畔については、溝30B・C埋土を削り出す形で築かれた（図139参照）。長さ3.5m、上面標高1.66m、上面幅4.0m、高さ13cmを測る。この大畦畔には（3層）が伴う。なお、大畦畔において（3層）小畦畔に対応する構造があったかどうかについては、付近の（2層）を除去した後の認識となつたため不明である。

(光本)

面的に検出した。

まず南北方向の小畦畔をみた。平面形は鹿田地区の調査グリッドに対して平行する。構築順序をみると、まず（4層）が畦畔として削り出される（a-a'断面）。（4層）畦畔は、上面標高1.63m、上面幅60cm、高さ12~20cmを測る。西側底面が東側よりも低くなり、比高が設定されている。この畦畔に伴う耕作土は（3層）である。その後（3層）はその西側を畦畔として加工され、（2層）を伴う耕作域を形成した。南北の（3層）畦畔は、a-a'断面付近とBQ~BR46区において平面的に検出した。

第4章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡第13・15次調査出土木材の樹種

能 城 修 一（森林総合研究所木材特性研究領域）

鹿田遺跡第13・15次調査で見いだされた木材40点の樹種を報告する。内訳は、弥生時代中期以前の板材1点と、古墳時代初頭の井戸から出土した杭等4点、平安時代中頃の曲物1点、平安時代後半～末の井戸から出土した曲物や板等14点、鎌倉時代～近世の溝から出土した木材1点、中世のピットから出土した建築材3点、近世の溝から出土した杭等14点、近世の板材2点である。ここでは、出土した樹種の木材解剖学的な記載を行い、代表的な試料の顯微鏡写真を示して同定の根据を明らかにする。樹種同定用のプレバラート標本は、木材から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレバラートには、OKUF-1303～1328およびOKUF-1338～1351の番号をふして標本番号とした。プレバラート標本は森林総合研究所に保管されている。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図158：1 a-1 c（枝・幹材、OKUF-1304）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材はやや多い。放射組織は柔細胞のみからなり、垂直壁には単壁孔が著しく結節状となる。

2. マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科 図158：2 a-2 c（枝・幹材、OKUF-1312）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。晩材は量多い。放射組織は上下に仮造管をもち、水平壁には鋸歯が著しい。分野壁孔は窓状で1分野に1個。

3. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図158：3 a-3 c（枝・幹材、OKUF-1311）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材はやや多い。分野壁孔は大型のスギ型で1分野に2個。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図158：4 a-4 c（枝・幹材、OKUF-1309）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は少ない。分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に2個。

5. アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図158：5 c（枝・幹材、OKUF-1345）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やか。分野壁孔は小型のスギ型で1分野に3～4個。放射柔細胞には樹脂を含む。

6. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図158：6 a-6 c（枝・幹材、OKUF-1338）

年輪のはじめにやや大型の丸い道管が數列配列し、晩材では小型で薄壁の道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は単列向性。

7. コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aeglops* ブナ科 図159：7 a-7 c (枝・幹材、OKUF-1316)
 年輪のはじめにやや大型の丸い道管が3列ほど配列し、晩材では小型で薄壁の道管が放射方向へ火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で単列のものと大型の複合状のものとからなる。
8. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図159：8 a (根株材、OKUF-1340)
 年輪のはじめに中型の丸い道管が10列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した薄壁の道管が火炎状に配列する半環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で単列のものと大型の集合状のものとからなる。
9. ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図159：9 a-9 c (枝・幹材、OKUF-1319)
 小型で薄壁の孤立道管がやや疎ら散在する散孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で5細胞幅くらい、鞘細胞をもつ。
10. サクラ属 (広義) *Prunus s.l.* パラ科 図159：10 a-10 c (枝・幹材、OKUF-1328)
 小型で丸い道管が数個ずつ複合して斜めに連なる傾向をみて散在する散孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は異性で3細胞幅くらい。
11. センダン *Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.* センダン科 図159：11 a-11 c (枝・幹材、OKUF-1323)
 やや大型から小型の道管が不規則に複合して疎らに散在し、徐々に小型化する。年輪界は採取できず環孔性は不明。道管の穿孔は單一。周囲状の木部柔細胞にはしばしば結晶をもつ。放射組織は同性で10細胞幅くらい。
12. カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 図159：12 a-12 c (枝・幹材、OKUF-1306)
 中型で厚壁の丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は接線状。放射組織は異性で1~2細胞幅、層階状に配列する。

今回検討した木材は、広い時代幅を持っており、一概に傾向を捉えることは困難である。しかしあモニ属が古墳時代から近世まで、またヒノキが弥生時代から近世までこの地域で継続的に使われている(表12)。マツ属複雜管束軸属は今回の発掘では12世紀前半以降からしか出ていないが、鹿田遺跡第3次調査や津島岡大遺跡第6次調査では9~10世紀の杭として多数使われており、古墳時代の杭も津島岡大遺跡第22次調査で数点見つかっていることから、これも古代以降、この地域では普通に生育していて使われていたと想定される。それに対し、アスナロの出土は岡山大学構内遺跡では初めてであり、アスナロの天然分布が近くでは鳥取県あるいは兵庫県にしかないとされていること(倉田1964)を考えると、これが近世における木材流通の成立を反映するものかは今後検討すべき問題である。

引用文献

倉田 修. 1964. 原色日本林業樹木図鑑 第1巻. 地球社.

表12 鹿田遺跡第13・15次調査出土木材の集計表

樹種名	生长期前	古墳初期	10世紀末～11世紀初頭	11世紀後半			12世紀前半～中頃			中世	鎌倉～近世	近世								
				板材	杭	板材	曲物底板	櫛板珠	曲物片	杓子伏	加工材	筈	棒状	不明	板材	柱材	木片	杭	板材	
モミ属			2												5	1		1		
マツ属複数管束系属															1					
マツ属																1				
スギ																				
ヒノキ	1							1		1		1						1		
アスナロ																		2		
クリ																		1		
コナラ属クヌギ節			2																	
コナラ属コナラ節																		1		
ウツギ属																				
ヤクシラ属																				
セイシダン																				
カキノキ属																				
総計		1	2	2				1	1	1	1	2	2	1	1	5	3	1	14	2

表13 鹿田遺跡第13・15次調査で出土した木材の樹種

標本	No	PL番号	樹種名	製品名	木取り	遺構	本文中 掲載番号	時代
OKUF-1303		モミ属	板材	板目	井戸8	岡17-W16	平安時代末(12c中)	
OKUF-1304	岡158-1	モミ属	板材	板目	井戸8	岡17-W17	平安時代末(12c中)	
OKUF-1305		モミ属	板材	板目	井戸8	岡17-W18	平安時代末(12c中)	
OKUF-1306	岡159-12	カキノキ属	櫛板珠	芯持ち丸り出し	井戸4	岡107-W7	平安時代後半(11c後半)	
OKUF-1307		ヒノキ	杓子伏	板目	井戸4	岡107-W9	平安時代後半(11c後半)	
OKUF-1308		ヒノキ	曲物片	追挽目	井戸4	岡107-W8	平安時代後半(11c後半)	
OKUF-1309	岡158-4	ヒノキ	曲物底板	追挽目	井戸3	岡105-W6	平安時代中期(10c末～11c初頭)	
OKUF-1310		ヒノキ	苦	割り材	井戸7	岡115-W13	平安時代末(12c前半)	
OKUF-1311	岡158-3	スギ	箸	割り材	井戸7	岡115-W14	平安時代末(12c前半)	
OKUF-1312	岡158-2	マツ属複数管束系属	棒状製品	割り材	井戸7		平安時代末(12c前半)	
OKUF-1313		マツ属複数管束系属	柱材	九木	ビット		中世	
OKUF-1314		モミ属	切削板ある板材片	板目	井戸1		古墳時代初期	
OKUF-1315		ヒノキ	板材	板目	河道	岡18-W1	弥生時代中期以前	
OKUF-1316	岡159-7	コナラ属クヌギ節	杭(逆)	芯持ち丸木	井戸2	岡30-W3	古墳時代初期	
OKUF-1317		コナラ属クヌギ節	杭(逆)	芯持ち丸木	井戸2	岡30-W2	古墳時代初期	
OKUF-1318		モミ属	板材	板目	井戸2	岡30-W4	古墳時代初期	
OKUF-1319	岡159-9	ウツギ属	不明木製品	芯持ち丸木	井戸8	岡117-W19	平安時代末(12c中)	
OKUF-1320		モミ属	柱材	不明	ビット		中世	
OKUF-1321		マツ属	柱材	不明	ビット		中世	
OKUF-1322		マツ属複数管束系属	加工材片(長幅)	加工材片(小片)	板目	井戸7	平安時代末(12c前半)	
OKUF-1323	岡159-11	セイシダン	加工材片(小片)	板目	井戸7		平安時代末(12c前半)	
OKUF-1324		スギ	板材	板目	土坑11		近世	
OKUF-1325		スギ	板材	板目	土坑11		近世	
OKUF-1326		ヒノキ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1327		クリ	杭	不明	溝30C		近世	
OKUF-1328	岡159-10	サクラ属	木片	不明	溝30B		鎌倉時代～近世	
OKUF-1329	岡158-6	クリ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1330		クリ	杭	平削	溝30C		近世	
OKUF-1340	岡159-8	コナラ属コナラ節	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1341		モミ属	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1342		クリ	杭	平削	溝30C		近世	
OKUF-1343		ヒノキ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1344		スギ	杭	平削	溝30C		近世	
OKUF-1345	岡158-5	アスナロ	杭	削材	溝30C		近世	
OKUF-1346		クリ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1347		クリ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1348		クリ	杭	芯持ち丸木	溝30C		近世	
OKUF-1349		クリ	杭	ミカン削	溝30C		近世	
OKUF-1350		モミ属	板材	板目	井戸8	岡117-W15	平安時代末(12c中)	
OKUF-1351		モミ属	板材	板目	井戸8		平安時代末(12c中)	

*OKUF1327と1347は、乾燥作業の結果、同一遺物と考えられる。

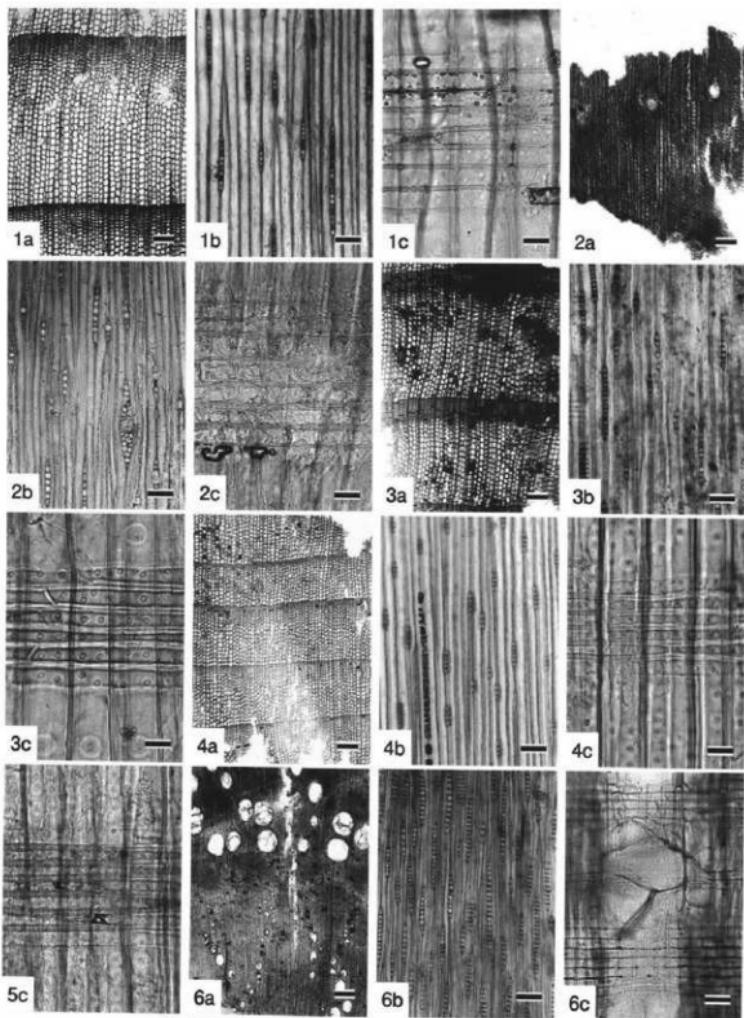


図158 鹿田遺跡第13・15次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c: モミ属(枝・幹材, OKUF-1304), 2a-2c: マツ属複葉管束亜属(枝・幹材, OKUF-1312), 3a-3c: スギ(枝・幹材, OKUF-1311), 4a-4c: ヒノキ(枝・幹材, OKUF-1309), 5c: アスナロ(枝・幹材, OKUF-1345), 6a-6c: クリ(枝・幹材, OKUF-1338). a: 横断面(スケール=200μm), b: 接続断面(スケール=100μm), c: 放射断面(スケール=25μm(1c, 2c, 3c, 4c, 5c), 50μm(6c)).

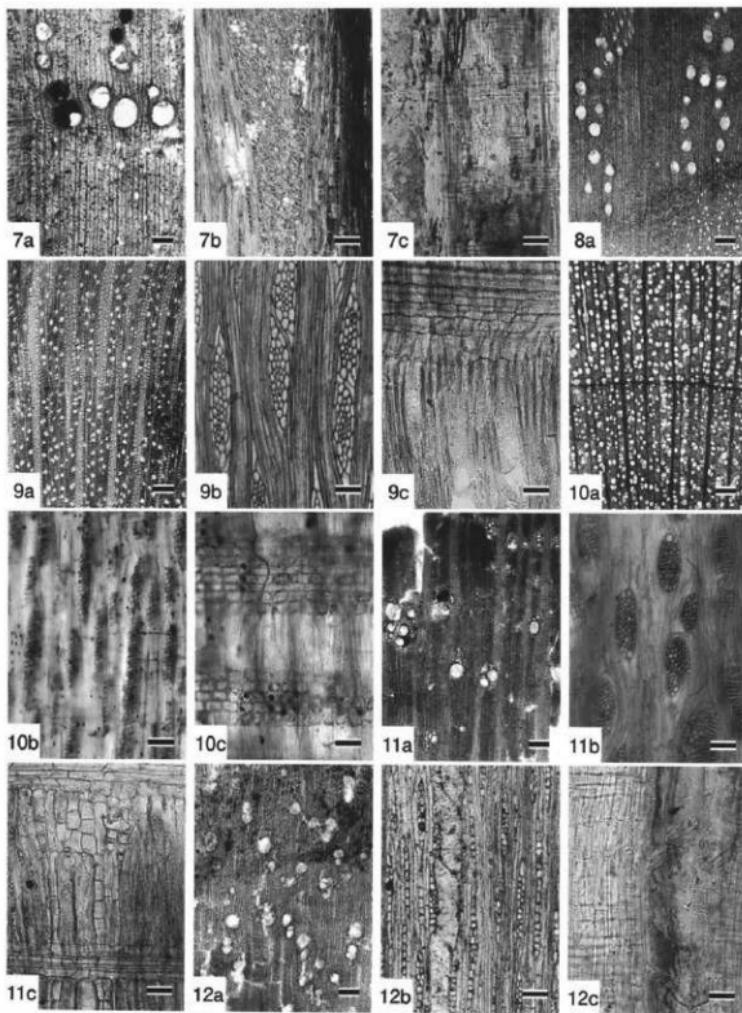


図159 廣田遺跡第13・15次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

7a-7c: コナラ属クヌギ節(枝・幹材, OKUF-1316), 8a: コナラ属コナラ節(根株材, OKUF-1340), 9a-9c: ウツギ属(枝・幹材, OKUF-1319), 10a-10c: サクラ属(広義)(枝・幹材, OKUF-1328), 11a-11c: センダン(枝・幹材, OKUF-1323), 12a-12c: カキノキ属(枝・幹材, OKUF-1306). a: 横断面(スケール=200μm), b: 接線断面(スケール=100μm), c: 放射断面(スケール=50μm).

2. 曲物の樹種同定

株式会社 吉田生物研究所

(1) 試 料

試料は岡山県庵田遺跡第13次査地点から出土した容器2点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結 果

樹種同定結果の表と顕微鏡写真を示し、以下に主な解剖学的特徴を示す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.) (表14・図160)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行を緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接続配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野ら2~4個ある。板目では放射組織はすべて單列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

表14 出土木製品一覧

No	品名	樹種	実測番号
1	曲物	ヒノキ科アスナロ属	図112-W11
2	曲物	ヒノキ科アスナロ属	図105-W6

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫1982『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版
- 島地 謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社
- 伊東隆夫1999『日本古遺物の解剖学的記載I~IV』京都大学木質化学生研究所
- 北村四郎・村田 深1979『原色日本植物図鑑木本編I・II』保育社
- 深澤和三1997『樹木の解剖』海竜社
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第27号
- 奈良国立文化財研究所1993『木器集成図録 近畿原始古代編』奈良国立文化財研究所史料集36号

使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type115

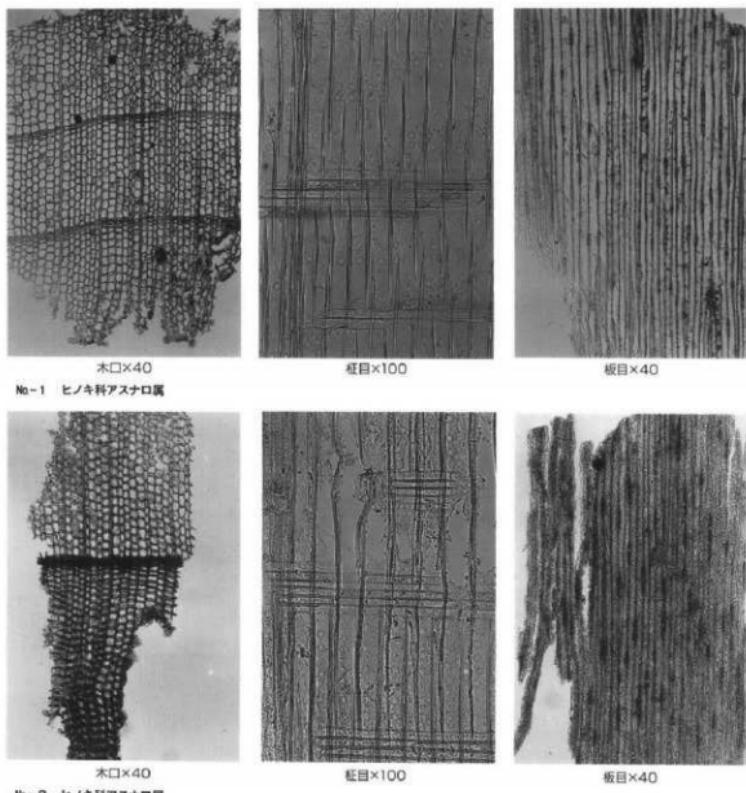


図160 出土木製品の顕微鏡写真

3. 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体の分析

富岡直人・畠山智史（岡山理科大学）

出土資料は平安時代後半～近世に属する哺乳類で、種レヴェルまで同定できたものは、ウマであった。

ウマと同定されたものは右脛骨2点と中節骨であった。右脛骨は、溝30B（鎌倉時代～近世）と〈4a層〉（中世～近世）より出土した。接合するか検討したが、破断面の形状があわざ大きさが異なることから別個体と考えられた。

A2は遠位端幅の復元値より体高112cm程度と推定された。

A1～A3、A5はいずれも茶褐色を呈し、ビビアナイトを析出しており、水分の多い土壤中に埋存し、腐朽するプロセスで骨中のリン(P)と鉄分(Fe)が化合していたことが判明した。

A4、A6は強い火を受け白色を呈する状態になっていた。

A5はピットより出土した。他の火を受けていない骨格に比べると色の着色は浅い傾向にある。残念ながら以上の中の同定はできなかつた。



図161 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体

表15 鹿田遺跡第13次調査出土動物遺存体一覧

番号	出土場所	層位	時代・時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長	破損	風化	色調	計測
A1	井戸4	裏堀より下層	平安時代後半	哺乳類	ウマ	中節骨	?	完形	?	?	viv	茶褐色	Bp : 48.75, Bd : 47.35
A2	〈4a層〉	-	中世～近世	哺乳類	ウマ	脛骨	R	dist + dia	d : f	?	viv	茶褐色	Bd : (53.00)
A3	溝30B	-	鎌倉時代～近世	哺乳類	ウマ	脛骨	R	dia	?	cm Claタイプ (dia前位)	viv	茶褐色	-
A4	溝30B	-	鎌倉時代～近世	哺乳類	目不明	部位不明	?	dia	?	?		茶褐色	-
A5	ピット10	-	中世	哺乳類	目不明 (小～大型哺乳類)	部位不明	?	dia	?	?	viv	normal	-
A6	溝30D	-	近世	哺乳類	目不明 (中型哺乳類)	部位不明	?	dia	?	?		茶褐色	-

4. 鹿田遺跡第13次調査における自然科学的分析

鹿田遺跡第13次調査においては、当該遺跡における土壌の性格や植生等を明らかにするために、株式会社古環境研究所に依頼し、植物珪酸体分析と花粉分析を実施した¹¹⁾。土壌サンプル地点は調査区南壁である。土壌サンプルは6点で、その内訳は〈4 b-1層〉、〈5 a層〉、〈6 a層〉、〈8 a層〉、〈9層〉、〈10層〉となる。サンプル採取日は2002年10月21日である。

註

- (1) 平成14年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の種本化」(研究代表者: 山本聰)に基づく。



図162 試料採取地点

a. 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪藻 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プランツ・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

(2) 試 料

分析試料は、基本土層断面から採取された6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーブ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- ① 試料を105°Cで24時間乾燥 (乾燥)
- ② 試料約1 gに対し直徑約40μmのガラスピーブを約0.02 g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- ③ 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- ④ 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- ⑤ 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- ⑥ 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- ⑦ 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1

gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の板比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表13および図163に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科] イネ、キビ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、シバ属
 [イネ科-タケ亜科] メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

[イネ科-その他] 表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木] クスノキ科、その他

(5) 考 察

1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

基本土層断面では、〈4 b-1層〉（試料1）、〈5 a層〉（試料2）、〈6 a層〉（試料3）、〈8 a層〉（試料4）、〈9層〉（試料5）、〈10層〉（試料6）について分析を行った。その結果、〈4 b-1層〉（試料1）と〈5 a層〉（試料2）からイネが検出された。このうち、〈4 b-1層〉（試料1）では密度が3,000個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

〈5 a層〉（試料2）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。〈10層〉（試料6）では、ヨシ属、ウシクサ族A、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。なお、同層では海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか、1979）が比較的多く検出された。〈9層〉（試

表16 鹿田遺跡第13次調査における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料	検出密度 (単位: ×100個/g)					
			1 (4b-1層)	2 (5a層)	3 (6a層)	4 (8a層)	5 (9層)	6 (10層)
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		30	7		7		
キビ族	Panicace type							
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		7	7	14	21	14	7
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type		7	7		7		
ウシクサ族A	<i>Andropogonac</i> A type		14			7	7	7
シバ属	<i>Zoysia</i>		7	7				
タケモ科	Bambusoideae (Bamboo)							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>			7		21	22	
ネガサ節型	<i>Platoblastus</i> sect. <i>Negasa</i>		22	28	14	28	22	21
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)		51	28	41	14	7	21
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>			36	55	28	7	7
未分類等	Others		14	57	14	28	43	27
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin		36	7		28		
棒状珪酸体	Rod-shaped		108	50	21	133	22	14
未分類等	Others		209	206	180	168	115	103
樹木起源	ArboREAL							
クスノキ科	Lauraceae						7	
その他	Others			7				14
(海綿植物)	Sponge		14	7	7		43	116
植物珪酸体総数	Total		506	455	346	490	258	219

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.88	0.21				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.46	0.45	0.87	1.33	0.91	0.43
ススキ属	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.09		0.09		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.08			0.24	0.25	
ネガサ節型	<i>Platoblastus</i> sect. <i>Negasa</i>	0.10	0.14	0.07	0.13	0.10	0.10
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.38	0.21	0.31	0.11	0.05	0.15
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>		0.11	0.17	0.08	0.02	0.02

タケモ科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>		15	43	58	
ネガサ節型	<i>Platoblastus</i> sect. <i>Negasa</i>	22	25	12	24	36
クマザサ節型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	78	40	57	19	13
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>		20	31	15	5

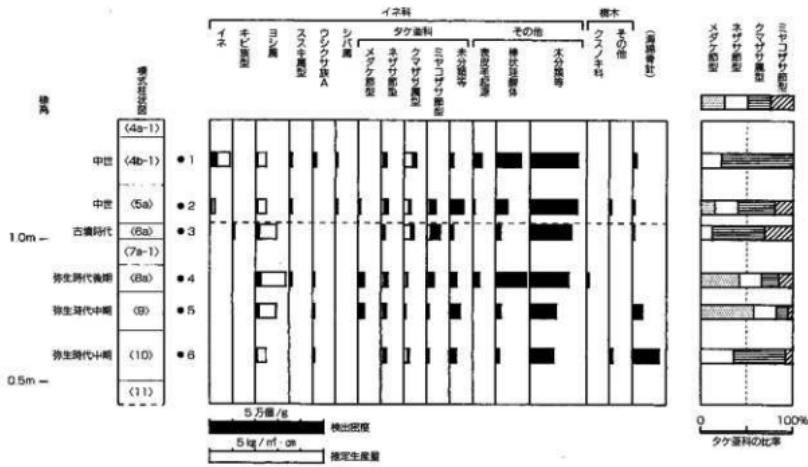


図163 鹿田遺跡第13次調査における植物珪酸体分析結果

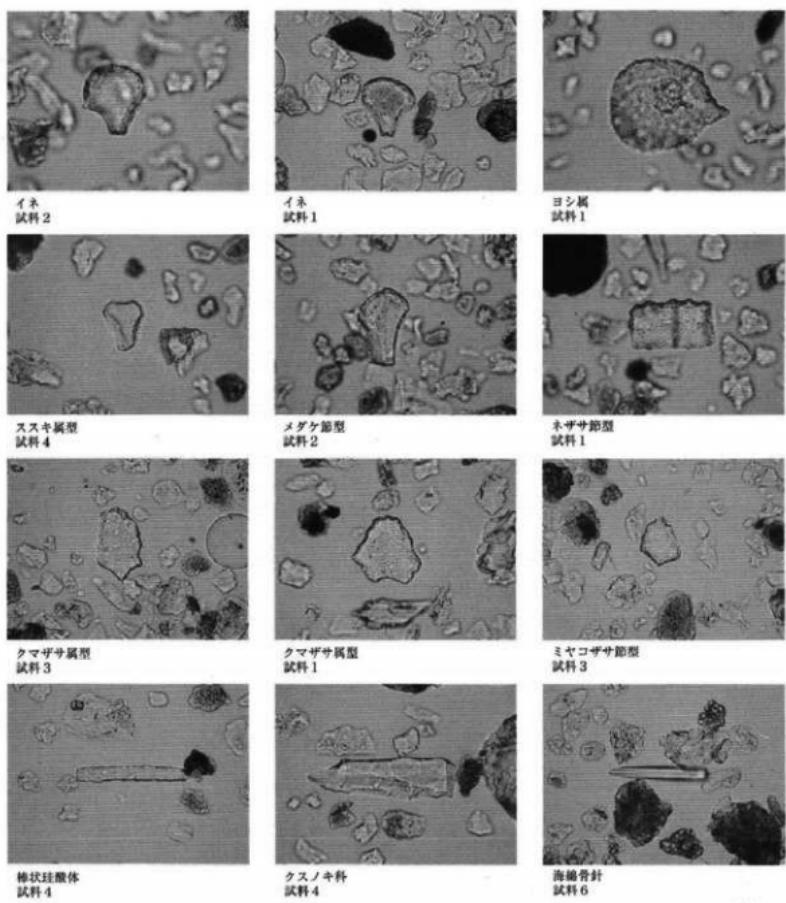


図164 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

料5）から〈6 a層〉（試料3）にかけても、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属がやや増加し、海綿骨針は減少している。また、〈8 a層〉（試料4）ではクスノキ科が検出された。〈5 a層〉（試料2）から〈4 b-1層〉（試料1）にかけては、前述のようにイネが出現・増加しており、ヨシ属は減少している。また、ススキ属型やシバ属なども検出された。

以上の結果から、弥生時代中期とされる〈10層〉～〈9層〉の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属ネザサ節やクマザサ属などの竹達類、およびウシクサ族などのイネ科草本類が分布していたと推定される。また、海綿骨針が比較的多く検出されることから、当時は何らかの海水

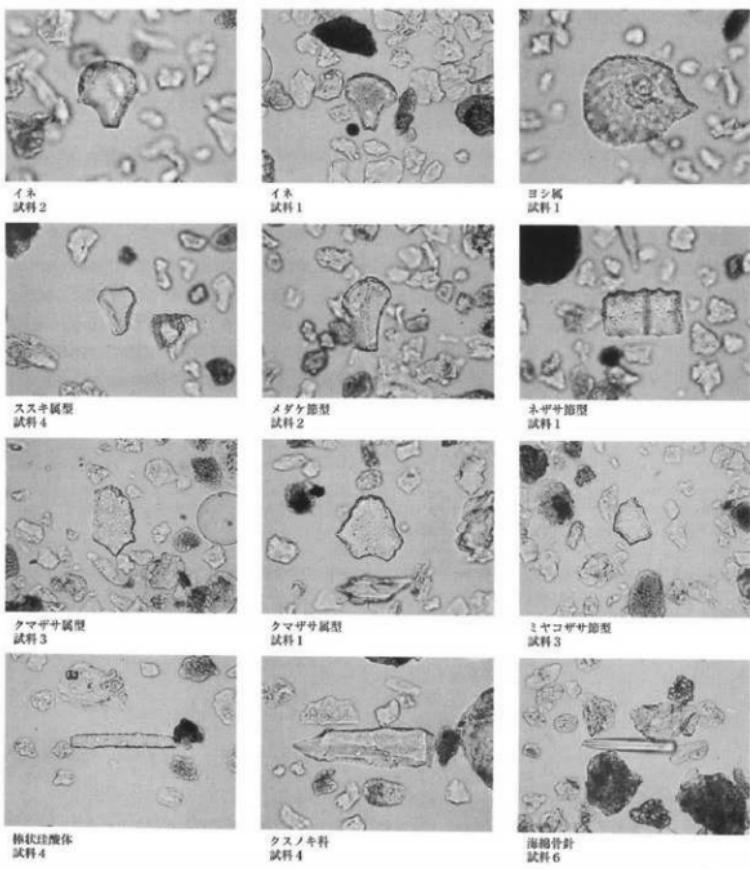


図164 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

— 50μ —

料5)から(6a層)(試料3)にかけても、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属がやや増加し、海綿骨針は減少している。また、(8a層)(試料4)ではクスノキ科が検出された。(5a層)(試料2)から(4b-1層)(試料1)にかけては、前述のようにイネが出現・増加しており、ヨシ属は減少している。また、スキ属型やシバ属なども検出された。

以上の結果から、弥生時代中期とされる(10層)～(9層)の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属ネザサ節やクマザサ属などの竹節類、およびウシクサ族などのイネ科草本類が分布していたと推定される。また、海綿骨針が比較的多く検出されることから、当時は何らかの海水

の影響を受けていた可能性が示唆される。

弥生時代後期とされる〈8a層〉から古墳時代とされる〈6a層〉にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、〈8a層〉の時期には周辺にクスノキ科などの樹木も生育していたと推定される。中世とされる〈5a層〉～〈4b-1層〉の時期には、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたと考えられ、周辺にはスキ属やシバ属、竹笹類なども分布していたと推定される。

なお、今回の結果では花粉分析で多産したコナラ属アカガシ亜属が認められないが、これは植物珪酸体が花粉と比較して現地性が高く、周辺地域の植生が反映されないためと考えられる。

(6) まとめ

植物珪酸体分析の結果、中世とされる〈4b-1層〉では、イネが比較的多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、中世とされる〈5a層〉でも、稻作が行われていた可能性が認められた。

弥生時代中期とされる〈10層〉から古墳時代とされる〈6a層〉にかけては、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属ネザサ節やクマザサ属などの竹笹類、およびウシクサ族などのイネ科草本類が分布していたと推定される。中世とされる〈5a層〉～〈4b-1層〉の時期には、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたと考えられ、周辺にはスキ属やシバ属、竹笹類なども分布していたと推定される。

文献

- 宇津川進・細野衛・杉原孟夫 (1979) チフラ中の植物珪酸体 "Opal Sponge Spicules" について、ペドロジスト、第23巻 第2号、pp.134-144.
杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の黒糞樹林発達史、第四紀研究、38(2)、pp.109-123.
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、pp.189-213.
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定期分析法-, 考古学と自然科学、9、pp.15-29.
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田土の探索-, 考古学と自然科学、17、pp.73-85.

b. 花粉分析

株式会社 古環境研究所

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 試 料

分析試料は、基本土層断面から採取された6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 方 法

花粉粒の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順を行った。

- ① 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- ② 水洗処理の後、0.5mmの篩で難などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去

- ③ 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- ④ 水洗処理の後、水酢酸によって脱水してアセトトリス処理を施す
- ⑤ 再び水酢酸を加えて水洗処理
- ⑥ 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- ⑦ 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1,000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(–)で結んで示した。

(4) 結 果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉12、シダ植物胞子2形態の計37である。分析結果を表14に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔樹木花粉〕マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、モチノキ属、カエデ属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕ガマ属-ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンボポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕單条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

花粉組成の変化から、下位よりI帯~III帯の3帯の花粉分带を設定した。

I帯(〈10層〉、〈9層〉) 樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を中心として、コナラ属コナラ亜属、マツ属複雑管束亜属、シイ属の出現率が高い。草本花粉では、イネ科がやや高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、ガマ属-ミクリ属などが伴われる。

II帯(〈8 a層〉) 樹木花粉より草本花粉の占める割合が高くなる。草本花粉では、イネ科とヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、アブラナ科、ガマ属-ミクリ属が伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、シイ属がやや低率に出現し、コナラ属アカガシ亜属とマツ属複雑管束亜属は減少する。

III帯(〈6 a層〉、〈5 a層〉、〈4 b-1層〉) 部分的にイネ科やコナラ属アカガシ亜属などが検出されるが、いずれも少量である。

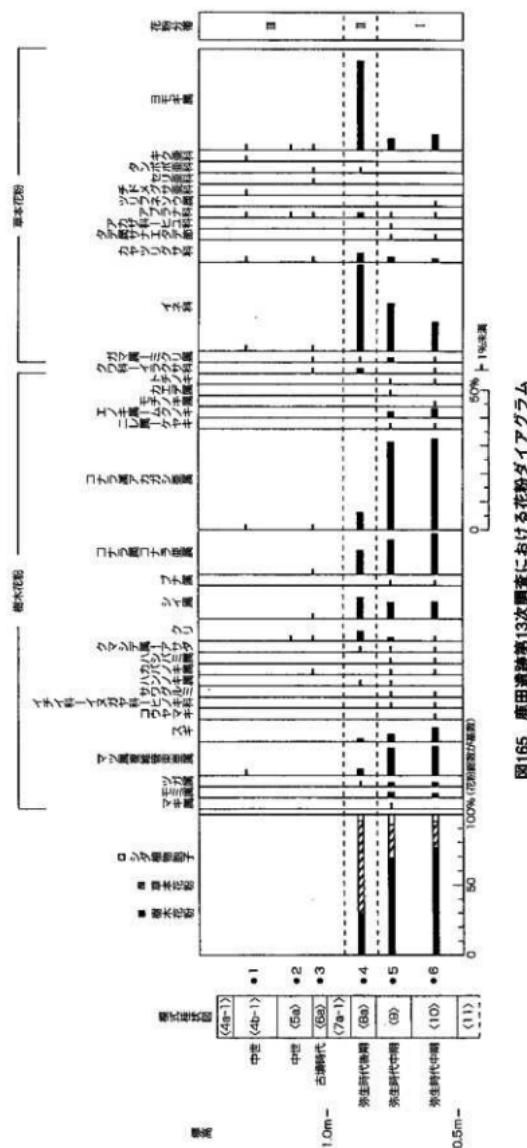
(5) 花粉分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされる〈10層〉~〈9層〉の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの草本植生が分布していたと考えられ、遺跡周辺にはカシ林(コナラ属アカガシ亜属)やシイ林(シイ属)などの照葉樹林を主として、ナラ林(コナラ属コナラ亜属)やマツ林(マツ属複雑管束亜属)なども見られる森林植生が分布していたと推定される。また、水生植物のガマ属-ミクリ属が見られることから、沼澤地の存在も示唆される。

弥生時代後期とされる〈8 a層〉では、カシ林やマツ林などの森林植生が大幅に減少し、イネ科やヨモギ属を中心とする草本植生が優勢になったと考えられる。この時期には、何らかの目的で周辺地域の森林が大規模に伐採

表17 鹿田遺跡第13次調査における花粉分析結果

学名	分類群	種名	1	2	3	4	5	6
			(4b-1号)	(5a号)	(6a号)	(8a号)	(9号)	(10号)
<i>ArboREAL pollen</i>		樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>		マキ属					1	
<i>Abies</i>		モミ属					6	5
<i>Tsuga</i>		ツガ属				1	5	5
<i>Pinus subgen. <i>Diplodiae</i></i>		マツ属被子植物	1		7	33	35	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ			3	9	17	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ						1
Taxaceae-Cephaelanthaceae-Cypressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科				2	3	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ				1	1	
<i>Aleurites</i>		ハンドキ属				2	1	
<i>Betula</i>		カバノキ属			1	3	1	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				1	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシテ属-アサガ			1	3	2	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	2	11	4	3	
<i>Castanopsis</i>		シイ属		2	24	20	21	
<i>Fagus</i>		ブナ属				1	2	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属-ナラ属		6	27	42	90	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属-カガシ属	3	8	19	105	111	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ				3	2	
<i>Celtis-Aphananthe ussuriensis</i>		エノキ属-ムクノキ				7	11	
<i>Ilex</i>		モチノキ属					1	
<i>Acer</i>		カエデ属				2		
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ				2	1	
ArboREAL-Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科			1	5	3	
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typho-Sporogonium</i>		ガマ属-ミクリ属			4	1	5	3
Gramineae		イネ科	7		14	97	58	36
Cyperaceae		カヤツリグサ科	2		4	10	6	4
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タケ属サエタケ属				1	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科					2	
Cruciferae		アブラナ科	1	2	2	5	2	2
<i>Impatiens</i>		フリフネソウ属						1
Hydrocotylaceae		チドリグサ属	1					
Apiaceae		セリ科				1		
Lactucaceae		タンポポ科				2	1	
Asteraceae		キク科	1					
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	6	2	12	100	14	19
Fern spore		シダ植物孢子						
Monocolpate spore		單孔孢子		3	9	10	16	16
Trilete type spore		三孔孢子	1		2	5	10	3
ArboREAL pollen		樹木花粉	4	1	19	95	251	273
ArboREAL-Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	1	5	0	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	18	4	39	214	88	67
Total pollen		花粉總數	22	5	59	314	339	333
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	2	3	3	2
Fern spore		シダ植物孢子	1	3	11	15	26	19
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
		明らかな消化産物	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)



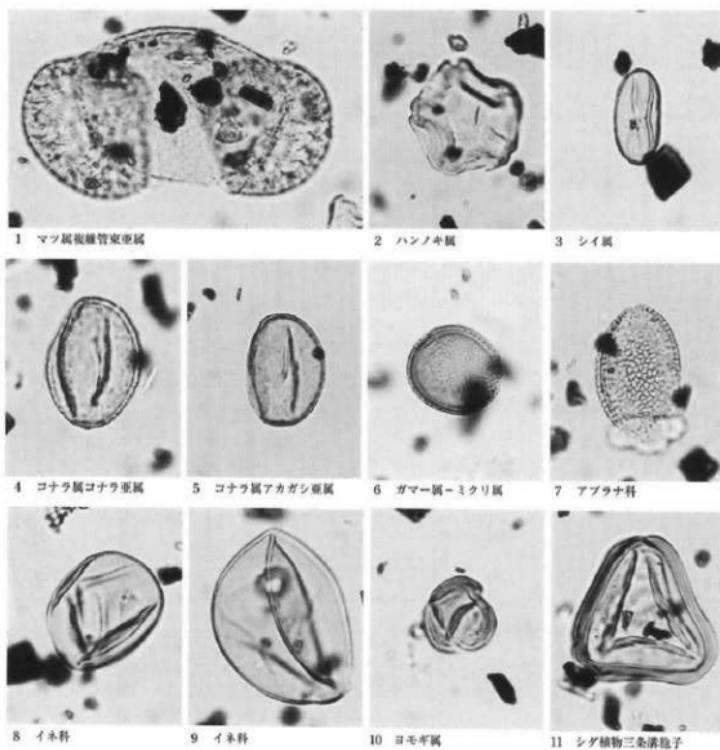


図166 花粉・孢子の顕微鏡写真

— 10 μ m

され、草原植物が拡大したと推定される。

古墳時代とされる〈6 a層〉および中世とされる〈5 a層〉～〈4 b-1層〉の堆積当時は、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復元。新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法。角川書店。pp.248-262。
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学研究館収蔵目録第5集。p.60.
 中村 純 (1973) 花粉分析。古今書院。pp.82-110.
 中村 純 (1980) 日本産花粉の標本。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。p.91.

第5章 考 察

1. 土器溜まり考

はじめに

土器溜まりという現象は、はたしてどのような歴史的意義を有するのであろうか。土器溜まりとは、専用の造構がなく、土器等が集積された現象を一般的に指す。自然地形による窪地や傾斜面、廃絶住居・溝等によって形成された窪み、微高地などに集め置かれた、土器を中心とする遺物群である。こうした土器溜まりは、造構という形態を探らないが、人間行動の結果として生じる考古学的現象として再定義・再評価が近年試みられている「行動軌跡」の一種（稻田2008）である。

さて、鹿田遺跡第13次調査では、古墳時代初頭の土器溜まりが3箇所発見された。古墳時代初頭の土器溜まりについては、土器編年への論究の中で土器様式と出土状態との対応関係から、土器の更新および一定期間を経た後の居住域の割り直しを考えた高橋護の見解（高橋1988）がある。一方で、土器溜まりを構成する遺物量や遺物分布のあり方等、土器溜まりの実態に詳細な分析が加えられてきたわけではない¹¹⁾。造構ではないという性格と一見雑然とした遺物出土状況、そして時間的制約の中で方法論的試行錯誤が要求される点は、土器溜まりの全体像の把握が進展しない要因となってきたといえる。上記の研究の現状を受け、本書では土器溜まりの全体像把握を目的に、遺物の個体数分析および遺物の器種別・類型別分布の検討を行った。その詳細については本書収載の事実報告に譲ることとし、小稿では遺物組成や遺物分布の観点から3箇所の土器溜まりの比較検討を行い、当該期の鹿田集落の動態を勘案しながら、土器溜まりの歴史的意義を追究したい。

(1) 遺物組成と時期

a. 土器溜まりの概要と遺物組成

まず土器溜まり1～3の基本的データを確認しよう（表18）。検出地点の地形は、土器溜まり1・2が窪地内であるのに対し、土器溜まり3は微高地～傾斜面となる。前者は同一窪地内の異なる箇所に形成されていた。

遺物の検出状況も土器溜まり間でいくぶん異なるが、それは土器溜まり間での遺物の置き方の違いを示唆する。土器溜まり2においては、北側～東側にかけて遺物の平面的な密集度合いが高かった上に、遺物の垂直方向への重なり（それらは取り上げる際に「下位」出土遺物と認定）が多く認められた。このことは、土器溜まり2の内部で遺物量の粗密があるとともに、密集部分においては土器を積み重ねた廃棄がなされたことを示すものと考えられる。一方、土器溜まり3では、遺物の各個体が散漫な状態で分布することを基本とし、下位出土遺物は斜面部分に限られる。したがって、土器溜まり3では平置きによる遺物廃棄が主であったものと考えられる。土器溜まり1の場合、1群とした北西部のまとまりを中心に、土器の顕著な重なりがみられたが、他はより平面的広がりをみせた。したがって土器溜まり1では平置きを基本としつつ、一部で遺物を積み重ねる様相が想定される。

こうした遺物の置き方の違いは、土器の数量の違いにも顕著に反映されている。平面的規模でみれば、土器溜まり2・3は、ほぼ同規模の遺物の広がりを有するのに対し、土器溜まり1はそれらの約4倍の規模を示す。一方、遺物量については土器溜まり1・2・3の比率がおよそ6:3:1となり、平面的規模と遺物量は必ずしも対応していない。土器溜まり2の遺物量の多さは、狭い範囲に集中的に遺物が廃棄された状況と対応するものである。反対に土器溜まり3の遺物量の少なさは、散漫な遺物出土状況の反映である。

各土器溜まりは包含層によって覆われていたため、遺物の周囲や内部には土が詰まっていたが、遺物が層位的に分離される状況は認められなかった。土器溜まり2を中心に、他でも認められた土器を上下に重ねて置く状況

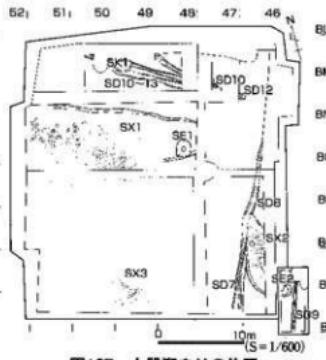
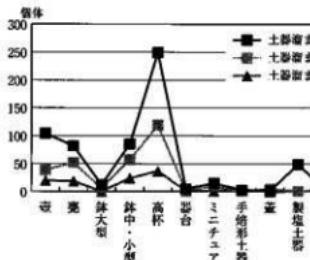


図167 土器溜まりの位置

図168 土器溜まり
出土土器の器種別最大個体数

土器溜まり間で多少のバラツキが認められる。

土器溜まり出土上器は、在地で製作されたものが大半を占める一方で、土器溜まり1・2においては他地域からの搬入品²²と考えられる壺と壺がいくつか存在する（表19、図169）。土器溜まり1では、西部瀬戸内系の複合

間にしても、間層によって遺物が層位的に区分されるものではなく、垂直方向へ遺物が連続的に重なる状況を呈していた。したがって、土器溜まりは短期的に形成されたものと考えられる。

遺物組成に関しては、総体としてみれば、土器溜まり1～3で類似した傾向を示すものといえる。土器組成に関しては、高杯を主体としながら、壺・壺・鉢（中・小型）の主要器種に、少数器種である鉢（大型）、器台・ミニチュア土器・手焙形土器・蓋・製塙土器が加わる構成が共通する。相違点としては、製塙土器や土壺・石錠という生産用具の含有量が土器溜まり間で異なる点が大きい。これらは、土器溜まり1・2においてまとまりをもった分布をなすものである。また壺と壺の比率にも

表19 土器溜まり出土搬入土器一覧

器種	器型	出土位置	件	状態	系統
壺	I系D	1	38	口縁1/2～肩部	呉系系統（内背厚さ3mm）
壺	I系D	2	1	9	口縁1/2～肩部
壺	II系A3	73	3	口縁～底部（半充填）	呉系系統（内背厚さ3mm）
壺	I系D	86	3	35	口縁1/2～脚部
壺	I系	163	5	5	口縫小片
壺	H	1	1	103	口縫1/2～脚部
壺	A2	T柱21・下段6	2	1	1口縫～底部（半充填）
壺	A2	10	1	61	口縫小片～脚部
壺	B	91	3	99	1口縫1/3～脚部
壺	B	82・下段21・80	3	91	脚部
壺	B	19	5	92	口縫～底部（半充填）
西系系統					西系系統（内背厚さ3mm）

土器溜まり2

器種	器型	出土位置	件	状態	系統
壺	I系A2	27・33・T柱213	2	口縫～底部（半充填）	山陰系
壺	I系A2	14・7	-	口縫小片～脚部	山陰系
壺	A2	24	27	口縫～底部（半充填）	山陰系

土器溜まり3

器種	器型	出土位置	件	状態	系統
壺	II系	24	15	脚部上半	呉系系統（外背タクタク）

表18 土器溜まりの基本データ

	土器溜まり1	土器溜まり2	土器溜まり3
規模	東西13.7m 南北8.6m	東西22m(3.3m) 南北6.4m	東西6.7m 南北3.5m
地形	窪地	窪地	微高地～低地
上器制作数	500～600	228～295	89～108
【土器内訳】			
壺	70～104	27～39	14～20
壺	72～82	51～52	18～19
鉢（大型）	12	5	0
鉢（小型）	81～85	40～57	20～24
高杯	196～249	82～119	29～37
器台	5	2	1
ミニチュア	12～15	9	1
手焙形土器	3	1	4
蓋	2	5	0
製塙土器	49	1	1
脚台（盆、鉢）	3	5	1
上器個体数	31	0	1
石錠個体数	7	6	1
その他石器個体数	19	4	1
標器個体数	362	317	478

b. 土器溜まりの時期

3箇所の土器溜まりから出土した土器は、いずれにおいても、次のような時期的

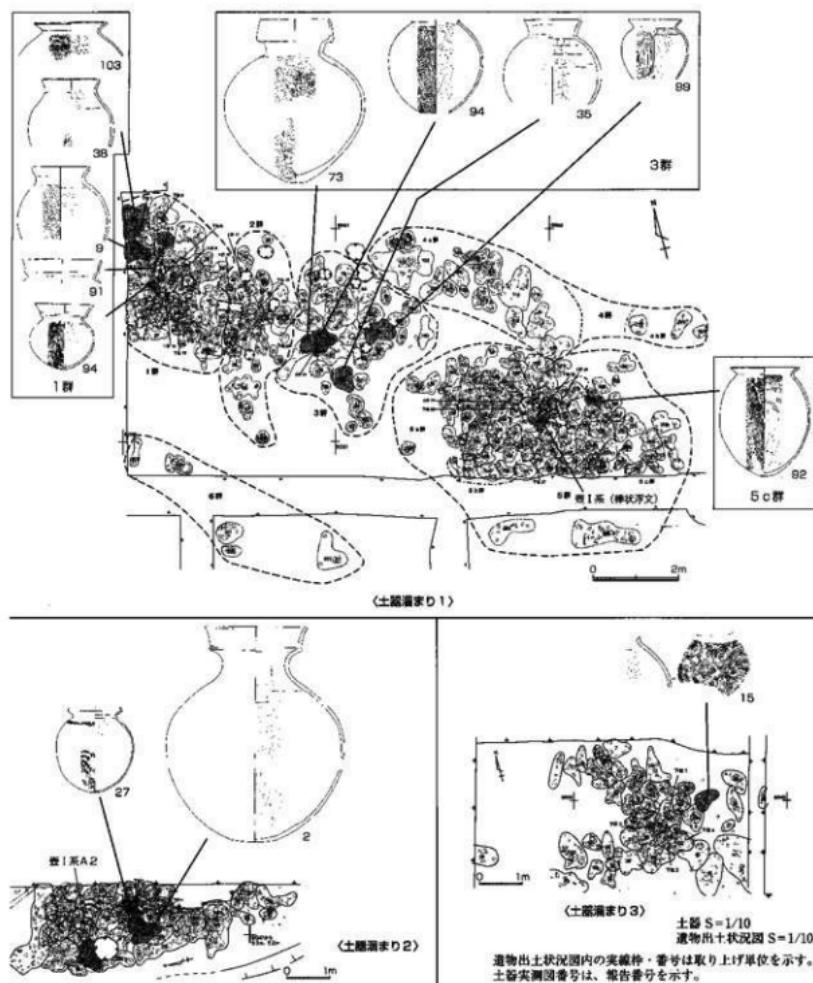


図169 土器溝まり出土埋入土器とその分布

特徴がみられる。壺I系については底部が明確な平底を呈する。また吉備型壺である壺A類については底部が平底の様相を残す。高杯については弥生時代後期段階よりも長脚化が進みつつ、杯受け部内面の水平化が未完了である。こうした特徴は、鹿田・古・1a段階（山本1988）、高橋謙福年（高橋1989）ではX-a期に相当する。これは上東福年（柳瀬1977）の下田所式前半に相当する。埋入土器をみても底部の球形化が未完了であり、古墳時

代初頭のものと位置づけられる。したがって土器溜まりの廃棄時期については、古墳時代初頭で、かつ一型式のみに収まるものであり、検出状況とともに土器型式の面からも、3箇所の土器溜まりにおける遺物廃棄が短期的であったことが想定される。土器溜まり間の型式差が認められないため、形成時期の細かな先後関係等については不明である。各土器溜まりの形成は、同一型式内という意味での同時期の所産と判断される²⁾。

(2) 土器溜まりの構造

a. 土器溜まり1における「群」とその構造

3箇所の土器溜まりにおける遺物組成と分布を検討した結果、土器溜まりにおける遺物分布の特徴としては、器種ごとにまとまった分布がみられる点と、そうした器種ごとのまとまりが集合してセット関係をなす点が挙げ

表20 土器溜まり1各群の遺物組成

	1群	2群	3群	4a群	4b群	5a群	5b群	5c群	6群	4群全体	5群全体
壹	I系A1類 I系A2類 I系A3類 I系B類 I系C類 I系D類 I系E類 I系類型不明 E系A類 E系B類 E系C類 E系D類 E系類型不明	2 1 1 3 1 9 1 15 2 1 1 2 4		1 1 1 1 2 2 3 8 3 1 1 2 1 2	1 1 1 2 2 3 7 1 1 2 1 1	3 1 4 4 2 2 7 3 1 1 2 1 1		1 1 1 3 18 2 5 1 4	1 1 6 4 6 1 18 2 5 1 4	3 1 1 1 30 30	
貳	A1類 A2類 B類 小計	16 2 6 24	1 1 3 2	9 1 1 12	1 1 2 2	15 16 4 15	2 2 2 1	13 15 1 1	1 1 1 2	1 1 5 35	
群(大型)	A類 B類 小計	2 1 3		1 2 1 1		1 1 1 2		1 1 1 1		1 1 2 4	
群(中・小型)	A類 B類 C類 D類 類型不明 小計	5 1 10 4 1 20	2 1 6 3 1 8	2 1 3 2 1 3	3 1 8 6 1 8	4 1 8 6 1 8	1 1 1 6 1 6	1 1 1 1 1 1	1 1 2 10 2 11	1 1 6 10 2 30	
高杯	A類 B類 C類 D類 類型不明 小計	15 1 2 2 9 27	7 1 2 2 1 29	5 1 1 1 1 10	2 3 2 1 1 2	10 3 4 1 1 19	8 1 4 1 1 15	13 1 1 1 3 33	2 1 1 2 10 12	31 5 7 3 13 39	
漆竹	A類 B類 小計	1 1 1				1 1 1		2 2 2		2 1 3	
ミニチュア土器 手形土器 小計	1 1 1					1 1		1 1		3	
壺	A類 D類 小計	2 2 2									
腰塗土器 脚台 合計	1 1 119	1 1 54	1 1 68	1 1 34	1 1 12	1 1 3	1 1 44	1 1 88	1 1 9	22 1 46 222	
土器 石器 陶器 鐵石 鐵石	2 1 1 1 1									8 1 2 2 1	

数字は個体数を示す。中添は該当する個体がないことを示す。

出：1基が小形な個体や土器溜まり1a～1d区として取り上げたものは上記に含まない。

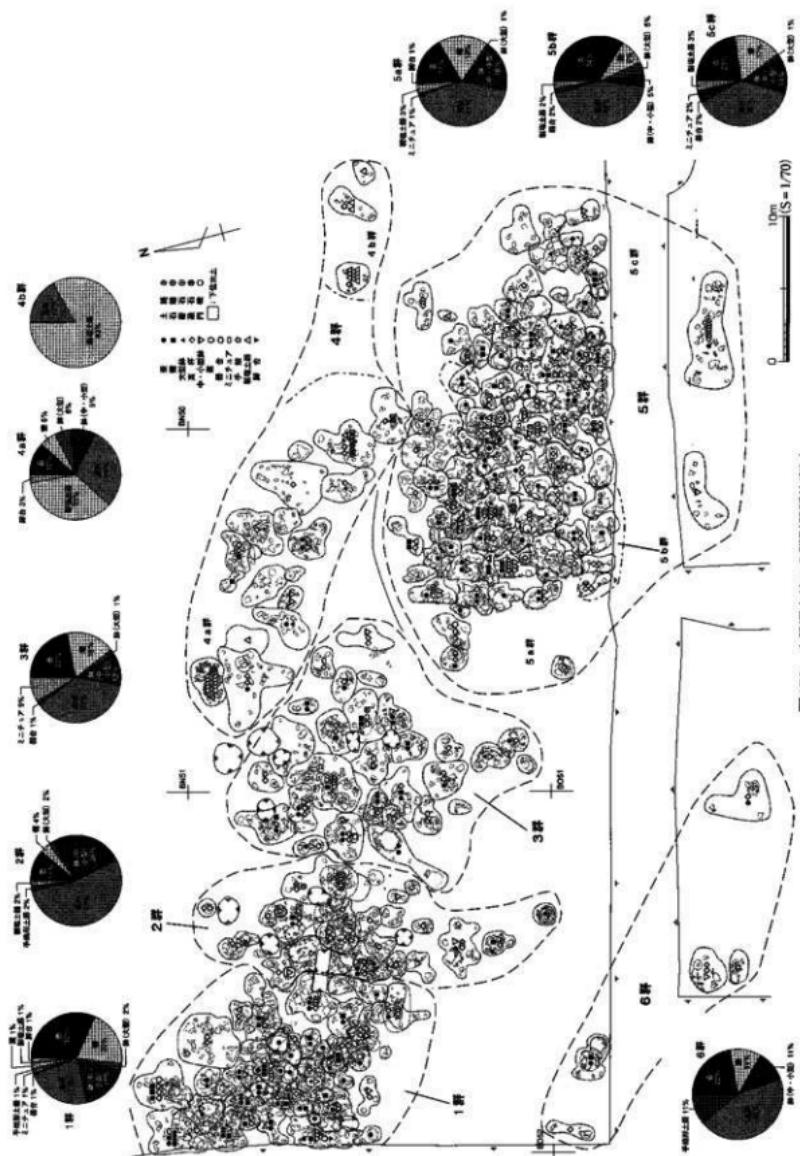


図170 土器満より1の断面構成比率(1)

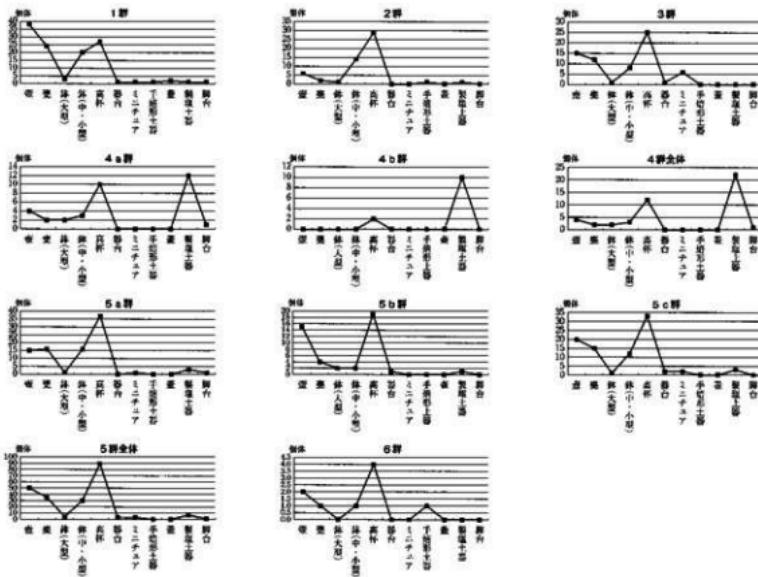


図171 土器満まり1の群別器種比率(2)

らる。こうした様相の典型例は土器満まり1である。土器満まり1においては、遺物分布と遺物組成を整理した結果、そうしたまとまりを6つの「群」として認識した。ただし、各群は、必ずしも等価な意味を有するとは限らない。それは、群の遺物組成の面から予想されるところである。したがって、群どうしの比較を通じて、改めて土器満まりの構造を抽出する作業が必要となる。一方、土器満まり2においても、同様の群を認識しうる可能性があったが、遺物量の多さが一因となり、シンプルな遺物群の把握に困難な面がみられた。ここでは、まず土器満まり1を対象に、認識した群を再構成する中で、土器満まりの構造を追究したい。その後に、土器満まり間の比較を通じて土器満まりの構成要因を探りたい。

土器満まり1における各群の遺物組成は表20及び図170・171となる。なお、5・6群は現代の建物基礎により失われている部分も多く、また1群についても西方への広がりが調査区西壁の状況から想定されるため、全体像を反映した組成とはならない点にも注意が必要である。

土器の器種組成から、各群の様相を比較しつつ概観しよう。基本的には高杯を主体とする器種組成をなすが、各群で内容はいくぶん異なる。1群は、西方への広がり方如何で組成が変わるために評価が難しいが、土器量が他に比べて最も多く、かつ壺の量が全器種の中で突出することを特徴とする。一方2群は、高杯にほぼ特化した組成を示す点で特異である。3群は、高杯→壺→壺→鉢（中・小型）という比率の順序となり、本土器満まりにおける平均的様相を呈する一方で、ミニチュア土器を多く含む点に特徴がある。4群は、遺物分布からa・bに分かれるが、いずれも製塙土器を主体とする点が特徴的である。5群は器種分布のあり方からa～cに細分したが、平面的にはひとつのまとまりを有するもので、5群全体でみれば平均的な器種組成といえる。5a群と5c群は、壺の比率に違いがある他は類似する。両者の中間に位置する5b群については、壺の数量の多さが目立つとともに

に、壺と鉢（中・小型）の量が少ないと特徴とする。6群は本土器満まりの周縁部に位置するが、攪乱により不明な点も多い。ただし、土器梢の可能性がある壺・壺の存在や、希少類型の壺、および手形土器がみられる点は、6群の特徴といってよい。

このように土器の器種組成から、「群」には異なるあり方がみられることがわかる。細やかな違いをみせる器種組成であるが、そこにおいて最も大きく異なるのは次の2つのパターンである。すなわち、第一に、高杯を主体に、壺、壺、大型鉢、中・小型鉢を主要器種とするもので、1・3・5a・5c群が該当する。第二に、高杯や壺、製塙土器といった特定器種のみに器種組成が偏るもので、2・4・5b群が該当する。これらをどのように理解しうるかは、群の性格を体系的に把握する上で大きな課題となる。

次に搬入土器の分布をみてみよう。搬入土器は、1・3・5b・5c群に分布する。複数個体が出土した1・3群をみると、搬入土器の分布には偏りがあるといえる。1群では北西部に搬入土器が分布する。中でも山陰系壺は並んだ状態で置かれたものと考えられる。3群では南半部に搬入土器の分布がみられる。こうした搬入土器は、それを保有する群の性格の一端をなすものと考えられる。

土器以外の土製品・石器の分布はどうだろうか。複数個体の土錐がまとまった状態で出土したのは4a群と5a群である。4a群の土錐は、製塙土器集中部である北西部ではなく、むしろ5群に近い位置である南東部に分布する。これらは土錐の出土状況と出土標高から、土錐を装着した状態の網が、土器の後に置かれたものと考えられるものであった。一方、土錐が単体で分布するのは1・5b・5c群である。石錐については個別に分散しており、2・4a・5c群に分布する。4a群では、石錐単体が製塙土器集中において出土している。

ここで群の成り立ちを探るために、群内部の遺物間関係を検討しよう。群内部における遺物の分布状況については、群の中での器種によるまとまりが形成されることを基本とする。この状況の典型例として1群を取り上げたい。まず、壺と壺は分布が重なる部分があるが、それぞれに細別類型において以下のような分布の特色がみられる。壺については、單口縁／複合口縁の二項が分布の中心／周辺関係を形成している。壺I系では数量的に多い單口縁であるD・B類が中心部、少数派の複合口縁であるA・C類が周縁部に分布する。精製壺であるII系では、直口壺（C類）が中心部、複合口縁壺（A類）が周辺部に分布する。壺については、吉備型壺であるA類が中心部、少数派の「く」字口縁壺は周辺部に分布がみられる。山陰系の複合口縁壺は両者の中間的位置にあたる。一方、壺・壺と分布が異なるのが高杯である。高杯は1群南東部を分布域とする。細別類型内での分布差はみられない。中・小型鉢は壺・壺と高杯の分布域の双方にまたがる形となる。中・小型鉢では、壺・壺の分布域に「く」字口縁のC類が多く、その他の段を有するA類や複合口縁のD類は高杯分布域に多い傾向がみられる。大型鉢は、やや高杯よりの分布域に属する。こうした器種分布のあり方を概念化すれば図173となる。1群では、單口縁・直口縁の壺と吉備型壺の分布域を中心部とみなせば、周辺部に高杯や複合口縁壺、「く」字口縁壺等が分布する構造となる。すなわち、土器満まりの遺物群は、一定の規則性のもとに成り立つものとみなすことができよう。

こうしたひとつの群内における器種分布の違いは、少なくとも器種レベルにおいては、数量の少ない6群やはるかに壺や高杯が分布する傾向がみられる。4a群では、少量ではあるが壺と壺・鉢（中・小型）とで分布を異にしており、製塙土器も一括りが高い出土状態を示す一方、高杯に関しては全体的に分布する。4b群については、製塙土器を主体に少量の高杯を含むという点では4a群と一連の性格のものと考えられる。5a群では、壺が西半部、壺と中・小型鉢が中央～東半部に分かれるとともに、高杯については比較的全体的に分布する。5c群でも、壺と壺の一定の複み分けが認められる。一方5b群においては、範囲が狭いこともあるが、壺を主体に各器種は混在的状況を示す。

ところで、1群の高杯の分布で注目されるのは、それが2群の高杯分布との連続性も想定しうる点である。この立場に立てば、2群は1群における高杯分布の延長として再構成することが可能となる。1群の高杯の数量が

少ない点も、この解釈を支持するものといえよう。一方、2群のすべてが1群に属するのか、一部は3群に属するのか等、細部の判断は難しい。3群の西側にも高杯の分布が認められるからである。したがって、2群については厳密に画することは困難であるが、1・3群に本来的には属する可能性が高いものと評価される。

同様の観点から、壺の数量が突出する5b群に關しても5a群または5c群に本来的には帰属するものとする見方も可能である。しかしこの場合、5b群を設定した根拠でもある壺を主体とする分布を5a・5cのどちら

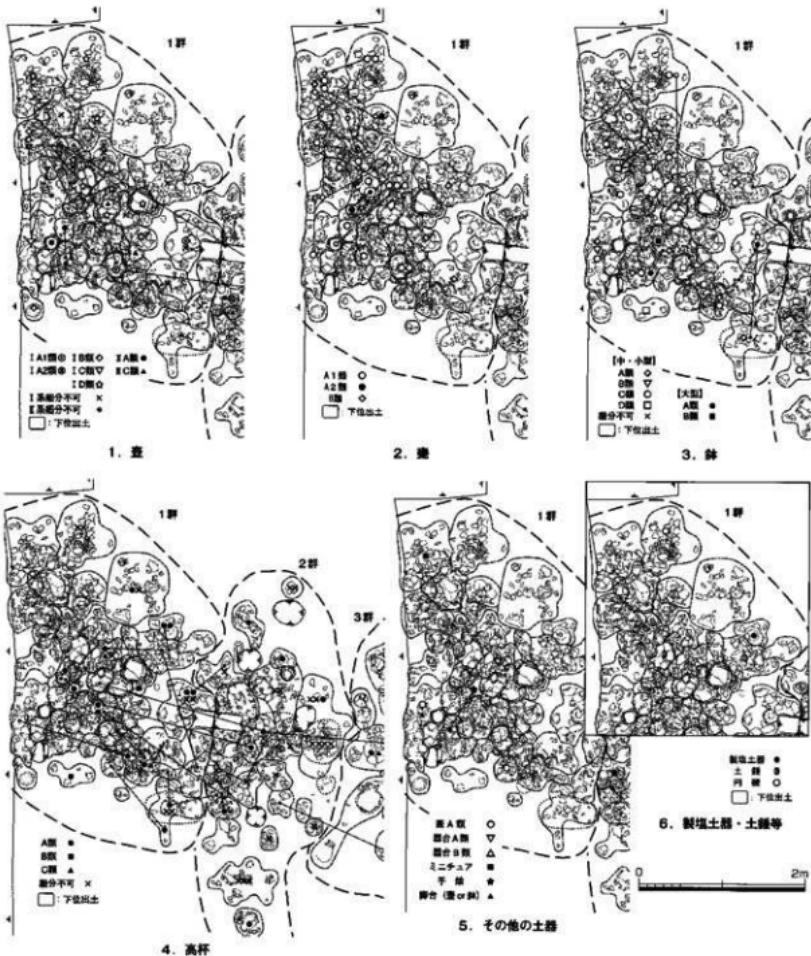


図172 土器遺跡 1-1群の器種別分布

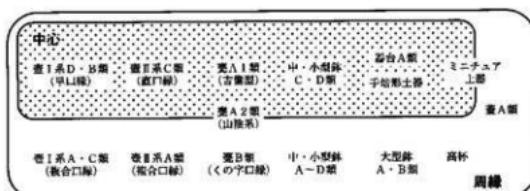


図173 土器溜まり1-1群の器種・類型分布概念図

を形成しながら遺物が連続的に置かれた状況を想定することがもっとも妥当な解釈と考えられる。

以上の状況から、土器溜まり1における遺物群は、次のようなまとまりに再構成することができよう。すなわち、「1+2群」「3+2群」「4a・b群」「5a・b・c群」である。6群については土器溜まり周辺部の様相として、他と同様に評価しうるかは現状では未知数である。上記のように6群以外のものを素材とした場合、これら4つのまとまりは何らかの集団単位に該当するものと考えられる。それは、それぞれにおいて一定の規則性をもった器種配置がなされているためである。しかしながら、すべてに等価な集団単位を想定することも妥当ではない。「5a・b・c群」のように、波状的にまとまりが形成されるパターンとその他では、集団の規模や単位のレベルで異なっていたことも予想される。また「4a・b群」のように製塙土器・土鍤という生産用具・漁撈具を伴う群を、他と同列の「集団」として扱うかという問題もある。つまり、同一集団が複数の群を形成した可能性も排除されるものではない。

こうした群の集合としての土器溜まり1全体は、入れ子状の社会組織を想定するならば、より高次の集団レベルに対応する可能性がある。ただし、そうした高次のレベルの集団性は土器溜まりという性格上、遺構という形態をとることなく、あくまで遺物の集積という形でしか反映されない一体性であるといえる。

b. 土器溜まり間の比較

では土器溜まり2・3の遺物群の構造は、どのように理解されるだろうか。まず、遺物数量の少ない土器溜まり3からみていこう(図174下)。土器溜まり3では、その全体において器種ごとに分布が分かれる傾向がみられる。中・小型鉢については比較的全体的に散在する反面、壺・甕・高杯については分布の中心を異にする。また造りが酷似する手焼形土器2点や土鍤・石鍤も、それぞれ近接する位置関係にある。こうした器種分布のあり方からみれば、土器溜まり1における遺物群の一単位に土器溜まり3全体が相当するものと考えられる。特に遺物量からみれば、「1+2群」や「3+2群」として把握した器種組成の単位と、土器溜まり3全体が対応するものと考えられる。

土器溜まり2においても、全体として器種分布の偏りが認められる(図174上)。甕は土器溜まり西半の中で、北端と南側に分布域が分かれ、前者においては土器溜まり1でみられたような単口縁/複合口縁の分布差も認められる。高杯は全面にわたって分布しつつ、東辺、北西、南に3箇所の集中域と周辺域を形成しているものと考えられるが、それらの境界については不明確といえる。中・小型鉢については高杯と類似する分布を示す。大型鉢の分布については、分散的である点を特色とする。甕に関しては、東辺に最も集中しつつ、2個体程度が全体的に分布するという特色をみせる。石鍤を中心とする石器は北端に集中する。

こうした土器溜まり2の様相に関して、北側と南側(甕の集中域を含む)に区分した細別群を見出すことも可能かもしれない。しかし一方で、甕や高杯の分布のあり方は、そうした境界を不分明にする。土器溜まり2の構造に最も類似するのは土器溜まり1の5群全体と考えられる。両者は規模と土器数量、全体としての一体的まとまりの形成という点において類似するためである。

に帰属せらるかは判然としない。壺分布からみれば、5群全体は5a・5b・5cそれぞれに分布域を有する。すなわち、5群においては壺分布がいわば三つの軸をなす。したがって、5群としての遺物の平面的まとまりを考慮すれば、5a→5b→5c、あるいはその逆方向に、内部で小群としての一定のまとまり

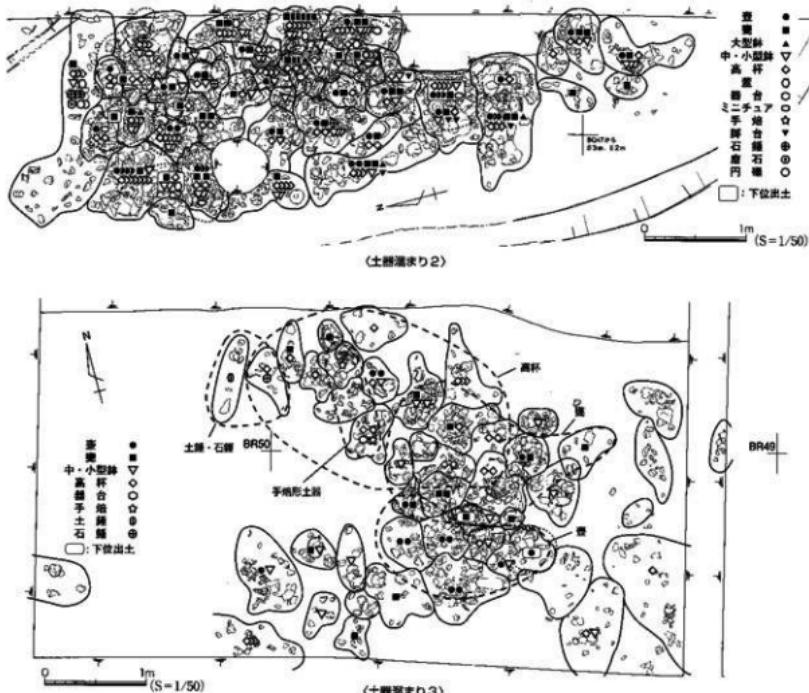


図174 土器満まり2・3の全器種分布

以上の土器満まり間の比較から、土器満まりを構成する遺物群の構造については次のようにまとめることができる。第一に、主要器種に関して分布上の棲み分けがみられ、かつそれら器種が集合して最小単位のまとまりを形成するもので、50~100個体前後の土器によって構成される。土器満まり1の「1+2群」「3+2群」「4-a・b群」および「土器満まり3全体」が該当する。第二に、分布上の棲み分けがみられる主要器種のセット単位が複合的にまとまつたもので、200個体前後の土器によって構成される。土器満まり1の「5a・b・c群」および「土器満まり2全体」がそれに属する。こうした二者が、背景としてどのような意味を有するのかは現状では判然としない。先に上器満まりの群構造について集団論に引きつけた解釈を試みたが、集団規模・集団統合の差が両者に反映されている可能性もある。

二者の差異をカッコを入れた上で、土器満まり1~3を形成した「集団」の単位数は、単純計算では上述の群の数、すなわち6「集団」という数字が得られる。こうした「集団」の実態に多少なりとも近づくために、次に鹿出遺跡の集落展開の中で、改めて土器満まりの問題を考えたい。

表21 鹿田遺跡の消長と土器溜まり形成

調査次	調査地点	弥生時代						古墳時代			
		中期	後期	1期	2a期	2b期	3期	4a期	4b期	1a期	1b期
第1次	外来診療棟 井戸数 土器溜まり	3基 1基	6基 2基	1基	1基	1基	1基	4基 9基	5基 5基	6基 3基	3基 1基
第2次	NMR-CT室 住居数 井戸数			1基							1基
第5次	管理棟 住居数 土器溜まり			1基							
第7次	基礎研究棟 住居数 建物数 井戸数 土器溜まり									4基 2基 1基	
第13・15次	総合教育研究棟 井戸数 土器溜まり									2基	

(3) 鹿田遺跡の集落と土器溜まり

鹿田遺跡では弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて集落が形成されていた。正式報告がなされた調査地点をもとに¹⁰、住居・建物と井戸、そして土器溜まりの数量を示したのが表21である。弥生時代集落は、外来診療棟地点（第1次調査、吉留・山本編1988）、NMR-CT室地点（第2次調査、吉留・山本編1988）、管理棟地点（第5次調査、松木・山本編1993）に所在する微高地を中心展開するが、古墳時代初頭において鹿田地区の広範囲に集落が広がることがわかっている。弥生時代後期前半以降には集落は継続的に営まれるが、古墳時代中期の集落は未確認であり、前期初頭をひとつのピークとして集落が急速に衰退する。本調査地点の土器溜まりが形成さ

れた古・前・1a期の集落については、北東の外来診療棟地点・管理棟地点に住居5棟・井戸5基があり、南西の基礎研究棟地点（第7次調査、山本・岩崎編2007）周辺にも住居4～5棟・建物2棟・井戸1基が確認されている。これら2つの居住域は「単位集団」（近藤1959）に相当する規模のものと考えられる。両者の中间に位置するのが、本調査地点（第13次）となる。すなわち、本調査地点は2つの居住域の境界にある。

鹿田遺跡における土器溜まりは、現状で9箇所以上が確認されている。もっとも早くに形成されたのは管理棟地点における土器溜まり1で後期前半に遡る。その後、後期後半以降には古墳時代初頭に至るまで土器溜まりが点在することとなる。注意されるのは、土器溜まりの形成時期と継続時期、立地である。

土器溜まりの形成時期については、古・前・1a期に急増することが注目される。これは、当該期における集落域の拡大に対応した現象であり、集落經營と不可分に土器溜まりが形成されたことが明らかである。

継続時期については、外来診療棟地点（第1次調査）の土器溜まり1・2のように、遺物廃棄が複数型式によるパターンの存在にも注意が必要である。第1次・土器溜まり2では、貝層を伴うマウンド状の土器溜まりが弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけて継続的に営まれている。一方、一型式の短期間に形成された土器溜まりについては、本書の土器溜まり1～3をはじめ、各所に点在している。

土器溜まりの立地に関しては、集落域／周辺域の差異に注目しうる。すなわち、本調査地点が周辺域であるの



図175 古墳時代初頭の鹿田集落

に対し、その他の土器満まりはいずれも居住域内部または近辺に形成されたものである。

以上のように、土器満まり形成の契機も、各脈絡により異なることが予想される。古・前・1a期について、長期／短期、集落域／周辺域の組み合わせで土器満まりを分類すれば次のようなになる。

長期的・集落域：第1次 - 土器満まり 2

短期的・集落域：第1次 - 土器満まり 3・4

短期的・周辺域：第13次 - 土器満まり 1～3

上記の組み合わせに間の差異を重視するならば、こうしたパターンが生まれる背景としては、次のような解釈が成り立つだろう。「長期的・集落域」に該当する第1次 - 土器満まり 2は、鹿田遺跡北東部の中心的居住域における、集落経営の記憶を内包した特殊性を帯びた場であったものと考えられる。それは同調査地点における「短期的・集落域」の土器満まりのような、居住域内部における一過性のものとの関係において成り立つものである。集落域における土器満まり形成は、土器の更新や住居の建て替え、あるいは移住などの、居住域内部で生じた個別的事象を契機とした可能性がある。

一方、それらと異なる性格を有すると考えられるのが、「短期的・周辺域」となる本調査地点における3箇所の土器満まりである。それは、未発見を含めた周囲の居住域からの集合的廃棄を想定することが最も妥当と考えられる。特に、古・前・1a期にピークに達した集落が、その後急速に縮小の道を歩むことを考慮すれば、居住集団による集落の廃絶、および他所への移住を契機とした可能性が高いものと解釈される。これは、土器満まりの遺物群単位の分析から複数「集団」の関与を想定した解釈とおおむね整合的なものと考えられる。土器満まりの遺物群単位にみる傾向には、「集団」の営みの一端が反映されていたものと評価することができよう。ただし、先に6つの群の存在を想定したが、古墳時代初頭の鹿田集落においては「単位集団」としては2単位、豊穴住居数としては9棟程度しか現状では判明していない。また、群どうしの関係も、遺物組成と数量、廃棄方法の点で、不均等であることも指摘したとおりである。実際の居住単位とどのような関係に「短期的・周辺域」の土器満まりが位置づけられるのか、今後の調査研究の蓄積や、土器の生産～消費過程および当該期の社会組織に関する研究との連絡を模索しながら、具体的に検証を続ける必要がある。

おわりに

従来、土器満まりについては、その遺物量の多さと遺構ではないという性格から、現地およびその後の整理・研究における実証的研究が遅れてきた。今回、遺物量算出とそれに基づく遺物分布に関する分析に取り組む機会が得られた。わずかながらでも土器満まりという現象を実証的に研究しうるスタート地点に立ちえたならば、本書ならびに小稿の目的は達成されたこととなる。小稿では、土器満まりの遺物群単位を抽出し、それを集団論の枠組に近づけよう試みたが、なお明らかにしえない点も多く、課題もまた残るものである。今後、いっそうの事例研究の増加を期待したい。

(光本 順)

謝辞 小稿をなすにあたっては、古式十師吾の腹席に際して下記の諸機関・諸氏にお世話をなった。記して感謝申し上げたい。

岡山県古代吉備文化財センター・島根県立歴史民俗資料館・島根県立歴史文化財研究センター・大久保徹也氏・中川 家氏

註

- (1) 岡山県下の弥生時代～古墳時代の土器個体数については算出作業自体が進展していないのが現状といえる。足守川矢部南向遺跡（江見編 1995）では、下出所～亀川上層式とされる土器満まり（豊穴住居62上層）について、土器の個体数カウント結果と器種別構成比率等が提示されており貴重であるが、残念ながら割合数のカウント基準・過程が判然としない。津守遺跡においても、縫入土器の研究に大きな成果をあげる一方で、器種分類と個体数算出結果も提示されている（亀山1996）、同様に基準・過程がわからず。
- (2) 縫入土器以外にも、他地域に系譜を有する土器としては、次のものがある。肩部球形の精製土器であるⅡ系壺は近畿地域の土器の系譜を引くものといえる。また善としたものも山陰地域に主に分布する「低脚杯」に形態的に類似するものがある。ただし、蓋については土器満まり出土の他の山陰系土器とは異なり、粒土が白色を呈するものではなく、山陰地域からの直接の縫入関係は想定しがたい。なお、山

- 該地域でも器種分類としては灰陶杯であるが、形態と大きさから蓋としての機能が想定される場合がある（中川2006）。
- (3) 層位関係をみれば、上器縦まり1号窯地の直上に遺物が置かれているのに対し、土器縦まり2号窯地に一層堆積した後に土器が置かれている。両者は同一窯地の範疇で捉えられるが、出土が離れているため直接的な層位の切り合い関係が不明である。可能性としては、土器縦まり1号の方が土器縦まり2号に先行して形成された状況も想定されるが、上記の理由から「同時期」の範疇で扱えることとする。
 - (4) 以下は概報段階であり、時期をしきり込みえないこともあります。表には記載していない。第12次調査において占墳時代初頭の土器縦まり1号窯所が発見されている（山本2001）が、また第17次調査では、東側の第7次調査地点で検出された住居群の続きにあたる堅穴住居2棟および小規模な土器縦まり1号窯所が検出されている（光本2008）。第19次調査では、上器を中心とする遺物と貝層からなる旅生時代後期～占墳時代初期の方形高まり状遺構が検出されている（野村2010）。

引用・参考文献

- 稻田孝司2008「先史－古代の集落・都市と集団関係」『考古学研究』第55巻第3号、pp.28-43
- 江見正巳（編）1995「足守川久都南向遺跡」「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」岡山県教育委員会
- 大久保徹也2002「中國四国地方の土器」『考古資料大観』第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ 小学館 pp.159-168
- 亀山行雄1996「古墳時代初頭の土器」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104
- 亀山行雄2006「古墳地城の古式土器器」「古式土器器の年代学」財団法人人蔵文化財センター pp.391-403
- 近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』第6巻1号 pp.13-20
- 高橋 譲1988「弥生時代終末期の土器縦毛」『岡山県立博物館報告』9 pp.1-32
- 中川 寧2006「山陰地域－山陰－」「古式土器器の年代学」財団法人人蔵文化財センター pp.243-256
- 野崎貴博2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.31-35
- 松木武彦・山木慎世（編）1993「鹿田遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 光本 順2004「鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 光本 順2006「鹿田遺跡第17次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.21-29
- 梅嶺昭彦1977「川入・上東遺跡の弥生土器及び古式土器器について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会
- 山本悦世1984「鹿田遺跡の弥生・古墳時代初頭の土器」「鹿田遺跡I」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.385-395
- 山本悦世2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』12 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世・岩崎志保（編）2007「鹿田遺跡5」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第23冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 吉留秀敏・山本悦世（編）1988「鹿田遺跡I」岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

2. 曲物製作における技術的特徴

鹿田遺跡第13次調査では、井戸2基（井戸3・4）から、直徑45cm以上の大型曲物が3点出土した。いずれも、井戸の底部に据えられた状態にあり、井戸枠として利用されていたことは明らかであった^(注1)。

井戸4出土の2点は、上下に組み合わせて出土し、保存状態は非常に良好である。一方、井戸3から出土した1点は、一部を調査時に破損したために、保存処理段階に個別部位が分離することとなった。そのため、形状復元の精度は、他よりやや落ちる点は否めないが、逆に、個別部位について詳細な観察が可能となった。ここでは、曲物に刻まれた痕跡からその特徴を整理し、製作技術あるいは井戸枠への加工過程を復元し、曲物研究における基礎的資料として提示することとする^(注2)。

（1）井戸3出土の曲物W5（図105・176・177、表22～25、図版21）

曲物が設置された井戸3の時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀初頭の時期が考えられる。

本曲物は、上下2段の籠をもち、側板と籠の間に3枚の添え木を作り、極目のヒノキ科アヌラ属を使用する。漆塗りの痕跡あるいは釘孔に代表される底板の同定痕は全ての部材において確認されない。こうした状況で側板の上下位置を特定することは困難であるが、籠との継合せ痕と判断される孔列（詳細は後述）が存在する側を曲物の下方と判断して説明を進みたい。その上下関係を前提とすると、出土状態は正位置となる。

a. 側板

全体の約1/3程度を破損し、マチ部（材の重合せ部）を失っているが、発掘の記録から直徑55.5cmが復元される。高さは17～17.5cmである。ただし、側板は下端から約3cm上の位置で上下に割れ、それぞれの破断面は必ずしも明瞭には接しない。側板の厚さは0.5～0.6cmである。マチ部以外に縦じ孔列が4カ所で確認される。

ケビキ 内面に縱方向と斜め方向のケビキが残る。前者は幅0.5～1cmの間隔ではほぼ全面に、そして後者は残存する側板の約1/3～1/4の範囲に限られる。縱方向の上端は側板上面に回り込んでおり、同面が破断面ではなく端面であったことを窺わせる。縱方向の後に施される斜めのケビキは、側板の下部約2.5cm幅と上部約15cmにわかれ。先に施される右上がり方向（内面向かって：以下同様）を中心に左上がりも認められる。前方のケビキでは、側板上面から6cm前後の位置にその下端がおおむねそろう部分と、側板の下端に向かって右下がりとなる部分が連続して観察された。それらの境界では線の間隔や角度が不規則に変化しており、幅約7cm程度の範囲に8本のケビキ線を1単位とする3単位の作業単位を抽出することができる（図105側板a-a'、図177a）。

b. 篦

上段籠は推定復元直徑55.5cm・幅5.6cm、下段籠は同56.7cm・幅5.5cmである。いずれも厚さ0.3～0.4cmで、側板に比べると若干薄い。マチ部以外での縦じ孔列は下段籠のみに4カ所確認される。

ケビキ（図105・177b） ケビキは、下段籠において、マチ部の内側材端部から約5cmの幅で、左上がりの9本の線が明瞭に確認される。一方、上段籠では不明瞭で確実なものはみてとれない。

マチ部（図105・176、表23・24） 両籠は、側板に設置する際に、マチ部をほぼ同じ位置にあわせていたことが発掘直後の所見で判明している。また、同位置と側板のマチ部の関係は、対角線上に一致するかどうかは確定できないが、反対側にあったことは十分に予想される。材の合わせ方は両段とも左巻き（曲物上部に向かって：以下同様）状態に置かれる^(注3)。マチ部の幅は上段17.5cm・下段18cmで近似する。マチ部では、①下段籠の外側が薄く加工され、②上段籠の下面ラインと下段籠の下面・上面ラインで材は若干削られて幅を狭め^(注4)、③下段籠では桿皮^(注5)が被さる材上端部を、皮の厚さ分だけ刻み込む加工が確認される。①では材の端部は厚さが0.3cmから0.2cmへ減じる。②では両端部が若干台形状に仕上がる傾向をみせる。③では桿皮の厚さが突出しないで上端

ラインは水平を保つ。加工されない下段籠下面では桿皮の厚さ分が下面ラインから若干突出した状態を呈する。

以上のような加工の可能性が指摘されるが、一部の箇所にとどまっており一貫性に乏しい。

マチ部縫合せ (図105・176・177c、表23・24) 上・下段籠とともに、マチ部は2箇所(列1・2)で縫合される。両列の間隔(中心線直線距離:以下同)は、上段籠で約12cm、下段籠で11cm程度を保つ。材端部からは外側で約1.5cm(列1)、内側では上段籠で約5.5cm、下段籠で6.8cmであり(列2)、外面端部付近とマチの中央付近がとめられていることがわかる。

[例1] 外側材端部に位置する孔列である。上・下段籠ともに4カ所の孔(下から孔①・孔②・孔③・孔④:以下同じ)が縦に並び、その左側に約0.8cm離れて縦に並ぶ2カ所の孔(上から孔⑤・孔⑥:以下同じ)で構成される状態が復元される。2列前外3段後内1段縫じ^(注5)にあたる。幅1cm前後の桿皮が巻かれた状態で残る。具体的な数字は表に譲るが、孔の間隔は右側孔①～④の幅が広く、左側の孔⑤～⑥は狭い。孔①～④で外面が縫じられるのは、その中でも間隔が広い部分となる。全体にバランスがとれた配置が見て取れる。

残存状況が良好な下段籠では、桿皮の端部は内面下端にはじまり、上に向かって孔①を通り外面へ出たのち下方に向かい、材の下面を巻き込んで内面を上昇する。孔①を通り越して孔②に至る過程で、桿皮先端から孔①までの桿皮上部に重なり端部を押さえ込む状態が、その膨らみからも窺うことができる。孔②から外面へ、孔③から内面へ、孔④から外面へと上昇し、籠材上端部を巻き込んで内面へ入り、そこから下降して左側の孔⑤を通り外面へ、最後に孔⑥へ入って収束する。孔⑤・⑥では若干傾いた形で差し込まれている。この段階には桿皮幅は0.7cm程度となる。こうした状態から、巻き付け方向は図面上の下からと考えて良いであろう^(注3)。また、上段籠においても下段と共通した縫合せが確認できる。

[例2] マチ部中央付近に位置する孔列である。上・下段籠ともに列2では4カ所の孔が縦に並ぶ。1列内2段縫じにあたる。下段籠では幅0.7cmの桿皮が孔②から外面へ出て、下の孔①を通って内面へ入り、そこから上部の孔③を通って外面へ、そしてさらに上部の孔④を貫通して内面へという縫合せをみせる。この縫じ方は、列1の孔①を列2の孔②にスライドさせた状態であり、皮の流れは列1と共通する。孔の間隔は上端と下端との間が1.5cm・2cm、孔の間隔は0.5～0.8cmで、外面が縫じられるのは0.8cmと0.5cmである。上・下段とも、孔の間隔などは近似した数値を示し、外面の桿皮の間隔が狭い点が列1とは異なる特徴である。

籠の共通性 上・下段籠は側板に比べると薄くてほぼ同サイズの材が使用される。また、左巻き状態の設置、マチ部の特徴、縫合せ方や孔間隔のバランスの良さ、列1と列2の関係など、きわめて共通性が高い。

c. 添え木 (図105)

長方形の剥板3枚が出土した。添え木①・②は側板と籠材の間に挟まった状態で、添え木③は曲物と分離して取り上げられた。調査直後の所見から、添え木②は上・下段籠のマチ部付近に位置していたこと、添え木①は同②とは約45cm程度の間隔を保つこと、添え木③は被損部にあったことが判明している。こうした3枚の位置関係は、添え木が45～50cmの間隔で配されていたことを物語る。3点の大きさは、残存長24.5cm～29cm、幅7cm～7.6cm、厚さ0.3cm前後に収まる。添え木①では側縁部が0.1cmに減じており、本来は両側縁を薄く仕上げ、側板に沿わせた状態であったことが予想される。釘孔あるいは縫じ孔などは全く確認できない。

ここで注目されるのが、長さの残存値が側板の高さより10～11.5cmも長い点である。出土状況では添え木が曲物下面からつきだした状態が確認されており、曲物を井戸枠として設置した際に強く固定するための機能が窺われる。

d. 側板と籠の縫合せ (図105・176、表24・25)

側板と下段籠には、マチ部以外において各4カ所に縫じ孔列の痕跡が確認される(図105-列3～6)。それらの間隔は、側板では26cm・30cm・29cm、下段籠では26.5cm・30.5cm・29.5cmを測り、側板の外側に籠がまわる位置関係を考えると両者はほぼ一連の間隔を保つと判断される。次に、孔の間隔を側板と籠で比較してみよう。側板

では孔が全て残っているのは列4のみである。同列では4カ所の孔①～④が上にむかって縦に並ぶ。孔の間隔は孔①～②が1.2cmに対して、孔②～③・孔③～④は各0.3cm・0.25cmと極端に短い。一方、下段縫では各列で4カ所の孔と棒皮が確認される。いずれの列も下方の孔①～②が1cm前後～1.5cmで間隔が長く、孔②～③・孔③～④は0.35～0.55cmとなり、板端に短い点は側板と共に通した特徴である。このように、縦じ孔列の配置・各級孔の間隔にみる共通性の高さは、両者が縦じ付けられたことを示唆するとみてよいであろう。

次に縦じつけ方であるが、下段縫の列4では孔②から外面をつたて孔③へあがった棒皮が、孔③を抜けて内面下方へ向かい、再度孔②を通り外面へ、続いて下方の孔①を抜けて内面へ、孔③を再度通り抜けて外面へ、そして孔④から内面へと続く。その結果、外面には3カ所で縫じながらも全体で2cm弱のまとまりをもつ長さとして棒皮が現れる。こうした流れは、孔②～③を欠落した列3・列5・列6の残存状況とも矛盾しない。つまり、1列内2段縫である列2と同じ4カ所の孔列でありながら、1列内3段縫となり、棒皮が同一の孔を複数回にわたって通る点や外面での現れ方にマチ部とは異なる特徴を示す。

ここで問題となるのが、下面から各列最下段にあたる孔①までの長さである。側板では1.9～2.3cm、下段縫では1.45～2cmでばらつきをもつが、列ごとに両者の差を比較すると、列3・6で0.5cm、列4で1～0.8cm、列5で0cmとなる。この状態では両材を水平位置に縫じつけられない。列6の位置で両材の下面をそろえ、列3・6を通って列4の側に向けて縫が上昇していた、つまり、側材に対して縫を斜めに縫じつけたと考えざるを得ない。

a. 形態的特徴とその用途

通常、曲物は底板をもつ容器として機能する。特に大形の容器の場合は、木釘や皮縫じによって側板と底板が固定され、縫も同時に木釘で固定する場合も多い。ところが本曲物では全く釘孔は確認されない上、縫と側板のみが縫じつけられた状況にある。こうした点から本来的に底板を持っていなかった可能性が窺われる。

一方、添え木では、その長さが側板の高さよりも10cm以上長く、底面から突出していた点を指摘した。容器とした場合、突き出た添え木の厚さでは、その過重に耐えられるかどうかは極めて疑問である。むしろ、井戸枠の設置を目的とした固定機能のほうが理解しやすい。曲物底部から二つに割れて出土した土器の出土状況も、その上部に曲物の側板あるいは添え木が強く押しつけられたことを物語る^(注6)。

こうした添え木は、井戸枠への転用の際に差し替えた可能性も考えられるが、それを差し引いても、本曲物は容器ではなく井戸枠として製作された可能性が求められるのではなかろうか。

(2) 井戸5出土の曲物W10(図111・177、表22・26～30、図版21)

井戸底部に重なりあって出土した2個体(W10・11)の内、下部に置かれた曲物である。底部を上方に置き、上部に後述するW11が被さる(図112)。側板には縫が3段張着され、その間に添え木が3カ所差し込まれる。底板は残っていないが、側板と下段縫を貫く木釘孔列の存在から、本米は存在していたことは明らかである。同孔列は添え木上にも認められる。内面の漆塗りも良好に残る。ただし、各部位が設置された状態であるため、詳細に観察することはできない部位も多い。井戸の時期は、出土土器から11世紀後半頃が考えられる。

a. 側板

直径は47.5×48cm、高さは22.3～22.6cm、厚さは0.6cmを測る。

ケビキ(図177c) 内面には縦方向と斜め方向のケビキが明瞭に残る。前者は、マチ部の幅5.5cmの範囲を除いて、内面全体に0.5～1cm間隔で施される。側板の上面にはケビキ線が若干回り込む状態が確認される。後者は2カ所で広範囲に観察される。1カ所はマチ端部から右へ38cm(幅約31cm)、もう1カ所は同端部から左へ14～約40cm(幅約26cm)であり、両箇所でマチを挟んで全体の1/2強を占める。その他にマチの対角線上にも狭小な範囲が確認される。やはり、縦方向と同じく縫合せ部周辺は避けられる。斜め方向のケビキは右上がりを土体とし、左上がりが上部に加わるが、一部に認められる不規則な重複から3単位程度の作業単位が抽出される部分もある。

マチ部（図111・177c、表26） 幅は7.5cmを測り、右巻きに置かれる。マチ部では添え木に加えて籠のマチ部も重ねて固定されるため、0.6cmの厚みは約1.8cmに達し、内面の側板カーブに垂みを生む。材の端部には明瞭な段が形成されており、後述する下端を除いて、材端部を薄く削るなどの加工は見いだせない。

縫合せ（図111・177c、表26・27） 縫じ孔列は1列のみである。内側の材端部から約6cm（外側では約1.5cm）の位置に10カ所の縫じ孔が縦に並ぶ。確認可能な内面でみると1列内5段縫じとなる。幅1cm程度の棒皮が、内面では孔⑤-⑥（長さ1.9cm）を中心に、上下方向に各1.2cm前後、1cm前後の長さを現す。一方、外側ではいずれも2.5-2.9cmで統一される。こうした数値には、非常にバランスのとれた孔の配置が窺われる。

塗りと側板端部加工（図111、図177c・d） 内面全体に黒漆が塗布されるが、下端から1.3cm前後には帯状に塗り残しが認められる。同部分は底板固定の釘孔がめぐる範囲でもあり、塗り段階に底板が存在していたことを示す。底板の厚さは1~1.3cm程度であろう。漆は側板上部1/3で残存状況が悪い。使用痕かもしれない。

ここで注目されるのが、内面の側板下端部に刻まれた加工痕である。幅約7cm・高さ約2.5~3cmの範囲で、材のコーナーに向かって斜めにカットされた面が明瞭に残る。その結果、縫合せによって生じた厚さ0.5cm前後の段は消失し、なめらかなカーブが生み出されている。漆塗りとの関係をみると、漆は同加工面の上半には施されるが下半部には及んでいない。つまり漆塗り以前の加工ということである。縫合せ関係の加工とは想定しがたく、考えられるのは漆塗り直前に行われる底板をはめ込む際の加工である。この僅かな作業によって、底板は比較的容易にそして安定的にはめ込まれ、側板の段差による底板との隙間を埋めることもできたはずである。

木釘孔（図111・177g） 側板底面から0.6cm程度上部に木釘孔がめぐる。これらは、側板と下段の籠そして2カ所の添え木を貫通する。釘孔の总数は28カ所で、その内16カ所に木釘が残る。木釘孔の形状は丸形一隅丸方形が20カ所、正方形が8カ所確認される。一辺あるいは直径は0.4~0.5cmである。孔の間隔は1.8~1.5cmの幅をもち、重複して打たれた痕跡も1カ所残っており、底板の固定に関して補修作業があったが窺われる。ただし、現状では、これらの中に規則性を見いだすことはできない。

b. 篠

籠は3段である。直径は、上段では48cm前後×49.5cm（側板マチ部位置）、中段・下段では49cm弱の数値を示しており、全体としては49cm前後に収まる。幅は上段が狭くて5.0~5.8cm、中段・下段では8cm前後、厚さはいずれも0.2~0.3cmであり、側板に比べてかなり薄い。

マチ部（表28） マチ部の幅は15.3cm前後と14cm程度に収まる。側板の2倍近い数値である。材の重合せは、上・中段は側板と同じ右巻きに、下段のみが左巻きに置かれる。いずれの籠も外側の材端部付近が薄く削られ、厚さは約0.15cmに減じる。内側についても上段籠では同様の傾向が認められるなど、マチ部分となるべく薄く仕上げている点は側板とは異なり、段の解消が促されている。また、マチ部の配置は側板と下段籠が一致し、上段・中段籠はその対角線上に置かれる。上・中段と下段では材の巻き方とあわせて配置の面での違いが指摘される。

縫合せ（表28~30） いずれの籠も2カ所で縫じ合せられる。外側端部から1.4cmの位置に列1と、同列から7cmの間隔を保つ列2である。列2はマチ部のほぼ中央に位置する。列1は、上段では4カ所、中・下段では6カ所、そしてその脇の2カ所に棒皮が通されており、上段は2列前内2段後内1段縫じ、中段は2列前内3段後内1段縫じ、下段は2列前外3段後内1段縫じとなる。孔の間隔は、外側の縫じ部が2cm前後の長さを示し、それ以外は0.5cm以下となる。列2では、上・中段は孔が4箇所であり1列内2段縫じ、下段は中段と同軸でありながら孔は6カ所となり1列内3段縫じとなる。外側の縫じ部の間隔はいずれの段も0.2~0.4cmと狭い。棒皮の幅は上・中段では0.9cm前後、下段は1.3cm前後に測る。このように各段では多少の差が認められる。

固定痕 上・中段の籠には側板との固定痕は認められない。下段の籠には側板と同じ位置に木釘孔が巡り、底板の固定の際に、側板とともに固定されたことがわかる。

c. 添え木

3カ所に4枚が確認される。それらの位置関係は、側板と下段のマチ部（図111添え木①）を正面に、右方向へ42cm（同②）、左方向へ40cm（同③）を測る。同②と③の間隔は42cmであり、それぞれほぼ等間隔を保つ。

添え木①の位置では幅13.5cmの間に、1cmの隙間から2枚と判断したが、同一個体の可能性も残す。同②③は各1枚である。長さは22~23.5cmが想定され、側板の高さ（23cm弱）とも矛盾しない。厚さはいずれも0.3~0.4cmで両側縁がやや薄くなり、側板のカーブにそって若干湾曲し段差を生じない。幅は9cm前後の可能性が窺われるが、上部の多くの箇所で覆われているため、詳細な観察は困難である。

添え木①と③では側板と蓋を同時に固定する木釘孔が下端部を貫通している。前者では1箇所、後者では3箇所の木釘孔が確認される。一方、添え木②では木釘孔は認められない。

(3) 井戸5出土の曲物W11（図111・177、表22・26~30、図版21）

井戸5において前述のW10上部に被さって設置された曲物である。側板に2段の蓋と添え木が4カ所に伴う。こうした部材の数や漆塗りの状態にはW10との違いが認められるが、それ以外の特徴はW10と共通する。

a. 側板

直径は49.5×51cm、高さは22~23cm、そして厚さは0.5~0.6cmを測る。

ケビキ（図111・177 f） 縦方向と斜め方向の存在・ケビキ線の間隔・作業手順・範囲などの多くの点で前述のW10と共通する。ただし、斜め方向が施される範囲はより一層分散的である。また、継ぎ孔列に沿った1条の線については、単独で長さが短いことから同ラインの設定に関わる線の可能性を示す。

マチ部（表26） マチ部の幅が8cmで右巻きに置かれる点はW10と類似する。一方、外側端部の厚さは0.5~0.6cmから0.3cmに減じており、W10で見られるような段差は多少縮小している。

縫合せ（図111・177 f、表26・27） 継ぎ孔列は1列である。内面では側材端部から1.5cmの位置を中心に15カ所の孔が継に並び、1列内7段継ぎとなる。孔の間隔は、内面の継ぎ部が0.5~1.5cm、外側では1.1~2.85cmと0.4cm（上端）を示す。継じて後者が長い点はW10と共通するが、数値のばらつき幅は大きい。漆皮幅は1cmである。

側板端部加工と塗装（図111・177 f・177 g） 内面の側板端部下端は、23×2.3cmの範囲で斜めに薄く削りとられ、厚さ0.5cm前後の側板の段差が消失している。この加工痕はW10と同様であり底板設置に伴うものと判断される。一方、W10と異なる点は、この加工面を含め内面全体に黒漆が塗布される点である。漆は上端から5cm前後の範囲では劣化が進んでいるのに対して、側板下端から8cm前後の範囲は漆塗りが特に良好な状態を保っており（図117 f）、底板の設置を示唆する木釘孔が存在するにも関わらず、底板の存在を示す漆の塗り残しは認められない。

以上の様相からは、まず側板端部を加工し底板を設置した後に漆を内面に塗って容器は完成し、その後、井戸枠に転用する際に底板を外し、改めて下半部全体に漆を塗り直したという工程が導き出される。漆の残存状態には曲物の重複も考慮すべきであるが、少なくとも、曲物下端付近の残存状況の良さはこうした復元工程と矛盾しない。さらに木釘孔部と側板下端の一部に残る漆痕跡の存在もこの仮説を裏付ける。ただし、必ずしも明確であるとは言い難い点は注意が必要であろう。漆の塗り残し部がない別の理解として、漆を下端まで塗ってから底板をはめたという考え方もある。しかし、漆面に板痕跡が全く残っていない点、そして、前述した底板をはめ込むための加工と実際にはめ込む作業間に漆を塗ることになり、その間に数日以上の期間をおくことは作業工程を考えると理解しにくい。

木釘孔（図111） 孔の数は27カ所、木釘は15カ所にのこる。底面から0.5~1cm前後の位置に並ぶ。その間隔はおおむね5~7cmにおさまり、全体的に均等な配置を示す。その範囲から外れる1cm前後あるいは9cmのものは補修や製作上の問題に起因することが予想される。孔あるいは木釘の形状は隅丸方形を呈す。一辺は0.4cm前後で

ある。また、側板内面では0.1cm程度まで細くなっている、先端がとがる木釘の形状を窺わせる。

b. 篦

上段篠は直径52.5cm、幅7.8cm、厚さ0.3cmである。ただし、上半部（幅2~2.5cm）では厚さが0.2cmに減じ、材の外側がくぼんだ状態が観察される。これは、本曲物の上部に被さった曲物W10の圧力が影響した可能性が高い。下段篠は直径52.3cm、幅6.0~5.2cm、厚さ0.3cmを測る。上段よりは幅が2cm程度狭い。

マチ部（表28） マチ部の位置は、下段篠は側板と一致し、上段篠のマチ部はその対角線上に配置される。一方、材の巻き方は上・中段は側板と同じ右巻き、下段のみが左巻きにおかれる。こうした配置はW10と共通する。

マチ部の幅はいずれも20cm程度である。両篠は、材の端部付近が薄く削られ先端はとがり気味となる。特に内側では、厚さは0.1~0.15cmに減じ、重ね合わせによる段はほとんど解消されてなめらかなラインを形成する。外観の仕上がりは良質であったと予想される。

縫合せ（表28~30） 両段とも2カ所に縫合せ列がある。いずれも、列1は椎材端部から1.8cm前後に位置し、列2はマチ部の中央部に近い位置にある。両列は7cm前後の間隔を保つ。棒皮の幅は0.8cmである。次に観察可能な外面について縫合せの状態を述べよう。列1では、上段篠では6カ所の孔①~⑥とその脇に接する1カ所の孔⑦が確認される。孔①~④は同一軸に並ぶが、孔⑤⑥では材の端部側に軸がずれる。一方、孔⑤⑥の軸線下には、孔①の左側に連続的に皮を残す孔の存在が認められる。これらの関係は、椎材の残存状況の悪さから断定はできないが、縫じ直しも視野に入れておく必要があろう。また、脇の孔については、もう1カ所にかすかな痕跡が認められることからも、本来は2カ所であった可能性が高いのではなかろうか。以上の判断から、2列前内3段後内1段縫じと考えたい。下段篠は縫じに並ぶ4カ所の孔とその脇の2カ所の孔で構成され、2列前内2段後内1段縫じと考えられる。上段篠に比べると孔の数が少ないが、篠幅の違いに対応するものであろう。両段における孔の間隔は、外面の縫じ幅が上段で1.5cm前後、下段でも1.8cm前後と内面より長く、全体的にバランスがとれた配置を示す。篠下端からの長さも両段で一致する部分が多い。列2は両段とも4カ所の孔が縫じに並び、1列内2段縫じとなる。それらの間隔は、外面の縫じ部が0.5cm~0.7cm、内面は1.5cm前後であり、列1とは逆に外面が狭い。

固定痕 固定痕があるのは下段篠のみで、側板と同位置に木釘孔が造る（詳細は側板の項）。

c. 添え木

4カ所に配置される（図111位置①~④）。添え木①~④の間隔は、同①~④の28cmを除くと38~39cmを保っており、おむね均等に配する意識がみてとれる。各側板の幅は8~8.4cmを測り、W10と比べるとやや狭いが、大きさや側縁を薄くする加工など、多くの点で共通する。添え木①②③は1カ所の木釘孔によって篠・側板と固定される。添え木④の木釘孔は2カ所である。

（4）鹿田遺跡出土曲物の特徴

以上、3点の曲物の特徴についてまとめた。そこから抽出される相違点などを整理しよう。また、鹿田遺跡第7次発掘調査井戸3出土の曲物W4（以下W4とする）も、類似性が高いことから参考資料として加えたい（図178）。同資料は12世紀末~13世紀初頭の資料である。⁽¹⁷⁾

部材の構成とその配置 部材の構成材は極目のヒノキ材あるいはヒノキ科アヌロ属が用いられる傾向がみられる。側板はやや厚めの材、篠材・添え木は薄い調板が用いられており、材の使い分けが見て取れる。また、部材を構成する側板・篠・添え木の配置には一貫性が認められる。側板と篠のマチ部の配置は、一致する場合と対角線上に置く場合に限られる。前者はW10・11の最下段篠であり、それ以外はW4を含め全て後者に限っており、対角線上が主流といえそうである。添え木の配置もマチ部の位置と強い関係を有する。いずれの曲物も側板マチ部に添え木1枚を置き、それを基準に全体にバランスよく配される。特に側板（4枚）の場合には、その対角線上の篠マチ部に1枚が配されている。

材の巻き合せ方はどうであろうか。W10・11・4では、下段の籠が左巻きに、そして、それ以外は側板もあわせて全て右巻きに置かれる。W5でも下段は左巻きであり、こうした配置には下段の特性が現れているのかもしれない。

つまり、各部材はマチ部の位置や材の巻き合せなどの配置に一定の配慮がなされており、その背景には曲物の強度を保つための技術的工夫があったことは十分に考えうる理由であろう。底板とともに固定される下段の籠が、他の籠と違いを示すのも、そういう意味合いを伝えるのではなかろうか。

技術的特徴と差異 技術面で注目されるのは、材端部の仕上げ方と底板挿入に関わる加工である。前者については、時期的に古い段階のW5では明瞭とは言い難いが、W10・11では籠の端部あるいは添え木の側縁などを薄く加工した状態が随所に確認される。そこには側板のカーブに添う仕上がりへの意識が見て取れる。ただしこの点は逆に新しい段階のW4ではあまり明瞭とは言い難い⁽¹⁷⁾。一方、底板のはめ込みに関わる可能性を考えた側板端部下端をカットする加工は、W10・11に加えてW4でも確認される⁽¹⁸⁾。通常、底板の設置は周りをたたいてはめ込むといわれる。この3点に見られるこうした加工は底板設置に関わる点で注目したい。また、この場合、側板内面に残る明瞭な段の存在が板の固定に強く関わることになり興味深い。

次に、一見共通性が高い曲げ物であるが、その中における技術的差異について指摘しておこう。側板を曲げるために施されるケビキについては、継方向と斜め方向になされる中で、W10・11では側板のマチ部は避けられている点を前述した。W4でこの点を確認すると、マチ部を避けることなく全面にケビキが認められる。継合せ方法にも、両者の違いが一部に見られる。側板の継合せでは、上端部で細かい間隔で孔を刻んで桟皮の端部を収めるという同じ手法がとられているが、問題は桟の列1における桟皮端部の始末の仕方である。W10・11では、孔①から外面に出て、材の下端を回って内面に入り、孔②へ向かう過程で皮の端部を内面で押さえ込む。それに対して、W4は、孔①から内面に出て、下端を回って外面に入り、孔②へ向かう際に皮に端部を外面で押さええる(図176・178)。つまり、最初の巻き付け方が逆方向になるのである。

その他に、部材や目的に応じて継合せ方法が異なる点も明瞭に描き出される。側板のマチ部は1列内5段あるいは7段か8段継じ、籠のマチ部では2列前2段あるいは3段後1段継じと、1列内2段あるいは3段継じで構成される。そして側板と籠の継じ方は1列内3段継じとして違いを見せる⁽¹⁹⁾。

井戸粧としての設置に関わる点では、W5では底板固定痕がない状態で側板と籠を縫じ付けた状況や添え木の長さから、転用というよりは本米に井戸粧としての製作された可能性を考えた。その中で、籠が斜めに継合せられる点、あるいは、W10では転用に際しての漆塗りが再度なされた可能性などの加工も注目しておきたい。

以上、鹿田遺跡で出土した4点の曲げ物について、その特徴をまとめてみると、確かに共通性は高いものの、相違点も含まれていることがわかる。こうした状況が何を意味するのか。そこに、時間的な変化や製作者の違いがあるのか。生産と流通の問題も含め、こうした点についての評価は、検討資料の蓄積を通じて整理することが必要であり、今後の課題としておきたい。

(山本悦世)

註

1. 出土状況については本稿128~129頁の詳細を参照
2. いざれの曲物も保存処理あるいは復元を行った後に実測したものである。そのため、文中に述べる数値等には、多少の幅をもって考える必要がある点を付しておく。
3. 篠・側板の上下位置については、制作時の上下とは逆板として設置されていることもあり、曲物に設置段階の上下位置が製作時点の上下位置と必ずしも一致するわけではない。以下、ここで述べるのは設置した状態での上下位置を元にした材の巻き方あるいは上下の表現を行うこととした。
4. 上・下段の籠では、端部の籠が若干狭くなる傾向が看取される。ただ、保存処理あるいは保存状態にやや問題もあるため明瞭とは言い難く、本米的な加工かどうかはやや疑問も残る。
5. 我記は参考文献(奈良国立文化財研究所1985)を参照した。
6. 目2点が曲物底面に食い込んで出土した。1点は中央で2つに割れて合わせ口状態にあったが、その中に調査体の皿・破片が入るなど、

諸状況から曲物設置時に倒れて押しこまれたことが想定される。(本報告書129頁参照)

7. 参考文献(高田2007)

- 報告箇所には、全体がくぼむとの記載がされ、側板端部コーナー部の加工については指摘がない(註7)。しかし、再度の観察によって、材の端部下端が6cm・幅3cmの範囲で斜めにカットされ、その結果、材のコーナーラインは丸みをもち、側板の底は消失してなめらかなカーブを生み出している。
- W4は、側板が1列内8段階じ上・中・下段の、簇はいずれも列1が2列内前3段後内1段級じで列2が1列内3段級じにあたる(註7)。

参考資料

岩井宏貴2004「角竹物」のもと人間の文化史75 貢田法良・成田義人著

高田貴太2007「鹿田遺跡第7次発掘調査戸井3出土物の基礎的整理」「鹿田遺跡5」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23号 岡山大学理系文化財研究会研究センター

奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』

成田壽一郎1996『曲物・藝物』理工学社

表22 曲物の概要

		井戸3 W3	井戸4 W30	井戸4 W31
全般的特徴		側板に3段の底、側板と蓋の間に透水木3枚、下脱離は既成のものによって側板に沿めて固定。側板裏・木板は無接着	側板に3段の底、側板と蓋の間に透水木3枚、側板から約6cm上に、側板・下脱離・透水木を貫通する穴孔があり、内部の空隙部等は、側板下端から1~1.8cmの範囲を貫通に盛り戻す。	側板に2段の底、側板と蓋の間に透水木4枚用。側板表面から約6cm上に、側板・下脱離・透水木を貫通する穴孔があり、内部の空隙部等は、側板下端から1~1.8cmの範囲を貫通に盛り戻す。
サイズ	直径	透水木底径30cm	47.5×48cm	49.3×51cm
	高さ	最高点37~17.3cm	22.3~22.6cm	22~23cm
	幅さ	0.5~0.6cm	0.6cm	0.5~0.6cm
ケビキ		縦方向: 幅0.5~1cm削除、斜め方向: 右上がりを中心・左下がりあり、作業部足3段級化	縦方向: 幅0.5~1cm削除、斜め方向: 縦方向後に右上がりと左下があり、W30では作業半径確認。いずれもマチ部にはケビキ無効	
側板	巻き方内	両脇部巻し	右巻き	右巻き
	縫	両脇部巻し	7.5cm	8cm
	加工	両脇部巻し	等に削除	外側端部を薄く削り、厚さ0.3cmに減らす。
	組合せ	両脇部巻し	1孔所、内側には透水孔10孔所、内側から見ると1列内5段級化	1孔所、内側に底孔15孔所、1列内7段級化
	組合せ	両脇部巻し	幅1cm	幅1cm
	底	両脇部巻なし	内側側板下端: 幅7cm、高さ25cmをカット→脱落消失	内側側板側面下端: 幅2cm・高さ23cmの範囲をカット→脱落消失
底部付近加工		特に無し	内側側板下端: 幅7cm、高さ25cmをカット→脱落消失	内側全体に底孔あり、下端8cm後の範囲は特に脱落が危険。木板丸あわいは側板下端の一筋に巻か?
強度		無し	下端から12cm前後を帯状に削り、内側合併に黒漆仕上	
マチ部	底	2 箇	3 箇	2 箇
	上段	上段	中段	上段
	下段	下段		下段
	直径	55~59.3	56.7	48.8×9.5
	幅 (cm)	5.6	5.5	4.55
	厚さ	0.3~0.4	0.4~0.3	0.2~0.35
	位置	両脇部はマチ部一致、側板マチ部とは一致しない。	側板マチ部の対角線上に位置、上・下・右・左各マチ部と一致	側板マチ部の対角線上
	幅 (cm)	17.5	18	15.5
	巻き方内	左巻き	右巻き	右巻き
	加工	一部にあり	材の端部を薄く加工	外側・内側の端部を薄く加工。
側板	2孔用	外側端部とチサキ端部付近の2孔所。	外側端部付近はマチ部の先端や側壁端よりの2孔所	
	2列側内2段側内1段巻じ	上段: 2列側内2段側内1段巻じ+1列内2段級化	上段: 2列側内2段側内1段巻じ+1列内2段級化	
	+ 1列内2段級化	中段: 2列側内3段側内1段巻じ+1列内2段級化	中段: 2列側内2段側内1段巻じ+1列内2段級化	
	縫合部	下段: 2列側内3段側内1段巻じ+1列内2段級化	下段: 2列側内2段側内1段巻じ+1列内2段級化	
	縫合部	マチ部: 1cm、側板との縫合部: 0.8cm	縫合部: 1cm	縫合部: 1cm
側板との固定		固定痕無し	木板で固定	固定痕無し
ケビキ		木板に丸上り	縫合部不規則	縫合部不規則
側板	取扱/開閉	3孔+2段/約45cm開閉、専用に配置	3孔+4段/専用に配置、40cm×40cm	4孔+4段/専用に配置、38~39cm×28cm
	幅×長さ(cm)	①7.5×39 ②7×24.5 ③7.5×27	④8.5×33.5×40.5 ⑤7.5×8.5×23.5 ⑥8.5×8.5×22.2	⑦8×22 ⑧6.5×22.5 ⑨6.5×22.5 ⑩6.5×22.5
	厚さ (cm)	0.1~0.3 0.2~0.3 0.1~0.3	0.2~0.4、両脇部0.3~0.3	0.3~0.4、(1)では側板0.2
	骨板	(2)は側板端部が薄く骨板に違う。	側板端部が薄くなり、側板に違う	(2)は側板端部が薄く、側板に違う
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
	側板・蓋との固定	固定痕無し、12さん込みのみ	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし	木板(1)で1孔所、(2)で3孔(側板・蓋・木板を固定)、(3)に固定痕なし
側板	側板	丸・扇丸形(透水孔)、正方形(透水孔)貫通あるいは一列10孔	丸丸方孔、2列丸孔(透水孔)、側板内面は約3cmまで織ぐこと	丸丸方孔、2列丸孔(透水孔)、側板内面は約3cmまで織ぐこと
	側板の右側	巻し	巻在していないが、木板は有り、端(う)→L3cm側	巻在していないが、木板は有り
	木取り/側板	W5~10は側板/セノキ骨アスロ葉(ただし小骨・蓋は無く)	-	-
時期		10世紀末~11世紀初頭	11世紀後半	11世紀後半
備考		透水木は底板から下に約15cm程度突出	-	-

考察

表23 曲物W5 箱材マチ部の特徴

	幅/重ね合せ方向	縫じ孔列	端部からの長さ	開間幅	孔の数	※残：一部破壊が及ぶもの、左右：縫列のある場合の位置を示す					
						縫板下端から縫じ孔までの長さ（外側の値）					
上段兼	幅17.5cm/左巻き	列1	外側1.5cm/?	右12cm 右3cm/左2cm	1孔① 4孔② 4孔③ 3孔④ 左孔⑤ 左孔⑥	1.5cm	2.5cm	3.8cm	欠損	4.9cm	4.1cm
		列2	内側5~5.5cm			4	1.9cm	2.7cm	3.5cm	4.1cm	
下段兼	幅18cm/左巻き	列1	外側1.3cm/2.1cm	約11cm 右1/左2	1孔① 4孔② 4孔③ 3孔④ 左孔⑤ 左孔⑥	1.5cm	2.3cm	3.8cm	4.3cm	3.4~3.2cm	3~2.7cm
		列2	内側6.5cm			4	1.5cm	2.3cm	3cm	3.5cm	

表24 曲物W5 縫じ孔間隔と縫じ皮の残存位置

部材	部位	列	孔数	※数値は外側の値						
				下端-孔①	孔①-②	孔②-③	孔③-④	孔④-上端	上端-孔⑤	
上段兼	マチ部	列1	右3カ所/左2カ所	1.5cm	1cm	1.3cm	-	-	0.6cm	0.8cm
		列2	外側				-	-		
		内側				-	-			
	内側	外側	1カ所	1.9cm	0.8cm	0.8cm	0.6cm	1.4cm		
		内側				-	-			
		列1	右4カ所/左2カ所	1.3cm	1cm	1.3cm	0.5cm	1.1cm	2.2~2.4cm	0.4~0.5cm
下段兼	マチ部	列2	外側							
		内側				-	-			
		列3	4カ所	1.5cm	0.8cm	0.7cm	0.5cm	2cm		
		外側				-	-			
		内側				-	-			
		列4	4カ所	1.45cm	1.05cm	0.35cm	0.45cm	1.95cm		
	側板との縫じ合わせ箇所	外側				-	-			
		内側				-	-			
		列5	4カ所	1.45cm	1cm	0.45cm	0.5cm	2cm		
		外側				-	-			
		内側				-	-			
		列6	4カ所	2cm	1.1cm	0.35cm	0.25cm	2.3cm		
	側板	外側				-	-			
		内側				-	-			
		列3	1カ所残	2cm	-	-	-	-	-	
		列4	4カ所	2.3cm	1.2cm	0.3cm	0.25cm	-	-	
		列5	1カ所残	2cm	-	-	-	-	-	
		列6	1カ所残	1.9cm	-	-	-	-	-	

※内側は側板部があるため2段で表示

- 欠陥部
■ 縫じ皮残存部
■ 縫じ皮の可能性

表25 曲物W5 側材と下段籠の縫じ孔の位置関係

縫じ孔列	部位	孔の数	側板下端から縫じ孔までの長さ（外側）				側板と側の数値差
			孔①	孔②	孔③	孔④	
列3	側板	1カ所残	2cm	-	-	-	0.5cm
		4カ所	1.5cm	3cm	3.35cm	3.8cm	
列4	側板	4カ所	2.3cm	3.5cm	3.8cm	4.05cm	1cm前後
		4カ所	1.45cm	2.5cm	2.85cm	3.3cm	
列5	側板	1カ所残	2cm	-	-	-	約0.5cm
		4カ所	1.45cm	2.35cm	3cm	3.5cm	
列6	側板	1カ所残	1.9cm	-	-	-	0cm
		4カ所	2cm	3.1cm	3.65cm	4cm	

表26 曲物W10・11の側板マチ部の縫じ孔位置

W10

マチ部の特徴	縫じ孔列	縫じ孔数	端部からの長さ	側板下端から縫じ孔までの長さ（内側）cm									
				孔①	孔②	孔③	孔④	孔⑤	孔⑥	孔⑦	孔⑧		
幅7.5cm/右巻き	列1	10カ所	外側: 1.5cm	0.25	3.4	6.1	7.15	10.1	12	14.5	15.2	18.5	19.5

* 上方から上方に向けて孔①→孔⑨とする。

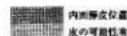
W11

マチ部の特徴	縫じ孔列	縫じ孔数	端部からの長さ	側板下端から縫じ孔までの長さ（内側）cm														
				孔①	孔②	孔③	孔④	孔⑤	孔⑥	孔⑦	孔⑧							
幅8cm/右巻き	列1	15カ所	外側: 1.5cm	0.5	1.5	4	5.1	7.75	9.25	12.1	13.6	15.4	16.1	17.7	19.1	21.6	22.1	22.5

表27 曲物W10・11の側板マチ部における縫じ孔間隔

W10

列	下端-孔①	孔②-③	孔③-⑤	孔④-⑥	孔⑤-⑦	孔⑥-⑧	孔⑦-⑨	孔⑧-⑩	孔⑨-⑪	孔⑩-1周
列1	25cm	26cm	29cm	26cm	25cm	22cm	28cm	26cm	28cm	28cm



W11

列	下端-孔①	孔②-③	孔③-⑤	孔④-⑥	孔⑤-⑦	孔⑥-⑧	孔⑦-⑨	孔⑧-⑩	孔⑨-⑪	孔⑩-1周	孔⑪-1周
列1	0.5cm	1.1cm	2.6cm	2.6cm	2.8cm	1.8cm	1.6cm	1.6cm	2.3cm	2.3cm	6.4cm

表28 曲物W10・11籠材マチ部の縫じ孔位置

W10	マチ部	列	列の間隔	端部からの長さ(cm)	孔の数
上段	幅15.3cm 右巻き	列1	7cm	外端14/2.3	左4/右2
		列2		内面6.9	4
中段	幅14cm 右巻き	列1	7cm	外端14/2.4	左6/右2
		列2		内面5.6	4
下段	幅14cm 左巻き	列1	7cm	外端8/1.8	右6/左2
		列2		内面6.2	6

W11	マチ部	列	列の間隔	端部からの長さ(cm)	孔の数
上段	幅30cm 右巻き	列1	6.8cm	外端18/29	左6/右1?
		列2		内面11.4	4
下段	幅30cm 左巻き	列1	7cm	外端18/28	右1/左2
		列2		内面11.2	4

端部からの長さ●●●●孔の数の○○○に対応
左=左面に並ぶ孔列、右=右面に並ぶ孔列

表30 曲物W10・11籠材マチ部における縫じ孔間隔(外面)

W10	籠材孔列	孔の数	下端-孔①	孔②-③	孔③-⑤	孔④-⑥	孔⑤-⑦	孔⑥-⑧	孔⑦-⑩	孔⑩-1周
上段	列1	左4/右2	0.4cm	0.4cm	0.4cm	—	—	—	—	—
中段	列1	左6/右2	0.2cm	0.2cm	0.15cm	0.15cm	0.1cm	0.1cm	0.15cm	0.2cm
下段	列1	右6/左2	0.2cm	0.2cm	0.5cm	0.5cm	0.5cm	0.5cm	0.5cm	—
上段	列2	4	26cm	26cm	0.6cm	0.6cm	0.6cm	0.6cm	0.6cm	—
中段	列2	4	24cm	24cm	0.9cm	0.9cm	0.9cm	0.9cm	0.9cm	—
下段	列2	6	21cm	21cm	1.9cm	1.9cm	1cm	0.6cm	0.6cm	—

W11	列	孔の数	下端-孔①	孔②-③	孔③-⑤	孔④-⑦	孔⑤-⑧	孔⑥-⑩	孔⑩-1周
上段	列1	左5/右1	0.5cm	1.5cm	1.3cm	1.5cm	1cm	1.25cm	0.5cm
下段	列1	右4/左2	0.6cm	1.25cm	1.5cm	1.9cm	0.5cm	—	—
上段	列2	4	1.7cm	0.5cm	1.45cm	0.55cm	—	—	—
下段	列2	4	1.2cm	0.7cm	1.6cm	0.5cm	—	—	—



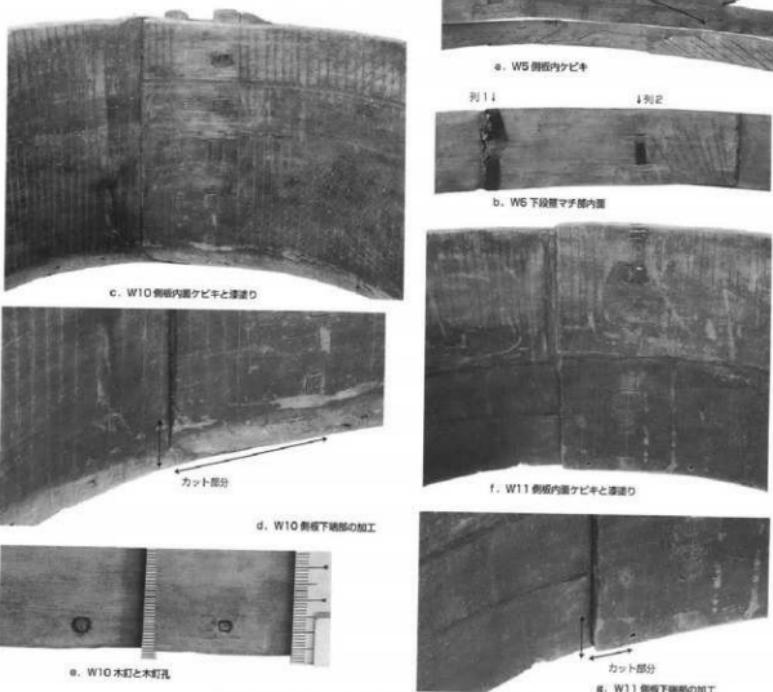
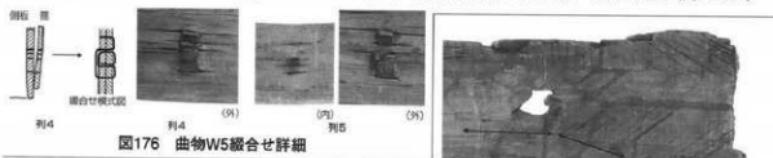
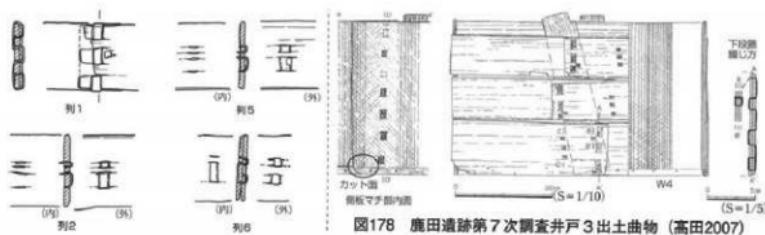


図177 曲物W5・10・11内面加工と木釘の状況

第6章 結 語

古式土器の整理・研究

鹿田遺跡第13次・15次調査の整理・研究にあたっては、古墳時代初頭の土器満まりの歴史的意義を追究することを大きな目標のひとつとした。そのための基礎的作業として古式土器の分類と個体数算出、土器満まり内部での遺物分布図の作成を行い、それら成果を本書に収載するよう努めた。個体数算出においては、その基準を明示し、個体数としたカウント可能な資料については元データを一覧表形式で収載した。出土土器片の破片数については土器満まり2の一部の器種において計測結果を提示した。

土器満まりの分析という点では、遺物の個体数算出に基づく分布図を作成した。その結果、土器満まりを構成する遺物群の構造を一定程度明らかにすることができた。一方で、土器満まりに含まれる礫や被窓資料に関する分布論的検討については課題として残すこととなった。また、土器満まりに関する基礎的研究は、発掘調査時のデータの質に左右される面も大きい。調査では任意の遺物取り上げ範囲を設定しながら整理・研究に備えたが、取り上げ範囲がより微細になればより細やかな遺物群分析を行いうる可能性がある。今後は、作業の効率化と効果の双方を勘案しつつ、最新の測量機器等を活用した、破片単位の微細データ取得を試みることも必要であろう。

各時代の調査成果と課題

弥生時代 弥生時代中期前葉～後期後葉における、集落周辺域の様相が明らかとなった。特に中期前半に遡る土器や溝がみつかったことは鹿田遺跡における集落形成のはじまりを考える上で重要である。また花粉分析によるところ、弥生時代中期には森林植生であった状況から、後期になるとそれが大幅に減少し、草木植生が優勢となるという結果が得られた。こうした植生の変化は、集落形成の時期と対応している可能性が高く、今後の景観復元を含めた研究が待たれる。

古墳時代 古墳時代初頭の土器満まりは絵画を有する壺を含む、当該期の良好な遺物を提供するものとしても重要な位置づけである。また集落の周辺域における井戸や溝、土器満まりの存在が明らかとなったが、これら遺構の意味について集落全体の中でいっそう議論していく必要がある。古墳時代後期の遺構としては、溝を検出した。古墳時代後期については、鹿田遺跡における集落の実態がいまだ十分につかみえていないものであり、今後の資料の蓄積が待たれる。

平安時代～鎌倉時代 10世紀末～11世紀初頭、11世紀後半～12世紀前半、14世紀前半の遺構・遺物を確認した。後二者における区画溝の位置の変化は、鹿田地区全体の集落変化と連動しているものと考えられる。その変化的具体的背景について、これから調査研究を通して追究していきたい。遺物としては、14世紀前半の土器質土器碗や、曲物をはじめとする木製品に良好な資料がみられた。一方で、当該期の土層の堆積状況は複雑であった。プラントオパール分析では、上層中からイネ科が検出され、当該地点または近隣における耕作の可能性が示唆されているが、耕作域とみなしうる空間構成は今回の調査地点において確認されていない。

近世 近世については、まとまった形で検出された土坑群の存在が注意された。土坑群の性格については、分析の結果、一様ではないものと考えられるが、土坑群の配置には計画性がうかがえる面もあり、今後の調査においていっそうの実態解明を行う必要がある。近世の鹿田遺跡の景観については、近年の調査成果において、耕作域だけでなく居住域の存在も示唆されるに至っている。居住域と土坑群の関係性についても、今後の追究課題となるだろう。

(光本)

図版1 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器（溝・井戸）



【井戸2】 図30

(S=1/3)

図版2 土器溜まりの土器〈壺〉1



図73-3



図49-10



図73-1



図50-20

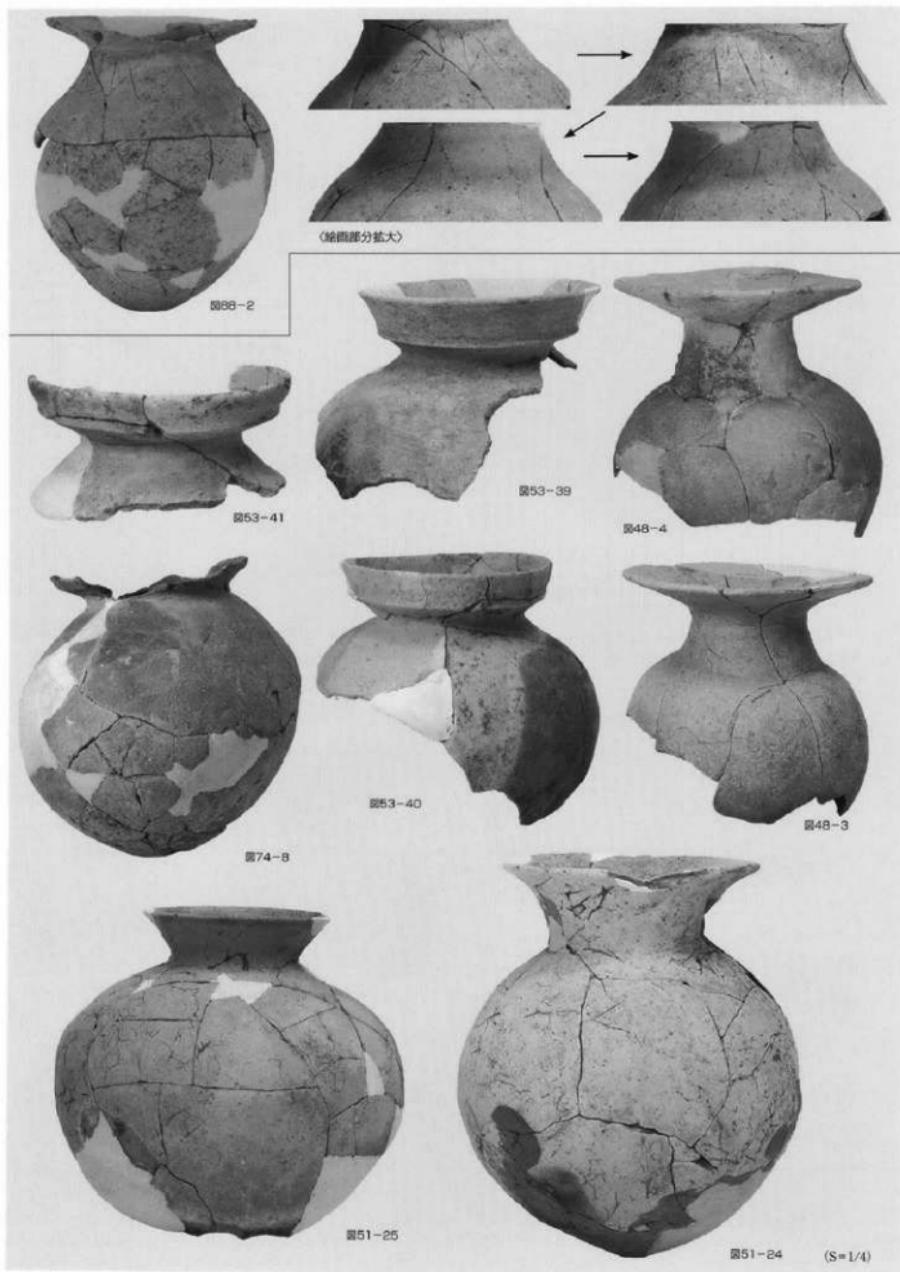


図73-2



図49-19

図版3 土器溜まりの土器〈壺〉2



図版4 土器溜まりの土器〈壺〉3



図51-21



図54-52



図54-53



図51-26



図88-6



図54-57



図54-43



図54-47



図52-36



図52-35



図54-51



底部の穿孔

図版5 土器溜まりの土器〈甕〉1

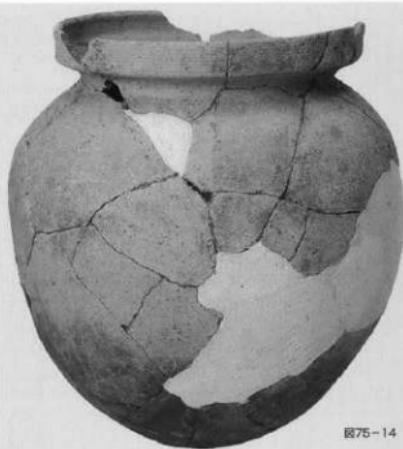


図75-14



図75-20



図75-21



図89-7



図75-22



図75-15 (S=1/3)

図版6 土器溜まりの土器〈甕〉2



図89-98



図75-19



図76-25



図76-27



図76-26



図58-91



図58-90

(S=1/3)

図版7 土器溜まりの土器〈甕〉3



図59-92



図59-93



図76-29



図59-95

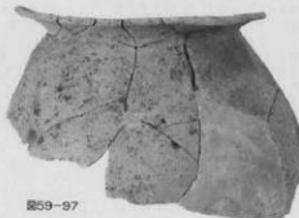


図59-97



図59-102



図59-96



図59-101



図76-30



図76-31

(S = 1/3)

図版8 土器溜まりの土器〈高杯〉1



図版9 土器溜まりの土器〈高杯〉2



図77-38



図78-47



図77-44



杯部内面の穿孔（縮尺任意）図77-44



図90-15



脚部接合面

杯部接合面

接合面にのこる刺突痕（縮尺任意）図90-15



図78-56



図77-32



図81-140

図版10 土器溜まりの土器〈高杯〉3



図版11 土器溜まりの土器〈鉢〉1



図64-221



図60-89



図60-87

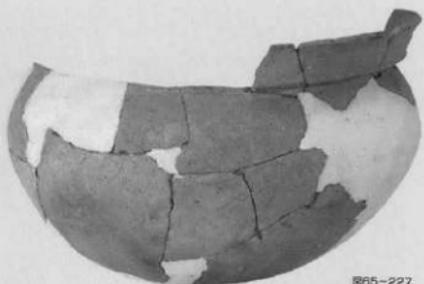


図65-227

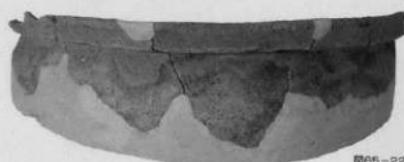


図65-226

図版12 土器溜まりの土器〈鉢〉2

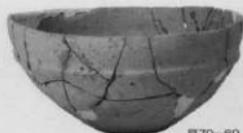


図79-69

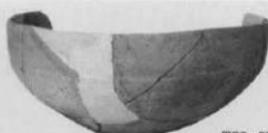


図79-67



図90-21



図79-71



図79-68



図63-172



図63-173



図63-185



図63-174



図80-83



図80-84



図63-187



図63-183



図63-179



図63-189



図63-184

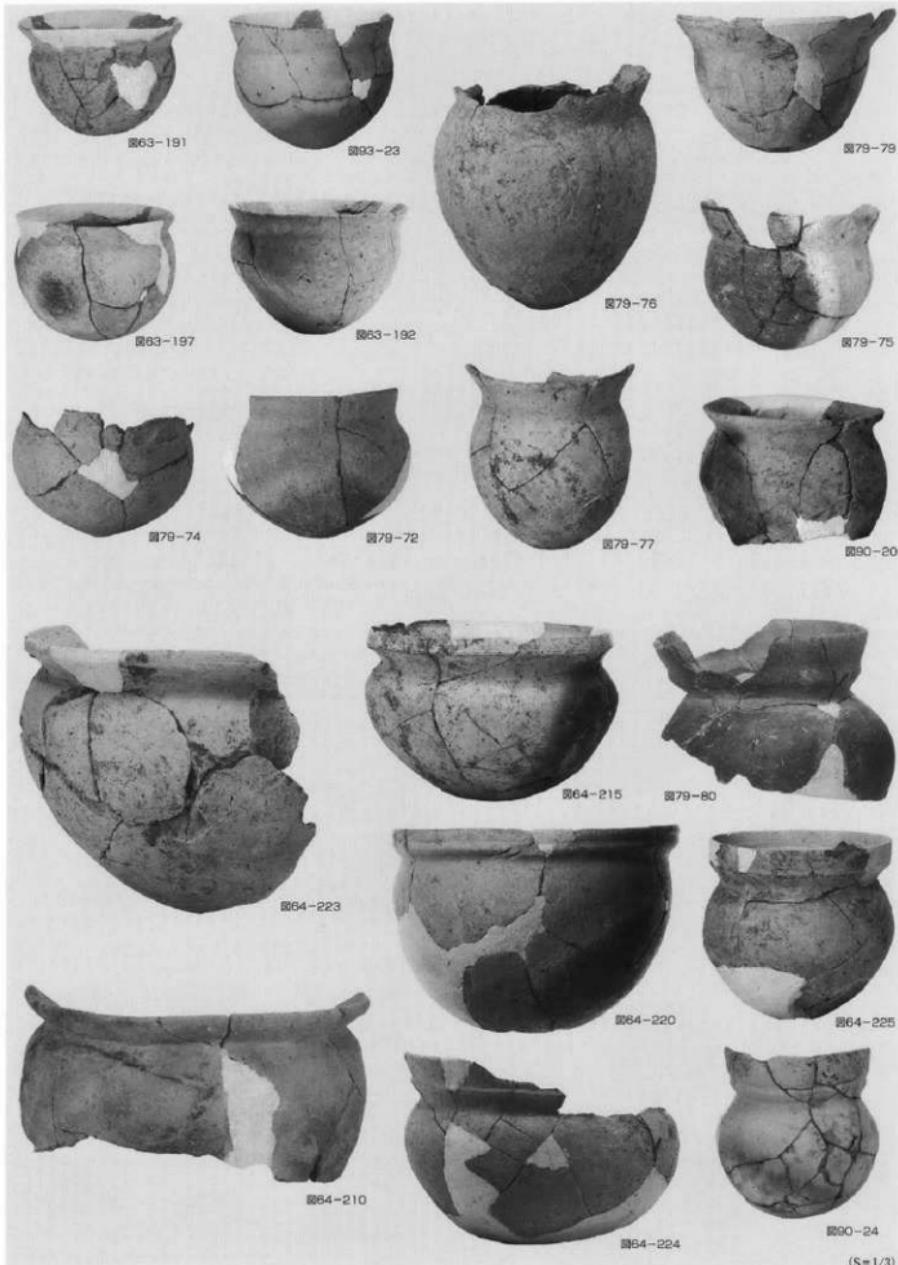


図90-18



図79-81

図版13 土器溜まりの土器〈鉢〉3



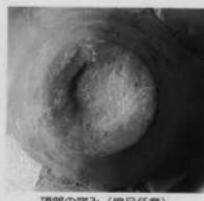
(S=1/3)

図版14 土器溜まりの土器〈蓋形土器・手焙形土器・器台・ミニチュア土器・製塩土器〉

〈蓋〉



図81-96



頂部の窪み(縮尺任意)
図81-93

〈手焙形土器〉



図90-28



つまみ部の接合部(縮尺任意)
図81-97



図81-94
図81-97

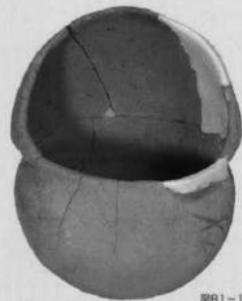


図81-107

〈器台〉



図65-232



図62-168



図81-92



図65-233

〈ミニチュア土器〉



図63-198



図63-204



図63-203

〈製塩土器〉



図65-236



図65-251



図65-252



図63-199



図63-207



図63-205



図65-235

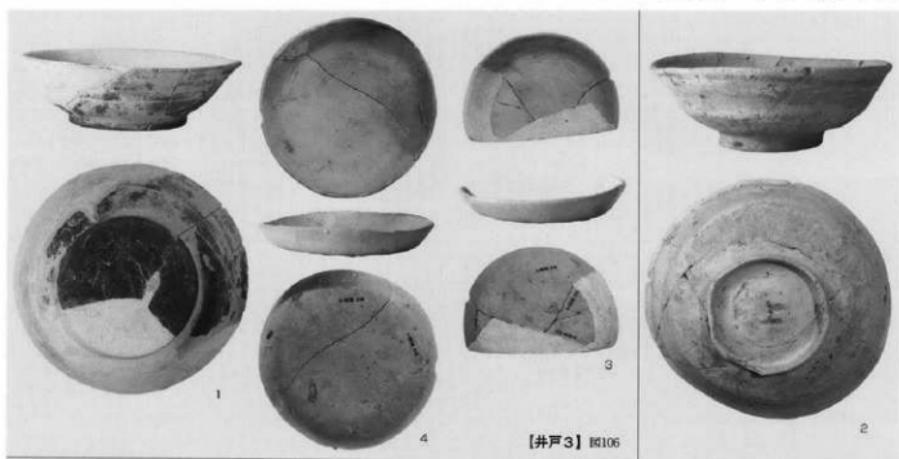


図65-244



図65-243

図版15 平安時代の土器



[井戸5] 図110



[井戸4] 図108



[土坑2] 図123



(S = 1/3)

図版16 鎌倉時代の土器

【井戸7】 図114



【ピット1】 図101



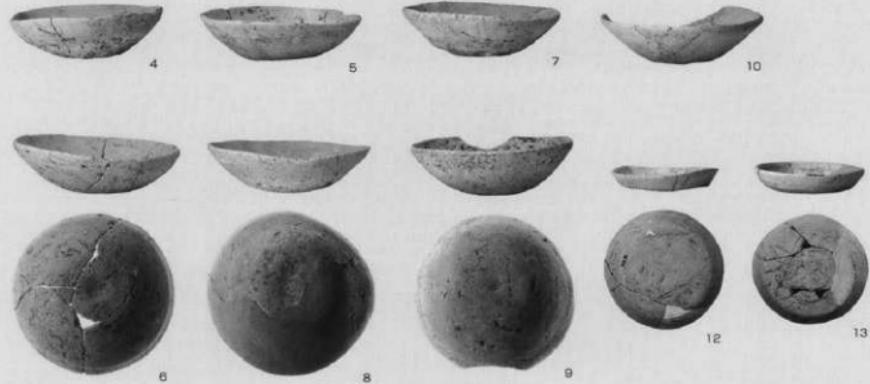
【ピット2】 図102



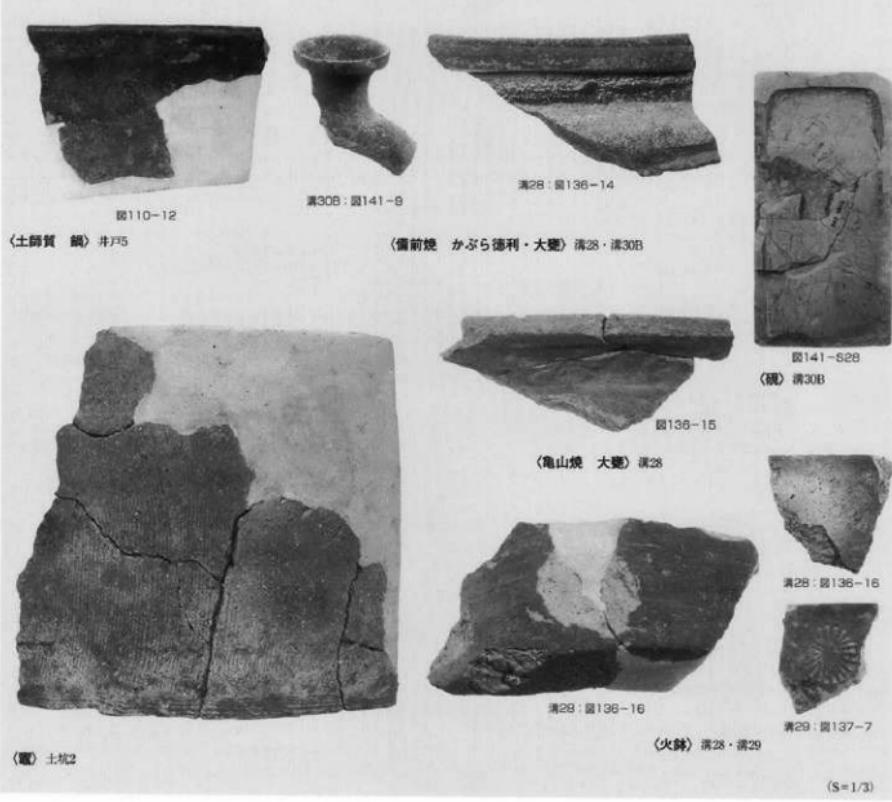
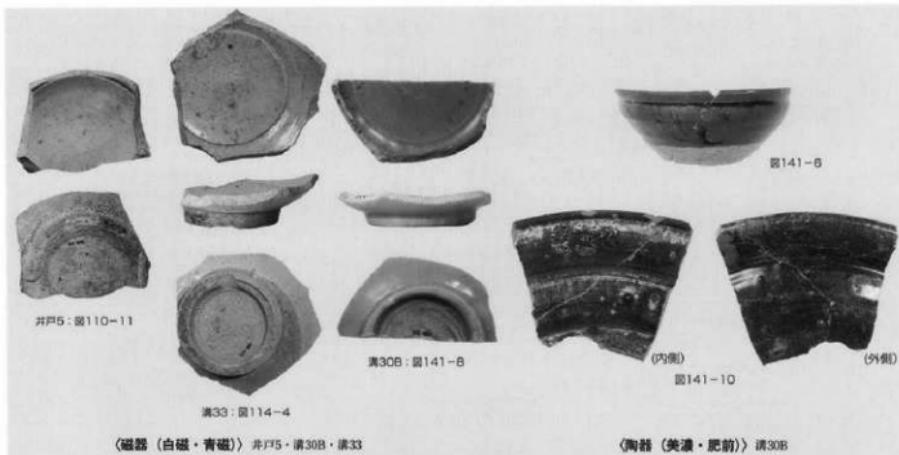
【その他のピット】 図103



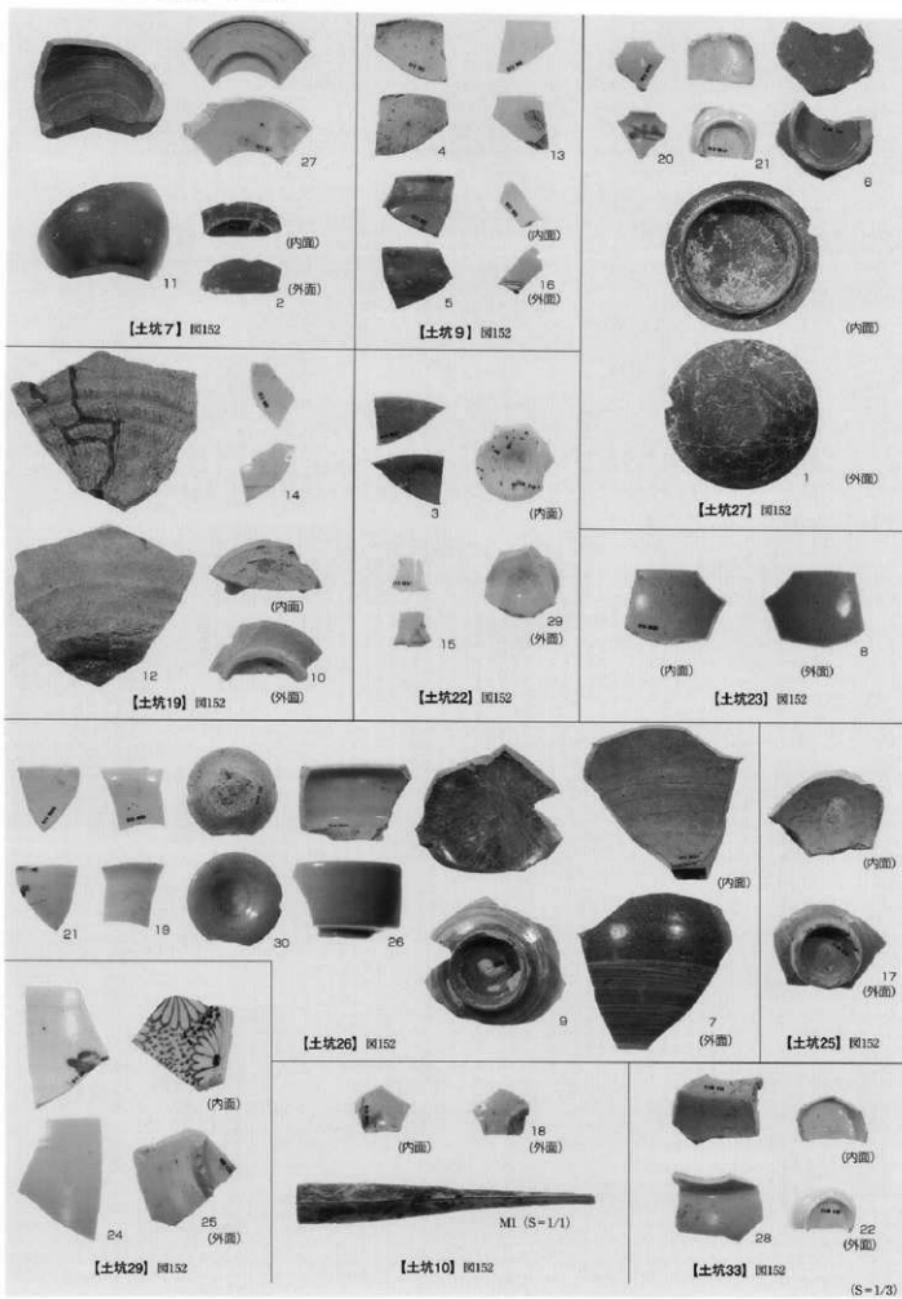
【溝28】 図136



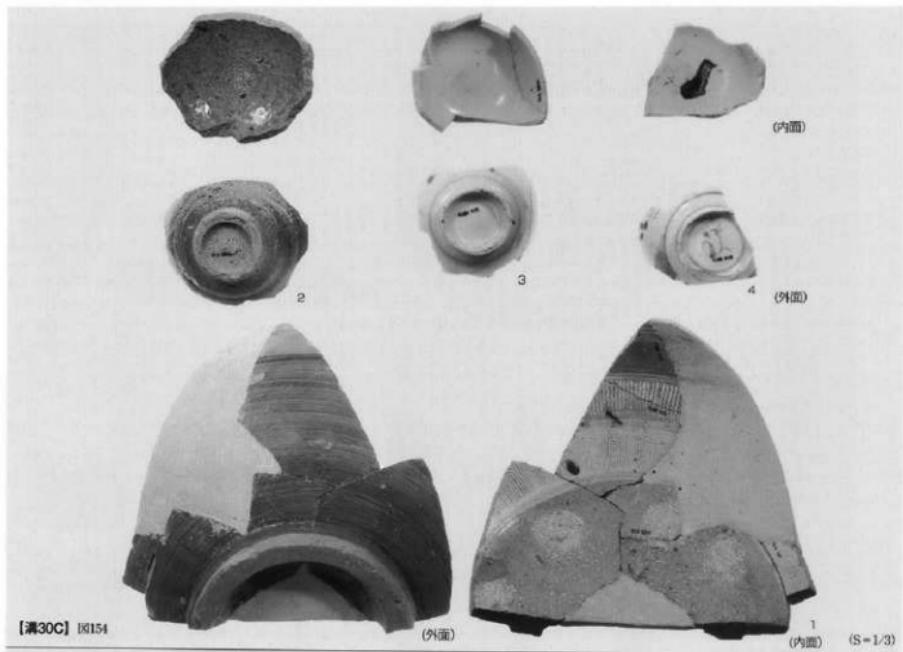
(S = 1/3)



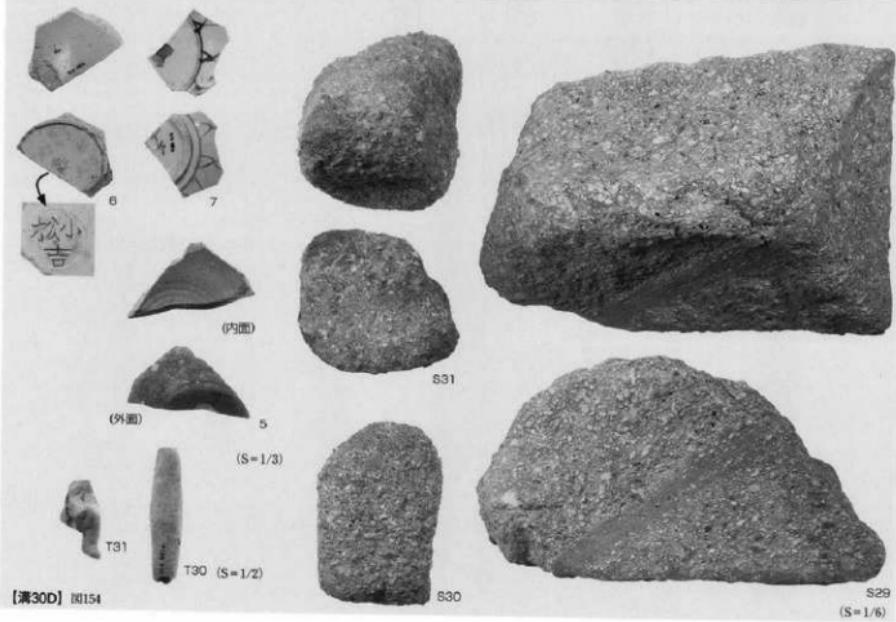
図版18 近世陶磁器（土坑）



図版19 近世陶磁器・石製品他（溝）

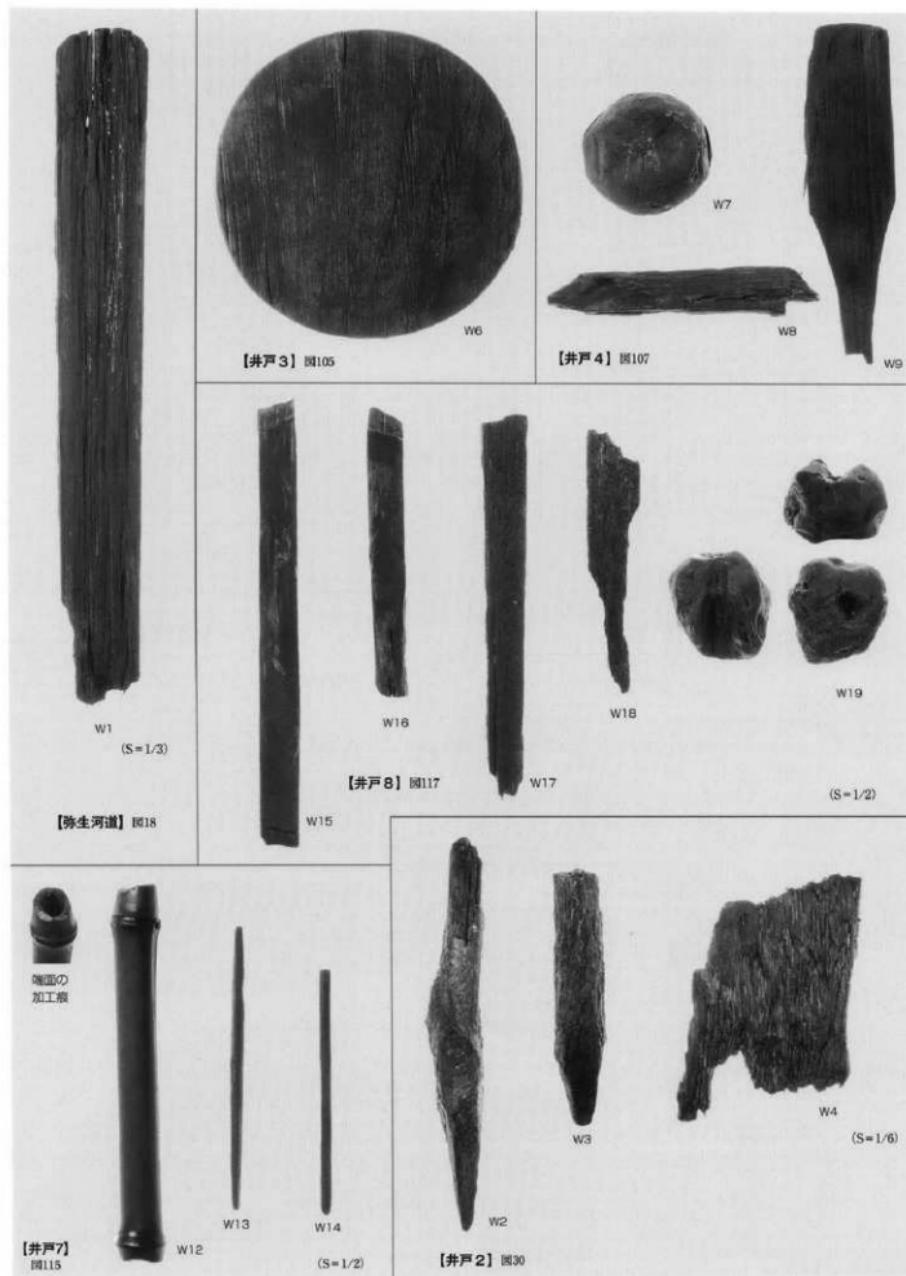


[溝30C] 図154



[溝30D] 図154

図版20 木製品 1〈各種製品〉



図版21 木製品 2〈曲物〉

【井戸3】図105



A

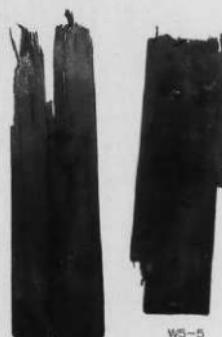


B

縫じ合わせの状況（丸器部分）

縮尺任意

【井戸5】図111



W5-4
添木

W5-5



W11

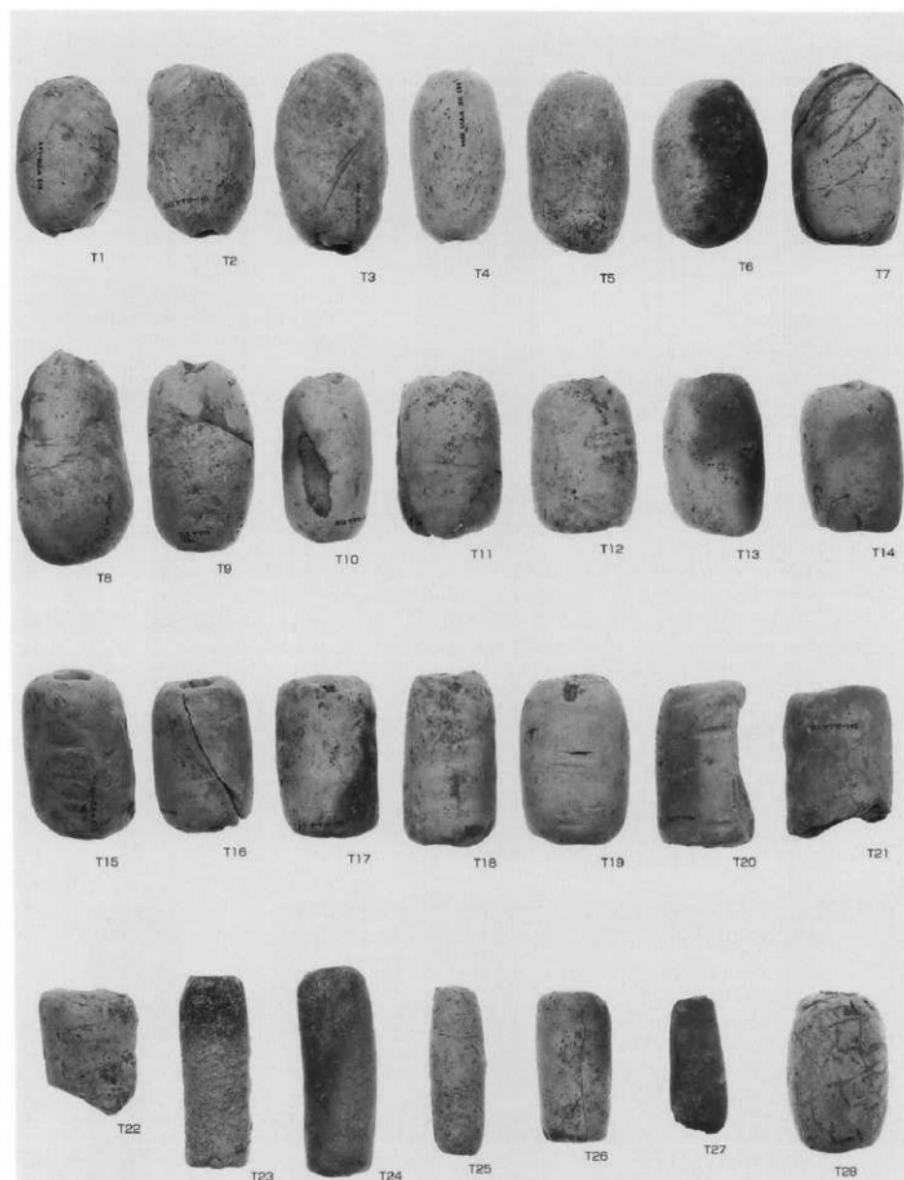
(S=1/4)



W5-6

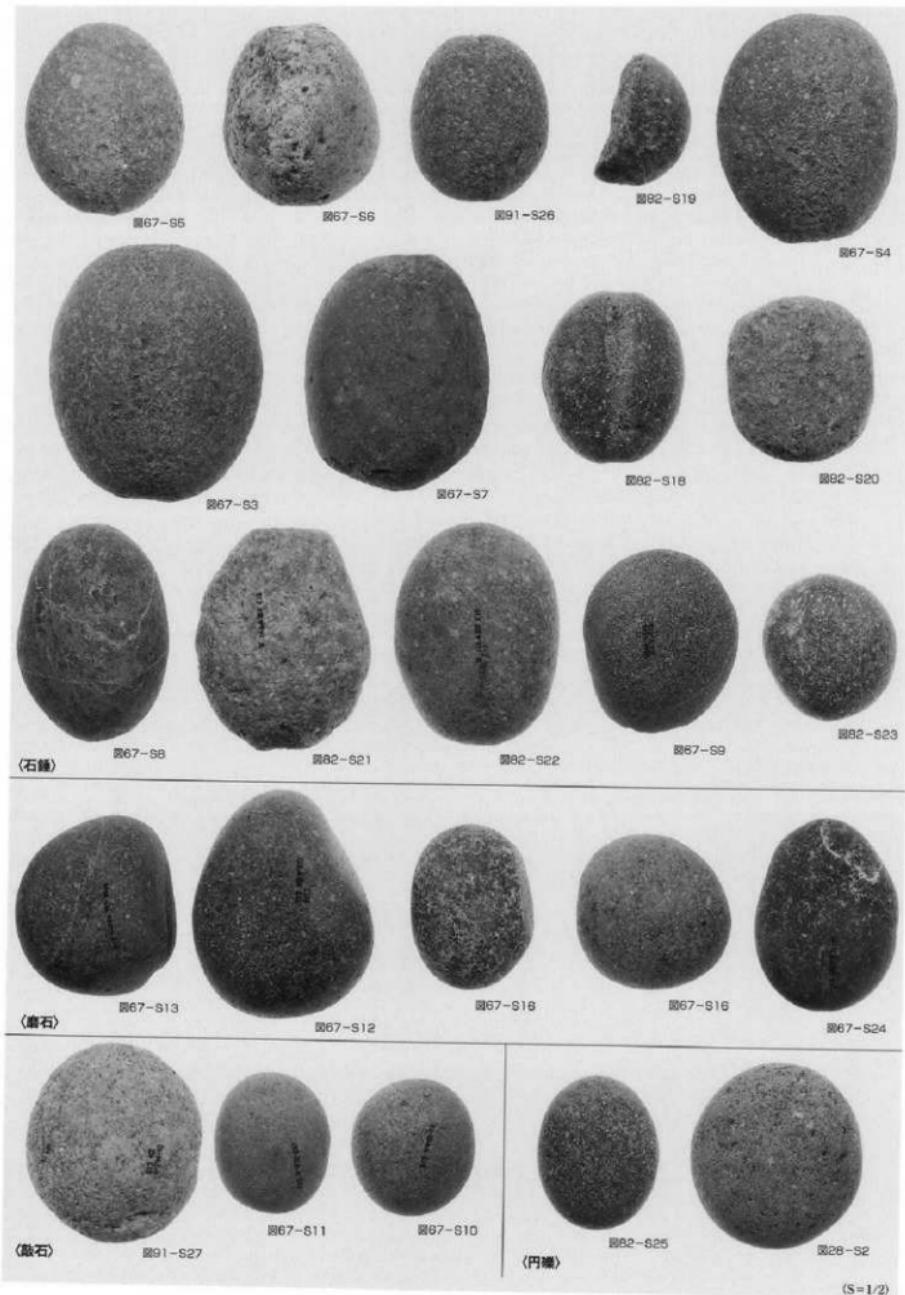
(S=1/4)

図版22 土製品



〈土錠〉 T1~T27: 土器塗まり1 (図66) T28: 土器塗まり3 (図91) (S=1/2)

図版23 石器



報告書抄録

ふりがな	しかたいせき							
書名	鹿田遺跡6 一第13・15次調査—							
副書名	総合教育研究棟新営工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第26冊							
編著者名	光本 順(編著)・野崎貴博・山本悦世・山口雄治・能城修一・富岡直人・畠山智史							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2010(平成22)年8月5日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
しかたいせき 鹿田遺跡第13 次調査地点	岡山県岡山市 北区鹿田二丁 目5番1号	33201	県2288	34度39分 03秒 ～ 34度39分 02秒	133度55分 09秒 ～ 133度55分 10秒	20020418 ～ 20021025	934m ²	総合教育 研究棟新 営
しかたいせき 鹿田遺跡第15 次調査地点	岡山県岡山市 北区鹿田二丁 目5番1号	33201	県2288	34度39分 02秒	133度55分 10秒	20031014 ～ 20031029	30.4m ²	総合教育 研究棟新 営
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
鹿田遺跡第13 次調査地点	集落	弥生時代・ 古墳時代 平安～鎌倉 時代	井戸、溝、土器窪まり 掘立柱建物、井戸、炉、土坑、 溝			弥生土器、土師器、 土鍬、石鍬 土師質土器、須恵器、 瓦器、陶磁器、土製品、木製品(曲物ほか)		
鹿田遺跡第15 次調査地点	集落	古墳時代 中世	近世・近代 土坑、溝、畦畔	井戸、溝 土坑		陶磁器、瓦、石祠 土師器、木製品(板 材、杭)		

2010年8月5日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第26冊

鹿田遺跡6

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 岡山市北区津島中三丁目1番1号
 (086) 251-7290
 印刷 西尾総合印刷
 岡山市北区津高651
 (086) 254-1111

